真・恋姫無双　２人の御使い

デイラミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫無双　２人の御使い

【Ｎコード】
Ｎ１９５８Ｗ

【作者名】
デイラミ

【あらすじ】
普通の生活を送っていた主人公、鷺島暢介。しかし、ある日目が覚めると見た事が無い場所、そして首が１８０度後ろを向いてこちらを見る人の視線だった。
オリ主、そして主人公陣営はオリキャラ（三国志に実際にいた将）と恋姫登場キャラの複合となります。
オリキャラに不快感とうがある方は戻るをお願いいたします。
なお、一刀は蜀におりますが強いアンチがかかっております。
かなりの悪者という感じになってるので注意をお願いいたします。

～キャラ紹介～（前書き）

少し思う所があって、主人公のみの紹介に変更です。

オリキャラ系はある程度、人が集まったらにしますです。

（9月1日）

～キャラ紹介～

【主人公】

名字：鷺島（さぎしま）

名前：暢介（ようすけ）

服装：ここに来た当時は一般的なスーツ姿。（色は黒）

髪型：短髪で色は黒

身長：１７０ｃｍ

体重：６７ｋｇ

年齢：２１歳

本作の主人公。

現代からこの世界へ来た人物。

基本的には真面目で怒りにくい性格。

ただし、相手が調子に乗ったりすると露骨に嫌な顔をする。

また、理想を押し付けてくる人間が一番苦手であり、嫌いでもある。

三国志に関する知識が全くない為、一刀と比べると先が見えない。

学生時代はサッカーをしていたが、特に優れた能力を持っているわけではなかったが。

努力を怠る事は決して無く、最後にはスタメンを獲得する事に成功した努力の人。

本人自身も、努力する事に楽しさを持っており、それは社会人になってからも変わってはいない。

久遠に関して、絶賛勘違い中（3話）
その後、勘違いは解消（幕間）

※　ちなみに彼の身長・体重はあるサッカー選手と同じになっております。
　ただ、別にモデルが彼と言う訳でなく、私が好きな選手だからという事なのですが・ｗ・；

～キャラ紹介～（後書き）

ついに始めてしまった恋姫ＳＳ。
やり始めた以上は完結まで進んでいく所存です。

……近くの図書館で三国志の本を探して読みこまないとな。
休日の過ごし方が大きく変わりそうです・ｗ・；

1話　試験帰りに拾ったもの（前書き）

せめてスタートの時ぐらいは誤字脱字が無い様にしたいなぁ。
そんな感じで書いていました。

1話　試験帰りに拾ったもの

ここは、河内郡温県孝敬里。
ある家で親子と思われる2人が向かい合って座っていた。

～久遠ｓｉｄｅ～

「それで、どうだったのかしら？」

母のその質問に、僕は視線を母から逸らし返した。

「えっと……今回は縁が無かったという事でと言われまして……」

やっぱりかという感じで母はため息をつく。

（今回の仕官先はいい噂を聞かない所だったから、噂の真意を聞いたら凄い怒られたんだよなぁ）

そう思い、僕は頭を掻いた。
ただ、あの反応だと恐らく噂は本当なのだろう。
ならば、あのような所に仕えるのは止めておいて良かったのだろうと結論に達した。
もちろん、母には絶対に言えない訳だが。

それに、どうせ仕えるならば、一生をかけてその人物に仕えたいと思うのは当然の事。
ただ、未だにその主も見つけられないまま、現在も実家でため息をつく母を見ている。

「仕官を断られる度に言ってると思うけど、あなたは私の子供達の中で最も優れていると私は思っているわ」

「はい……わかっています」

僕には1人の姉と6人の妹がいる。

ちょうど僕は2番目の子なのだが、下の子はまだ小さいし比べるのはどうなのだろうかと思っている。

もしかしたら、数年後には僕以上の逸材が出てくるかもしれないのだが、母は。

「いや！　あなた以上は出てこないわ！」

と、胸を張って宣言していた。

ここで断っておきたいのだが、僕自身は早く主を見つけて自分の力を発揮したいと思っている。

別に、一生家に居てもいいじゃん？　って考えではないのであしからず。

「そんなあなたが未だに仕官先が見つからないとは、相手が眼が節穴なのか、あなたが真剣じゃないのか」

「ぼ、僕はいつでも真剣にやっています。ですが、まだ出会えていないだけで……」

「主を見つけられずに、変な服装の子を見つけて連れ帰ってくるとはねぇ、で、彼はまだ？」

苦笑しながら言う母の言葉に僕は頷く。

「はい、まだ眼を覚ましてはいません」

実は今回の断られた仕官先での試験帰りに倒れていた男性を保護していた。

普段ならば賊に襲われた被害者かと思い、「あ、またか」という形で通っていたかもしれない。

ひどい話かもしれないが、現在の大陸の治安状態を見れば納得する事だろう。

では、なぜ助けたか。

それは彼の服装にあった。見た事もない服に興味が湧き、僕は彼に近づき、彼が生きている事を確認した。

死人を調べるわけじゃないしと彼の服を触ったり、近くに落ちていたよくわからない入れ物らしきものを調べたりしていた。

ただこの光景は、見る人が見たら、遺品漁りにしか見えない光景だった気がする。

そんな最中に彼が呻き声をあげたのを聞いて、僕は驚いていた。

「いや、別に怪しい事は」と思わず答えてしまったのは僕だけの内緒だ。

しかし、彼は目覚めたわけでなくただ声が出ただけであった。

よくよく考えれば、こんな所で何をしてるんだろうと思った僕は

乗ってきた馬に彼を乗せ家まで帰る事にした。
調べるなら、こんな場所じゃなく家で調べた方がいいだろうという判断だった。

家に帰った僕を待っていたのが、びっくりした表情を見せる母と妹達の姿。
彼を妹達に任せて、僕は母に事情を説明した。
彼を見つける前、彼のいた辺りに流星が落ちるのも見たと伝えると母は思い当たる節があったのか一人納得し僕にある事を話した。

母曰く、管輅という占い師が、流星に載って天の御使いがやってくるという占いの結果が出たらしい。
もしかしたら、僕が見つけてきたそれが天の御使いかもしれないわね、と母は笑いながら言っていた。

「早く眼がさめてくれれば、確認ができるんだけど……それに早く寝台に戻りたいでしょ」

「まぁ……寝台以外で寝るのは慣れてるから」

笑みを浮かべて話す母に僕は苦笑しながら答える。

連れてきた彼は今、僕の部屋の寝台で眠っていた。
これは当然なことで、この家には空き部屋が無い為、誰かの部屋に連れて行かなくてはいけない。
誰かの部屋というか、連れてきたのは僕なので自動的に誰の部屋かは決まっていたわけだが。

母への説明を終えた僕が部屋に戻ると寝台で寝てる彼と、彼の近くに落ちていた入れ物を調べる妹達の姿。
妹達と言ってもいたのは2人だけで、残りはどこかへ行ってしまったようだ。

残っていた妹達と一緒に中身を再び調べていたのだけれど見た事無いようなものばかりだった。
結局、彼が目覚めてから教えてもらうという結論に達したわけだが。

あの日から彼が眼を覚ます事がなく、僕の部屋の寝台は未だに占領されたままだ。
まぁ、寝る場所としては椅子に座ったままでも十分寝られるのでいいのだけれど流石に、連日は厳しいので身体が少し痛い。

「とりあえずは、次の仕官先をしっかりと探しておきなさい」

「は、はい。分かりました」

母の言葉に頷き、僕は母の部屋から出る為に席を立った。

（次の仕官先かぁ……どこかあったかなぁ）

そんな事を考えながら。

部屋に戻った私は本を読もうと本棚の前に立っていた。
既に何度も読んだ事のある物ばかりだったが何度も読み返せば別の面も見えるという母の教えに従い。
１０回近く読み返している物もある。

「さて……今日は何にしようかな」

最近買った新しい本を読むべきか、あるいはまだ別の面が見えていない作品を読み返すべきか……悩むなぁ。
そう考えている僕の背後から声が聞こえた。

「ん……」

その声と何かが動く音。
あ、ようやく彼が目覚めたのだろうと思い、僕は彼の方を向いた。
予想通り彼は目覚めており、見覚えのない場所だからか辺りを見回していた。

そして僕の視線に気づいたのかこちらを向いてきた。
目の開いた状態の彼と会うのは初めてなのでとりあえず挨拶しないといけないと感じた僕は。

「あ、やっと目が覚めたんですね、身体は大丈夫ですか？」

と、笑顔で言ってみたんだけれど彼は突然震えだし僕の方を指さしてきた。
その指は震えており口はパクパクし、何かを言おうとしていたが、何を言えないまま彼は倒れてしまった。

「え？　な、なんで？」

驚いた僕は彼に駆け寄ったが彼は気絶しておりしばらくは起きなさそうだった。
なぜ彼は倒れたのか考えていた僕はすぐに結論に達した。

本棚と寝台は向い合せにある。
当時の僕は本棚の方を向いており寝台には背を向けていた。
そこに起き上がる彼の声を聞いた僕は、寝台の方を向いた。
そう、首だけを寝台の方へ向けて。

だから、彼には自分に背を向け首だけが真後ろを向く人間の姿だった。
彼の反応を見るに恐らく、彼のいた場所には僕の様な人はいなかったのだろう。

「あぁ、母上からもするなって言われてたのに……どうしよう」

目覚めた彼をまた倒れさせた事に頭を抱えながら、彼が眼を覚ましたら謝ろうと考える僕だった。

～暢介ｓｉｄｅ～

見た事がない部屋で、恐らく初対面の子がペコペコと俺に対して頭を下げている。
「すいませんでした」と言いながら頭を下げており、下げる度に通称「アホ毛」と呼ばれる部分がピコピコ動く。

それを横目に見ながら俺は、今自分が置かれている状況を考えていた。

まず、今いる部屋だけど、俺には全く覚えがない。
だからだろう、目が覚めたときに「どこだよここことか」「知らない天井だ」という台詞が出てきた。
やっぱりこういう台詞が出てくるのは王道なのかねぇ。

次に見たのは服装だ、今の俺の服装はスーツ姿になっている。
上着は椅子に掛けてあったので、皺にならずにすんだと、一安心していたわけだが。
そこで一つの疑問が生じた。

（あれ？　俺、昨日は家に帰ったよな）

昨日は会社が定時で終わり、俺はさっさと家に帰った。
その後は風呂に入り、飯を食って、寝間着に着換えて寝てたはずなんだ。
ところが、目が覚めてみたらスーツ姿になっていた。

テレビのドッキリとかか、とも考えたが一般人の俺にここまでする事はない。
大体、本人が何の了承もしてないのにこんなことしたら裁判ものだぞ。

「どういう事だよ……」

そう呟き、頭を下げていた子の方を見ると……まだ頭を下げていた。

「あのさ、もう十分気持ちは伝わったから、とりあえず頭を下げるのは止めてくれ」

そういうとその子は頭を下げるのをやめ、俺の方を見ると少しだけ笑みを浮かべて言った。

「あ、ありがとうございます」

そういう……さっき、自分の事を僕って言ってたから、彼だよな、うん。

一人称が僕って男だろうし。

俺は目の前の子を彼、つまり男性だと考えた。

「いや、いいよ。いきなり倒れた俺も悪いだろうし」

と言うが、あの状況で倒れない人間がいたら見てみたいものだと思う。

目が覚める→見た事ない場所で混乱→視線を感じその方向をみる→首だけ１８０度回る人間と目があう

左から右なら、１８０度回るけど、今回は前から後ろだ。

そんな世界びっくり人間みたいな人物に会った事ないわけで。

俺は気絶して、再び目覚めると彼がさっきまで謝っていたわけだ。

「ところで、ここは一体？」

「ここは河内郡温県孝敬里で、私の家です」

先生、場所を聞いたら聞いた事ない場所がかえってきました。
河内郡温県孝敬里……日本の地名じゃないよなぁ。

俺は間違いなく、日本にいたはずなんだけど。
海外出張の予定も無いし、行ってる最中でもない。
普段通りの生活をしていたはずなのに。

目が覚めてみたら、見覚えのない場所で見覚えのない人がいて。
聞いた事のない土地の名前を教えられる。

どうなってるんだ……おい……
思わず頭を抱える。

「あ、あの……」

頭を抱える俺に彼が少しだけ明るい感じの声で話しかけてきた。

「ん？」

「そういえば、まだ自己紹介を済ませていませんでした」

「あぁ、そうだね」

自分の状況が分からずに落ち込んでいたが、よく考えたらまだ自己紹介をやってなかった。
社会人失格だなぁ……

「じゃあ、俺からやっておこうか、俺は鷺島暢介だ」

「鷺島暢介……姓が鷺で名が島で字が暢介ですか？」

「いや、俺には字は無いよ、鷺島が姓で暢介が名だよ」

流石に字は無い、というか今でも字って文化はあるのか？

「字が無いんですか……それに珍しい名前ですね」

「確かに、自分の親族以外で会った事ない名字だからね」

ついでに同じ名前の人と会った事もそんなに無い気がする。

「ようすけ」という名前だと、陽介や洋介とかが多いからなぁ。

「えっと、次は僕の番ですね」

そういうと彼は咳払いをし、口を開いた。

「僕は姓名が司馬懿、字は仲達と申します」

「……へ？」

司馬懿ってあの三国志時代の人だよなぁ。

その辺の時代は全然知らないけど、名前ぐらいは知ってる。

凄い有名人だけど、それが眼の前にいるこの子だってのか。

やっぱり冗談を言ってる様には見えないから、本当なんだろうか。

ひょっとして俺……大昔に飛ばされたってのか。

1話　試験帰りに拾ったもの（後書き）

やっぱり文章を作るのって大変なんですよね。

ここまで考えるのに時間が凄くかかりました。

一回一回、自分の口でキャラの台詞を喋りながら確認していたので。

途中で女性の台詞も言っている自分もいました。

……このまま行って恋姫キャラと絡んだら私は何役やる事になるんだろうか。

2話　どこへ行くにも準備は必要（前書き）

しっかりとキャラ設定などもしているはずなのに。
実際に書いていくと徐々に変化を遂げていく・ｗ・；

なんか、怖いです。

2話　どこへ行くにも準備は必要

～暢介ｓｉｄｅ～

この世界に来て、もうすぐ一週間になろうとしていた。

「ふぅ……」

そういい、俺は視線を本から窓の外へと向けた。
天気は良くなく、朝から降っている雨がまだ降り続いていた。

「しかし、会話は出来るのにどうして文字になると読めないんだ」

視線を本に戻すとそこには白文の書かれた部分が見える。
最近になりようやく読めてきたのだが、ここに来た当初は全く読めなかった。

「雨……やみませんね」

その声に俺は視線を今度は右に移し隣に座る女性を見た。
女性の名前は司馬孚、字は叔達といい、仲達の妹さんで、現在の俺の文字の先生だ。
女性と言ったが子供で女の子と言った方が正しいかもしれない。
なぜ彼女が俺の先生をしているのかというと、それは目覚めたあの日に遡る。

あの日、目覚めた俺は仲達との話の後、母親である司馬防さんに会いに行った。
流石は親子という感じで2人の髪色や顔つきがよく似ていた。
ただ、司馬防さんの方が目つきが鋭い。

「……と、これが現在のこの大陸の状況かしら」

正直、この話を聞いて改めて自分が本来いた世界とは違う所に来たと実感していた。
そしてこういう状況下において、天の御使いの話も広がっており、それを希望としている者も。
決して少なくはないという事。

「天の御使い……それが俺という事なんでしょうか？」

はっきり言えば、俺がその天の御使いである可能性は高いだろう。
何しろ、今から１８００年も先の未来から来たわけで、この時代の人間ではない。
ただ……俺は、神様からどうしろとか言われた覚えはない。
あの日だって、家に帰ってそして寝ただけで次の瞬間にはこの世界にいた。

「少なくとも、久遠は流星を見てその後、落ちたと思われる場所であなたを見つけたわ。見た事も無い服を着たあなたをね」

だから、占いの内容にあってはいる。
そう司馬防さんは言った。

ん？　ところで久遠って誰だ？
俺を見つけたのは仲達ではないのだろうか？
ただ、久遠と言った瞬間、司馬防さんの目は仲達を見ており、仲達もまた頷いていた。

ひょっとして……久遠って仲達の名前か何かか？
でも、さっきの自己紹介では久遠の「く」の字も出てこなかったわけだし。

聞くべきか？　いや、なんか凄く嫌な予感がするから止めておこう。
機会を見つけて聞いてみればいいだろうし。

「ところで、あなたはこれからどうするのかしら？」

司馬防さんの言葉に、俺は久遠という名前については考えるのをやめた。

「正直にいうと、どうすればいいのか、俺自身が困っているという所です」

いきなり外に出て行っても剣とかの扱いの出来ない俺じゃすぐに狙われて終わりだろう。
かといって、いつまでもここに居る訳にもいかない、それは迷惑だろうし。
あと、先ほど分かった事なのだが。

「文字が……全く読めなくて、これは不味いですよね」

「不味いどころじゃないわね……」

司馬防さんが苦笑でそう返す。

普通に会話は出来るのだが、いざ文章になるとまるで読めない。

これじゃあ、旅をするにしても誰かに仕えるにしても問題外だ。

「剣については、あとは文字だけど……」

そう司馬防さんが言っている時。

「あ、あの母上、文字は僕がおしえ……」

俺の隣にいた仲達がそういいかけたが司馬防さんが手で制した。

「久遠、あなたは自分の事を考えなさい。早く仕えて私や妹達を安心させなさい。全く……」

地雷に向かってジャンプしてしまったのか、司馬防さんは仲達に説教をし始めた。

会話の流れを聞いてると、どうやら仲達はどこかに仕官したのだがそれが上手くいかずにきているらしい。

……この時代にも就職難ってあるんだな。

しかし、仲達ほどの人物でも仕官が出来ないってどんだけハードル高いんだろうか。

「とりあえず、彼に文字を教えるのは永遠（とわ）に任せるわ」

「と、永遠にですか……あ、でもあの子なら安心かぁ」

どうやら説教が終わったらしく、文字を教えてくれる人が決まったらしい。

しかし、仲達、かなり絞られたのかぐったりしてるな。

「聞こえたと思うけど、教えるのはこの子の妹の司馬孚に任せるわね」

「あ、ありがとうございます」

まただ、司馬孚さんという名前が出てきたが、2人の会話では永遠という名前が出ていた。

凄く気になるなぁ……

「久遠、永遠を連れてきなさい」

「はい」

司馬防さんは仲達にそう指示をし、仲達は部屋から出て行った。

「気になるかしら？」

「え？」

不意に司馬防さんから、そう聞かれ俺は答えに困った。

何の事だろうか。

「真名の事よ、さっきから久遠や永遠の名前が出る度に反応してたから」

どうやらバレバレだったようだ。

俺は素直に頷くと、司馬防さんは丁寧に教えてくれた。
曰く、真名とはその人物自体を示す名であり誇りである。
それを許可していない人間が呼べば最悪、首を飛ばされても文句は言えないらしい。

（……あ、あぶねぇ、これは誰かに会う度に名前を聞かないとうっかり真名で呼んでサヨウナラってありえるわけだし）

もちろん、そんな死に方はご免だ。
うっかり真名を呼んじゃって首と胴体が永遠の別れって笑えないし、絶対成仏できない。

「どうやら、久遠はあなたに真名の事を教えなかったようね」

そういうと司馬防さんは額に手を置き、やれやれと首を左右に振った。
確かに、これを教えてもらわなかったら俺は挨拶するたびに命をかける必要があったという事に気付いた。
仲達よ……命にかかわる事は教えていただけると有難かったかなぁ。

～久遠ｓｉｄｅ～

僕は永遠を探している最中にふと、大変な事を思い出していた。

（あ、そういえば暢介に真名の説明をするのを忘れていた）

どうも先ほどの会話で、真名が出る度に、暢介の表情が変わっていたので何でだろうと思っていたのだけど。
そういえば、忘れていた。

（ま、まぁ……母上が教えてくれてるだろうから……また説教かなぁ、説教だよねぇ）

と、少し暗い気持ちになりながら私は永遠の部屋の前に立った。

「永遠～いるかい？」

そう言いながら部屋に入ると、永遠はそこにいた。
椅子に座り、本を読んでいた。

「あ、どうしたんですか？　久遠姉様」

僕に気付いたのか永遠は本を閉じると僕の方へ近づいてきた。
何というか、トテトテって音が似合いそうな歩き方だ、小さいから余計に可愛いんだろうなぁ。
少しうらやましい、でも僕ぐらいの年でもそうなったら逆に恥ずかしいし、やっぱり年相応が一番だよね。

それと、多分誤解されてるかもしれないけど、僕……女性だからね。
一人称が「僕」とか、胸が無い（ちょっと巻いてるんだけど）とかで男と誤解されるんだけど。
世の中に一人称「僕」で女性っているからね。

「うん、母上が呼んでるから呼びに来たんだよ」

「母上がですか？　分かりました」
そう頷く永遠を連れて僕は部屋を出た。

「そうですか、御使い様の文字の先生を私にですか」
「ええ、永遠なら大丈夫だって母上がね」
母上の部屋に向かう途中、僕は永遠に説明をしていた。
ある程度説明をし、特に会話らしいものは無かったのだが。
「あの……姉様、一ついいですか？」
不意に永遠が話しかけてきた。
「うん？　どうしたの？」
どんな質問が来るのかも考えていなかった僕は気軽に返した。
だから、永遠の表情が少し赤くて、恥ずかしそうだったのに気付かなかった。
「姉様はどうして……その……む、胸を巻いているんですか？」
「へ？」
予想を超える質問に僕は歩を止めて呆然と永遠を見ていた。

永遠は頑張って質問したんだろう、顔が真っ赤になっていた。

「えっと……な、何でそんな質問を？」

質問の意図が分からずに、僕は間抜けさ全開で聞いた。
質問に質問を返すって良くない事なのだけど。

「以前の姉様は特にそういう事をしなかったのに、突然、胸を隠し始めたので何かあったのかなと思いまして」

多分、あの時の事を聞いてるんだろう。
僕はそう確信した。

以前、ある所に仕官しようと試験を受けたのだが、最後の面接において。
面接官の視線が胸をチラチラ見ている事を感じた僕は激怒し、さっさとそこを後にしたわけだ。
もちろん、結果は不採用。

もしかしたら、それを気にしなければ採用もあったのかもしれないが、それは僕自身、嫌だなぁと思っていた。
何というか、女性の武器を活用しましたと思われる事が嫌で仕方がなかったから……

という事で、一度試しに胸を包帯の様なもので巻いて試験に行ってみたのだが。
試験管の視線は全く胸にいかず、面接も大変いい形で終わったのだが……

（落ちてちゃ意味ないよね～）

やがて試験の時だけそういう準備をするのも面倒になってきたので普段の生活からそうしていたのだが。
今度は初対面の人から男性に間違えられる事が、時折あった。
母上や姉、妹達は「久遠（姉様）って、凄く女性らしい顔つきだよね」と言われるのだけど。
やっぱり、一人称、そして胸なのだろうか。

そういえば、暢介は僕の事を女性だと思っているのだろうか？
対応などを見てると、恐らくは勘違い中だと思う。
どこかで誤解を解かないといけないのだろうけど、どこで解くべきか。

まぁ、今じゃなくてもどこかで言えばいいだろうし。
そう、僕は気楽に考えていた。

～暢介ｓｉｄｅ～

「母上、永遠を連れてまいりました」

しばらくして仲達が司馬孚さんを連れてきた。
え？　もう真名を知ってるんだがら、久遠って書けばいいんじゃ

ないかって？
いや、真名預かってるわけじゃないし、それに何かこの辺の文章も悟ってきそうだからさ。

「暢介、その考えで正解です」

うん仲達よ、ここの文章は読まないでください。

「いえ、その辺りもしっかり出来ているのでよかったなぁと」

そう言って、仲達は笑みを浮かべる。
あれ？　何か可愛いなって思ったけど……あれ、男だよな？
だって、「僕っこ」なんて俺、実際に見た事ないし、あれって空想のものだと思ってるんですが。

そう混乱している際に、パンパンと手をたたく音が聞こえ、俺は考えを止めた。

「何を言ってるのか分からないけど、この子が司馬孚よ、ほら永遠、挨拶をなさい」

そう司馬防さんに促され、トテトテという効果音が似合いそうな歩き方で司馬孚は俺の前まで来ると、ペコリと頭を下げた。

「はじめまして、私は姓は司馬、名は孚、字は叔達と申します。よろしくお願いします」

なんというか、守ってあげたいって感じのオーラが出てる気がするなぁ。

「あぁ、俺は姓は鷺島で名は暢介、字は無いんだ。好きに呼んでくれればいいから」

「では、鷺島様と」

何というか……礼儀正しい子だなぁ。
こういう子って俺のいた世界でもあんまりいないような気がするなぁ。

「あの鷺島様、早速今から勉強しましょうか」

「あぁ、そうしようかな」

司馬孚、かなりやる気みたいだ。
こういうのを見ると教えてもらう側も嬉しいし、やる気も上がる。
嫌々引き受けたってのが見えると、やる気落ちるしね。

「それでは母上、私は鷺島様の勉強を教えてまいりますので、失礼いたします」

「ええ。基本的な文章を読める程度の知識を教えればいいから」

「分かりました。それでは行きましょうか」

「あぁ」

そう言って、俺は司馬防さんの部屋から出て行った。
出る際に一緒に出ようとしていた仲達に。

「久遠、残りなさい」

という言葉が聞こえ仲達が、がっくりしたのが感じ取れたのは内緒だ。

「そういえば、仲達って今日帰ってくるんだっけ？」

回想を止め、俺は司馬孚の方を見る。

「そうですね、確か今日だったと思います」

そういい司馬孚は頷く。

仲達は数日前から別の仕官先の試験があるという事で家を出ていた。

いろいろな所で、試験があってるんだなと呟いた際に。

「それだけ、人材が足りないって事ですね」

と、仲達は言って試験に向かっていったのだけれど。

（人材が足りないけど、落ちてるんだよな……仲達って）

そう思ったが言わないでおいた。

「それでは続きを始めましょうか。私の予想だと、今日中には全て終われそうですよ」

「そっか、なら司馬孚の予想が当たるように頑張らないとね」

そう言って、俺は再び勉強に戻った。

勉強が終わり、俺は司馬孚と共に司馬防さんの部屋へと向かった。
司馬孚が司馬防さんに勉強が全て終わった事を報告し、2人で部屋を出ようとした際に入れ替わりで仲達が入ってきた。
その表情は明るかったので、ひょっとして採用になったのかと思ったのだが。

「いや～、駄目でした」

その言葉に全員がズッコケました。
えぇ、どこかの喜劇の様な見事な転びようでしたよ。
司馬防さんなんて机に頭ぶつけてたからなぁ。

そして部屋に響くは、司馬防さんの「またか……」という声だった。

2話　どこへ行くにも準備は必要（後書き）

見事に暢介君は勘違い中の状態です。

しかし、筆者自身も「僕っこ」ってリアルで知り合った事ないんですが。

皆さんの知り合いにはおりますでしょうか？

さて、次の話辺りで旅立てればいいのですが……何か引き延ばしそうだなぁ（汗

3話　旅立ち（前書き）

旅立つまでの時間に3話分。
ペース的にどうなのだろうか。

さて、これから中国の地図を見て、2人をどのあたりまで進めるかを考えないと。
どこかで馬を手に入れたとしても距離を見つけないといけませんね。

あと、剣と暢介の決意の部分はもっといいのが浮かんだら訂正するかもです。

3話　旅立ち

笑顔で「落ちました～」という答えで場をズッコケさせた仲達。
その代償は母である司馬防さんの拳骨一発だった。

～暢介ｓｉｄｅ～

一日振り続けると思っていた雨は夜になると上がり、俺は外に出ていた。
見上げれば星が綺麗に見えており、それは今までいた場所では見れない風景でもあった。

「……昔、じいちゃんの家に行った時ぐらいだよな、こんな星が綺麗に見えたのって」

そう呟きながら、俺はさっきの司馬防さんとの会話を思い出していた。

「まだ、旅立つ決意は出来てないのかしら？」

そういう司馬防さんの表情は真面目で、先ほど仲達の頭に拳骨を落としていた人には見えない。
ちなみに仲達は司馬孚に引きずられながら部屋から出て行った。
頭に大きなコブを作って。

「恥ずかしいですけどまだ……この勉強が終わる頃には旅立つつ

もりでいたのですが」

俺の言葉に司馬防さんは小さく頷き、そして言った。

「恥ずかしい事ではないわよ。中途半端な決意ではこの大陸では生き残れないのだから」

「……」

「それに、誰かに仕えるにも旗上げするにも決意無き者に場所は無い」

中途半端な決意で王に仕えたり民を導く事は出来ない。
それは分かっている。

「だから、ここでその決意が出来るまでいても構わないわ。娘達もあなたに懐いているしね」

最後の方は笑みを浮かべながら話す司馬防さん。

「いえ、決意というか漠然としたものはあるんです」

「あら、ちゃんと考えてたのね。話してみて」

「はい。俺にはこの大陸全部の人々を幸せにするなんて事は決して出来ない……そう思っています」

司馬防さんの表情から笑みが消える。
分かってる、今の俺の言葉は守れない命もあると宣言しているのだから。

「多分、俺は人々から天の御使いと呼ばれると思います。だけど、俺は武と知も無い普通の人間です。決して神様じゃない」

「だから、俺に出来るのは多分……近くに居る人達だけなんだと思います」

「それは、領内の人間ということね。」

「勿論です。誰かに仕えるにしても旗上げするにしても、俺はその領内の人間を守りたいと思っているんです」

「……」

司馬防さんは顎に手を当て、考え始める。

「あなたの言うそれは、領土が広がればその分、守る人間は増えていくという事になるわね」

「はい」

「やがて、それが大陸全てに広がれば、あなたは大陸に住む全ての人達を守る……大きな夢ね」

「確かに夢です。だからでしょう、俺はその決意をしっかり持てないんです」

夢を語るだけならいくらでも出来る。

そう、問題はそれを実現するための道が見えるかどうかなのだが。

「その決意が持てないのは1人だからよ」

「1人だから？」

俺の言葉に司馬防さんは頷く。

「ええ。あなたの言うその夢は1人で背負うには重すぎるのだから決意も出来ないし、進む事も出来ない」

「だけど、こんな夢の様な話に乗るような人が」

俺の夢は明らかに大きく、実現なんて出来るかも分からない。
領内の皆を幸せにという段階でそれは綺麗事に聞こえるだろうし、それを大陸全部に広げる。
そんな理想論に付いてくるような人間が……

「どうかしら、久遠を連れて行ってみては」

「仲達を？」

司馬防さんの提案に俺はびっくりした。
自分の子供をこんな夢物語に付き合わせようとしているのだから。

「あの子もいい加減、誰かに仕官しないといけないと思っていたから丁度いいわ」

「そ、そんな事で自分の子供を……」

「あら。天の御使いの右腕なんて言われたらあの子だって嬉しいわよ」

そういう司馬防さんは笑顔だ。
思ったけど、この人って間違いなくSだよなぁ。

「それにあなたならあの子を導けると私は思ってるわ」

「え？」

「なぜ、あの子が色々な仕官先から断られてるか分かるかしら」

「断られる理由？」

仕官先から断られる理由、それは色々な要素があるよなぁ。
例えば、面接時の言葉使いとか服装、あるいは思想の向きとか。
あるいは面接官との相性とかだろうか。
あぁ、案外緊張して「君、表情暗いね」って言われてパニックになってボロボロになるってそりゃ俺だ。

「それはね、あの子の才、それを恐れているから」

「恐れる？」

「ええ。誰だって凶暴な虎を飼いたくはないでしょ」

それは当然だろう。
ある程度の地位にいる人間ならそれを死守したい。
そこに自分よりも明らかに上の能力を持っていて扱う事が困難だと思えばどうする。
簡単だ、それを採用せずに扱いやすそうな奴を雇えばいい。

「仲達は、だから落とされているんですか？」

「まぁ、あくまでも私の予想よ。案外、あの子は試験とか面接を手を抜いてるかもしれないし」

本当にそうなら説教ね。

そう司馬防さんは言うけど、その表情はそれはないわねという子を信じる親の表情だった。

「だけど、俺にその虎を預けるんですか？」

正直俺は猛獣使いじゃないし、どこかの動物王国の主でもない。

そんな虎を預けられても一口で終わりですよ。

「大丈夫よ。あなたの前なら虎も猫になるから……私を信じなさい」

そんな司馬防さんの言葉も信じられないのだけど。

それに何で俺の前だと虎が猫になるんだよ。

ただ、いくら親が認めても。

「仲達本人が俺に付いてくると言ってくれたら一緒に行きます。でも強制しないでください」

本人が嫌だといえば、それまでだ。

俺だって嫌がる人間を無理やり連れていく気は無い。

「ええ。分かってるわ」

そういう司馬防さんの表情は笑っていた。

先ほどまでのやりとりを思い返して俺はため息をついた。

「はぁ……司馬防さん。仲達を脅してるんじゃないだろうな」

そんな事は無いだろと思う自分と、大いにありうると思う自分がいる。

それに……場面も想像できるから厄介だ。

「確かに、仲達が一緒に来てくれたら助かるのは事実だよな。それに……」

仲達の様な、歴史に疎い俺でも知ってる大物が一緒に来てくれるなら有難い。

それに、おぼろげだった夢の景色が仲達と2人並んでみると少しだけ見えた気がした。

「俺は仲達が来てくれる事を期待してるのかな」

「嬉しい事を言ってくれるね、暢介は」

呟いた声に仲達の声が聞こえたので俺は視線を左右に振った。

すると、俺の左側に仲達が俺に背を向けた状態で立っていた。

「い、いつからそこにいたんだ？　というか、どっから来たんだ」

「ん？　いつからっていうと、『司馬防さん。仲達を脅してるん

じゃないだろうな』って所からで。どこから来たかは僕の部屋の窓から」

最初からいたのね。
あと仲達よ、窓は玄関じゃないぞ。

「司馬防さんとの話は終わったんだ」

「うん。すぐに終わったよ」

「そ、そっか」

結果が気になる俺は仲達の方を見る。
仲達は依然、俺に背を向けたままだ。

「あのさ、暢介」

「ん？」

沈黙を破ったのは仲達の方だった。

「暢介のしたい事。母上から聞いたよ」

「あぁ、どう思った」

「正直、大きすぎる夢だと思うよ」

「だよな」

「ただ、最初から大陸全員と言わなかったのは合格。流石にそれ

を言われたら僕は、がっかりしてたよ」

「だろうな。俺だって最初からそんな夢は言わないさ」

そうだ、最初から大陸全員なんて無理なんだ。
それなのにそれを追いかけるのはただの理想主義者だ。
悪いけど、俺はそれには乗れない。

「それに、その先には必ず他勢力との戦いがある」

だから、一呼吸入れて仲達は言った。

「もし、戦いになった時。暢介は相手を、殺す事が出来ますか？」

「……」

「即答は出来ませんか……」

少しだけ仲達の声に寂しさが含まれた気がした。

「勿論、誰も傷つかないのが一番いいさ。でもそれは無理だろ…
…互いに譲れないものがあるのだから」

「そうですね。そもそも、簡単に折れるものでは仕える人間が困
るわけですがね」

「あぁ、だから俺は戦う。戦って逝った人達に、俺の目指したも
のが正しかったと認めてもらえるように、そして残った人達が笑顔
で入れるようにね」

「……」

俺の言葉に、仲達は返答は無かった。
俺の思い、仲達には届かなかったかな。
そう、俺が思った時だった。

「……うん。決めた！」

「え？」

そう言って、仲達は俺の方を振り返った。
振り返った仲達は笑顔で思わず俺はドキッとした。

（おいおい、俺はノーマルだろ。何で男にときめいてんだよ。アッー！な関係はごめんだぞ）

無理やりそれを抑えた俺は仲達の方を目線だけじゃなく身体も向けた。

「決めたって。何を？」

我ながら馬鹿な質問だよな。
今の状況で決めたなら、１つしかないだろうに。

「僕は君と一緒に行くよ。君の夢を叶える為にね」

仲達は笑顔のままだ。

「いいのか？　君ぐらいの人なら……」

もっと、天下に近い人間に仕えられるだろうに。
そう言おうとした俺に仲達は首を横に振った。

「いいんだよ。僕が決めた事なんだから」

仲達は笑顔のまま、それでいて少しだけ頬を赤く染めて言った。

「僕は君と一緒に行くよ、だって僕は……」

（おいおいおい！！　この流れはどうみても「僕は君が好きなんだ」って流れだよな。俺はノーマルなんだよ！！）

まさかの展開予想に俺の頭は混乱状態。
ただ、仲達の答えは。

「僕は君を拾ったんだからさ。最後まで面倒みないとね」

ズッコケましたよ。ええ。
良かったと思う反面、何か複雑な気分にもなってます。
あと仲達よ、顔を赤くして言わないでくれ。

「何だ。保護者って事ですか」

「まぁね、それにさ……」

「ん？」

「２人で協力しながら、進んでいくのって凄く楽しいと思うんだ。
僕が出来ない事は暢介がやって、暢介が出来ない事は僕がやるから」

「それだと……殆どの事を仲達に任せないとな」

「うんうん。任せてよ、僕がちゃんとやってあげるよ」

笑顔で頷きながら仲達が言う。
おぉ、頭のアホ毛もピョンピョン跳ねてるよ。

頷きが終わると、仲達は真面目な表情で俺に告げる。

「僕の姓は司馬、名は懿、字は仲達……そして真名は久遠。これをあなたに預けます」

真名を預かる。
それがどれだけ大変で名誉な事か、それを受け取らない訳にはいかないよな。

「あぁ、確かに受け取った。俺には真名は無いから、今まで通り、暢介でいいよ」

「ええ。よろしくお願いしますね、暢介」

「こちらこそ、久遠」

～久遠ｓｉｄｅ～

「久遠、あなたが彼と共に行くというなら、私は母として喜んで送り出すわ」

「母上」

暢介との話の後、僕はもう一度母上の部屋に向かった。
そこで、暢介と一緒に行くという事を伝えた。

正直に言えば、告げた時に母上が喜ぶのだろうかと思っていた。
母上の言葉を借りれば、僕は娘達の中で一番の才能を持っていると言っていた。

それが天の御使いなんていう、最近になってようやく文章が読めてきている人と一緒に行くというのだ。
本来なら、それなりの勢力の王に仕えてほしいと思っているはずなんだ。

「私が考え直せとでも言うと思ったかしら？」

「正直、思ってました。　僕が母上の立場なら少し考えないかと言うと思います」

「そうね。私も、普通ならそういう所なんだけどね」

そう言って母上は、少し考えるそぶりをみせた。

「今思えば、あなたが彼に会うのはちょっとした運命なんじゃないかと思ってね」

「運命……ですか？」

「そう、彼に会うまであなたは仕官に失敗し続けた。そしてあの

日も試験に落ちて家に帰っている途中で彼に出会った」

「まぁ、確かに出来すぎてる感じがしますけど」

「そうね。あまりに出来すぎてるわね」

暢介を助けて、彼の旅立ちに同行する。
そこまでの流れはあまりにも出来すぎている、まるで初めからこの流れが決められていたかのように。
だけど。

「例え運命でも、僕は暢介と共にこの乱世。くぐり抜けて見せます」

「しっかり決意を持ってるわけだし。私が何を言っても駄目でしょうから」

それぐらいの決意を持っていれば、すぐに仕官できたでしょうに。
そう母上は苦笑しながら言った。

「それはそうと久遠、もしかしてとは思うけど、まだ彼は」

「ええっと……多分、勘違い中だと思います」

彼、暢介はまだ僕の事を男性だと思っているようだ。
どうやら彼の世界では一人称を「僕」と名乗る女性に会った経験がないのだろう。
だから、僕＝男性という式が出来ていると思う。

「その巻いているものをとってしまえば、すぐに分かるでしょう

に」

「そうなんですが、取る機会を逃してしまい」

本来なら最初の段階で伝えておくべきだった。

ただ、「僕女性なんですよ」なんてどこで言うべきなのか分からなかったんです。

「なら、明日からは取って行けばいいと思うわよ。彼の目が飛び出すかもしれないけどね」

悪い笑みでそう言う母上。

「流石に、旅立つその日に暢介を驚かせるのはどうかと思うので……落ち着いたら伝えます」

今は無理でもどこかで伝えればいい、当時の僕はそう思っていた。

ただ、この考えはあっさり壊れる事になる。

その原因を作ったのは僕自身なので、何とも言えないのだけれど……

～暢介ｓｉｄｅ～

翌日、旅立つ事になった俺と久遠を見送るのは司馬防さん１人だった。

その際に俺は、司馬防さんから一本の鞘に入った剣を手渡された。

「これは？」

「あなたへの私からの餞別です。気にしないでください。その辺に売ってたものですから」

そう言われ、俺は剣を見る。

ちょっと重いそれは、簡単に人の命を奪う事が出来るものだ。

「別にそれで、多くの者を殺せと言ってるわけじゃないわよ。ただね、長く戦場にいれば感覚はどんどんおかしくなっていくわ」

「……」

「それこそ、人を殺す事に慣れてしまう。命の重さも分からず、ただ己の欲望の為に殺してしまう……そんな人になってしまうわ」

「その剣は命の重さを感じる為のものよ。それを決して忘れてはいけませんよ」

「はい……ありがとうございます」

「いいのよ。私も自慢の子をあなたに預けるのだから、これぐらいはしないとね」

そう言って、司馬防さんは笑った。

ただ、なぜか隣に居た久遠はちょっと苦い表情を浮かべていた。

「久遠、しっかりと鷺島様を支えなさい。彼にとってこの場所で起こる事は全てが初めての事。彼の苦しみ、それを理解するのも大事な事よ」

「分かっています」

「鷺島様、久遠をよろしくお願いいたします。この子は精神面でまだ弱さを見せる時があります。その時には支えてあげてください」

「はい。俺も久遠に支えられてばかりじゃなく、支える、そのつもりでいます」

その答えに満足したのか司馬防さんは頷くと微笑み、別れを告げる。

「2人の活躍、この地から祈っておきましょう。……行ってらっしゃい久遠、鷺島様」

「さぁて、久遠。どっちに向かおうか？」

「とりあえず、南に行きましょう」

昨日の雨が嘘の様な晴天の中、2人は南に向かって歩を進める。

『番外』

「いいのよ。私も自慢の子をあなたに預けるのだから、これぐらいはしないとね」

（母上、何でそこで自慢の娘って言わないのですか……）

3話　旅立ち（後書き）

次の話では暢介君の勘違いを解消してあげましょう。

と言う事で、幕間という形になるかと思います。

なので、更新は早いかなぁ。

幕間　何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね（前書き）

さて、暢介君にはここで勘違いを解いてもらいましょう。

現在の筆者
地図確認→「ここまで行くと不自然じゃないかな」

と言う事で、場所を探しております。

幕間　何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね

～暢介ｓｉｄｅ～

旅立ちの日からひたすら歩いていると、自分がどれだけ恵まれた世界にいたのかが良く分かる。

遠くに行くなら、バスや列車、飛行機だってあった。
それに乗ればすぐに目的地についていたわけだから。

もちろん、この時代にそんなものは無いし、無い物ねだりをする訳にはいかない。

だけど、これだけは皆に言いたいんだ。

（人間って……歩こうと思えば歩けるもんだね）

そう、ある程度の距離になればそこで一歩も動けないぐらいに疲れ果てる所なのだが。
いつもある程度の余裕がある状態で宿に泊まれていた。

そして今日も余裕を持って宿に着いたわけだ。

常に余裕があるのは学生時代の走りこみでスタミナ強化を続けていた結果なのか。
それとも、久遠の距離配分が絶妙なのか。

（……どっちもだろうな。っていうか、このバッグ）

そう思い、俺は足元に置いてあるバッグを見る。
久遠が言うには俺が倒れていた場所のすぐ横に落ちていたらしい。
このバッグは俺の物であるのは間違いない、見覚えがあるしね。
ただ、こいつは実家に置いてきているから。

（俺をここに連れてきた奴は、実家に入り込んだって事か）

親父、お袋……どうやら家のセキュリティは不完全らしいぞ。

バッグの中にはボールペンとノート、そしてスニーカー。
スニーカーは大変役立っている。

何しろ、それまで俺が履いていたのは革靴だからだ。
いや、革靴で長い距離を延々と歩くのはどうかと俺は思うんですよ。

そして音楽プレイヤーとイヤホン……そして、実家に置いている、ヘッドホンが入っていた。
イヤホンかヘッドホン、どっちか1つでいいじゃんとその時、思ったのは内緒だ。
ただ、2つあって良かったとその後、思ったのだが。

まぁ、後は色々だね、下着とかも一応入っていた。

連れてきた奴は、実家に入り、一人暮らしの俺の家にも入って色々入れていったらしい。

ちなみに久遠にはボールペンとノート、そして音楽プレイヤーの説明はしておいた。

「うわ～こんな綺麗に書けるんですね」

ノートに自分の名前を書く久遠。

その様子を見ながら俺は、やっぱりここは自分がいた、現代と違うんだなと再認識した。

ボールペンでノートに文字を書くという当たり前の行為を久遠は珍しい物を見る目で見て。

今は、それを自分がやってみるという事で緊張していたからだ。

困ったのは音楽プレイヤーの説明だった。

音を楽しむという事で、この時代にも楽器はあるようで、その音を楽しむものだと説明したのだが。

久遠はいまいち、理解できなかったようで……いや、俺の説明力不足なのもあると思う。

社会人生活で培ったトークスキルは、まるで役立たずなようです。

しょうがないので、実際に聞かせようと思い、イヤホンを久遠の耳に入れようとしたのだが。

「いや！　入ってくる……」

という、声だけ聞いたら凄く誤解を受けそうな言葉を言う久遠。

ええ、その時の場所が宿で、久遠の部屋で良かったですよ。

これが街中とかだったら間違いなく俺、スケベ扱いですよ。

ただ、曲を楽しんだ久遠は気にいった曲があったのか、時折それ

を口ずさんでいる時がある。
ちょっと待ってね、久遠さん、その曲1回しか聞いてないのに全部覚えたの？
歌詞カードもなしで……凄いわぁ。
と、感心してしまったのは内緒だ。

そんな事を考えていると、部屋が取れたのか久遠がこちらに向かってくる。
ただ、その顔は何やら複雑な表情を浮かべていた。

「どうした？　そんな顔して」

「いえ……実はですね。一部屋しか取れなくてですね」

ん？　部屋は取れているんだから別にそんな複雑な表情しなくても。

「それも、寝台が1つしか無くてですね。いや、普通よりは大きいらしいんですが」

「あぁ、そう言う事か。でも、俺は構わないけどなぁ」

「構わないって……」

「まぁ、そういう所で並んで寝た経験はあるにはあるからなぁ」

「そ、そうなんですか……って暢介、何で遠くを見る様な目をす

るんですか？」

「いや、思い出したら自然と目線が遠くに」

思い出すべきじゃなかった、あれは高校生の時の合宿ときだ。
チームメートの１人がベッドを壊してしまい、なぜか俺のベッドに入ってきた。
気付かなかった俺は、翌日、視界一杯に入ってきたそいつの顔に思わず悲鳴をあげてしまった。

あれと比べれば、今回は何倍もマシだ。
あいつはどうみても野郎だったけど、久遠は中性的……っていうか女の子に見えるし。
うん、大丈夫だろう。

って……今度は表情が暗くなったぞ久遠のやつ。

～久遠ｓｉｄｅ～

ここまで暢介に自分の性別の事を告げなかったのは僕のせいだという事ははっきり分かっている。
ただ、言い出す機会が未だに見つからない。
というか、どこでこの事を言えばいいんだろうか。

今は部屋で既に暢介は寝台で横になっている。
先ほどまで話をしていたのだけれど、そこでも言い出せなかった。

「勘違いしてると思うけど、僕、女性だよ」

そう、この一言でいいんだ、なのに言えない。

そうしていつも通り、言い出せずに一日が終わってしまう。

この繰り返しだ、もう終りにしないと……

そう思いながら僕は暢介の方を見る。

既に眠りに入っているのか、規則正しい呼吸が聞こえるだけだ。

「……寝よう、今日はもう言えないし」

そう考え、僕は暢介の寝る寝台に横になった。

暢介とは背中合わせの状態をとる。

目をつぶるが、全く眠る事が出来ない。

ここ数日は伝えられなかった自分に嫌気がさして寝れない時が続いていた。

（いい加減、寝ないといけないのに）

そう思っていた、僕の脳裏に母上のあの言葉が出てきた。

それは旅立つ寸前に母上に引きとめられて言われた言葉だ。

「いい久遠、もしも彼に女性だと告げるのが難しいなら行動で示

しなさい」

「行動ですか？」

「そう……最悪、襲うしかないわね」

「襲うって何を言ってるんですか母上」

「最悪の場合よ。でもそうね……寝てる彼に抱きつくというのはどうかしら？」

「いや、どうかしらって……」

「彼が起きたら、自分にはそういう癖があるとでも言えばいいのよ……実際、あるみたいだし」

「な、無いですよ」

「あんたね、理遠（司馬朗の真名）が言ってたわよ、一緒に寝てたらいきなり抱きつかれたって」

「……あ」

「立派な物を持って抱きつくとは、無い自分への嫌味か！　って」

「立派な物って……」

「兎に角、方法はあるわ、後はあなたが何を選ぶかよ」

（何で、これを今思い出すんだろ）

それだけ切羽詰まってる状態という事なのだろう。

そう思った僕は、一旦寝台から降りた。

そして、胸を巻いていたそれを取り、再び寝台に横になり、暢介の方を向いたのだが。

（……だ、駄目だ。恥ずかしくてこれ以上は）

余計に恥ずかしさが増してしまい僕は背を向ける。

しかし、色々と考え、動いたおかげで、眠気がきてる事を感じた。

（もう寝よう、それに胸も取ってるし、明日になったら説明できるだろうし）

そう考えて僕は目を閉じた。

明日になれば自然と説明も出来ると考えて。

そして忘れていた。

母上が言っていた、僕の寝ている時の癖を。

～暢介ｓｉｄｅ～

気持ちよく寝ていたのですが、目が覚めてみると誰かに抱きつか

れている状態でした。
ええ、抱きついているのは久遠でしょう。
そうじゃなかったら、逆に凄く怖いです。

ただね、久遠でもおかしいんですよ。
だって、背中にさっきから当たってるんですよ。

何が当たってるかって？
背中に柔らかいのが当たってるんですよ。
分からない？　分からないならそれでもいいんですけど。

（おかしいだろ、だって久遠って男せ……って久遠本人は一言も言ってないよな）

そう、久遠は一度も「僕は男です」とは言っていない。
勝手に俺がそう思って、一人で納得していたわけだ。

（俺の勘違いか……って事は俺、今、女の子と一緒のベッドで寝てる）

そう考えると突然、体中が熱くなった気がした。
否、確実に熱くなってる。

（落ち着け俺、そうだ……昔、妹と一緒の布団で寝てたじゃないか……ってあれは肉親じゃ！！）

今寝てるのは、肉親じゃない……それにだ、ここまで密着したのは初めてで。
完全に混乱していた俺は、久遠を起こす事も忘れて一人で慌てふためいていた。

「本当にごめん！　勝手に男性だと勘違いしてました」

朝になり、今の俺は久遠に向かって土下座をしていた。
久遠は顔を真っ赤にしていたが。

「い、いえ、僕の方こそ、こんな行動をとってしまい」

と、決して怒っているわけでなく恥ずかしさの赤だった。

「いや、久遠が寝てる時に何かに抱きつくってのは癖なんだろ」

「らしいです」

「まぁ、こういう形で俺の勘違いが解けたのは良かったかどうかは疑問だけど……」

早い段階で知れて良かったよ。
そう告げると久遠はクスッと笑った。

「そうですね、まさか僕もこんな形で疑問が解けるとは……ってそもそも暢介が僕を女性って思えば良かった話じゃないの？」

「そ～ですね～」

某番組のお客さんみたいな返しになってしまった。

「ねぇ、どうして僕を男性だと思ったの？　やっぱり、僕に女性

の魅力がないから？」

そんな事は無いと、俺は首を横に振る。
久遠に女性の魅力がないなんて、ありえない。

特に何がという訳じゃなく、全体的に女性らしいです。
では何で、俺は男性だと思ったのか。

単純に、「僕っ子」なんているわけないよね。
という思い込みがあまりにも強かった。

ただ、今ではリアルでもいるんだなぁと考えを改めました。

「暢介、僕が女性だからといって、付き合い方を変えないでよね」

その言葉に俺は頷く。

「あぁ、変える気は無いよ。そもそも俺は男女って事で付き合い変えられるほど器用じゃないんでね」

「そっか、なら行こうか。今日も歩くよ」

そう言って久遠は腰かけていた寝台から立ち上がり荷物の方へ歩く。

（そもそも、女性との付き合いだってよく分からないからな）

思わず苦笑する俺。
女性との付き合いなんて、クラスメイトとか妹とかお袋ぐらいだ。
親密な付き合いなんて無かった。

見ると、今まで腰の所で纏めていた髪を、今は首の所で纏めている久遠の姿が。

「あれ？　位置変えるんだ」

そう言った俺に久遠は振り返り、笑顔で言った。

「うん。こうすれば女性っぽいと思ってね」

その後、宿を出る際に亭主が久遠を見てひっくり返ったのは内緒だ。

あぁ、亭主も久遠を男と思ってたのな。

幕間　何かを伝える時って大抵、口に出る前にバレルよね（後書き）

リアルで「僕っ子」に会ってみたい僕です。

次の辺りで義勇軍、そして2人目のキャラを出したい。

しかし、このキャラ、原作で名前だけ出てるっぽい。

これはオリキャラになるんか……

4話　守る為に……（前書き）

最近の出来事。

図書館にて三国志の本を探す。

「見つける」→「うわぁ～武将がイケメンの絵だ」→ｏｒｚ

俺が読みたいのはこういう本じゃないのに……

他の本も似たようなものばっかりで困ってますです。

ちなみに作中で久遠が口ずさんでいる歌ですが。

特に決まって無いので、皆さんそれぞれでどうぞ。

4話　守る為に……

～暢介ｓｉｄｅ～

義勇軍を募り、最初は３００人という数が集まった。
多いなぁと思っていた俺に久遠が言った一言は。

「う～ん、少ないなぁ」

３００人が少ないとは、俺はそう思ったのだが。
思えば、人の単位も俺の時代のそれとは違ってくるわけで。
時代によっては１０００人単位とかもあるわけだし……

それに、この３００人が全員入ってくるわけではなかった。
体力や実技、それにほんの少しの面接で少しばかり落とす。

面接にてこの３００人は2つのタイプに分かれる事になった。

一つは、「飯が食える」とか「御遣い様に付いて行けば何かいい事あるかも」と考える者。

もう一つは、真剣にこの世を憂い、乱世を終わらせたいと強い思いでいる者。
中には「御遣い様のお手伝いをしたい」と言ってくる者もいた。

この2つに分かれており、人数は後者が少し多く２００人、前者は１００人だった。

これをどうするか久遠との話し合いになったわけだが。
結論はすぐに出た、俺と久遠は同じ事を考えていたから。

全員採用ではなく、後者の方を取り、前者は落とすという方針だ。

これは2つのグループを一緒にしてしまえば後者グループに悪影響が出るだろうという予想からだった。

後者グループは訓練などを行えばどんなにきつくてもやり遂げようとするだろう。
しかし、前者はどうだろうか。
彼らの目的はあくまで飯を食ったり御遣いに付いて行く事で何か貰えたりするんじゃないかというもの。
よって、前者グループは訓練はまともにやらないだろう。

戦いにおいてもそうだ。
前者グループは、命の危機ともなれば武器を捨てて、さっさと逃げ出すだろう。
別に上官に忠誠を持ってる訳でもないし、金の切れ目ならぬ米の切れ目が縁の切れ目ってやつだろう。

後者グループは逆になるだろう。
彼らは命の危機になったとしても自らの命をかけて上官を守ろうとするだろう。
それが自分の役割であり、そうする事で上官が生き延び、それが自分の土地。
ひいては自分が守りたい身近な人達を守ってくれると信じ。

その2つを一緒にすれば、間違いなく不満が出る。
後者グループからすれば、物欲の連中と一緒に戦うのも不満だろ

うし、訓練も適当になって力にならない。
それでは賊との戦いで大きな被害になってしまうだろう。
そうして後者グループの方を採用する事になったわけだが。
その際に……

「まぁ、彼らに上に立つ者として信頼されてくださいね」

と、久遠に言われた。

上に立つ者としての信頼……
う～ん、社会人になってもまだ昇進とかしてなかったし……

部活でもキャプテンじゃなかったからなぁ。
上に立つ者ってどういう事をすればいいのやら……

その後、俺の取った行動は久遠を唖然とさせたわけだが。
その行動のおかげか、俺は兵士達に信頼され「この人の為なら死ねる」という形になり。
上に立つ者という事では成功したというべきなのだろう。

さて、３００人中２００人という少ない人数からスタートした訳だが。
別にこれ一回きりという訳でなく、何ヵ所かの街や村に寄った際に義勇軍を募っていた。
ただ、あくまで飯欲しさに来るものなどもいるために、増え方はあまり良くなく。

現在の所、６００人という人数になっている。

ただ、移動中に賊との戦いもあり、死んでいった者をいる。
この戦いの際に、俺も賊を殺しており、初めて人を殺すという経験をした。

正直、身体の震えは止まらなかったし嘔吐も止まらなかった。
人間ってここまで震えて、出す物も無いのに吐くんだなって思ったよ。

「大丈夫ですか……暢介」

心配そうに声をかける久遠に俺は右手を挙げて大丈夫だという意思表示をした。
声をかけてもらっただけだが、俺は少しだけ落ち着き、久遠の方を見た。
大分、辛そうな表情をしているんだろう、久遠や兵の皆の心配する表情が見える。

「……悪い、覚悟はしてたはずなんだけどな……」

人を殺すという覚悟を持って、旅に出たはずなのに実際に殺してからこんな感じだ。
いかに俺の覚悟が甘かったのか……自分自身に苦笑せざる得ない。

「いえ、その反応が当り前ですので、暢介は大丈夫ですよ」

「当り前？」

「ええ、人を殺しておいて、震えて吐いて、自分の覚悟の弱さを知る事です」

それに、久遠はそこで一旦言葉を切り、再び口を開いた。

「何の罪悪も無く、人を殺す人間に僕は仕えたくないですし、皆もそうだと思いますよ」

そう言うと、久遠は兵士達の方を振り向く。

兵士達は頷き、久遠はそれを確認すると俺の方をもう一度見た。

「暢介、その感情がある限り、あなたは大丈夫」

そういう久遠の表情はまるで、母親が子供を見る、そんな優しい表情だった。

さて、そんな事があったりして現在は南郷という所に来ています。

度々、賊との戦闘があり、それを撃破しているという事でこの辺りでは名前がそれなりに売れてきているらしい。

もともとは天の御使いが率いている義勇軍という事で少しは名があったようだが。

ただし、賊の立場からすれば名の売れている義勇軍を倒せば自分達の名も上がる。

なんていう考えの集団もいるらしく、名声のある分だけ戦闘も増

えていた。

戦闘が終われば敵味方関係なく供養する。

その行動がまた、名声を与えて色々な人に注目されるというわけだ。

しかし、そんな事は関係ないとばかりに俺達の移動は、まぁ緩い。

「♪～」

「ん？　久遠、その曲ばっかり口ずさんでるな、気に入ってるのか？」

隣で歌を口ずさんでいる久遠に俺は言った。

その曲は、俺の音楽プレイヤーに入っていた曲で、有名な曲だった。

久遠は一度だけ、それを聞いて、次の日には歌詞を全部覚えている状態で口ずさんでいた。

まぁ、英語とか無かったから覚えやすかったのかもしれないけど。

「気に入っているというか、これしか知らないから、それで暢介、どうでしたか私の歌は？」

「あぁ、とても上手だったよ」

それを聞いて、久遠は笑顔で再び口ずさみ始めた。

そうして歩を進めていくうちに街が見えてきた。

ようやく着いたかと俺達は安堵したのだが……

「ん？　何か騒がしいような……」

耳を澄ますと、街の方から人の声が聞こえてくるのだが様子がおかしい。

言い争っている感じの声が聞こえてくる。

「そうですね、すいませんが確かめてきてくれませんか？」

「はっ」

久遠の指示で、１人の兵士が入口へ向かっていった。

「それで、どうでしたか？」

「はっ。どうやら大規模な賊が来るという事で、県長が逃げ出したとの事で人々が混乱して」

兵士の報告に俺は久遠に聞いた。

「県長が逃げるって、それ不味いよな」

「不味いどころじゃないですよ。治める人間がいない訳ですから、何を出来ませんよ。このままだと」

「賊の侵入を許して略奪か？」

俺の答えに久遠は首を横に振る。

「それだけで済めばいいですが、それ以上の被害も考えられます」

「それって……」

俺の答えに久遠は頷く。

最悪の出来事が起こる、それを知っていてどこかに行く気はない。

俺は皆に告げる。

「ここの人達を助けよう」

「おぉ！」

俺達は街へ向けて進軍を開始した。

街に入ると口論している集団に出くわした。

「本当に申し訳ありません、私のせいで……」

右手に帽子を持って、女の子が頭を下げていた。

ただ、他の人々はその女の子を責める様子は見られなかった。

「いや、あんたの責任じゃない。ただ、相手が悪かったんだ」

「そうだな……それより、これからどうするんだ？」

「そりゃぁ……逃げるしかないだろう」

どうやら、人々は逃げるつもりでいるらしいが、何があったのかを聞く必要がありそうだ。

「何かあったんですか？」

俺は近くに居た男性に話しかけた。

「賊の奴が2人、この街に来て暴れてたんだが、あそこにいる嬢ちゃんが叩きのめしてな。それに怒った賊が仲間連れて攻めてくるって事で逃げよう話になってるんだが」

「そんな事が」

「あぁ……ん？　ってか、あんた誰だ。見た事ない服着てるし」

「えっと、俺は」

自己紹介を始めようとした瞬間、間に久遠が入ってきた。

「この方は鷺島暢介様と申しまして、こちらの義勇軍を率いている方で更に、噂されている天の御遣い様です」

「て、天の御遣い！」

男の声に周囲の視線が俺に集まる。

人々は「あれが天の御遣い様か」とか「見た事ない服だぁ」と言

っている。

（……俺、服を着てなかったらどんな風に見られたんだろ）

ちょっと泣けてきた。

そんな時、恐らくこの人々のまとめ役なのだろう初老の男性が一人、俺の前に立った。

「わしはここで長をさせてもらっているものじゃが。あんたは本当に天の御遣い様なのかのぉ？」

「天の御遣いに関しては、皆さんに信じてもらう他ありません。ただ……」

「……」

「育った場所から離れたくない、そう本心では思っている人々を見捨てる訳にはいかないんです」

そうだ、彼らは逃げるつもりでいるが、それは本心じゃない。

本当はここから離れたくないんだ。

自分が生まれ育った場所、自分の思い出の場所。

そこから離れるという事は、自分の思い出をも捨てるという事になるから。

そして、自分達が逃げてしまえば思い出の場所は賊によって壊されてしまう。

それはあまりに残酷だ。

「そうじゃの……自分の育った場所は自分の手で守る……当然の事じゃのぉ」

老人は頷くと、人々の方を向き、言った。

「わしらのこの生まれ育った街、守るぞ」

「で、ですが長老……逃げた方が」

「確かに逃げれば命は助かるじゃろうな、じゃが逃げた先でも賊が来たらどうする？　命ある限り逃げ続けなければならぬかもしれん」

それに……長老はそこで言葉を一旦切り、一呼吸入れて言った。

「ここに天の御遣い様が来たのも何かの天恵かもしれぬ、勿論、強制はせぬ。逃げる者は逃げても構わぬ、怨む事もない」

「……」

人々は考える。

長老の考えに乗り、ここにいる俺達と共にここを守る戦いに参加するのか。

それとも、この街を捨てて近い街でも村もいいからそこに逃げるのか。

ある程度の時間が経ったが、誰一人逃げようとはしない。

「……皆、この街が好きなんじゃな」

そう言った長老の言葉がすべてだった。
好きな場所を守る、何と単純でそれでいて素晴らしい事か。

「さて、御遣い様。指示を与えては下さいませぬか」

長老の言葉に俺は久遠の方を見る。
久遠は頷くと前に出て叫んだ。

「では、まずは賊の規模が分かる方と、このあたりの地形に一番詳しい方がいたら、僕の所に」

「それと、若い男性は武器になる物を探してきてください。女性の方は負傷者の手当てが出来る様に準備をお願いします。子供は、老人と一緒に安全な場所に避難を」

テキパキと指示を出す久遠。
そして、指示を受けた人々が一斉に散らばった。

……うん、俺の立場って一体何なんだろ。
こういう指示って本来は俺がやるべきなんだろうね。
やらないといけないんだろうな……

俺がやれる事っていえば……手伝いだな。

「よし、久遠。俺は街の人達の手伝いをしてくる」

「了解。戦闘前に張り切りすぎて怪我しないでよ」

「分かってるよ」

そう言って、俺は街の人達の手伝いに走った。

「現状の戦力だと、６００人の義勇軍に街の人達が４００、そして賊が１５００か」

数字だけで見ればその差は５００。

その差に街の人達の表情は暗くなった。

「ただ、５００という差はそこまで無い……ですよね」

久遠に話しかけたのは先ほど、街の人達に謝っていた女の子。

今は手に持っていた帽子を被っている。

うん。その帽子はどこかで見た事あると思ってたんだよ。

ようやく分かった。

その帽子はあの有名な考古学者で冒険家のあの人が被ってるのだね。

鞭を自由自在に使い、トロッコに乗ったりなんかするあの人。

だって、色まで一緒だし。

テーマソングが頭の中で鳴っています。

「そうですね、賊の戦法は人数任せで正面に突っ込んでくるだけと考えられます」

「策とは言えませんね、それなら手の打ちようはある。」

「ただ、もしかしたら敵に軍師がいれば話は変わるし、それに……」

「敵の中に武に長けた者がいる可能性もある」

その言葉に暗かった街の人々の表情が更に暗くなる。

ただ、そんな中でも「やっぱり逃げよう」とかそういう事にはならないのは。

既に覚悟を決めたという事なのかもしれない。

「今回の俺達はただ、勝つってだけじゃ駄目なんだ」

今まで黙っていた俺が口を開いたので皆の視線が集まる。

「ただの勝利や痛み分けじゃ、賊は何度でもここに来る、今回の俺達は大きな戦果が必要になるはずなんだ」

またここで生活をしたいという人々の願いを叶えるには　ただの勝利ではいけない。

大きな戦果を手に入れて、賊を牽制するという必要がある。

完全勝利。それが今回の俺達の勝利条件だ。

「その通りです暢介、僕が言おうと思ったんだけどな」

久遠が笑いながら、その中で感心しながら言う。

「それぐらいは分かるさ、ただね。詳しい作戦は、久遠。君に任せるよ」

戦術面についても俺は久遠に度々聞いてはいるのだが、まだ実践で使えるレベルじゃない。

未熟な状態で戦えば被害が大きくなってしまう恐れがある。

まだ、俺は久遠に全権を任せるしかない。

隊列・部隊分けなどが終わり、それぞれが持ち場について行く。

久遠は伏兵部隊の指揮を取る為に俺とは離れて動く事になる。

そして俺は賊が止まる事無く向かって来る様に正面に展開される部隊に配置となった。

義勇軍の中でも上位に入る人達を周りに置いてもらってはいるけども。

かなり危険な位置になる事は間違いなかった。

それと、あの帽子を被っている子とも少し話をしたんだけど、名前を単福と名乗っていた。

……うん、誰の事だか分かりません。

今までの戦いとはまるで違う、皆を守る戦いが始まる。

4話　守る為に……（後書き）

はい、2人目のオリキャラになるんでしょうか。
単福さん登場です。

彼女の被っている帽子はスポーティーソフトと呼ばれているもので。
某考古学者であり冒険家の彼が被っているので有名ですね。

他に帽子が思いつかなかったのは内緒です。

次の話で賊戦は終わって、勧誘ターンになればいいなと。

流石に今度は更新が遅れるかもしれないです。

5話　2人目の仲間（前書き）

勧誘の仕方が分からない。
そして戦闘描写が上手くいかない；w；
経験を重ねていくうちに上手くなっていければいいのですが

5話　2人目の仲間

賊の立場からすれば。
いつも通りの楽勝な仕事だと思っていた。
いつも通り、街を襲って物を奪う。
そして、自分の産まれた場所を守る為とかでわざわざ残った者達を殺す。

あとは、逃げ遅れた女子供を奪って売りさばく。
まぁ、女の方は売らずに自分達の物にする集団もある。
あぁ、流石に老人には買い手がつかないから殺しておくんだが。

現在の大陸では子供などはそれなりの額で売買がなされており。
賊にとっての収入源の一つになっていた。

そんないつも通りのはずだったのに。

……なんだ、この目の前に広がる光景は。

見渡せば、死んでいるのは殆どが賊で、義勇軍や街人なんかに追いかけまわされている。
今まで見た事も無い光景に他の賊達も恐怖からか逃げ出そうとしているのも見える。

義勇軍を率いているのは天の御遣いらしいという話は伝わっていた。
ただ、正直な所……「だからどうした?」というのが賊の中での

答えだった。

むしろ、そんな天の御遣いを殺してしまえばいいんじゃないかという話になっていた。

きっと高値で売れる物を多く持ってたり身につけているに違いないと。

彼らの中では天の御使いの存在なんてそんなものであった。

天の御使いが大陸に平穏を……それは全ての人の思いではないという事だった。

そして彼らは街に攻撃をしかけた。

攻める際に正面に見た事のない服を着た男を見て誰かが「あれが天の御使いじゃないか？」

そう言った。

彼らは攻撃対象を天の御遣いに定め、突っ込んで行ったのだが全てを跳ね返されていた。

近づく者は即座に義勇軍の兵士達に切り捨てられ、御遣いに近づく事さえできなかった。

御使いの近くにいる兵士達が義勇軍の中でも精鋭だったというのは彼らの知る由では無かった。

ただ、無意味な突撃を繰り返しては弾かれる。

もしも、賊に軍師の様な人がいれば即座に突撃を止めて下がらせるだろう。

しかし、彼らにそんな者はいない、だから走り出したら止まらない。

時間が経過するに連れて何人かは御遣いに近づけたのだが、今度は見た事も無い帽子を被った少女に止められる。
流れる様なその剣は彼女が剣に関して確かな腕を持っているという事がわかる。

ただ、御遣い自体の剣の腕もそれなりで賊相手には遅れは取ってはいない。
上手く行けた者もそこで終わってしまう。

やがて標的を一番弱い、街の人々に変えて行く訳だが。
今度は人々の殺気に怖気づいてしまう。

彼らは自分達の街を守るという信念と同時に、賊を許さないという怒りも持っている。
街や村を捨てて行く人達は、その怒りを殺して逃げていく。
残っていた人達もいるが、少数の為、その怒りが相手に伝わる事は無い。
あってもそれは弱く、簡単に消されるものであっただろう。

ただ、今回は違った。
彼らはその怒りを消す事なく、賊にぶつけている。
賊の立場からすれば、今まで襲った連中とは違うその雰囲気に恐怖を感じていた。
しかも、近くには義勇軍の兵士達もいるのだからたまったものではない。

そうして前掛りになっていた賊達が逃げようと後ろ向く。
そこに背後に回っていた義勇軍の別働隊が彼らめがけて突っ込んでくる。

完全な挟み撃ちに賊達は完全に浮足立ち次々と討ち取られていく。
中には命乞いをする者もいたが、問答無用で斬られていた。

やがて、戦いが終結した頃には多くの賊の遺体が転がっている景色が広がっていた。

～暢介ｓｉｄｅ～

「久遠、被害の方はどうなってる？」

戦いが終わり、現在は動ける者達で遺体を処理していた。
兵士達の動きは慣れたものでスムーズに動いていた。

「義勇軍の中では被害は少しで亡くなった者はいません……ただ」

そういう久遠の表情は曇る。
あぁ、そう言う事か……

「街の人達の被害か……」

「はい。義勇軍の人達が助けていたんですが、怪我人も多数で……」

被害０の戦いなんて存在しない。
あったとしても、それは戦力差が明らかに違いすぎる場合などだろう。

今回の様なほぼ同じ戦力差の場合、被害は確実に出てくる。

それは分かっていたし、覚悟はしていた。
だが……
「実際に、街の人達に被害が出たと聞くと……」
「ただ、敵を圧倒しての勝利は達成されたわけなのですが……」
表情の曇ったままの俺と久遠。
勝利条件は達成し、賊は壊滅しており、狙い通りのはずなのに。
心は晴れない。
ここを割り切る……そんな事、出来る訳がないよな。
「久遠、長を呼んできてもらえないかな」
「……暢介、謝罪するつもりですね」
その言葉に頷く俺。
「申し訳ありませんでした！」
長に頼んで、今回の戦いで亡くなった者の親族、あるいは恋人などを集めてもらった。
その人達を前に俺は頭を下げた。

周りから、ざわざわと声が聞こえる。

「俺達が助力したというのに、皆さんの大切な方々を死なせてしまい……」

戦い自体は完勝と言ってもいいものだった。
こちらの被害は少なく、相手は大敗している。
何人かの賊は逃げだせただろうが、再結集しても戦力が整うまで時間がかかるはずだ。

ただ、死者が出てしまった事が俺に重くのしかかっていた。
これを何とかしない限り、この戦いは完全に終わった訳ではない。

「御遣い様、お顔をあげてください」

女性の声が聞こえ、俺は顔をあげた。

「戦えば死ぬかもしれない、でもあの人達はそれも覚悟の上で戦いました。それで亡くなったとしても彼らは後悔はしていないと思います」

「だけど、残された皆さんは……」

そう、死んでいった人達は死も覚悟の上で戦い、そして死んでいった。
ただ、残された彼女達はどうだろうか。
大切な人が亡くなって、立ち直るのが簡単なはずがない。

そして、俺達は決まった勢力に属していない義勇軍。
つまりは色々な場所を転々としている存在だ。

仕官出来ればいいのだが、ここの県長は既に逃亡。
誰もいない状態なのだ。

せめて、ここが復興するまではいたいし、彼女達の心の傷を癒し。
それから次に向かおうと思っているのだが。

「ならば、御遣い様。あなたがここを治めてはいただけませんか？」

「え？　お、俺がですか？」

その申し出は予想していなかった。

「ええ、あなたがこの地を治めて皆を導いてくだされば……私はいずれ産まれてくる子に、あなたのお父さんはここの王と共に戦い、皆を守ったと伝えられます」

そう言うと、女性は自分の腹を擦った。
恐らく、亡くなった彼の子を宿していたのだろう。

見れば、残された人達の腕の中には生まれたばかりの子や。
まだ小さい子が多い。
もしも、彼らが大きくなり自分の父親がどうなったかと聞いてくる事もあるだろう。

その際に、母は胸を張って言える。
あなたの父は皆を守る為に戦い、そして亡くなったと。
ここを治める王と共に戦ったのよと……

「久遠……」

一人で決めるものではない。

そう判断した俺は、久遠に視線を向ける。

「何をするにしても始まりがあります。暢介、ここから始めましょう」

そう言うと、兵士達も頷く。

やがて、人々から「治めてほしい」とか「前の奴よりはずっといい」などと声が上がる。

街の人達からすれば、逃げようとした自分達を説得し、そして賊を殲滅し。

大切な人達を亡くして彼女達に頭を下げ、謝罪した。

今までの県長などからは考えられないその行動に彼らは信じた。

この方なら、きっと自分達を導いてくれると。

「……分かりました。よろしくお願いします」

暢介はそう言って、再び頭を下げた。

荊州は南郷、この地で俺は治める者、統治者としての一歩を踏み出す事になった。

～久遠ｓｉｄｅ～

「え？　単福さんをですか？」

統治者となった暢介と共に城に入った僕。

荷物などを部屋に置き、暢介は単福さんを誘えないかと言ってきた。

「うん、何となくなんだけど。彼女、優秀だと思ってさ」

「確かに優秀だと思いますが、どうでしょう？　もしかしたら、既にどこかの勢力に仕えていて、ここへはたまたま寄ったという可能性もありますし」

恐らく、彼女は優秀な人材だと思う。

ただ、暢介は何となくと評した。

うん。これをそのまま告げたら間違いなく本人は不機嫌になりそう。

だって「何となくだけど、君って優秀だと思うから仕えて」って事だ。

これを聞いて素直に仕えますって言う人間が珍しいと思う。

それにだ、彼女がもし、どこかの勢力の人間なら無理な引き抜きは止めておきたい。

それが理由で関係悪化で戦争になりかねない。

もっと、そうなったなら彼女の能力は本物という事になるんだけど。

「そうか……でも、どこにも仕えていないなら」

「仕えていないなら、話をしてはみますが……」

「あぁ、頼むよ久遠」

「もし勧誘に失敗しても怒らないで下さいよ」

そう言って、僕は単福さんがいる宿屋へ向かった。

その道中で、勧誘を成功させる為にどう言ってその気にさせるか文章を考えながら。

～単福ｓｉｄｅ～

仲達さんが仕官の話を持ってきた際には私は驚いていた。

特に私自身が何かしたという実感がないからだ。

剣で何かをしたわけでもなく。

知では何もしていない。

そんな状態の自分に仕官の誘い。

「ひょっとして、既にどこかに仕えているの？」

そういう仲達さんに私は首を横に振った。

「いえ。私はまだ、どこの勢力にも仕えてはおりません」

そう、私はまだどこにも仕えてはいない。

だから、ここに仕える事は可能だ。

それにあの謝罪などを見るに彼に仕える価値はある様に思える。上から目線になる者達と違い、彼は人々の視線まで降りる事が出来る。

「仕えていないなら、うちに仕えるというのはどうかな？」

「大変、魅力的な話しだと思います」

「なら……」

「はい、その仕官のお誘い。喜んでお受けいたします」

そういって私は仲達さんに頭を下げた。

そうして雑談を少しした所で私は言った。

「仲達さん、私の頼みを聞いてはくれませんか？」

「ん？　頼み？」

「はい、私は以前水鏡先生の私塾にいたのですが、そこで2人の友人がいました……」

その後の事を言うと、その2人の友人は私よりも先に仕えるべき主を探して旅に出た。

それから数日の後、私も同様の旅に出た。

「その2人がどこかの勢力に仕えているならば、どこかでぶつかるはずです」

「それはそうでしょうね」

「その時に私は、2人と戦い……勝ちたいと思っています」

この気持ちに嘘はない。

私は2人と一緒に過ごし、仲良しだったが、やはり負けたくないと思ってはいた。

まぁ、絶対に勝てないって思いたくは無かったから。

「……その時に、力を貸してほしいって事ね。いいですよ、僕達は仲間なんだから」

「いいんですか、敵は大きな壁ですよ」

「そんな事を言われたら、余計にやる気になるよ、僕」

そう言って、仲達さんは笑う。

私はそれを見ながら2人の友人の顔を思い出していた。

孔明ちゃん・士元ちゃん、私はずっとあなた達を支える役割を担っていた。

二人が作り出した策に穴は無いか、その策は現実的かなど。

でも、私だっていつまでの三番手にいるつもりはないよ。

天の御遣い様、そして目の前で今、笑っている仲達さん。

この3人でどこまで通用するか。
それを試したい。
だから、一緒の所に仕える事は出来ないみたい。

「あのですね、私の本名は単福では無くて……」

翌日、城に向かい天の御遣いこと、鷺島様に面会した私は偽名を使っていた事を謝罪した。

「あ、そうなんだ……それで本名は」

「はい、私は姓は徐、名は庶、字は元直、そして真名は燈(あかり)と申します。私の真名を受け取っていただけますか」

「確かに受け取った。俺は姓は鷺島、名は暢介、好きに呼んでくれて構わないから」

「分かりました、鷺島様。これから先、私は鷺島様と共に歩んでまいるつもりでおります」

「えっと、その真名は僕も呼んでいいのかな?」

仲達さんが尋ねてくる。

「はい、仲達さん。私の真名を受け取ってください」

「了解、確かに受け取ったよ。僕の真名は久遠、受け取って」

「はい、受け取りました久遠」

互いに真名を交換し、私達はこの地を治める事になる。

主を支え、人々を幸せに……さぁ、頑張ろう。

5話　2人目の仲間（後書き）

本当はここで、燈さんにはもうちょっと苦悩をしてほしかったんですが。
書いてみたら脈絡のない文章でした・ｗ・；

まぁ、対してこっちはあっさりしすぎですね。
本来はもうちょっと葛藤とかあるべきなのに。

次回は内政メインになるかと思います。
さぁ、内政の本を探しに（ｒｙ

6話　治安って大事だよねぇ（前書き）

オリキャラ紹介に関しましては次のオリキャラが出たら載せようかと思います。

えぇ、こういう風に書いているという事は。
登場が近いという訳です。

6話　治安って大事だよねぇ

～暢介ｓｉｄｅ～

物事を集中してやっていると、一日が早く進んでいく。
それをほぼ毎日繰り返していれば、時間の進みはとても早い。

今の俺の状態がまさにそれである。

街の統治者、県長となってからの数ヶ月間、あっという間だった。
こういう立場になった事のない俺からしたら何もかもが初めてだった。

兵士達の募集、城壁の修復、街の復興計画などなど……

だからと言って「いやぁ～俺、そういうの素人なんで」という訳にはいかない。
それに、俺自身もそういう言葉を言うつもりはない。

毎日が勉強という状態ながら、上手く街を立て直せてきているのは。
久遠や燈、そしてここに残っていた文官の力が大きいだろう。

その間、俺は机に向かい本を開いては勉強をしていた。
前の県長は本だけは大量に所有していたらしく、部屋の本棚は満杯だった。

それを見た燈が「ふわぁ～」と変な声をあげた事は忘れておこう。

うん、ただの本が好きなだけと納得しておいた。
でないと、顔を真っ赤にして俺を斬り殺そうとしていた光景が思い浮かぶから……
あの時は死ぬかと思ったけど。

さて、本来は復興に向けての道筋を作るべきなのだろうが。
指示を出すべき俺が、内政とは何か？　という状態なので、現状は久遠と燈の2人に任せてしまっている。

2人には正直、悪いと思っている。
内政だけでなく、兵士達の訓練なども2人は行っている。
訓練に関しては俺もやれる事はしているのだが、新兵の体力訓練ぐらいしかできない。

陣形や武器を扱った訓練になると、兵士達よりも弱い俺では教える事が出来ない。
なので、そこから先は2人が行っている。

よって、2人は朝早くから夜遅くまで政務と軍事をどちらも対処しなくてはいけなかった。
睡眠時間も削られており、2人は時折、欠伸をしたりなどと身体面で影響が出てきていた。

やがて、優秀な文官や兵士達の中でもまとめ役の人達が出てくる様になり、2人への負担は減る様になった。
睡眠時間もそれなりに取れる様になったのか、少しずつではあったが顔色が良くなっていた。
その中で、負担が減った分なのか2人は時間を見つけては俺に勉強を教える様になった。

「暢介には早く参加してもらわないとね」

という久遠。（笑顔）

「鷺島様の努力をより良いものにするのも配下の勤めです」

という燈。（こっちも笑顔）

2人の教え方は上手く、その成果として俺は2人と政務に関しての話が出来る様になっていた。

まぁ……まだ、簡単な部分ってだけで、あと、陣形とかの軍事面も勉強しないと……まだまだ、勉強は山積みだな。

あぁ、そういえば、どっかに流星が落ちたって噂が流れてきた。

噂話で多くの人の経由があったのか、どこに落ちたなどの情報は不明だった。

（天の御使いは俺だけじゃないって事か……）

そう思いながら、俺はその御遣いが誰に拾われたのか、気になっていた。

やがて、もう一人の天の御使いと対面する事になるのだが。

それはまた別の話。

～久遠ｓｉｄｅ～

復興を進める上で、一番大切なものは何か？
そう考えた際に、僕は「安心」と答える。

いかに優秀な統治者がいても、治安が悪ければ人々はそこを離れるだろう。
喧嘩、略奪などが日常的に行われれば人々は安心して暮らせない。

そうならない為、僕は治安改善に力を入れた。
燈や文官達と話し合い、警備隊の詰所、警備経路の作成。
それらを完成させて暢介の許可を貰う。

暢介もまた、治安改善が優先事項だという認識だったので、許可は比較的楽に貰えた。

さて、机の上で作られたものは実際に行うとその通りに行く可能性は低い。
人間というのは時として、予想を遥かに超える動きをする時があるからだ。

さて、実際に警備などが始まると盗人を捕まえたとか、喧嘩の仲裁などという報告が上がってくる。
それは最初の頃は増えていたのだが、徐々に減ってきており成果は見せていた。

成果が出ている事で僕は安心していた。
これで、この街は安全という事で近くの街や村から人が移住してくる可能性が出てきた。

人が増えればそれだけ経済面でも活発になれる。
もちろん、人が増えればそれだけ治安の悪化の原因にもなる。
だが、そうなっても大丈夫な様に話は進めているから、心配はしていない。
ただ、一点だけどうにかしないといけないなぁと思っている所はあった。
それを暢介に突かれる事になったのだけど。

～暢介ｓｉｄｅ～

「なぁ、久遠。この警備計画って夜の警備計画が不十分だと思ったんだけど」

復興計画を立てる際に久遠から出された警備計画書。
それを読み、俺はＧＯサインを出した訳だが。

改めて読み直すと、朝と昼に関してはしっかりと作成されていたそれに、夜の部分が殆ど書かれてなかった。
夜間警備が書かれなかった理由、その理由を俺は考えてみた。

考えられるのは人員か賃金、このどちらかだろう。
まず人員だが、不足しているならば募集をかける事で人は集まるはずだ。
移住者のおかげで人口は増えており、人には困らないはずだ。

では、賃金面か。
確かに夜の方が朝や昼と比べて高くなるだろう。
それは、俺の時代でもそうだったし。
「深夜バイトおいしい」と高校時代の友人も言っていたし
現状では俺達はそこまで裕福な状態ではない。
そこで賃金面で高い、夜の警備を削るのは致し方無いのかもしれない。
でも……
「夜に関しては、警備隊にかかる賃金の問題があって……」
久遠の答えは賃金面での理由だった。
「そっか……」
「夜間の警備を増やす事は重要だという事は分かってる、でも……僕らにはそこまで裕福じゃない」
裕福ではないか……ある程度の金銭があれば可能。
そして、夜の警備を行う事で人々が夜でも安心して出歩ける様に出来れば。
夜も商売をする人や商人が来る事が出来て経済面が良くなる。
そうなれば、もっと多くの人が来る事になるだろう。
そうなれば、安定して夜の警備隊の賃金が払えるはずだ……
つまり、きっかけを作る為に必要な金銭……あ……
「久遠。あるぞ……高値で売れそうな物が……」

「売れそうなもの？　鷺島様、そのような物がありましたか？」

燈が首を傾げる。

「あぁ、それは……」

そこまで言った時、久遠が悲鳴をあげた。

「だ、駄目ですよ！　暢介の部屋にある本を売るおつもりでしょう、あれは売っちゃ駄目です！」

いや、久遠。

街の治安の為なら、本を売るぐらい認めろよ。

それに……

「本じゃない、忘れたか。俺の部屋の右隣りの部屋に何があったか」

「……あっ」

そう、俺の部屋の右隣りには以前の県長が、買った美術品やらが置きっぱなしになっていたのだ。

調べてみると、それらは県長が税収を私的に使って購入していた物だったようだ。

どう処分するか、困った俺達はひとまず保管して置く事にした。

これらを持って逃げなかった辺り、以前の県長は命最優先だったのだろう。

選択的には間違ってないと思う、美術品とかを持って逃げてる最中に賊に見つかれば終わりだろうから。

「あいつ、いい物持ってるみたいじゃないか」そう言って襲われていた事だろう。

それに、生き延びたとしても改めてここに来てこれらを持っていく事は出来ないだろう。
既に調べはついてるし、来たらその場で逮捕されて終わりだ。

「あれを売ろう、もしかしたら全部が偽物かもしれないけど。そうなったら俺が警備兵達に頭下げて夜に回ってもらう様に頼むよ」

「分かりました。後で商人に来てもらって見積もってもらいましょう……あぁ、何人か連れて比べてもらいましょう」

複数の商人に見積を出してもらう。
その際に「あそこの商人は」と洩らす事で、本当に欲しい物ならば上積みをするだろう。
偽物なら、そこの商人に売るべきだという事だろう。

やる以上は少しでも高く欲しい。
そうする事でこの考えは成功に近づくのだから。

治安が復興への大きな道だ。
それがしっかりしていなければ何をやっても上手くはいかない。
夜の警備が成功すれば、次のステップへ向かう事が出来るはずだ。

上手くいくかどうかは分からない。
美術品が全品偽物で大した値がつかないならば、賃金での差がつけられずに夜の警備への志願者が増えない。

俺は、ここにはいない前県長の美術品を見る目がある事を祈った。

～燈ｓｉｄｅ～

結果を言えば、前県長の持っていた美術品は本物で高値で取引されました。

「これなら、夜間の警備編成も出来るかもしれない」

そう言って、久遠さんは早速私と文官さん達を含めて話し合いを始めました。

話し合いが終わり、久遠さんは警備隊の人達にその旨を伝えにいきました。

外は少しだけ薄暗くなっており、私は長い時間をかけて話し合っていたんだと実感しました。

そんな中、私は今、鷺島様の部屋の前に立っています。

さて……どうしよう。

私は扉の前でウロウロしながらどうしようかと考えていました。

いや、部屋の中に入った事はあるんです。

鷺島様の勉強を手伝うという事で、ただ……それは彼が部屋に入る前に声をかけたもので。

中に居る時に入った事はないので。

「……えっと、何て言って入ろう」

そんな事を考えていると……

「あれ？　何してるの燈？」

「ひゃぅ！」

突然、声をかけられて私は情けない声をあげてしまいました。
声の方を見ると久遠さんが不思議そうな表情を浮かべていました。

「驚かせたなら謝るけど、それより暢介の部屋の前でどうしたの？」

「えっと……」

「用があるんだったら、こうすれば……」

そういうと久遠さんは鷺島様の部屋の扉をドンドンと叩き始めました。
あまりの展開に呆然としてしまっています。

「いないみたい……ってどうしたの燈？」

「い、今のは」

言葉の意味がわかったのか、久遠さんは「あぁ」というと苦笑を浮かべた。

「そっか、燈は知らないんだっけ。これは、暢介のいた世界で部屋に誰かいる時に確認する為のでノックって言うんだって」

「〝のっく〟ですか」

「そっ、だから燈も暢介を呼びたい時はこうやって叩けばいいから」

なるほどを頷く私は、その時、久遠さんの手に持っている物を見た。

「あぁ、お風呂に行くんですか？」

久遠さんが持っていたのは洗面用具。

ここにはどういう訳か、風呂場が作られていた。

恐らく、以前の県長が作らせたものなのだろう。

……美術品といい風呂場といい……前の県長は色々な物を残してますねぇ。

「うん、ちょっと疲れちゃったから。あっ、そうだ燈も一緒にどう？」

久遠さんの申し出を断るのも悪いですよね。

それに、鷺島様もいないようだし……

「そうですね。ではご一緒させてもらいますね」

そう言って私は洗面用具を取りに部屋に戻った。

湯船に浸かり私は久遠さんの方を見た。

腰まで長い髪、どのくらいの期間伸ばしていたらあそこまで行くのだろう。

それに何というか、女性から見ても思わず見とれてしまう。

出る所は出てるし引っこむ所は引っこんでいる。

理想的な体型とはこの事を言うんだろうと私は一人で納得していた。

かく言う私は……だ、大丈夫。

で、出てる所に関しては負けていないと思う。

関係は無いが、身長に関しては友人2人と同じ私でも、ここに関しては2人に勝っている。

それが原因で一回、目の焦点のあっていない友人2人が。

「私達の……取ったんだよね……返して」

と言ってきたので、私塾内を逃げ回ったのもいい思い出です、はい……

「何遠い目をしてるの？」

声をかけられ、左を見ると。

湯船に浸かる久遠さんの姿が。

「いえ、ちょっと昔の事を」

何かを察してくれたのか、久遠さんはそれ以上は聞いてこなかった。

会話らしい会話も無いまま、時間だけが過ぎた。

ふと、耳を澄ますと久遠さんが何かを口ずさんでいた。

「♪～」

やがて、それが終わると久遠さんは私の視線に気づいた。

「あちゃ～いつもの感じで歌ってた」

「歌ってた？」

「うん、これは暢介が持っていた”おんがくぷれいやー”っていうのに入っててね、聞いて覚えちゃったんだ」

これ歌うと、暢介も喜ぶし……そう久遠さんは笑顔で話した。

歌か……

「まだ、その”おんがくぷれいやー”というのは、聞けるんでしょうか？」

「どうだろ……暢介に頼んでみればいいと思うけど」

そう言うと「そろそろ上がろうか」と久遠さんが言うので私も一緒に上がる事にしました。

部屋に戻る途中で再び、久遠さんが鷺島様の部屋の扉を”のっく”しましたが反応なし。
まだ、部屋に戻っていないようです。

「……どこ行っちゃったんだろ」

不安そうで、残念そうな感じの久遠さん。
私も少し残念です、もしいればその”おんがくぷれいやー”というもので聞いたものを覚えるのに。
そしてそれを鷺島様と一緒の時に歌えば。
もう少し仲良くなれるだろうに……そう考えていた。

～暢介ｓｉｄｅ～

俺は真っ暗な街の大通りの真ん中にいた。
誰もおらず、人々は家に帰り、外には出てはこない。
まだ辺りは暗くなったばかりなのにだ……
目を閉じて、俺がいたあの世界の夜を思い浮かべる。
夜遅くになっても光り輝く街並み。
その明るさは日を跨いでも続き、朝日が出る頃に消えていく。
消えた後には陽の明かりが照らしてくる。

目を開けて真っ暗な街を見る。
正直、怖いと思った。

街灯の明かりがどれだけ人に安心を与えるのかを再認識していた。

再び、目を閉じる。
今度はこの場所に露店などを並べて明るい感じにしてみた。

流石に子供達がいる光景ではないが、仕事上がりの兵士や文官達、
彼らが楽しく飲んだり食べたりしている光景。
それらを思い浮かべる。

目を開ければその光景は夢でしかない。
ただ、その夢に近づけるのがここを治める者のやるべき事ではない
のだろうか。

「やってみせるさ……」

そう呟き、俺は城へと戻った。

城に戻り、部屋に向かった俺の目に入ったのは俺の部屋の前でウ
ロウロしてる燈の姿だった。
何事かと聞くと、久遠から音楽プレイヤーの話を聞いたそうで。

「わ、私も聞きたいんです！」

と、大声で言うので分かったとバッグを漁った。
確認するとバッテリーはまだ持つようで安心した。

もし、電池切れなら俺は何て燈に説明すればいいのか悩んでいただろう。

そして、燈もまた久遠と同じようにイヤホンを入れる際に妙な事、知らない人が聞いたら誤解する台詞を言ったので。

またヘッドホンに変えて聞かせました。

やがて、一曲が終わると。

「珍しい経験をさせていただき、有難うございました」

と、頭を下げると部屋から出て行った。

あぁ……あなたもまた、一回聞いたら全部覚えるタイプなんですね。

正直、凄いよ。

と同時に、今度2人にデュエット曲でも聞かせて見ようかと思ってしまう俺なのであった。

6話　治安って大事だよねぇ（後書き）

街灯の有難味は本当に知って分かるものです。
筆者の場合は父親の実家の周辺が真っ暗で、自販機の明かりが頼もしく見えました。
その自販機が故障していた時にはまさに暗闇で、子供ながらにトイレに行けずに困っていました。

さて、次回ですが。
幕間を挟むか、黄色い賊さん達との戦いになるか。
まぁ、戦いになれば次のオリキャラ登場になるかと思いますが。

7話　新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人（前書き）

さて、3人目の登場となります。

今回の様な事をしたら、現実なら絶対に出来ないだろうなぁ。
絶対処罰されるだろうし。

まぁ、そこはご都合主義という事になるのでしょうか。

7話　新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人

～暢介ｓｉｄｅ～

ここ最近になって、賊にも多少の変化が出てきた。

今までは特に服装などに統一感があったわけではないのだが。
最近来ているのは頭に黄色い布を巻いた賊が出現している。

今までの賊とは違い、突然襲ってくるという特徴があり。
こっちとしてはいつ来るのかという予測が立てられない時がある。

ただし、強さに関して言えば一般の賊と変わらないので。
戦闘に入ってしまえばそのまま撃破されている訳だが。

どこにそんな戦力があるんだと言わんばかりに頻繁に出てくる。
そのせいで、兵士達の疲労はたまり、人々も外に出るのを躊躇してしまう。
結果として多少の街の発展が遅れてしまう。

そして、困るのがこの賊の始末である。
殺してしまうべきなのか、そのまま追放するのか。
扱いに大変困ってしまう。

放した所で、また賊になって来られても困る訳だし。
だからと言って殺すというのもこちらとしては取りたくはない手段だ。

相手の戦意を削ぐという意味合いでは処刑もやむなしなのだろうけども。
どうやら、彼らにそれは通用する感じがしない。

まぁ、彼らの本拠地は俺達の場所からは離れている為か、大軍で来るという事は少ない。
ただ……少数で何度も来るので……

「ふぅ……」

朝議の際に、久遠と燈のため息を何度も聞いている。
復興の際には文官達の働きで、仕事が楽になったので休めていたのだが。

この賊の攻撃の頻繁さに2人は兵を統率する役割も果たしているので出陣している。
もちろん俺も出ているのだが、2人はそれにプラスして内政も見なくてはいけない。
この言い方だと、俺は内政してない様に思われそうなので、しているという事は言っておくよ。

結果として、2人は再びロクに寝れない状態が続いている。
最近では久遠が風呂場で眠ってしまい、溺死しかかったらしい。

さすがに、これ以上2人に負担をかけるのは不味いので文官・武官の募集。
また、将として採用出来る様な人を探していたわけだが。
俺は大事な事を忘れていた。

その採用を担当するのも2人で、負担が増す事を。
流石に助けますよ……えぇ。

結果として言えば、文官として採用された者もいるし。
武官というか兵士として採用された者もいる。
ただ……将としての採用者は一人もいないという状態だった。

要するに、今までも何も変わらない状態が続きそうだという事だ。
内政の手は増えるので文官達に出す指示の量が増え、兵士達が増えるのでその編成の時間も取られる。

はっきり言えば、2人には休みがない状態な訳だ。
流石に俺の時代みたいに日曜は休みって事は出来ない訳で。
ただ、どこかで2人にはしっかりと休みを取ってほしいのだが……

「2人とも、大丈夫か？」

と聞けば、即座に。

「大丈夫です」

と返してくる。
顔色はかなり悪い状態なのだが。

そういう状態なので、疲れを取るにはお風呂だよね。
と思っていたのだが、そこで久遠が沈んで死にかけるという事を

やってしまう。

俺に出来る事はと言えば、その事で顔を真っ赤にしている久遠に対して。

「今度から入る時は、燈なり他の文官を誘ってくれ」

ようするに一人で入るなと指示を出す事ぐらいだった。

俺はなんだ、久遠のお父さんかなんかか？

～久遠ｓｉｄｅ～

あぁ……思い出すだけで恥ずかしい。

まさか、お風呂に入ってて死にかけるなんて。

燈が入って来なかったら本当に危なかった……こんなので死んじゃったら一族の恥だよ。

しかし、ここ最近は復興を始めた頃以上に忙しくなっている。

最初の賊殲滅の噂も消え始めており、賊が再び出てきてみたり。

その賊達とは違う、黄色い布を巻いた賊もたまに出てきている。

どっちも戦いになれば、倒せているので気にはしていないんだけど。

なにしろ、数が多すぎるのは問題なんだよねぇ……

数が多く、頻繁に発生する。

そのせいで兵士達の疲労も増すし、被害も出てくる。
今の所は深刻な問題まではいってはいないのだけれど。
それよりも、今の自分への仕事量の多さは一体何なのだろうか。
見れば、住民達からの意見書や文官達からの報告書。
部隊長などからの訓練の報告などなど……
同じような感じで燈にも回っている事だろう。
住民などからの意見書は暢介が「住民から意見を取ってみると、優先すべきものが分かるかも」
という事で意見箱を設置してみた訳で。
確かに、意見書の中には、なるほど、と感心するものもあったし、実際に実行した事もあった。
だが、同時に名前を書かないという事で意味が分からないものや。
どう見ても自分の利益にしかならないような事を書いてる者もいた。
ただ、全てを一応見ておくので量が多い。
勿論、暢介や燈、文官達にも分けているのだが……
「多すぎるよぉ……」
恐らくだが、住民の中に１０以上の意見書を入れてる人がいると思われる。
だって……多すぎだもん。

そう思い、僕は髪に手をやった。
……ぼさぼさだ。

ここ最近の忙しさで、ろくに髪の手入れをしていなかった事を思い出した。
仕事が終わって、お風呂入って、その後には寝るって流れが固定して来てるからなぁ。

この状態で朝議とか出てる事に最初は恥ずかしさもあったんだけど。
別に暢介が特に何か言ってくる訳でもなかったので気にしなくなっていた。
それに、燈もぼさぼさだったし。
暢介の反応の無さにちょっと寂しくもあった訳だけど。

そして、人材に関しても募集はしたが、将に取り立てられる者は、いなかった。
やっぱり、優秀な人材は既にどこかの勢力に所属しているのだろうか。
今回来た人達も優秀ではあったんだけども……将として考えると足りない感じがしていた。

高望みなのだろうか、いや、人材に関しては妥協してはいけない点だと思う。
人材は大切な宝だ、それを考えれば厳しく見るべきなのだから。

その時、扉が”のっく”された。

「久遠さん、私ですが」

声の主は燈だった。
僕は扉を開ける為に席を立った。

「ん？　どうしたの燈」

扉を開けると多少疲れた表情をした燈がそこにいた。
あぁ、確か燈も今は書類作業中だったね。

「えっとですね。実は仕官したいという方が来まして」

「え？　仕官希望者？」

それは珍しい事だ。
こちらから募集をかける事はあっても、自ら仕官しに来る人はいなかった。
嬉しい限りだ。

聞けば、既に暢介と会っているそうで、玉座の所にいるようだ。
僕は部屋を出ると燈と共にその人物の元へ向かった。

～？ｓｉｄｅ～

時間は少しだけ遡る。

「へぇ～いい感じに治められてる街じゃない。警備隊の配置も理想的だし」

私はそう言いながら辺りを見回す。

人々の笑顔は決して作られた笑顔じゃなく自然なものだ。

信じられないかもしれないが、街によっては県長などが他人の目を気にするあまり。

「常に笑顔でいろ！」なんてふざけた決まりを作っているらしい。

まぁ、そういう時の笑顔はあくまで作られたものだから、違和感があってしょうがないんだろうけど。

「夜も商店が出てて、活気があるってのも聞いたけど……まだ早いよねぇ」

以前、陽は出ており暗くなるまでまだそれなりに時間がかかりそうだ。

「うん。早く天の御遣いとやらに会って、どんな人物か見てみようかな」

そう考え私は、城の方へ向かった。

その道中、ちょっと前の会話を思い出していた。

「お、お前……今、なんつった？」

おぉ、私の上司様……すごい間抜け面してますよ。

ここは上司様の部屋。

「ですから、思う所がありここから出て行こうかと」

「いやいや、お前な……そんな簡単に辞めれる立場の人間じゃないだろ」

「……その職も辞して」

「簡単に辞めれる職じゃねぇだろ」

そういうと彼はため息をついた。
ここ最近は黄色い布を巻いた賊との戦いが続いており疲れているのだろう。
いつもの能天気さが見られない。

「本当に申し訳ないと思っています」

「その表情は嘘ついてる顔じゃないな……ふぅ……」

そう言って彼は苦笑を浮かべて言った。

「……認めるよ、説得しても聞かないからな、お前は」

「ありがとうございます」

そう言って私は彼に背を向けて、部屋を出て行こうとした。
出ていく以上は早く出るべきだろう。
と、その時。

「ちょっと待て……一ついいか」

「何でしょうか？」

彼の言葉に私は歩を止めて、彼の方を見る。
先ほどのまでの苦笑ではなく真剣な表情だった。

「誰に仕えるつもりで行くんだ？」

「……」

「お前が、この職を捨ててまでどこに行くのか……実家に帰って子供達に勉強でも教えるわけじゃないだろ」

私は無言のまま、彼を見る。
こういう真剣さがいつも出てくれればいいのにと、思った。

「誰かの元で、その知を使いたいんだろ。教えてくれ、誰なんだ」

「……天の御使いの噂はご存知ですか」

「天の御遣い？……あぁ、２人いるって話のか」

「はい。私はその内の１人、南郷にいる御遣いを見てみたいと思っています」

「あぁ、賊を殲滅し人々を救い、街を見事に復興させた話だったか」

私は頷く。
御使いの噂が良く流れており、その殆どは南郷にいる御使いの話である。

恐らく、配下の誰かが意図的に流しているのだろう。

「その通りです。その噂に大変興味を持って、噂が本当なら仕官したいと思っています」

「あぁ……お前は興味を持つと、実際に見てこないと納得しないもんな」

よく知ってるよ、と彼は言った。

そうだ、私はその噂や興味深い話を聞くと自分の目で見なければ納得はしない。

例え、どれだけ素晴らしかったと話を聞いてもだ。

「それでは、今度こそ失礼させていただきます」

そう頭を下げて部屋から出ようとすると……

「おいちょっと待て、最後の別れぐらい、いつもどおりでいこうや。そんな固い奴じゃないだろお前は」

「……」

「こんな形で分かれるなんて嫌だぞ、さっきから身体が痒くてしょうがねぇんだよ」

彼は笑顔でそう言っている。

やれやれ……

「はいはい、最後ぐらい固い感じで終わりたかったのになぁ～」

「んな事させるかよ」

「ちぇっ」

「ったく、御遣いの所で迷惑かけるなよ」

「その言い方だと、まるでお父さんみたいだねぇ」

「ふん、年齢的にはそんな感じだぞ」

「そうですね。……あぁ、私の真名は預けておきますね」

「そうか、大切に預かっておくよ」

別れが近い。

私は彼に笑顔で言った。

「では、行ってきます……今までありがとうございました……何進様」

「おぅ、行って来い氷花」

その声を聞いて私は部屋を出て行った。

門の所に兵士が立っている。

彼に頼んで御遣いの所まで行こう。

「すいません、御遣い様にお会いしたいのですが」
そう言われた兵士は慣れた感じで聞いてくる。
「ご用件は何でしょうか？」
その言葉に私はこう返す。
「仕官をしたいので取り次いでいただけませんか？」
その答えは予想してなかったのか、兵士の表情は驚きになった。

～暢介ｓｉｄｅ～

目の前に居る仕官希望者。
入ってきた時は猫耳頭巾を被っていたが俺の目の前に立つとそれを取った。
頭巾に隠れていた髪は真っ赤で長さは短め。
耳が気になるか何度も髪を触って耳が見えない様にしている。
……何かあるのか？
「す、すいません、遅れまし……うわぁ！」
そう思っている時に、久遠と燈が転がる様に部屋に入ってきた。
っていうか、実際に転んだしな。
その２人を見て、クスッと彼女は笑った。

急いで2人は俺の横に立つ。
おい久遠、燈、息が上がってるぞ。
疲労が溜まってる状態で走ったらそれは辛いだろ。

「こっちは全員揃ったよ。とりあえず、自己紹介からお願いできるかな？」

そう言うと、彼女は頷き、言った。

「はい、私、姓は荀、名は攸、字は公達と申します。この度は面会させていただきありがとうございます」

そう言って、彼女は頭を下げた。
その名前を聞いて久遠が少し考える様な仕草を見せる。

「えっと、荀攸さんは、どうしてうちに仕官を希望されたんですか？」

おい、俺のこの質問……就職試験の王道の1問目じゃないか。
「わが社を志望した理由」……思い出したくねぇ。

「はい、それは……」

そこまで荀攸さんが言いかけた瞬間。

「あー！」

何かを思い出したのか久遠が突然、大声を上げて荀攸さんを指さした。
おい久遠、指さすな失礼だぞ。

「だ、だって暢介、荀攸って言えば何進大将軍の右腕と言われた人物ですよ」

「だ、大将軍の右腕……」

そう言われて俺は荀攸さんの方を見る。

荀攸さんは、発言を途中で止められたはずなのに、にこやかなままだ。

「えっと……荀攸さん、彼女の言った事は……」

「はい。確かに私はここに行く以前は何進様にお仕えしておりました」

「……」

右腕なんて恐れ多いと言う荀攸さんの言葉が遠くに聞こえる。

ふと、久遠の方を見ると顔が真っ青だ。

燈も同様の顔色になっている。

おいおい、大将軍の右腕がここに仕官しに来るってどんな冗談だよ。

それに、この事を大将軍は知ってるのか？

知らなかったら大変だぞ……俺、流石にそういう人を敵に回したくはないぞ。

「あぁ、大丈夫ですよ。彼には全てを話し、理解してもらって去っていますので」

荀攸さんのその一言で俺達は少しだけ楽になった。
あぁ、良かった……

「では、改めて理由の方を話してもよろしいでしょうか？」

「は、はい」

「何進様の所に居た際に、何度も御遣い様の噂を耳にしておりました。復興、賊殲滅などなど……言えばキリが無いくらいに」

「そ、そんなに……」

そう言いながら俺は久遠を見る。
あ、久遠の奴、視線を逸らしやがった。
お前、色々と噂流してるって燈が言ってたからな、ある事ない事話してるんじゃないよな。

「はい。それほどの人物とはどのような人なのか大変興味を持ち、今回こちらに来たのです」

そして、荀攸さんは一呼吸を入れて再び口を開いた。

「この街の人々の笑顔……素晴らしいものでした。人々に、ここまで安心を与えられる主君ならば私も仕えたいと思い、ここに来ました」

「その感じだと、もし俺が噂通りの人間じゃ無かったらここには来なかったって事だね」

「勿論。もし噂が偽りなら、街を出て実家に帰っていたと思いま

す」

「そ、そうだったんだ……」

変な噂とか流れてなくて良かった。

復興や賊殲滅に関しては、自信を持ってやってますって言えるからなぁ。

もし、聞いた事も無い様な話を言われたらどうしようかと思ったよ。

「ですので、お願いいたします御遣い様」

荀攸さんは片膝を折り頭を下げ言った。

「この荀公達を、ぜひとも貴方様の配下にお加え下さい。必ずお役に立って見せましょう」

「えっと……荀攸さん、とりあえず顔を上げてください」

そう言うと荀攸さんは顔を上げる。

その表情は真剣そのものだ。

「仕官についてはこちらからお願いしたいぐらいです。これからよろしくお願いしますね」

そう言われた荀攸さんの表情は笑顔に変わった。

「はい、御遣い様の為、私の力を全て捧げます。その始まりとして私の真名を受け取って頂けますか？」

その言葉に俺は頷く。

「ありがとうございます。私は姓を荀、名を攸、字を公達、真名を氷花（ひょうか）と申します」

「あぁ、君の真名を受け取るよ。氷花、俺の事は好きに呼んでもらって構わないから」

そう言った瞬間、氷花の表情が困惑に変わる。

ん？　俺、変な事言ったか？

「えっと……どうしたの氷花？」

「あの、私……御遣い様の名前を知らないのですが」

「へ？」

「噂に聞くのは御遣い様の事なのですが、名前等が全然出てこなくて……」

その言葉を聞いた俺は久遠を見る。

だから、視線を逸らすな、口笛を吹くな。

「お前は、何を広めたんだ」

「えっと……御遣い様の事を中心に……名前は言ってなかったかも……」

「……」

その答えに俺は頭を抱えた。
つまりあれか、今の俺は「南郷にいる天の御遣い」って認知で「鷺島暢介」の認知は限りなく0ですか。
なんてこった…

「氷花、俺の姓は鷺島、名は暢介、字はないんだ。好きに呼んでくれて構わないから」

そう、立ちあがっていた氷花に告げた。
まぁ、呼び名なんて「鷺島」とか「鷺島様」とか「暢介」とか「暢介君」ぐらいだろう。

ただ、その時に気づけばよかった。
氷花の周りの空気が変わっていた事に、真面目な空気が薄れて来ていた事に。

「それじゃあ……暢ちゃんで」

「「「はぃ？」」」

見事にハモッタよ、俺達3人仲好いな。
いや、そういう事じゃなくて。

「ちょっと待ってよ、暢ちゃんって！」

久遠が怒った様な感じで言う。
いや、俺と燈は、まだ驚きから回復できていない。

「えぇ～だって、好きに呼んでくれて構わないって言ってくれたから呼んだんだけどなぁ」

氷花の表情がついさっきまでとは違い、何というか悪戯大好きって感じの表情に変わっている。
あれ……これが本来の氷花なのかな？

「う……」

俺自身が好きに呼んでいいと言った以上、呼び方で文句は言えない。
それに、暢ちゃんって呼ばれた経験あるし。
親戚のおばさんとかに……

「まぁ、その呼ばれ方は慣れてるからいいよ。それより、2人とも彼女を配下としていいかい？」

そう2人に告げると、先ほどの驚きから回復した燈が俺の方を向いて言った。

「鷺島様がお決めになった事ですので、私はそれに従うまでです」

次いで、久遠も視線を氷花から俺の方へ移して言った。

「僕も構わないよ……名前の呼び方はどうであれ、彼女は優秀だし、断る理由はないよ」

そう言って、2人は氷花の元へ行くと互いに自己紹介を始めた。
もちろん、真名も互いに交換し終わると俺の方を向いた。

「暢介、早速ですが氷花に、この街の現状等を説明してきます」

「あぁ、頼む。俺は新兵の体力訓練に行ってくるよ」

そう言って、俺達は部屋を出てそれぞれの場所へ分かれていった。

その後の事だが。

仕事に関して氷花の実力は予想通り高く、2人は仕事量が減った事に素直に喜んでいた。

仕事中の氷花は真面目なのだが……仕事が終わると久遠や燈をからかっていた。

まぁ、その対象は久遠が9割なんだけども。

久遠は別の意味で、疲れが増す事になったようだ。

7話　新しい人は真面目と悪戯好きが同居する人（後書き）

さて、3人目の氷花さん、彼女は桂花の年上の姪にあたる人ですね。
どこかで絡ませたいのですが……連合軍辺りになるでしょうか。

連合軍までに後2人のオリキャラを入れて、ひと段落です。
この2名は武官なので予想はしやすいかもしれません。
特に1名はオリキャラアリだと、ほぼ高確率で書かれているキャラです。

次は、拠点フェイズか先に進むか。
他の筆者様の作品を見ていますと、どうしても拠点を書いてみたいと思ってしまいます。
また、オリキャラ紹介も載せたいと思っています。

明日は休みか……（・w・；）＜どうみてもフラグですね

8話　欲しい人材は予め絞っておきましょう（前書き）

はい、凄く短いです。
ごめんなさい。

もっと長く書こうとしたんですが……ネタが・ｗ・；

8話　欲しい人材は予め絞っておきましょう

～暢介ｓｉｄｅ～

氷花が入った事で、久遠と燈の仕事量は確実に減った。

それによって2人の睡眠時間は少しずつ戻り始めた。

髪を手入れする時間が取れた様で、ボサボサだった髪は今ではサラサラになってるようだ。

まぁ、気づいてはいたけども女性に髪の事を言うのはどうかも思って言わなかった訳だ。

氷花は仕事中は真面目で久遠や燈を相手に改善点などを話し合っている。

今までは中心に居たのは久遠だったのだが、今では氷花が中心に居る。

やはり、経験者がいるだけで周りが変わるんだなと俺は思った。

確かに久遠も燈も知識はあったが、実際の経験は今回が初めてのもの。

そこに経験者が来てくれれば2人にはとても心強いだろう。

あれだ、ベテラン選手が若手を指導するって感じなんだろう。

……まぁ、ベテランと言っても氷花はまだ２０代なんだけどさ。

俺より年上だし。

ところが、そんな氷花だが仕事が終われば今までの姿が嘘の様な感じになる。
単純に悪戯好きな子供の様になる。

まぁ悪戯ってのも殆どがスキンシップのいきすぎという分類に入るやつだと思う。

例えば、久遠の背後から胸を触ったり……触ったり……あれ？
それしか出てこない……

つまりはそういう訳だ。

その後は顔を真っ赤にした久遠に拳骨を喰らう。
それを見ながら燈が「ふわ～」とこちらを顔を赤くする。

そして、俺がため息をつく、この光景は既に見慣れたものだ。

だから、今でも……

ここは朝議などを済ませる場所。
机と椅子が用意されており、それぞれが座ってから朝議が開始されるわけだが。

そこには顔を真っ赤にして席に座る久遠、席に着いている燈、ただ顔は赤い。
そして拳骨を喰らって地面に伸びている氷花。
ため息をつく俺。

いつもの日常です、今日も平和だ。

今回は久遠が入ってきた際に。

「おはよ～、久遠ちゃん～」

と、先に来ていた氷花が素早く久遠の背後に回り、胸を触った。

その後、拳骨を喰らって地面に伸びている。

「全く……氷花は油断も隙もない」

と、久遠は真っ赤にしたまましゃべる。

燈は「ふわ～」と声をあげていた。

パンパンと俺は手を叩き、皆の注目を集める。

「さぁ、朝議をしよう。氷花、起きろ」

そう言われて氷花は起き上がり、席に着いた。

その表情は真面目で、どうやらスイッチが入ったようだ。

その表情を見て、久遠と燈も表情を引き締める。

「さて、氷花が入った事で内政に関しては楽になったと思うんだけど、将軍職に関してはまだ不在だ」

将軍職の不在。

それが今の俺達が置かれている状態だ。

現在の賊との戦いは久遠や燈が兵を率いているが、それは賊が相手だから出来る事だ。
これがもし、別の王との戦いになれば前線で戦える将が必要となってくる。

王じゃなくても、賊で武に長けた人間が出てくる可能性もある。

「それで、近く武官の募集をかけようと思うんだけど、どのような人材を求めるかを決めておきたいんだ」

今回の議論はそこだ。
武官で武力があれば誰でもいいという訳じゃない。
条件をあらかじめ決めておいてそれを基準とした方がいい。

「条件としては、武があるのは勿論ですが……ある程度の知も欲しい所ですね」

そう発言したのは燈。
敵の策などを見破るには武官の方にもある程度の知は必要となってくるだろう。

「確かにその2つを兼ね備えた人材が必要でしょうね」

氷花も同意する。
あとは久遠なんだけども……

「僕も燈の意見に賛成だよ。相手の挑発などにあっさりかかる様なのは不要だからね」

瞬間湯沸かし器の様なやつはいらないって事か。

確かに、すぐに挑発に乗って突撃なんてされたら兵士達の命も危ないからなぁ

ふと、頭の中でどんな人材が欲しいのか考えてみる。

もちろん、戦場とかそういうのを想像するのは難しいから、俺のやってきたアレに置き換える。

そう、サッカーに。

現状のうちには司令塔が3人も存在している。

ただ、その先にいるはずのストライカーが存在していない状態だ。

攻撃の中心、つまりは戦場において武によって仲間を鼓舞する役割を果たす人物だ。

司令塔の3人にも得点力はあるが、やはりそのポジションには敵わない。

そこを獲得した場合、次に必要なのは何だろうか。

補佐役だ。

いかに攻撃に長けたストライカーを手に入れても、相手チームの作戦次第では完全消される。

それは戦場において、策略によって無力化されてしまうという事だ。

それを防ぐには、もう1人の選手が必要になってくる。

それは周囲の目を自分に向ける様に動き、ストライカーの仕事をしやすい様にする。

もちろん、自分自身もゴールを狙える様に攻撃力が必要になって

くる。
つまり、武と知のバランスがもっとも取れた人間でなくてはいけない。
バランスの取れた人間、何でもこなせる人間にそれを任せる。

俺は、3人に考えていた事を伝えた。
勿論、サッカーの部分は抜いておいた。
言ってもこの時代にサッカーは無いし……

「なるほど、敵と戦う将とそれを補佐する役割の将……」

氷花が考え込む。

「敵と戦う将はいるかもしれませんが、補佐する役割は……」

「そういう人材だと……もう、どこかの勢力に仕えているんじゃないかな」

燈と久遠はそう言った。

確かに、この条件は厳しいのかもしれない。
でも、妥協する訳にはいかない様に思える。

「……いいえ、見つけられるかもしれません」

氷花の声に俺達は氷花を見た。

「暢ちゃんが求める、人材、確かに高い能力の人ならばどこかに

仕官している可能性は高いでしょう」

ただし、そう氷花は付け加えた。

「他の人から見れば特徴が無いという評価を下された人はまだ、在野にいるかと思います」

「特徴がない？」

「はい、これと言って何かがある訳でもない人。そういう人の中に私達が望む人材はいるかもしれません」

「でも、特徴が無いというのは……」

「特徴が無い、確かに優れたものが無いという判断もありますが。その中には別の意味もあるかと思います」

別の意味か……

「長所が無い、それは纏まった能力のせいで抜けたものが無いという判断もできます」

「抜けたものは無いけれど、高い所で纏まっているって事か」

「はい。まぁ、試験官の目が良ければ見抜かれますが……賭けてみましょう」

次の募集に、実際にそういう人物が現れるのか。

現れてくれればいいが、そう俺は思った。

そして、実際に試験後に、その人材を手に入れる事になったわけだが。

それは次に語ろうか。

8話　欲しい人材は予め絞っておきましょう（後書き）

特徴が無いのが特徴です。
そういう人ってたまにいますよね。

私も、昔ある試験官にそう言われたことがありました。

それって褒め言葉なのでしょうか？
それとも、バカにされてたのでしょうか。
まぁ、いいんですが・ｗ・；

次回は残り2名の登用になります。

9話　思った事が叶う事って結構あるよね（前書き）

さて、残り2名の登場ですが。
1人は既にオリキャラ登場物では王道キャラの様な気がします。

そしてもう1名は……大丈夫ですよね。
知名度ありますよね……友人に「誰？」って言われて焦ってるんですが・ｗ・；

9話　思った事が叶う事って結構あるよね

～？ｓｉｄｅ～

「これが……御遣い様の治める街か」

目の前に広がる光景に私はただ、驚いた。

多くの店が賑わっており、その種類は食事処に留まらず。
服飾や装飾などといった雑貨にまで揃っていた。

何より私の目を引いたのはその人の多さだ。
多くの人が食品や雑貨などを見て回っており、その表情は明るい。

それに、これだけの人の多さなら治安の問題が出てくるはずだが、良く見れば。
警備兵と思われる人がしっかりと見回っている。

恐らく、ここだけじゃなく満遍なく配置されているのだろう。

（やはり、噂は本当だったのか）

私は、実家に戻っていた際に人々が言っていた噂を思い出していた。

曰く、南郷にいる天の御使いは街の復興を成功させたらしい。
また、優秀な部下達を使い、街を以前以上に豊かにさせたという。
そこは治安は良く、多く商人が商売をしにやってくる。
夜も明かりが照らされ、人がいなくなる事はない。

噂は流れていくと途中で色々と付け加えられてしまうものだ。
私も、この噂で本当の部分は半分……そう思っていた。

人々が集まれば治安の問題が大きくなっていく。
元々いた人達と新しく住む人達の間で争いが起こる事は多い。
それを上手く治めるのは並大抵の事ではない。
夜に関しても、治安が悪くなりやすいのは夜で街によっては人っ子一人出てこない所もある。

とは言うものの、その答えは実際に見なければわからないもので。
……確かめに行きたいなぁ……と私は思っていた。

ちょっと前まで役人だった私は、同僚の不正、民への暴力などを見て。
「こんな所にいられるか！」とさっさと、職を捨てて帰ってきたわけだ。
ようするに今は何の職にも就いていない。
時間はある、南郷まで行って見て、帰ってくる時間さえも。

そう思った私は、両親に南郷に向かう事を伝えた。

「南郷にいる天の御使いが治める街を見に行ってこようと思いま

す」と。

そう告げると、両親は「行ってきなさい」と言ってくれた。

その言葉に頷いた私は旅の準備を終えて、さぁ行こうかとなった所でどこで聞いてきたのか、付き合いの長い友人が家に来て私を外へ連れ出した。

本当に……どこで聞いてきたのやら。

「おい！　天の御使いの所に行くって本気か？」

「う、うん」

友人の剣幕に少しうろたえる私。

それに、顔が近いよ……ちょっと離れてよ。

「はぁ……時々だけど、お前の行動力って凄いよな。俺には真似出来ね」

「そうかな？　思い立ったらすぐに行くべきだと思うんだけど」

「早過ぎるだろ！　もうちょっと情報とか手に入れてから行っても損は無いと思うけどな」

そう言われ、ちょっと考える。

確かに御遣いの情報は少ない、名前も知らないし。

ただ、変に情報を手に入れるのも良くないだろうから、真っ白な

状態で行った方が良かったりする。
そう思っていた私は急いで行こうと思っていた。

まぁ、時間はあるし……あんまり言いたくないけど。

「それにさ、俺もお前も推挙されるかもしれないんだぞ。わざわざ南郷まで行かなくても」

そう私と友人は、劉曄様に「君達が良ければ、曹操様に推挙したいのだが」と言われていた。
これは名誉な事ですぐにでも受けるべきものなのだろうが。

私は「少し時間がほしい」と告げた。
それを聞いた友人は「お前、何言ってるんだよ」と驚きの表情をしていたのだが。

劉曄様は「構わない。自分の主を決める事、即決するものではない」と言ってくれました。
ちなみに友人は即決しようとしていたらしいけど。

「こんな機会は、二度と無いと思うぜ」

「うん、二度と無いと思う」

友人の言葉に私は頷く。
そもそも推挙されるなんてそんな話は絶対に無いだろう。

「だろ。だったら、曹操の所に行った方が絶対にいいはずだぜ」

確かに、曹操という人物は素晴らしい人物だという話は聞いてい

る。
素晴らしい統率力、そして内政に関しても高い能力を発揮する。
民の事を考えるその姿勢。
その姿を慕い、多くの者が集うと聞く。
そういう所に行けるのは名誉な事だと思う。
だが……
「私は、平凡だから……」
そう言った。
私には何か特化しているものがあるか、そう問われると答える事が出来ない。
優れた武も知も持っていない。
全てが「それなり」にという形だ。
聞けば曹操は優秀な人材を求めているという。
そんな所に平凡な私が行っても、意味が無い様な気がする。
それどころか、推挙してくれた劉曄様の評価も落としかねない。
「おいおい、まだ言ってたのか？　お前は全てが優秀なんだよ」
その話になると、友人はいつもこう返してくる。
「お前が平凡なら、俺とかどうするんだよ？　頭よくねぇし」
「でも、楓……あなたには弓がある。それは立派な能力だよ」
友人、楓の弓の技術は確かだ。

その弓の精度は高く、森に逃げ込んだ賊や動物を仕留められるほどに。

「弓だけさ……お前の様に何でもこなせない」

「でも、個性があるっていい事だよ。私にはそれも無いから」

苦笑を浮かべる私。

自分の事とは言え、個性が無いのがとても辛い。

思えば、子供の頃から私は何でも「それなり」に出来ていた。

ただ、「それなり」なので、どうしてもそれ以上の人が出てくる。

そうなれば私は存在感をなくしてしまう。

もう慣れてしまったけど……

「だからといって、どうして御使いの元へ行くって話になるんだ？」

「それなんだけど……」

私は楓に御使いの元へ行くその意味を話した。

最初の通り、噂話を確認したいという事に偽りは無い。

でも、噂通りの人物ならそれは仕えるに値するのではないだろうか。

「まぁ……私の様な人を配下にしてくれるかどうか、疑問だけどね」

そう最後を締めた。

我ながら……どれだけ後ろ向きなんだろうか。

「俺は、お前と一緒に曹操軍に行くもんだと思ってたけど、お前にはお前なりの考えがあったんだよな」

「楓……」

「何も考えないで行こうとしてるんだったら、首根っこ捕まえて止めてたけどな」

「さ、流石にそれは……」

「まぁ、幼馴染の俺から言える事は……とりあえずその後ろ向きな考えはやめとけ」

私は頷く。

「あと、自分は大した事が無いってその思考を止めろ。お前は凄い奴なんだからな、俺が言うんだから絶対だ」

「……」

「今度会う時は、敵かもしれんし、同盟結んで仲間かもしれん……まぁ、お前なら割り切ってくれそうだけどな」

逆に俺の方が色々考えそうだ。

そう楓は言った。

「だから、今度会った時……味方だったら、俺が曹操軍の兵士達に自慢できる様な将軍になっててくれよ」

「あそこにいる満寵将軍は俺の幼馴染だったんだってな」

「将軍か……」

「行けるさ。お前なら絶対にな」

止めるはずが、いつの間にか送り出そうとしている事に楓は気付いているのだろうか。

その後、普段通りの会話をし、私達は別れた。

家に戻った私は、劉曄様に仕官の件の断りの手紙を書いた。

これで私は曹操の元へ仕える機会を無くした。

でも、後悔はしていない。

翌日、楓に手紙を預けて私は村を出た。

目指すは南郷にいる御遣いの城へと……

（で、遠かったから商人の人の牛車に乗せてもらった訳だけど）

ついてみれば、噂通りで街が賑わっており人々の笑顔も自然なものだ。

そして、街の人から聞いたのは……

曰く、人材が不足しているそうで、特に武官を求めているらしい。

そして、その試験が今日行われるという。

それを聞いた私は、すぐに試験の申し込みの為に城へと向かった。

城に着いて申込みを済ませると、広場に通された。
そこには同じように申し込んだ人達がおり、準備運動などを行っていた。

それを見た私も、同様に準備運動を始める。
その際にある人物の所で視線が止まった。

腰まである長い髪、その色は青で凄く綺麗だった。
私もそれなりに長いのだけれどそこまではない。

背は高く、体型も出てる所は出てるといった所かな。
私？　……それなりにですよ、ええ、体型も身長もそれなりですよ。
なんか、泣けてきた。

ふと視線が彼女の持っている武器に移る。

大斧、それが彼女の持っている武器であった。
あれほどの大きさをきっと、軽々と使いこなすのだろう。
それに、あの人は強いというのが初対面なのに分かる。

ちなみに、私が使っているのは剣。
この扱いもそれなりで、何ともいえない。

やがて、試験官が来て今回の試験内容が発表される。

試験内容は、まずは弓の扱いから。
これに関しては、楓から教えてもらっていた経験がいい方向に向かいそうだ。

次は模擬戦、1対1で戦い、負けたらそこで終了となる。
これは……誰と当たるかで変わりそうだから運なのかな。
間違っても、あの人とは戦いたくない。

その後は、筆記があり終了。

うん、模擬戦を通れれば何とかいけるかもしれない。
頑張ろう。

私はそう、胸に誓った。

結果的に言えば、私は残れた。

弓の扱いは楓の教えを守った結果、的の中心を射抜く事が出来た。
次の模擬戦もあの大斧の女性と当たる事なく進み、残れた。
筆記だけど、これは一番自信があった。

うん、武官募集の試験で筆記が一番好成績ってどうなんだろって思いました。
だけど、そういう人がいてもいいと思うんです。

結果発表は翌日と言う事で用意された部屋で待つ私。
同部屋になったのは、あの大斧の女性だった。

あの人の模擬戦は見てて凄かったなぁ……私、相手が飛ぶのって初めて見たかも。
それに凄く速い動きも見せた。

あんな重い武器を持っているのにだ……

戦ったら間違いなく私も空を飛んでたはずだ……まだ飛ぶのはいいや。

先ほどからその彼女と話している。

お喋りな人では無い様で、ちょっと戸惑っていたけれど。

故郷の話や、自分の両親の事などを話していた。

何でも彼女、河東郡の出身らしく旅を続けてここまで来たらしい。

その後も話は続き「一緒に仕えられるといいね」という感じになれた。

やっぱり、同部屋の人とは仲良くならないとね。

商人の牛車に乗せてもらった時も、宿屋で話が弾んだおかげだし。

……あれ？　ひょっとしてこういうのも才能って言うんだろうか？

翌日、張り出された結果を見た私は安堵した。

書かれていた名前は2名、そのうちの1名は私だった。

ほっとして、もう1人の名前を見た私はその名前の人物を見た。

同部屋だった彼女の名前だったからだ。

彼女の方も気付いたのか、私と目が合うと笑顔になった。

その笑顔に私も笑顔を返す。

その後、文官の人について行った私達は御遣い様のいる部屋へと通された。

～暢介ｓｉｄｅ～

時間は、昨日の試験終了後に遡る

武官募集の試験において、久遠達3人が推薦してきたのは2人。
1人は徐晃公明という人物だった。

弓の技術があり、模擬戦において相手を飛ばしたという。
筆記では多少の誤答があったようだが、そこまで問題視するものではないらしい。

「彼女の武力は確かです、また知もあるようです。ぜひ彼女を採用してください」

3人とも、彼女を採用すべきだと推してくる。
まぁ、3人がそこまで推してくる人物だ、断る理由も無い。

そう思いながら、俺は他の受験者の結果を見ていた。
筆記に置いて、殆ど無回答の人もいる。
流石に武力だけの人間を取る気は無いので、スルーする。

将となる人に求められるのは何も武力だけじゃない。
軍師の考えを理解し、それを実行する。
また、いざという時は撤退もあるだろう、その判断力。
武力だけで、何は無くとも突撃だぁ～って人は危険すぎるからね。

そしてもう1人は満寵伯寧という人物。

「何でもこなせるというのは大きな長所なんですがね」

そう、満寵さんを評したのは氷花。

ちなみに今、仕事中なので真面目な氷花です。

全てが出来る人間ってかなり重宝する。

学生時代にサッカーをしていた際に、一番味方に居てほしかったのは何でも出来る奴だったからだ。

確かにスペシャリストと比べれば見劣りする。

ただ、その人が別の技術を求められた時にそれが出来るかと言えばそうではない。

そういう時に何でも出来る人物を置けば、チームとして機能するという事だ。

この世界に関しても同じだ。

何でも出来ると言う事は、訓練も出来る、そして非戦闘時には内政もこなせるという事だ。

外交だって、使者として向かわせる事が出来る。

便利屋と言われればそれまでだが、実際に一番頼りになるのはその便利屋だ。

というか、まさに俺達が求めていた補佐役にピッタリじゃないか。

「分かった。この2人を採用しよう」

そう、告げた。

そして今、採用された2人は久遠達と名前と真名を交換している。
満寵の真名は葵（あおい）、徐晃の真名は命（みこと）というらしい。
しっかり真名を受け取ったのだが……

「「あの、御遣い様の名前は何なのでしょうか？」」

という、どこかで聞いた様な言葉をまた聞いた訳だが。

噂を流した本人を見ると、やっぱり顔を逸らして口笛を吹いていた。
うん、今度からは俺の名前も出してほしいよ。

その後、名前を告げ「好きなように呼んでくれていいよ」と告げると。

「「はい、鷺島様」」

と、燈と同じ様に呼んでくれた。

話す限り、2人とも真面目な性格をしている。
仕事中の氷花となら相性はよさそうだけど……プライベートの氷花との相性はどうなんだろうか。

何か、久遠と同じ目に遭いそうな予感がする。
……不安だ。

9話　思った事が叶う事って結構あるよね（後書き）

ちなみに、葵の回想シーンで出てきた楓さんなんですが。
最初はこの人も三国志の武将で行こうと思ってたんですが……

色々あって本当にオリキャラに。
ただ、性別的には男性です。

男性で曹操軍……はぃ、扱いが分かりますよね・w・；
一応、連合軍辺りで出てくるかと思います。

次こそはオリキャラ紹介と拠点フェイズを書きたい所です。

オリキャラ紹介（前書き）

5人集まりましたので紹介文を作成いたしました。
史実での事も書いているという形になっております。

オリキャラ紹介

姓：司馬
名：懿
字：仲達

真名：久遠（くおん）

鷺島軍の軍師であり、暢介を保護した人物。

史実では西晋の礎を築いた人物、または孔明のライバルという方が有名なのかもしれない。
非常に苛烈な性格だったようだが感情を隠す事が非常に上手かったそうで。
激しい怒りを抱いている際にも表面は穏やかに振舞っていたらしい。

また、軍師というイメージがついているが、史実では将軍としての活躍が多かったようで。
某ＳＬＧでは鎧姿のビジュアルでの登場もあったようです。

この作品では、母である司馬防より久遠を含む姉妹の中で一番の素質を持っていると言われる。
名門の出身ではあるが、本人はそれを全面に出す様な事はしない。

幼少期の頃から培われた知識は豊富。
才色兼備で真面目、ただし幽霊には弱い（死人に策は通用しないから）
怒らせると非常に怖い。

髪型はロングで色は銀色。
リボンを結んでいるが場所は幕間までは背中の辺りで結んでいたが。
それ以降は、首の辺りで結んでいる。

第１８話の段階で暢介に対して恋心を持っている最中。
それを成就させようと氷花に引きずりまわされる。

拠点２において、お酒に酔うと陽気で大胆な性格となる。
ただし、記憶はしっかりと残っているため、自己嫌悪に陥りやすい。

姓：徐
名：庶
字：元直
真名：燈（あかり）

久遠同様に軍師として仕える。

史実においては、劉備軍の軍師として活躍。
その後、偽手紙により劉備の元を去る際に、孔明を推挙している。
撃剣の使い手とされている。
また、知人の仇討ちを行うなど任侠肌の人物とも言われる。

この作品内では、孔明と士元の２人が旅だった後に。
師である司馬徽より背中を押されるという形で旅立つ。
２人と一緒の主君に仕えるという考えはあった様だが、優先順位

は下だったようだ。

それ以上に2人と戦いたいという思いを持っており、仕官を勧めてきた暢介達と共に行く事を決めた。

司馬徽の私塾に入ってから書の楽しさを知った様で。
見た事の無い本を見ると「ふわ～」という声を出す。
ただ、見た事ある本や興味の無い本にはその反応は示さない。
友人2名の影響か、艶本を見つけても反応は薄い。

髪型はショートカットで色は黒。
帽子を被っており、薄茶色のスポーティーソフト帽。（某有名な考古学者で探検家をイメージしてください）
服装は孔明と同じデザインだが、燈はラフな形で着ている。

料理の腕は『普通に料理店出せるよね』というのは氷花談。
何でもこなせるけど一番の得意分野はお菓子作り。

姓：荀
名：攸
字：公達

真名：氷花（ひょうか）

元々は何進の元にいたが、去って暢介の元へ来た。

史実では董卓の暗殺を計画してみたり、蜀郡太守を自ら望むなど。
大変行動力があった人物だったようです。
その後は、叔父である荀イクと共に曹操の元で活躍。

曹操に仕えてからは、目立たず、慎ましく生きており。
その姿に曹操は息子の曹丕に対し。
「荀攸は人の手本となる人物である。お前は礼をつくして彼を尊敬しなければならぬぞ」と教えた。

その後、曹丕は荀攸が病気になった際に見舞いに訪れ、荀攸の寝台の下で拝礼をしたとの事。

この作品内においては、御使いの噂に興味を持って何進の元を去ります。
その後は暢介の元で上の2人同様に軍師として仕える事になります。

仕事中では経験の浅い久遠と燈を引っ張り、指導する立場になっている。
ただし、仕事が終われば久遠に対して、セクハラまがいの事を仕掛けるお茶目（本人談）な性格に変わる。
ちなみに燈に関しては「何か、手を出すと危ない気がする」と話している。

髪型はショートで髪の色は赤。
普段は猫耳頭巾を被っている。
長さ的には燈よりは長い、耳が隠れる程度の長さ。
また、耳を隠す仕草が多くみられる。

桂花と同じ服装で背も変わらないのだが、氷花の方が温和な感じを受ける。
服に関しても赤色になっている。
久遠の恋成就の為に奮闘中（半分以上は楽しそうだから）。

姓：満
名：寵
字：伯寧

真名：葵（あおい）

史実においては公明正大で法に厳しいが、傲慢でないため人に疎まれる事はなかったそうです。
初めの頃は洛南太守として領内の平定に手腕を発揮、その任務に忠実で信賞必罰を徹底する姿勢に。
曹操は大変喜んだそうです。

その後は軍事の職も経験し、後年は呉に対する守備の任を命じられる。
関羽・陸遜などの将とも戦い、それを撃退している。
曹氏四代に仕え、常に安定した能力を発揮した人物。

この作品内においては、自分自身の長所が見つからずに困り切っている。
ただ、周囲から見ると全てが高レベルで出来るという評価なのだが。
本人は、それに気付いていない。

氷花同様、御使いの噂に興味を持ちやってきた。

髪型は腰と首の間ぐらいの長さで色は白でストレート。

姓：徐

名：晃
字：公明
真名：命（みこと）

史実では、曹操軍に所属しており数多くの武功をあげています。
ただ、最後は矢を額に撃ち込まれるという最期ですが（正史では病死になってます）

情報収集を重視し、戦闘時には敗戦の場合の対策を念頭に置いて戦いを進めるという堅実派ですが。
好機と見れば、配下達に食事の暇も与えないほどの追撃を行う事もあった。

なお、三国志演義において徐晃を説得し曹操軍に引き込んだのは満寵という事になってます。
もちろん、曹操自身の策もあったようですが。
そして最期の時、孟達の討伐に向かっていたのは司馬懿だったそうです。
これだけ見ると、この軍の人と絡んでますよね。（まぁ、全員曹操軍って言ってもいいですしね）

本来ならばこの時には既に仕えているのですが未所属になってもらっています。

氷花・葵と違い、御使いの噂を聞いて城に来た訳ではなく。
ただ、旅をしていて到着した時に募集があったので志願したという経緯。

武器は大斧を愛用している。

髪型は青のロングヘアーをポニーテールにしている。

【データ】

身長順：命＞葵＝暢介＞久遠＞氷花＞燈
髪の長さ：久遠＝命＞葵＞氷花＞燈

オリキャラ紹介（後書き）

そろそろ、黄巾も終わり次に進めようかと思っております。

拠点は書いてはいるんですが、まとまらないという状況で。

まぁ、本編を優先すべきと思いますので。

１０話　噂は時として剣よりも鋭く刺す（前書き）

荀攸さんの耳の事ですが
叔父の不注意で怪我をしたという話はあります。

ただ、その後は創作ですので。

ご理解をお願いいたします。

１０話　噂は時として剣よりも鋭く刺す

～暢介ｓｉｄｅ～

「……なんで、こうなったかなぁ」

黄色い布を巻いた集団、黄巾党との戦いも序盤こそ押されてはいたものの。

やはり、中盤以降は対策を練られたりなどで勢いは消えつつあった。

現在は一か所に勢力を集結させているらしく注目されていた。

反撃を狙う為なのだろうか……

俺達はというと、集結に遅れた南陽黄巾軍の殲滅の為。

南陽へ兵を出していた。

「ここで南陽黄巾軍の殲滅に貢献できれば、名声も上がり、何か恩賞を貰えるかもしれません」

と、言う軍師達の言葉に従い兵を出した。

ええ、兵は出しましたよ。

俺は城にいますけども。

そう、今回出陣していったのは久遠・燈・葵・命の４人。

俺は留守番を命じられた。

まぁ、留守番でも街を見て回って改善するポイントは無いかとか。
ここの建物密集してるから燃えると危ないから区画を考えなければと思い。
城に戻ってから同様に留守役になっている氷花と話したりしていた。

しかし、氷花はどっちが素の氷花なのか分からない。
仕事中は真面目で終わればお茶目。
最近は葵も被害にあっているらしく警戒しているらしい。

そんな氷花だが、燈と命には手を出さない。
燈に関しては「いやぁ～燈ちゃんって小さいからさ……色々問題ありそう」
と、言っていた。

命に対しては「あれは、死にかねない」と命の危機を感じていたようだ。
まぁ、斧で殺されかねんからなぁ。

俺だって「荀攸様が徐晃様に悪戯した所、死にました」みたいな報告受けるのやだからな。
他国にも広まったら氷花の親族、別の意味で泣くぞ。

それと、久遠と葵が何か嬉しそうだったのは気のせいだと思いたい。

さて、現在俺は書庫に来ている。

この近辺の地図作成を行っているのだが、昔の地図を見てみようと思い来た。

書庫を歩き回っていると「んしょ、んしょ」と氷花の声が聞こえた。

声の方を見ると、氷花が背伸びをして上段にある竹簡を取ろうと手を伸ばしていた。

ただ、どう見ても届いていないのだが……

しばらく見ていた俺は、氷花に近づくとその竹簡を取った。

「あっ」

そう言った氷花に竹簡を手渡す。

その際に、俺は氷花の右耳に視線がいった。

普段は頭巾で隠れていたが、上を向いていた際にずり落ちたのだろう。

その右耳は少し変形しており傷の様なものが見える。

その視線に気づいたのか氷花は手渡された竹簡を落とし手で耳を隠した。

「……」

氷花の表情はいつものそれとは違う。

何か、怯えている様な雰囲気さえ受ける。

「氷花？」

そう、俺が声をかけた瞬間、氷花は逃げる様に書庫から出て行った。

俺は落ちた竹簡などを棚に適当に置くと後を追いかけた。

氷花の後を追いかけた俺は文官や、侍女などに氷花を見たかと聞いたが。

皆、見ていないという返答だった。

街の方も探し、尋ねたりもしたのだが誰も見ていないという結果だった。

（そういえば、氷花って耳を見せない様にしてたからなぁ）

頭巾を被っている際は見えていないが頭巾を取っていた時は髪で隠していた。

恐らく、あの傷は触れられたくない部分だったのだろう。

「……そりゃあ、あれだけ見てれば気付くよな」

知らなかったとは言え、その部分をジロジロ見てしまった。

「とにかく、氷花を見つけて謝らないと……」

その思いで俺は氷花を探し続けた。

辺りは薄暗くなり、俺は城に戻ってきた。
城に戻った後も探しまわった俺が最後に来たのは城壁の兵士達が見回る通路。
そこに氷花はいた。

声をかける前に氷花は俺に気付き、俺の方を向く。
互いに無言のまま、向き合っている。

「突然、逃げ出してしまい、申し訳ありませんでした」

そう言って氷花は頭を下げた。

「いや、俺の方こそ……ジロジロ見てしまった……ごめん」

俺も頭を下げる。

「暢ちゃ……鷺島様が謝る必要はありません。私が最初に言っておけばよかった事なのですから」

氷花の言葉に俺は頭を上げる。

再び無言となる。
辺りはどんどん暗くなっていて、街の方は明かりが灯されていくのが見える。

「聞かないんですか？」

氷花の声に俺はすぐに返した。

「氷花が話したいと思うなら話してくれ」

相手が隠したい事を他人が聞こうと頼むのはあまり良くは無いだろう。

そう思い、俺は氷花に任せた。

氷花は少しだけ考えると話し始めた。

「……この傷自体は子供の頃に叔父が酒に酔いまして、その際に出来たものです」

「……それって」

嫌な予感がして口を挟もうとした俺に、氷花は首を横に振りながら言った。

「鷺島様の考えている事は分かります、ただそれではありません」

「……」

「酔った叔父の近くを通っていた際に、叔父が飲んでいた杯を割ってしまいその破片が耳に当たってしまい」

この傷が、と氷花は傷痕を指さす。

「叔父の前では隠していたんですが、誰かから聞いた様で……すまなかったと……」

傷が出来た経緯を聞いていたが、俺は妙な感じを受けた。

今の話だと、叔父は氷花に謝っている。
多分、氷花自身もあれは事故だったと考えている。
ならば、書庫で怯えた目で俺を見たあれは何なんだろうか。

俺が考えている事が分かったのか、氷花は口を開いた。

「鷺島様。書庫でのあれに叔父は関係ありません。あれは、その後の事が」

「その後？」

「はい」

頷く氷花、そして……

「私は鷺島様の前の主君、何進様の前にもある人に仕えていました」

「そこで私は、普通に仕事をしていました。誰かに恨まれる事も無かった……と思っていました」

「思ってました？」

俺の言葉に氷花は頷く。

「本人にその気は無くても、他人から見れば恨まれる様な事だったのかもしれません」

「始まりは誰か、それは今でも分かりません。ある時、こんな噂が流れました」

曰く、荀公達の右耳は変形しており、それは生まれつきで呪われている……と。

「全く根も葉もない噂でしたが、人と言うのは不思議なもので噂を信じてしまうものです」

「気づけば、私に向けられる視線は、化け物を見る様な、そのようなものでした」

「ひどいな……」

恐らく、言い出したのは同じ様に仕えていた人間だろう。
氷花の能力を見れば優れている事は分かる。
それに嫉妬し、氷花の耳の変形を呪いだと嘘を広めた。
結果的にはそいつの思惑通りになった訳だ。

「この頭巾もあの頃は、一族が集まった時などに着ける程度だったんですが。噂以降は常に被っていました」

そう言う氷花。
ただ、それだと余計に相手に噂を信じさせたのではないだろうかと俺は思った。
噂に対して疑う程度だった人達も氷花が隠しだして「あぁ、噂は本当だったのか」と思いだしたのかもしれない。

「周りに人が寄り付かなくなり、仕事中も手伝いはなく……挙句、

暴言も吐かれ」

近づくな！　そう言うのはまだ良かった。
中には面白がって近づいてきて、無理やり頭巾を取ろうとする者もいた。

その為、仕事中は常に上司の傍から離れず、終われば即座に部屋にこもる生活だった。
そう氷花は話してくれた。

「鷺島様に取った行動は、過去に耳を見られた時の記憶が蘇ったからだと思います」

面白がって頭巾を取り、右耳の傷を見る。
その後、噂は本当だと知り、中には指を指し、笑った者もいる。
「気持ち悪いと……」言った者もいる。
どんなにこれは古傷だと言っても信じもしない。

それが、書庫で俺が氷花の耳を見た事で思い出してしまった。
そういう事らしい。

「そんな中で、何進様が私に自分の所へ来ないかと求めてくれたんです」

何進は政治の実権を握った際に、有望な人材を招聘し、その中に氷花が入っていた。
氷花からすれば、この様な場所から出れるならばと求めに応じた。

ただ、運は氷花に味方してくれなかったようだ。
その人材の中には氷花と同じ場所にいた人間もおり、勿論、その噂も知っていた。

そして、噂は再び氷花を苦しめる事となる。
新天地に来たつもりが同じ噂が他の人々に伝わり始め、氷花はまた孤立し始めていく。

たかが噂、その噂が氷花を苦しめ続ける。
何か目立った事をするでもなく、他人を蹴落とすなどの行動を取った覚えもない。
ただの嫉妬から始まった話。

たが、その噂もある時に終わりを告げる事になった。

「その噂を聞いた何進様が私を呼びだしたんです」

そう氷花は噂の終わりの時を話し始めた。

～氷花ｓｉｄｅ～（回想）

「おい氷花。お前、自分の噂は知ってるのか？」

「はい……存しております」

何進様の部屋に入った私はその一言に固まった。
とうとう、噂は何進様の耳に入ってしまったんだと……

「そうか……氷花、見せてみろ」

「え……」

見せてみろ、その言葉に身体が震える。
嫌だ……何進様に見られたくない。
あの人達と同じ様な反応をされたくない……

俯き、震えている私に何進様は椅子から立ち上がると私の傍に来た。

「出来れば、お前自身が頭巾を取って見せてくれ」

「い……嫌です」

「氷花……」

見せたくは無い。
これがもし、私の右耳に傷が無いなら好きなだけ見せたっていい。
でも、実際に私の右耳には傷があって、噂通りに変形している。

「いいか氷花。俺は別にお前の耳を見て笑ったり指を指すつもりはねぇ」

「……」

「それを見て、お前を首にするつもりもない」

「……」

「ただ、その噂が嘘ならお前は苦しんでるはずだ。違うか？」

「そ、それは」

「だから、その噂の真意を確かめさせてくれ。無理やり取るのだけはやりたくねぇんだ」

視線を上げると、何進様は普段見せない様な真面目な顔つきだった。

目線からも自分を信じろという思いが伝わってくる。

その真面目な表情に私は、この人を信じてもいいのではないかと思い、頭巾を取り右耳を見せた。

その後、右耳の変形は子供の頃の傷が原因であると何進様に告げた。

何進様は、なぜこの噂を否定しなかったのかと私に聞いて来た。

噂が異常な速度で広まった事、実際に私の耳を見た人がすぐに噂と結びつけた事。

怖くなって頭巾を被った事で噂が本当なんだと思ってしまった人。

そういう人達に右耳の変形は傷のせいだと伝えても信じてもらえなかった。

その内、私自身が諦めてしまった。

「ふむ……」

話を聞いた何進様が考えるそぶりを見せる。

何かを閃いたのか一人で納得すると、私には、もう部屋に戻っていいぞと告げた。

～回想終了～

～暢介ｓｉｄｅ～

「翌日、何進様は私を含めて今回招聘された人達の前でこう言いました」

「この中で荀公達の耳が変形してるのは呪いのせいだとふざけた噂を流した奴がいるみたいだな。荀公達の耳は古傷によって変形している、呪いなどではない」

「それを知らずに勝手な作り話で荀公達の名誉を汚す様な事をした者は誰だ！」

「今出てくれれば、許そう。だが、隠れているつもりならば私自らが探し出す。そのつもりでいろ」

その時の言葉を全部覚えていたのだろう。
氷花はそう言うと薄らと笑みを浮かべた。

「その日の内に、噂を話し始めた人物が出てきました。彼はその日の内に、郷に帰らされたようですが」

「そっか……」

「それからは、皆、私に謝罪してくれて元の生活に戻れました。何進様がいなければ今でも私は噂に怯えていたはずです」

恐らく、鷺島様の所に来ても、噂は追いかけてきていた事でしょう。

そう言って氷花は視線を俺から街の方へ向ける。

俺も同様に街に視線を移す。

夜間だと言うのに、街はまだ活気を失っていない。

今頃、酒や食事などを取る人々で賑わっている事だろう。

普段言えない上司への愚痴や待遇の不満を酒の力で言って笑う。

そういう景色が見られるはずだ。

「そういえば、氷花はよく耳を隠す仕草をしてるけど」

「あぁ……あれは私の癖で、止めるべきなのでしょうが……癖と言うのは治らないから、癖なのでしょう」

笑みを浮かべたままの氷花。

「そっか……」

「鷺島様は、もし私がここに来た際にその噂が流れてきたらどうなさっていましたか？」

「多分、何進さんと同じ事をすると思う」

噂とかそういうものを全く信じていないのもあるのかもしれない。

実際に確かめて、それで理由を本人から聞いて。

話したくない時もあるかもしれないが、噂を完全に鵜呑みにはしないだろう。

「そうですか……あの人と同じ様に……」

「それに、噂を信じたら久遠や燈が怒ると思うよ」

仲間の名誉を汚す奴はどこのどいつだ！！　って感じで探し回ってさ。

その噂を最初に作った奴を見つけ出し……その後は怖いな。

「仲間ですか……」

「仲間だろ、俺達皆」

「ふふ……そうですね」

そう言って笑う氷花。

それを見ながら俺は、何かを忘れている様な気がした。

忘れているそれを思い出そうと記憶を探る。

「あ……」

そして、思い出した俺は間抜けな声を出した。

「どうしたの？」

「いや……書庫で氷花が落とした竹簡、適当に棚に戻したんだ」

書庫は種類別で分けられている。

前の領主の頃は、適当に置かれていたそれを久遠や燈、文官達が分けた。

『絶対に、元に置いてた場所に戻してよね』

と言っていた久遠の顔を思い出す。

もしも、適当に直してたら分かってるよね……という怖い顔でした。

「あらら、しょうがない。私が直しますよ」

そう言って氷花は俺に背を向けて階段の方へ向かっていく。

「いや、置いたのは俺だから俺が……」

その言葉に、氷花は歩を止めて俺の方を向く。

「いいよ、元々は私がおとしたもの、自分で直すから」

それに、暢ちゃんじゃ全部直せないでしょ。

と、笑いながら言ってきた。

「……言い返せない」

「ふふ、まぁ任せて。久遠ちゃんに怒られない様にしとくから」

そう言って再び、俺に背を向けて歩き出す氷花。

だが、何かを言い忘れていたのかまた歩を止めて俺の方を見る。

「そうだ。私の耳の事、久遠ちゃん達には私の口から伝えるから」

「あぁ、俺から言う事はないよ」

その答えは予め知ってた様で、氷花は頷く。
そして、言い終わったのだろう、氷花は階段を下りていった。

一人になった俺は、視線を階段から街に再び移した。
それを見ながら、俺は時間が流れていくのを感じていた。

その後、部屋に戻る途中に書庫を覗くと氷花の姿はなく、適当に置いていた竹簡は無くなっていた。
竹簡が正しい場所に戻っているか、確認は出来ないが氷花が仕事を適当にこなす事は無いと信じているので。
俺はその場を離れた。

数日後、南陽黄巾軍討伐を終えて久遠達が帰ってきた。

報告に来た燈によると。
葵は戦場を広く見る事が出来て、その時の最善の行動を取ってくれる。
また、味方の部隊が有利になる様に補佐の役割も果たす。
軍師からしたら暴走する恐れが無いのでとても助かるとの事。

命は慎重な戦い方を見せていたが、好機と見るや、先頭をきって追撃を見せる。
状況判断に優れており、今回は無かったが撤退戦などでも上手く動いてくれると思われる。
彼女も暴走がなさそうなので、安心出来るとの事。

2人を獲得出来て本当に良かったですね、と燈は話す。
被害は少なくは無かったが、討伐にしっかり貢献できアピールで

きたとの事。
名声も上がり、これから兵士として志願してくる者も増えてくるでしょうと、燈は言った。

ところで、久遠達は？　と燈に聞くと疲れているらしくお風呂に向かったらしい。
それを聞いて俺は何か嫌な予感を感じた。
主に久遠に何かが起こりそうな……

～久遠ｓｉｄｅ～

目の前にいる氷花に思わず身構えてしまった。
見れば隣にいる葵も同様の姿勢をしていた。

「どうしちゃったの？　２人して」

口調で分かる。
今の氷花は仕事状態じゃない。

「い、いや……反射的に」

そう言うが、僕も葵も姿勢は変わらない。

「そう。それより、３人ともお疲れ様。燈ちゃんは暢ちゃんの所かな？」

「え？　う、うん。燈は暢介の所だけど」

おかしい、氷花がおかしい……

僕が思っていたのは。

『会えなかった分、一杯やらせてもらうぞ～』

って感じで飛びこんでくるかと思ったのだが。

手をワキワキさせながら。

しかし、現状を見るとその様子はなく至って普通だ。

「どうしたの久遠？　さっきから変だよ」

「い、いや……なんか、氷花の対応が普通だなぁって……」

普通……そう言いながら氷花は俯き考える。

考える間、僕は周囲の空気が変わったのを感じた。

主に氷花の周辺が。

「……ひょっとして久遠ちゃんってこういう事を考えてた？」

そう言いながら手をワキワキさせながら近づいてくる氷花。

あ～そうそう、こういう感じなんです……って！

「い、いや……出来ればさっきの普通の方が」

そう言いながら後ずさる。

氷花の狙いは僕か葵だ、葵には悪いけど上手く葵の方に……ってちょっと！

「何で、僕の方に来るの！」

「何でって……流石にここで葵ちゃんを狙ったら命ちゃんに怒られるし、私も死にたくないから」

見れば、葵は命の後ろに隠れており、僕に対して手を合わせて「ごめん」と言っていた。

視線を氷花に戻すと、笑みを浮かべたまま近づいてくる氷花。
怖い……こんな事なら燈じゃなくて僕が報告に行けばよかった……

どんどん近づいてくる氷花の威圧に耐え切れず、僕は逃げた。
逃げた僕のはいいのだが、当然の様に氷花は追いかけてくる。

必死に逃げる僕に笑みを浮かべて追いかける氷花。
それを呆れた表情で見る命とその後ろに隠れる葵。

日常に帰ってきたという思い。
ただね……

「こんな形で思い出すのは嫌だ！！」

その声は空に響いた。

～暢介ｓｉｄｅ～

久遠の悲鳴が聞こえる。
恐らく、氷花に捕まったのだろう。

見れば、燈も悲鳴の意味がわかったのか「ふわ～」と顔を真っ赤

にしていた。

ふと俺は氷花の事を思う。

本物の氷花はどっちだ？　その思いがあった。

仕事中とプライベート、どちらが素の氷花なのか。

思えば、何進さんの元へ行くまでは悪意のある噂のせいで毎日が苦痛だったはずだ。

ストレスなど、多くのものをため込んでいたはずだ。

それが何進さんの所で噂は無くなり本来の自分に戻れたのだろう。

ただ、ため込んでいたものがある分、弾けているようだが……

だから俺は久遠や葵に対してこう思う。

（多分、ある程度進めば落ち着いてくるはずだから……耐えろ）

自分には被害が来ないから言えるんだろうなと思いながら。

１０話　噂は時として剣よりも鋭く刺す（後書き）

荀攸さんの耳について。

どちらの耳を怪我したのか、調べたのですが分からないままでした。

今回は右耳と言う事にしましたが、もしご存じの方がいましたら。
教えていただけるとありがたいです。

さて、話は黄巾から連合へと向かいますが。
その前に、荀攸さんにはもう１つダメージを……

あれ？　このｓｓのヒロインって荀攸さんだっけ？

11話　自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね（前書き）

今回は恩賞を頂いて、少しレベルアップした暢介達。
そして氷花に取って悲しい出来事。
反董卓連合への檄文などがあります。

タイトルですが。
リアルでも自分の予想を超える様な物を貰う時は喜びよりも。
「え？　こんなにいいんですか？」と畏まってしまいますね。

11話　自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね

～暢介ｓｉｄｅ～

黄巾党の本隊が壊滅したという知らせが大陸中に広まった。
リーダーであった、張角らは死んだとの事だ。
残党などが残ってはいるのだが、トップが死んだ事で賊を辞める者が止まらないらしい。

そんな中で俺は、南陽黄巾軍殲滅の協力を行った事への恩賞が伝えられた。

「えっと……今、何て言った？」

「南郷太守に任ずるそうです……」

そういう久遠も信じられない表情を浮かべる。
いや、久遠だけじゃないこの場にいる全員が同様の表情を浮かべている。

確かに、久遠達４人が率いた軍は殲滅戦で大活躍をしたらしい。
野戦においては葵の部隊の援護がバッチリ決まり、官軍勝利に貢献。
攻城戦では命が一番乗りを果たし、官軍の将や兵達に強烈な印象を残したらしい。

「それにしても、いきなり太守に任命ってどうなんだ？」

出世しすぎだろと、俺は久遠に聞く。

街１つを治めてるに過ぎない俺が南郷郡を治めるって……

「う～ん、内政の事に関しては噂として中央にも広まってるし…

…それに」

「それに？」

「今回の殲滅戦で軍事に関しても活躍した事で官軍の将の人達からも称賛されましたから」

「太守として任命するに足りる人物と認識してくれたって事か」

その言葉に久遠は頷く。

「あ、言っておきますけど。お断りしますって出来ませんからね」

「分かってるよ。勿論、有難く受け取るよ」

断ると思ったのか、久遠が注意してきた。

流石に上からの命令を断る気はない。

その言葉にこの場にいた皆が笑みを浮かべた。

何だろう、ひょっとして「お断りします」って言うと思っていたのだろうか？

「なら、早速南郷郡にいる有力者の人達、そして荊州牧である王叡に挨拶に行くべきですね」

「同時に、郡の中にある街や村の状況を調べないと、賊などの攻撃で荒れたままの場所もあるはず」

燈と氷花がすぐに取るべき行動を示す。

太守として土地を治めると言っても、元よりここにいる有力者の協力を得ない事には話にならない。

協力が無ければ、復興は上手くいかないだろう。

そして荊州のトップにいる王叡への挨拶もしておくべきだろう。

上の人間の印象は良くしておいて損はない。

俺のいた時代と違って、上が気に入らなければそのまま殺されかねない。

そんな気がする。

「幸い、僕達は内政と軍事で評価を得ている。恐らく、有力者の人達も友好的だと思うけど」

有力者には天の御遣い、その看板は通用しない。

彼らは現実的に考えてくるだろう、だからこそ久遠の言う、内政と軍事の評価は武器になる。

俺達なら、この地を豊かにしてくれるのではないかと……

勿論、それに応えられなければならないのだが。

「あぁ、友好的なうちに挨拶は済ませておこう」

そう俺は言った。

王叡への挨拶は氷花と燈が行く事となった。
理由としては、まず王叡は武官を軽く見ている様で葵と命では話にならない。
誰にすべきかと話しあっていた際に氷花が自ら志願してきた。

「王叡への挨拶に失礼があってはいけません。ここは私に任せてください」

そう、氷花は言った。
ただ、1人は危険なので護衛の形でもう1人付ける様に頼んだ所。

「なら燈で、賊程度で葵や命を使う訳にはいきませんので」

気のせいだろうか、久遠と葵が、ほっとしたのは。
流石に挨拶に行く時は常時真面目モードだと思うぞ。
残った3人は有力者達への使者として向かう。

そして、俺はというと文官達と相談して郡内にある街などに派遣する者達を選定していた。

統治範囲が広がり、今までなら目の前の街だけだったのが郡全体を見る事になる。
その為、郡内にある街などにこの街の復興などに携わった文官を向かわせて内政に取りかかってもらう。
また、俺からの指示を受けてからの行動が素早いという事もあるだろう。

向かわせる文官達を決め、その近くに若い文官を一緒につけて向

かわせる事も決めておいた。
過去に氷花がいた事で久遠と燈が成長を見せた様に、ベテランから若手への教育も忘れてはいけない。

いくら優秀な人材を揃えても育成に失敗すれば勿体ない。
若手を成長させるには経験を積ませる事が一番、いい方法だと俺は思っている。
そして、その近くには多くの経験を積んだベテランを置いておく事が効果的だと思う。

そういう意味合いを込めて、派遣する人材をあらかた決めていった。

派遣を決めた文官達を説得し、派遣状態の際の給与なども話をつけていく。
中には難色を示している者もいたが、しっかりとした補償を持たせる事で納得してもらった。
交渉と言えるものなのかは疑問だが、とりあえずは必要な事だから頼むと誠意を込めたつもりだ。

難色を示していたのが若い方に多かったのは、ちょっと意外だったかなぁ。
普通はベテランの方が難色を示し、若い方が乗り気だと思っていたのだが。
まぁ、若い人からしたら、まだここで勉強したいという事なのだろうか。

ベテランの人達も有望な若手見つけたから一緒に連れて行って育てるんだという思いが強いのかな。
まぁ、そういう思いは大歓迎なんだけども。

ふと、思ったのだが案外この若手の文官の中に三国志とかに出てきた人が混じってるんじゃないかと思ってしまった。
本当にそうなら、嬉しいんだけど……名前聞いても分からないからなぁ俺……

本当にこんな事なら勉強しとくべきだったと強く思う。
まぁ、まさか三国志の世界に飛ばされるなんて思った事ないし、今更言っても遅い。

やがて、有力者達や州牧への挨拶を済ませた久遠達が帰ってくる。
報告では州牧への印象は、悪くは無いとの事。
まぁ、悪い印象さえ与えなければ成功と言ってもいいだろう。

有力者達だが、本当に友好的な者もいれば、表向きな者もいたようだ。
当然と言えば当然だろう、最初から皆仲良し何て事は無い。
そういう人達の信頼を得るには結果を残すしかない。

南郷太守となり、各地からの報告や有力者などとの会談。
名を上げた事で志願してる兵士達も増えており、新兵訓練の体力作りの時間も取りづらくなっていた。

久遠達とも仕事以外で会話らしい会話はしていない。
というか……ここ最近は朝議以外で殆ど会ってないような……

この間に変わった事と言えば、命の進言で間諜などの諜報部隊を作った事か。

いつの時代も情報を制するものが時代を制するという事なのだろうか。

学生時代の部活においても、他校の状況などを調べる役割の人間がいた。

中心選手や戦術などを調べ、ミーティングで発表する。

それを持って、試合に臨んでいった事を思い出した。

まぁ、少し違うかもしれないが情報の大切さは知っているので命の進言を受け入れた。

この部隊は命自身が訓練などを行い、間諜を育てている。

金銭面や人材面で多くの間諜の育成は難しいが確実に育っている様だ。

そんな中で、ある話が大陸中に広まった。

漢の皇帝である、霊帝が亡くなったという事だ。

霊帝の死後、朝廷内では大将軍何進と十常侍の確執から争いが起こり始めた。

何進が争っている、その話が来た時、ある人物に変化が起こった。

俺がそれを知ったのはある日、葵からの報告だった。

「鷺島様、氷花さんの様子がこの所おかしいのですが」

という事だった。

氷花の以前の主である何進が争いの中心にいる。

別に仲違いで離れた訳でなく、氷花のわがままで離れただけだ。

何進の身を案じているのだろうと思った。

ただ、仕事のスピードが落ちると拙いので氷花の仕事量を削り、仕事に慣れて処理速度が異常な事になってる久遠に回しておいた。

恐らく、本人も「いつもより少し多め？」という感じでしかないだろう。

というか、それぐらいの速度になっているという事です。

そのスピードが俺にも欲しいよ、本当に。

争いはどんどんと泥沼化していき、互いに引けない所まで来てしまっていた。

いや、最初から引く気などどちらも無かったと思う。

結果から言えば、何進は十常侍によって暗殺され、十常侍はその後、何者かに暗殺された。

最終的には当時、地方領主であった董卓によって一応の収束を見せた。

氷花の事に関しては何進が暗殺されたという報告を受けた際に、呆然となっていた。

それからしばらくは仕事が出来る状態ではなかったので、久遠や

燈に仕事を回し氷花には休みを与えた。

流石に、今の主は俺だ！　過去の奴は忘れろ。
何て事を言うつもりはないし、言ってはいけないだろう。

どれだけ悲しんだかでその人が相手の事をどう思っているかが分かると誰かが言っていた気がする。
それならば、氷花は何進という人物を慕っていたのだろう。
耳の傷、そこから生まれた噂で苦しんでいた氷花を救ってくれた人だから。

氷花が再び政務に戻ったのはそれから1週間ぐらい経った頃だろうか。

「長い休みを取ってしまい、申し訳ありませんでした。もう大丈夫です」

そう、力強く氷花は言った。

さて、董卓によって収束を見せかけていた大陸であったが、あくまで【見せかけていた】という事だ。
争いの火種は存在していて、それは言いがかりでも導火線へと着火するのには十分で。
その導火線の先に居る運の悪い人物は他でもない董卓だった。

内政に一段落がつき、一日の流れが少しゆっくりし始めた頃。
俺達の元に檄文が届いた。

送り主は袁紹。

「董卓が洛陽で暴政を働き、民達が苦しんでいるから解放する為に兵を出してほしいという内容だね」

檄文の内容を見ながら久遠が話す。

その表情は、どことなく釈然としないものだった。

見れば、大広間に集まっている皆が檄文を読み、そして首をかしげていた。

「普通なら信用すべきなのでしょうが……どうも、内容が」

「うん。董卓を一方的に悪者に仕立てあげているんだよね」

燈の言葉に葵も続く。

董卓は悪者だから皆で倒しましょうという内容。

これが本当ならば兵を出すべきなのだろうが……何か胡散臭い。

よく分からないけど……この檄文はあくまで仲間を集めるという口実で。

董卓を攻める本当の理由は違うんじゃないか。

そんな中、一人考え込んでいた氷花が口を開いた。

「袁紹は名門の出身、逆に董卓は辺境の出身……それで洛陽にいるのは董卓、これが原因なんじゃないか……」

氷花の言葉に、皆が驚く。

「まさか、洛陽に董卓が入っているという事への個人的恨みですか？」

燈が驚きの声を上げる。

そりゃあそうだ、もし氷花の言う通りならこれは完全な個人的な恨みでしかない。

洛陽という中心に名門の自分でなく辺境……田舎の人間がいるなんてという事。

「それも可能性として考えられるという意味……暢ちゃん、檄文の内容が本当か嘘か調べる必要があるよ」

氷花の言葉に俺は頷く。

俺は視線を命に移す。

命自身も俺から何を言われるのか分かっているようだった。

「命、間諜を使って洛陽を探ってくれないかな」

「……わかりました」

命はそう答えると、誰を出すのかを考え始めていた。

基本的に命は殆ど喋らない。

無駄な事は言わないという事なのだが、お酒が入ると多弁になるとは葵談。

未だに見た事ないけど。

とにかく、今回の檄文の内容が真実か、それとも袁紹の恨みから

来た自分勝手な事なのか。
見極める必要がありそうだ……ただ……

「暢介。この檄文は大陸全土の諸侯達に送られてるから、断ったら目を付けられるよ」

「……絶対参加かよ」

頭を抱える俺。
拒否すれば今度はお前の番と言われるか董卓に協力してるんじゃないかと疑われる訳だ。
新興勢力の俺達としてはあまり、巨大な戦力を敵に回す気は無いけどさ。

あくまで、今は敵に回したくない。

「だね……あぁ、命。なるべく早く情報を取ってくる様にお願い」

久遠の言葉に頷く命。

「よし、兵糧も士気も十分なのは分かった。後は間諜が持ってくる情報が手に入ったらまた集まろう」

そう言って、俺は会議の終了を宣言した。
今回の連合軍参加は将は全員出る事となった。

なので、文官達に不在の間の指示などを出す様にし後は、出陣の時を待つ訳だ。

そうして大広間を出た俺の横に葵が並ぶ。
身長が一緒なので、目線が同じになる。

「鷺島様。今回の連合軍にもう一人の御使いは来るのでしょうか？」

「あぁ……確か、劉備軍にいるんだっけ」

そう、もう一人の御使いは劉備の元にいるらしい。
流石に歴史には疎い俺でも知ってる名前の人だ。

そんな所にいる御使いが今回の連合軍に参加するかどうか。

「はい。劉備軍にいるらしいですね」

「どうだろね。まぁ、行ってみれば分かるさ」

「そうですね」

その後、少しばかりの世間話を行って俺と葵はそれぞれの持ち場に戻った。
劉備の元にいる御使いとはどんな人物なのか。

少しだけだが、会うのがちょっと楽しみな俺だった。

11話　自分の予想を超える恩賞を与えられたら喜びより焦るよね（後書き）

本当は何進さんを死なせないでどこかに逃げさせようとしたんですが。
やはり、ここは亡くなってもらいました。

氷花が立ち直るまでの部分は幕間という形で出したい所。
あ、別に何進×氷花じゃないですので。
2人の関係は親子みたいだなという設定にさせていただいています。

次回は反董卓連合集結という事で。
一刀君登場です。

ちょっと、ゲーム版と比べて性格が変わっているかもしれないですが。
その説明文は書いておこうと思います。

この小説内での一刀君（前書き）

タイトル通りなので、特に前書きがございません。

もうしわけない。

この小説内での一刀君

今作の一刀君は基本的には、何もやっておりません。
内務や軍事に関しては「俺わかんねぇし」という感じになっています。

現状では天の御使いは自分だけで、南郷にいる御遣い（暢介）は偽者だと思っているようで。
その為、暢介の噂を聞くと凄く不機嫌になり苛立つ時がある。

勧誘などの失敗が無い為、自分には魅力があるんだという節がある。
（あくまで御使いという看板のおかげに気付いていない）
それが原因で、暢介陣営の有る人物に勧誘をかけて騒動となる（じゃっかんのネタばれです）

暢介が歴史を知らない為、自分が優位に立っているという事で暢介を下に見ている。

それでも劉備陣営内の人達からの信頼は抜群に高い。

この小説内での一刀君（後書き）

蜀√をしていると一刀君って何かしたっけ？　という疑問にぶつかりました。

歴史を知っているのが果たしてプラスなのか。
それとも、何も知らない方がプラスなのか。

この小説の重要ポイントです。

12話　長い話はいくつになってもきついものです（前書き）

筆者は学生時代に、テレビなどで紹介されるほどの選手と。
ある競技で試合をしましたがそのオーラに完全に飲みこまれました。

カリスマとは違うかもしれませんが、優秀な人間と当たると。
こうなるのかと実感した時でした。

……まぁ、曹操様のカリスマは別物でしょうけど・ｗ・；

12話　長い話はいくつになってもきついものです

～暢介ｓｉｄｅ～

なんだ……この状況は。

目の前に広がる光景に俺は頭を抱えるしかなかった。

ここは、反董卓連合軍の集合場所。

その場所にある大本営に俺は軍議を行うから来てくれと言われてきた。

現在は連合軍の総大将を決める事になっているのだが……

誰もやりたがらない……いや、正確には一名、凄くやりたそうな人はいるのだが。

その人物は決して自分から名乗り出ようとはしない。

他の諸侯達も誰かを推薦しようという動きは無い。

推薦したら、責任を取らせられる事を恐れているのだろう。

最悪、最前線に配置されてしまう恐れもあるからなぁ……

そんな中、凄くやりたそうな人、袁紹が総大将に必要な要素などを話している。

家柄やら治めている土地の広さなどなど……うん、それだとあな

たしかいないねと言うぐらいに。

もう一人の天の御使いはまだ来ていないし……遅刻か？　それとも不参加か？

そんな事を考えながら俺は、他の勢力の人達を見る。

色々な人が来ているが、一番、俺が目に入ったのは曹操だった。

（凄いオーラだなぁ……あれが、カリスマってやつかもなぁ）

見るだけでも圧倒的な威圧感を感じる。

もしあれが、本人が意識していない無意識のカリスマっていうなら本気になったらどうなるのだろうか。

きっと、足が震えてその場から動けなくなる……間違いないな。

彼女の元に居る者は、そのカリスマの元で働ける事を喜びに感じれるだろうし。

敵はその威圧感の前にすぐに膝を折るだろう……

そんな彼女も今では袁紹の言葉に呆れながら聞いている風に見せている。

恐らくは、右から左に聞き流しているんだろうけども……

そう言えば、カリスマといえば学生時代の部活でそんな風に言われている人と。

全国大会でにあたった事もあったなぁ……

確かに試合で対面した時は身体がビクッとなって震えたからなぁ。

卒業してから、その選手、国内リーグのチームに入団して今は代

表だもんなぁ……
社会人になった俺が周囲に自慢できる話の一つになってるし……
って全然関係ないな。
そんな昔の事を思い出すほど、場の空気はしらけてきている。
「あの、鷺島様」
「ん？　どうした燈」
隣を見ると燈が呆れた表情でこちらをみている。
いや、表情の原因は俺じゃなくて袁紹だろうけど。
ところで、何で隣にいるのが燈なのか。
本来なら、こういう所についてくるのは久遠なんじゃないかと皆、
思ってるはずだ。
久遠は今、俺達の陣にいる。
というか、陣から出て来れない状態になっている。
なぜそうなっているのか、またこの連合軍内での俺達の考えを言
っておこうか。
……どうせ、袁紹の演説は終わりそうにないから……あと袁紹、
その言葉はもう3回目です。
～暢介ｓｉｄｅ～（回想）
命が送り込んだ間諜が董卓の情報を手に入れたのは出陣する４日

前だっただろうか。
当時の俺達は反董卓連合の参加の為の準備が終わっており、その情報を皆で見ていた。

「……なるほどね、これが暴君ね……」

間諜からの情報を見た俺達は袁紹からの檄文との内容の違いに呆れてしまった。
例えば、1だったものを5とか10と言うのならばまだいい、一応1はあるんだから。
だが、これは0のものを10と言っている様なもの、つまりははっきりとした嘘。

「洛陽の民は、董卓の事を名君だと慕い、圧政などを行っている様子は見られないだってさ」

同様に呆れ顔の久遠が書状の内容を読む。
董卓は暴君などではなく、名君だった。

「……で、反董卓連合はこの子の首を狙う訳か……ひどいな」

俺の呟きに皆が黙りこむ。

反董卓連合、出だしは袁紹の嫉妬……だが、参加する諸侯達はそれに上手く乗ろうとしている。
これから先、乱世に突入した場合に名声は大きな武器となる。

その名声の為に董卓の首を取りに向かう。
董卓本人からしたら、訳も分からないまま、命を狙われている訳だから。

たまったもんじゃない。

嫉妬、名声、人の欲の為に狙われる董卓に俺は何をすべきなのだろうか。

ただ……その首が掲げられるのを見る為か？

……もしも、洛陽に一番乗りが出来れば……董卓を助けられるんじゃないのか？

でも、リスクがでかすぎる、諸侯達に気づかれたらどうする。

次に狙われるのは俺達になるかもしれない……だけど、助けられる命がそこにあるなら。

「……董卓を助けるぞ」

俺の言葉に皆は予想していたのか頷く。

「まぁ、この情報が来た段階で何となく予想はついてたけど……暢介、本気なんだよね」

「勿論、冗談でこんな事は言わないよ。それより、皆はいいのかい？　危険な事に皆を巻き込む事になるけど」

董卓を助ける。

それは、言葉で言うほど簡単なものではない。

何しろ、連合に所属しながら連合を騙さないといけない。

もし失敗すれば、間違いなく次に狙われるのは俺達になる。

「董卓に手を貸した」とか、理由なんてのはいくらでもつけられる。

今回がそうだったように……

「鷺島様ならば、助けようとするのではないかと思っておりました。逆に安心しております」

「まぁ、これだけ分かってて名声とかの為に董卓を討つなんて言ったら私は出て行ってたよ、暢ちゃん」

燈と久遠が言う。

葵と命を見ると、二人も頷く。

「皆、有難う」

俺は皆に向かって頭を下げる。

簡単に王が頭を下げるなとか言われそうだが、ここは頭を下げておきたかった。

「僕達の方針は決まったね。連合軍を出し抜いて董卓を助け出す……ついでに董卓軍の武将も手に入れちゃおう」

戦力も増やしておきたいしね。

と、久遠は笑みを浮かべて言った。

さて、方針が決まり出陣する当日、1名の人間にある変化が起こっていた。

「うぇぇぇ……」

「く、久遠さん。大丈夫ですか？」

葵が自分の背中にいる久遠に声をかける。

前日の事、久遠はどうみても張り切っていた。

いや、張り切りすぎていた。

同じ様な状況を俺は自分のいた世界で見た事があった。

運動会前日に張り切りすぎて、当日に体調を崩して不参加になったという事。

まさかとその時は思っていたのだが。

当日になり、久遠は体調を崩していた。

流石に一人で馬に乗せる訳にもいかなかったので葵に任せる事になったのだが。

さっきから、久遠は呻き声を上げている。

「う～……あ、葵……」

「ど、どうしました？　酔っちゃいましたか？」

「……先に謝っとくね。ごめん」

「あ、謝るって何を？　……だ、駄目ですよ。今吐かないで」

そして背後で聞こえる声と悲鳴に俺達はため息をつく。

まぁ、葵にはご愁傷様と心の中で言っておいた。

集合場所につき、陣を建ててその中で久遠を横にしておく。
葵は着替えをすませているが、テンションが落ちてる。
そりゃあ、自分の背中に吐かれてテンション落ちない奴はいないわな。

命が慰めているけども……本当に君ら仲いいね。

久遠は吐いたおかげか、調子は多少上向きにいるようだが、まだ外には出せない。
もう少し経つと大本営にて軍議を行う為、行かなければいけないのだが。

「今の久遠だと、また吐きそうだよなぁ……」

「そうですね。ここは私か氷花さんを選ぶべきかと」

流石にこんな状態の久遠を連れ出すほど、俺は鬼じゃない。

となると、燈か氷花になるんだろうけども……
あんまり警戒されたくないからなぁ……氷花を知ってる人とかいそうだし。

「燈、来てくれないか」

ここは燈を選んでおこう。
流石に、知名度の無さを理由にしたとは言いたくないけど。

「承知いたしました」

燈は頷く。

さて、諸侯達がどういう人物達なのか見てこないと……

そして、最初の状況へと戻るわけだ。

～回想終了～

袁紹の演説は未だに続いていた。

何と言うか、よくそこまで話が続くなぁと素直に感心してるよ俺。

いい加減、総大将を決めないと話が進まないよなぁ……

でも、推薦して最前線に出される訳にはいかない。

さてどうしたものかと考えていると。

2人の男女が凄い勢いで入ってきた。

「す、済みません、遅れてしまいました」

あ、演説を途中で切られてしまったからか袁紹の機嫌が少し悪くなった気がする。

まぁ、話の途中に割り込まれて不機嫌になる気持ちは分かるけども結構話してたからいいでしょ。

その後、遅れてきた2人の内、女性の方は劉備。

男性の方がもう一人の天の御使いと呼ばれている北郷一刀である

事が分かった。

北郷が着ているのは恐らく、学生服だろう。
あと、劉備が北郷の事を「ご主人様」って呼んでいたけど。
あれって北郷がそう呼ばせているのだろうか。

まぁ、そう呼ばれて喜ぶならいいんだが……せめて場所を考えないか。
プライベートでなら、別に構わないけどこういう場面には相応しくないような。
周りの諸侯達の表情もなんか良くないし、最初から悪い印象だぞこれは。

そんな事を考えている時、北郷と目があった。
俺が会釈をし、顔を上げた際に北郷の目を見て少し戸惑った。

（凄く睨んでるよなぁ……俺、何かしたか？）

そう、北郷の俺を見る目は怒りの目だった。
まるで親の仇を見るかのような目に気付いたのか燈が俺の方を心配そうに見てくる。

「鷺島様……」

「大丈夫だ」

燈にそう返した俺は視線を北郷から袁紹へと向ける。
話は劉備が袁紹を総大将に推薦し、その責任を取って前線に回されている所だった。

総大将が決まれば話は早い。
作戦などを組み立てて行かなくてはいけないのだが……

結論から言えば、作戦なんてものはありません。
ただ、袁紹から言われた事を簡単に言うと。

「勝手にやれ」

という事だ。

まぁ、勇ましくとか華麗にとか言っていたけども。
具体的なものはない。

軍議が終わり諸侯達も呆れた表情のまま、天幕から出て行く。
作戦なんて無い、ただ進んで行けという総大将の元、不安な出だしである。
はぁ……これを陣に持って帰って、氷花達に何て言えばいいんだろうか。

「素晴らしい作戦ですね、この作戦は袁紹様ぐらいしか思いつかないでしょうね」

帰って早々、軍議で決まった作戦を伝えると氷花はいい笑顔でこう言い放った。
褒めてる様で、実際は全く褒めていない訳だが……

「そして配置を見ると袁紹軍は真ん中ちょっと後ろ、う～ん、素晴らしいぐらいに邪魔ですね」

氷花よ、その笑顔で言うと凄く怖いぞ。
ちなみに俺達は、袁紹軍からみて、左前に配置されている。
ようするに前線だ。

董卓を救出するには洛陽まで行かなくてはいけない。
？水関、虎牢関、この２つを損害を最小限に抑えて洛陽へ一番乗り。
そして連合軍にそれを悟られてしまってはいけない。

董卓の協力者とか思われない為には、董卓軍とも戦闘をこなさなくてはいけない。
そういう点では？水関において、前線に配置されたのは幸いだったかもしれない。

「まずは？水関の突破からだな……皆、気を引き締めて行くぞ」

俺の言葉に皆が頷く。

「でだ……久遠よ。お前はまだ体調が戻らないのか……」

「ご、ごめんなしゃぃ……」

未だ、横になり弱々しい声を出す久遠に俺達は頭を抱える。

12話　長い話はいくつになってもきついものです（後書き）

一刀くんの暢介への怒りは？水関の突破後に書こうかなと思っております。

リアル生活が忙しさを増していまして、ＰＣの前に座る時間が少ないです。
帰宅→夕食→お風呂→寝るという流れが方程式になっています・ｗ・；

13話　相手の思い通りに動くのって嫌だよね（前書き）

この作品中の一刀君ですが、キャラ変わりすぎかも。

あと、暢介くんに対して偽者と思っているのは。

当初は現地の人が天の観使いを名乗ってるんだろという考えから。

不幸な事故でたまたま飛ばされたやつ。

だから、こいつは御遣いなんかじゃないという自分本位の考えです。

飛ばされ方は一緒なんですが、その情報が無い為です。

はぃ・w・；

13話　相手の思い通りに動くのって嫌だよね

～暢介ｓｉｄｅ～

？水関についた連合軍は決められた配置についている。
先陣をきる事になっている劉備軍は最前線に配置されている。

「劉備軍はどうするつもりなんだろうか」

兵力は少なく、袁紹から兵と兵糧を回しては貰っていたが。
それでも多い方ではない。

「多分、？水関に籠っている将を挑発して引きずり出すつもりなんじゃないかな」

「引きずり出すって、普通は籠城する方が得策だろ？」

打って出て野戦に持ち込んだって意味は無いと思うのだけど。

「普通はね……ただ、？水関を守る将の華雄は猛将で自らの武に誇りを持っている将で、あとは」

猪な所があるという。
要するに、自分の武を馬鹿にしたら切れて出てくるだろうという読みだそうだ。

「そんな都合よくいくか？」

「まぁ、抑え役の将がいれば止まるかもしれないけどね……まぁ、居ても止まらないかもね」

「なるほどねぇ……でだ、久遠、調子は戻ったみたいだな」

「すっかりね、今度からは前日に張り切らない様にしとくよ」

昨日までの体調不良が嘘の様に立ち直った久遠。
やっぱり、張り切りすぎが良くなかったのだろうか。

視線を？水関に移すと劉備軍の武将が２人、？水関の方へと進んでいるのが見える。
ひょっとして挑発でもするのだろうか。

しばらく様子を見ていると予想通り、２人は？水関に向かって挑発を始めた。
まぁ、何と言うか……俺に向かって言っている訳じゃないのに……すげぇへこむ。

対象となっている華雄からしてみたら、即飛び出して叩き潰すってぐらいに怒り心頭だろうなぁ。

「ほら、予想通り」

そう言って、久遠は胸をはった。
うん、本当にお前の言った通りだったな。

……ん？　？水関の門が開いたか。
どうやら、劉備軍の狙い通りになったわけだが……

「なぁ、久遠。劉備軍の戦力で華雄を止められるのか？」

「難しいだろうね。装備は貧弱だし、借りてきている袁紹軍の兵士達の士気も高くなさそうだから」

久遠の言葉に燈が続く。

「逆に華雄の兵士達は上司を馬鹿にされた為、士気は高いはずです」

「って事は……」

「前線の維持が難しくなって後退して……色々な勢力を巻き込むといった所かな」

そして、乱戦になった所で一騎討ちで華雄を討ち取って戦功をあげる。

そう、久遠は続けた。

「乱戦にして、他の勢力の戦力を削る訳か……」

そう言って、俺は少し考え込む。

多分だけど、最前線に回された事への恨みとかもあるんだろうなぁ。

「……面白くないなぁ……なんか、劉備軍の考え通りに進んでるのが」

「そうですね、それに董卓の将の首を取るのを見たくはないですし」

久遠の言葉に燈も続く。
確かに、董卓軍の将を討ち取られるのを見るのは俺達としてはいい話ではない。
助けようとしている軍の人間なのだから。

「？水関への一番乗りは止めて……戦線維持に兵を割こう」

「そうですね、その方が袁紹への印象もいいはずです。今は悪い印象は持ってほしくないですし」

袁紹への印象を悪くするのは色々と面倒だと、燈が言う。
確かに、あれだけの大軍を動かさせるだけの資金力と土地があるわけだしな。

ここは、印象を良くするように動く事にしよう。
俺達はあくまで洛陽に一番乗り出来ればいい訳だから。
それに、劉備軍の策に乗りっぱなしもよろしくない。

「燈、葵と命に劉備軍への戦線維持の援軍に向かう様に伝えてくれ」

「分かりました」

燈に指示を伝えると、燈は葵達の方へと駆けて行った。

「さて……この行動で劉備軍の策を潰せるか？」

「戦線を袁紹の元まで下げないのと、華雄との一騎打ちを阻止できれば成功ですけどね」

「一騎討ちか、命しかいないな……」

この軍の中で武に長けており一騎打ちが可能なのは命しかいない。
葵は個人の武に関しては自信が無いらしく、以前、久遠とした時は互角だったらしい。

軽くへこんでいたけども。

「命の判断に任せよう」

そう、呟いた久遠に俺は頷く。
命……無理だけはしないでくれ……

～命ｓｉｄｅ～

私と葵の部隊が劉備軍の援軍に入ってから、戦線は多少の落ち着きを見せ始めていた。
多少は押し込まれているが、先ほどまでの勢いは無くなってきている様だ。
この様子なら、戦線を押し戻せるのも近いかもしれない。

どんなに華雄とその兵士達が強く、士気が高くても兵力差はどうしようもない。
いかに猛将でも何十人に囲まれればいつかは討たれてしまう。

さて……私はどう行動しようか。
現状のままでいれば、戦線維持だろう。

だが、あの情報をもう少し深く調べるとするならば……私は……
私は視線をある人物へと向ける。

視線の先では、劉備軍と袁紹軍の兵士達が空を飛んでいた。
私の目はその原因となっている人物を見ている。

「弱い！　あれだけの挑発をしておいてこの弱さとは何だ！　もう貴様らに様は無い、華雄隊、このまま総大将の首を」

「ちょっと待った！」

袁紹の陣へと向かおうとする華雄に対し私は声をあげた。
我ながら、こんな声が出るとは思わなかった……正直、驚いている。

「貴様、何者だ？」

華雄の視線が私に向けられる。
感じるのは殺気、もし普通の市民なら、これだけで死んでしまうかもしれない。

「鷺島軍の将が一人、徐晃と申します。流石に、総大将の元へ向かわせる訳にはいきませんので。どうでしょう、私と一騎討ちをしていただきませんか？」

そう言いながら、私は大斧を向ける。
華雄の目つきが鋭くなる。

「ほぉ、斧使いか……良かろう。さっきまでの雑魚とは違うよう

だしな」

戦斧を構え、華雄は名乗りを上げる。

「我が名は董卓軍の将、華雄なり！　この戦斧の威力、その身でしかと味わえ！」

さぁ……どう戦いましょうかね。

～一刀ｓｉｄｅ～

自分達の思惑通りならば、今頃は戦線は袁紹の所まで下がって乱戦になっていたはずだった。

そうして愛紗が華雄を一騎討ちで討ち取る、それで終わるはずだった。

それが今では戦線は押し戻されて一騎討ちも愛紗では無く、鷺島軍の将がやっている。

ならば、？水関への一番乗りを狙おうとしても既に孫策軍が向かっている様でそれも無理。

俺達がやった事は敵を挑発して？水関から出して、戦線を維持できずに乱戦一歩手前になってしまった事。

それを鷺島軍の援軍で押し戻した。

どうみても、高評価になるのは鷺島軍だ。

鷺島暢介、この名前が出てくる度に俺はイライラしていた。

この世界に来てから、ずっと俺はその天の御使いと比べられていた。

愛紗などは『天の御使いの名を騙っている者は多数おります』と言う事で偽者だという考えだった。

それがしばらく経つと、『南郷という所で天の御使いが領主をしているらしい』という話になっていた。

そこから『南郷にいる御使いが治める街は復興し、夜も明かりが消えない賑いを見せている』とか。

『先の黄巾との戦いで配下が活躍し、太守となったらしい』だと、そんな話ばかりだった。

そんな素晴らしい御使い、ならば自分達の近くにいる御使いはどうかと人々はみてきた。

俺に何を期待しているんだ？　政治？　軍事？　出来る訳ないだろ。

俺は普通の学生でそんな経験は何一つない。

大体、天の御使いと言われる人物が複数いるのもおかしい話だろ。

こういう、救世主ってのは１人ぐらいしかいるはずねぇだろ。

そして今回の対面で、俺はもう一人の天の御使い、鷺島暢介を見た。

その服装は、社会人が着るスーツ……見間違う訳はない。

多分、あいつは俺と同じ世界から来たんだろ。

でも天の御使いじゃないはずだ、多分、何かしらの事故かなんかで飛ばされた不幸な人ってやつだ。

だから、こいつは天の御遣いなんかじゃない。
絶対にそうだ、本物の天の御使いは俺だ……俺なんだ！

桃香達は現状をどうするべきか話し合っている。
どうするべきか？　簡単だろ、鷺島軍の将が負ければいいんだろ。

あるいは……狙撃でもして華雄もろとも消えてもらうか。
そういえば、鷺島軍の将の名前……徐晃って言ってたな。

丁度いいじゃないか、確か徐晃は矢が額に当たって死ぬんだよな。
ちょっと早いけども……いい事思いついたな俺。

だけど、こいつら……絶対、反対するんだろうな。
一騎討ちは武将にとっての神聖な舞台、そこを邪魔などしてはいけないと。

何が神聖な舞台だ、そんな舞台で上がってる本人達は嬉しいだろうが。
それで負けたら意味が無い、それよりもどんな方法でも討ち取る方がいいはずだ。

さて……どうやって説得するか……

～命ｓｉｄｅ～

戦場に相応しくない様な静けさが辺りを包む。
互いに肩で息をしている状態ながら、間合いを測っている。

（情報はすべて正しかった……これで私の方は満足なんだけど）

何度か鍔迫り合いになった際に、華雄と互いに聞こえる声で会話を行っていた。

初めの時は華雄の方が大声で答えそうになっていたのでその時は無理やり間合いを詰めていたが。

華雄の方も理解できたのか、途中からは上手い具合に会話が出来ていた。

その中で私は、自分達が持っている情報が正しいのかを確認していた。

既に董卓という情報は持っていたが、それが真実か否かを知りたかった。

間諜の情報がもしかしたら偽情報の可能性も考えて……

結果としては間諜が持ってきた情報は正しく、董卓は名君であった。

もしも、偽情報ならばそれを鷺島様に伝えるのだが、そうでないなら私達の行動の真意を伝えるべきかもしれない。

そう考え、再び鍔迫り合いの態勢に持っていく。

流石に回数重ねすぎて怪しまれそうだけど……

「あなたの話は私の知っている情報と一致しました、ですので、あなたに伝えたい事があります……我々は董卓を助けるつもりです」

「なんだと！　だが、助けるならなぜ連合に参加している」

「表立って董卓側に立てば、我々も狙われてしまう。そうなれば

助ける事が出来ないと考え、この方法をとりました」

そこまで話、一旦互いに後方に飛ぶ。

（さて……これで後は、華雄が引いてくれれば助かるが……戦闘は別だ）

猛将といわれる華雄だ、決着がつかなければ引かないだろう。

私としては引いてくれて董卓にこの事を伝えてほしいのだけど。

「……」

「……」

互いににらみ合いが続く。

私の方は『引いてくれ』という思いの入った視線だったかもしれない。

その時、華雄が私の懐に飛び込んでくる、完全に反応が遅れた。

思わず目を閉じる。

「この件、董卓様にお伝えしよう」

「え？　……あ、お、お願いします」

「分かった。だが、何もしないままで引く事は出来なくてな、すまん」

「え？」

次の瞬間、腹部に激痛が走る。
どうやら柄の部分で思いっきり突かれたらしい。
息が出来ずにその場にしゃがみこむ。

「華雄隊、これより戦線を離脱する」

そう言って華雄は隊を纏めると素早く離脱していった。

それを見ながら私は呼吸が落ち着くのを待つ。
未だに腹部の痛みは引いてはいないが多少はマシになってきていた。

近くにいた兵士に肩を借り、私は立ち上がる。
さて、陣に戻ったら鷺島様に伝えておかないといけない。
董卓へ、私達が助けに行くという話を伝える使者をたてましたと。

～一刀ｓｉｄｅ～

弓での攻撃をすべきだという案はすぐに却下された。
やはり、一騎討ちは戦場の華だのそういう理由だった。

そうこうしている間に華雄は撤退するし？水関は落とされるしで俺達には何も残らなかった。

？水関への一番乗りの戦功は孫策軍へ。
華雄の件では鷺島軍に対しての評価が上がっていた。

討ち取れなかったが猛将といわれる華雄と互角に戦えたのが大き

かったようだ。

愛紗か鈴々なら確実に仕留められてはずなのに……倒せないならするんじゃねぇよ。

と、口から文句が次々出てくる。

それに、さっきの軍議で次も俺達は最前線だ。

それもあの鷺島軍の軍師のせいだ。

あいつが『あの時に我々が援軍を出さなければ、戦線は下がり袁紹様への被害をあったかもしれません』

何て事を言うから、袁紹の奴がもう一回最前線に配置してきやがるし。

鷺島軍は最後方に配置される形になるし、何か散々だ。

だいだい、徐庶……なんでお前がそっちにいるんだよ。

お前は蜀の人間だろ、さっさとそいつから離れてこっちくればいいんだ。

……そうだ、今から説得しに行けばいいんだ。

俺が本物の天の御使いだって言えば、絶対にこっちに来るはずだ。

それだけ、この天の御使いの名前の威力はあるんだ。

そう考えながら、俺は鷺島軍の陣へと歩を進めた。

この行動が俺自身の名前を潰す事になるとも知らずに。

１３話　相手の思い通りに動くのって嫌だよね（後書き）

次回は一刀君、勧誘に向かって大失敗。

そして徐庶を大激怒させる言葉を吐きます。

あと、葵が久遠と武力が一緒というのは。

某ＳＬＧ（最近新作が発表されましたね）内において。

葵：６４　久遠：６３という事でこうなりました。

……燈も６４で互角なんですけどね、戦える軍師２名。

ちなみに、徐晃が矢で死ぬのは演義の方です。

１４話　引抜交渉（前書き）

【注意書き】

同作品内で、一刀君ですが鷺島軍の将の情報は持っておりません。
ですので軍議で会っている燈や？水関攻略戦で活躍した。
命、そして葵の事だけを知っているようで。

久遠と氷花に関しては全く知らない状態です。

……ふつうは情報で流れてくるんでしょうけどね。

１４話　引抜交渉

～燈ｓｉｄｅ～

「……兵糧も十分な状態か、今のままであればいいんだけど……」

兵糧の確認をしながら私はそう呟いた。

現在、？水関を攻略した連合軍は次なる標的である虎牢関へと向けて進行中です。

今は夜なので進行は止まり休息を取っている。

私達鷺島軍は、連合軍の中で最後方に配置されています。

どうやら、戦功をあげた我々を袁紹さんが不満に思い戦線から一番遠い位置に配置。

自分達の陣を少し前に出す形になってしまいました。

総大将が前目に位置するってどうなんでしょうね？

恐らく、？水関をあっさり突破出来た事で袁紹さんに持ってはいけないものを与えてしまったようです。

”慢心”を。

まぁ、私達からすれば次の虎牢関は激戦地となるのは必至。

董卓軍も主力を配置し抵抗してくる事でしょう。

呂布・張遼・陳宮……名前を見ただけで並の兵士なら逃げ出す事でしょう。

……私だって、逃げたいですよ。

戦闘が始まれば、一番被害が少ないのは最後方に居る事になる私達なんですが……

流石に総大将が敗走、最悪討ち取られるという展開だけはあってはならないので。

（そうならないように、久遠さんや氷花さんと話をしておかないと）

そんな事を考えていた。

さて……確認も終わったし、鷺島様に報告しに陣へ……

そう思い、歩を進めようとした私に……

「ちょっといいかな？」

と、声がかけられる。

振り向くと、そこには劉備軍にいる天の御使いが立っていた。

「えっと、君って朱里や雛里と同じ私塾なんだよね？」

話したい事があると言ってきた彼が私に言った一言目がこれだ。

何となく誰の事なのかは分かりますけど……

「それは真名ですね、私の知っている範囲でその真名を名乗っている人は知りませんが」

そう言うと、彼は驚きの表情を浮かべた。
なぜだろう、私があの2人の真名を知っていると思っていたのかな。

「その真名、恐らくですが孔明と士元ですよね」

「あぁ……えっと、君は2人とは真名を交換してないのかい？」

どうやら、目の前の彼は真名の重要性がいまいち理解できていないようだ。
2人は教えなかったのだろうか……ため息をつきたい。

「真名と言うのはその人物の全てです、学友というだけで交換するものじゃありません」

「そうなんだ……てっきり……」

話が長くなりそうな気がします。
流石に、これ以上は時間をかける訳にもいかないでしょう。

「申し訳ありませんが、私に言いたい事は何でしょうか？　別に孔明達との事を聞きたい様でもありませんし」

そう言うと、彼は少し考える仕草を見せる。

「……うん、このまま話を続けてても意味ないか……」

「ええ、私も早く鷺島様に報告すべき事があるので」

考える仕草のままの彼は、目をつぶると一回頷いた。

そして目を開くと。

「じゃあ、言わせてもらうよ。徐庶、俺達の所や来ないか」

「……はぁ？」

まさかの言葉に、私は少しだけ思考が止まった気がしました。
引き抜きだなんて、それも私を……

「君はここより、俺達の所に居た方がいいよ。朱里や雛里もいるんだしさ」

「……」

「絶対にここから離れた方がいいよ」

どうやら、彼は私を鷺島様から遠ざけたいらしい。
なんだろう、凄く腹が立ってきた。

「その話、孔明達にしましたか？」

「え？　いや……」

突然の言葉に、彼はまた、少し驚きの表情を浮かべた。

「そうでしょうね。もし、しているのなら2人はあなたを止めるはずですから」

「な、なんで……」

「私は2人が旅立つ時に、こう言ったんですよ」

そこで、一旦言葉をきり一呼吸入れて、再び口を開いた。

「次会う時は味方より、敵で会って2人の知略と戦いたいなぁって……私は、2人を超えたいんですよ」

それは私の思い。

もし、2人とまた一緒に居たいと思っていたなら、あの時の鷺島様からの要請にも断っていただろう。

『会わなくてはいけない友人がいるんです』と。

恐らく、そう言っていれば鷺島様も久遠さんも説得はしなかったと思います。

そういう2人なので。

「ですので、私はここを去る気もありませんし、あなたの元へ行く気もありません」

そう私は断りを入れる。

これで、終わりだろうと思い……ただ、気づいていなかった。

彼、北郷一刀の雰囲気が変わっていた事に。

～一刀ｓｉｄｅ～

こんなはずじゃなかった。

俺の予想にこんな展開は無かった。

説得して、すぐに引き抜きに応じてくれるものだと思っていた。

目の前に居る少女、徐庶は俺の説得を断りやがった。

朱里と雛里を超えるだって？　ありえねぇだろ。

そんな奴らと戦うぐらいなら、一緒に居た方がよっぽど楽が出来るってのに。

そういえば、朱里達に話したら止める様に言われるだろうって言ってたな。

そんな訳あるか！　あいつらは俺の事には絶対ＹＥＳしか言わない。

多少は修正点は言ってくるけど、基本的に俺に逆らわない。

兎に角、徐庶を手に入れる、これは絶対だ。

あいつの所から軍師を無くす、鷺島の所には軍師は徐庶しかいねぇんだろ。

あとは武将の徐晃と満寵ぐらいだろ。

名前の知られてる将って言えば。

だが、徐庶に説得は無意味に見える。

何か手は……あ。

あるじゃないか……徐庶といえば、母思いで有名だったな。

あれすれば一発じゃね？

「話は終わりです。では、私はこれで……」

そう言って俺に背を向ける徐庶。

「ちょっと待てよ！！」

歩を進める徐庶の右手をつかみ、引っ張る。

引っ張られたはずみで徐庶の帽子が落ちる。

「痛！　何をするんですか」

そう言って怒る彼女に俺はこう言った。

「いいのか、お前の母親がどうなっても！」

～燈ｓｉｄｅ～

「いいのか、お前の母親がどうなっても！」

今この男は、何と言った？　私の母親？　どうなっても？

「ど、どういう事ですか」

「お前の母親、豫州の潁川郡にいるんだろ……俺は、知ってるんだよ」

そう言って、彼は笑みを浮かべる。

見ている人が不快になるその笑みで。

「母は何の関係も無いでしょう！！」

私は声を荒げる。

そんな私を彼はにやにやしながら見ている。

「おいおい、大きな声出すなよ。それに、交渉では使える物は何でも使わないとな」

「……そんな事、孔明達が許す訳が無いでしょう」

そうだ、あの友人2人は思いついてもそれを口に出す事は無いだろう。

そして劉備という人物はこの様な事を嫌うと聞く。

ならば……

「ばれない様にやるよ。こっちに来てもらう訳だから、君の母親にね」

何が来てもらうだ…無理やり連れて行くつもりなのだろう。

この大陸、金さえ貰えれば何だってやる奴らがいる。

母を見捨てる？　そんな事、出来る訳ない……

鷺島様を捨てる？　私は……

視線を彼に移すと、さっさと決めろよと言わんばかりの不機嫌そうな表情。

選択の余地は……ない。

「私がそっちに行けば、母に危害は……」

その言葉に彼の表情は勝利を確信した表情に変わる。

「あぁ、お前がこっちに来るなら何をしないさ」

その言葉の真意は分からない。
だけど、母の事を考えれば……

申し訳ありません……鷺島様、久遠さん、みんな……

「わ、私は……」

後は、あなたにお仕えいたします。
そう言うだけだった、でも、私は言えなかった。

なぜなら。

「ちょっと待った！　燈、そんな事を言う必要はないよ」

という声が聞こえてきたから。

声の方を向くと、そこには久遠さんが立っていました。

～久遠ｓｉｄｅ～

いやぁ～本当に、間に合ってよかった。
何か燈の帰りが遅いから心配して見に来たけど。

もう少し遅かったら、燈が劉備軍に引き抜かれる所だったわぁ。

「く、久遠さん」

「大丈夫だよ燈」

そう言って、僕は燈の所へと近づく。

彼、北郷の力が弱まったのか燈は少し暴れて拘束から逃れた。

僕は落ちていた燈の帽子をとり、手渡す。

「全く、同じ天の御使いって言われてるのに暢介とえらい違いだねぇ」

「だ、誰だよあんた」

暢介と比べられたからかな、ちょっと怒って彼は言ってきた。

こういう点も暢介とは違うんだよねぇ。

「僕？　この鷺島軍の軍師をやらせてもらってる司馬仲達という者です」

名前を聞いて彼の表情は驚きに変わる。

ほんと、コロコロ表情が変わるなぁ……

「人の名前で驚くのは後でいいからさ、今からそちらの陣へ参りましょうか」

「は？　何で俺の陣へ？」

おやおや、こいつは自分のやった事が分かっていないようだ。

「あなたの行った事を劉備殿に伝えないと。我が軍の軍師を引き抜こうとし、その者の母を人質に取ろうとしたと」

そう、彼が行った事は脅迫だ。

引き抜きを断ったらお前の母親がどうなるか分かってるかという訳だから。

これはしっかりと、劉備陣営の方々にも説明しなければ。

どんな風な目で見られるんだろう。

今まで信頼していた御使いが実はこんな人でしたと分かった時。

何だろう……少し見てみたいかも。

「ちょ、ちょっと待てよ」

「あぁ、それとも次の軍議の時に全員の前で発表してあげましょうか、さぞ評判が落ちる事でしょう」

軍議でこの事を報告すれば、皆が彼を見る視線が変わる事だろう。

まぁ、同時に身内からの評価も大いに落ちるだろう。

「それと、これが一段落ついたら大陸中にこの話を広めようかな。どう？　君のやった事はこんなに大きな事になるよ」

私の情報網、甘く見ないで下さいよ。

そう続けると、彼の表情が変わる。

どうやら、自分の立場が分かって来た様で彼は焦り始めていた。

まぁ、それだけの事をやったんだけどさ。

どう考えても、北郷一刀だっけか？　彼の名声は地に落ちるというか抉るね。
自業自得なんだけども。

「ま、待ってくれ。それは勘弁してくれ」

「いやいや、燈にあれだけの事をしておいてまさか黙ってろって？　そんな事出来る訳が」

「頼む！　さっきの事は、俺もカッとして言っただけなんだ、本気にしないでくれ」

どうやら、自分の中では都合のいい様に話を作っているようだ。
さっきの事は断られたからイラッとして言ったまでで本心ではないとの事らしい。

……納得できないけどねぇ。
イラッとしたら相手の母親を使って脅迫に近い事をやるっていうのかねぇ。

その後も、『言う！』『言わないで！』の言いあいが続く。
そんな中で。

「……母に危害を加えないと誓うなら……私は構いません」

燈の言葉に彼は何度も頷く。
まぁ、燈自身がいいというなら私がどうこうするつもりはないけれど。

言わないでと何度も念を押し。
彼は自分の陣へと帰って行った。

天幕へと戻る途中。

「燈、今回の戦いが終わった後に燈の母親を南郷に連れて帰ろうか」

そう、僕は燈に言った。
燈も同じ事を考えていたのか頷く。

さて、今回の件は鷺島軍内に留めておくとしよう。

一応、それが約束なのだから。

～一刀ｓｉｄｅ～

もう少しだった、もう少しで徐庶を手に入れられたのにあの女、邪魔しやがって。

それにしても何であいつの所に司馬懿がいるんだよ。
あいつのせいで何もかも滅茶苦茶だ。

ただ、今回の事は言わない様に出来たのは大きい。
こんなのがばれたら間違いなく俺は桃香の所にはいられないからなぁ。

それにしてもあの女……司馬仲達って名乗ったよなぁ。

それって司馬懿の事だろうし、何でそいつが鷺島の所にいるんだよ。

絶対、あいつもこの時代の事を知ってるはずだ。

だからあんなに人材が集まるんだ、そうじゃなきゃ偽者の天の御使いの元に来るかよ。

そう思いながら俺は、陣へと戻っていた。

１４話　引抜交渉（後書き）

どんな状況でもこの交渉方法で上手くいくわけがないですね。
という見本な形。

一刀君は暢介が三国志を知っていて優秀な人材を集めていると思っているようです。
まぁ、そう考えないとおかしい配下に見えなくもないですね。

次は虎牢関と行きたい所ですが、暢介達は殆どからまないんですよね・ｗ・；
なので洛陽に行くぞという所までになるかと思います。

洛陽に入って董卓救助に向かう暢介達。
そこでまた、一刀君が入り込んできて大混乱という展開・ｗ・；

あら、孫策や曹操達ともからみ書きたいのになぁ……

１５話　大事な時に限って邪魔は入ります（前書き）

董卓への説得文。
考えれば考えるほど、妙な感じになっていきます。

練れば練るほどに駄目になっていくってどういう事よ？
と、自分に疑問視。

さて、後書きにちょっとアンケートの様なものを置いておきますね。

15話　大事な時に限って邪魔は入ります

～暢介ｓｉｄｅ～

現在、連合軍は虎牢関攻めの真っ最中。

しかし、俺達は後方にいるので戦闘に加わっていない。

まぁ、袁紹の救援という形で命の部隊を向かわせているが、本隊の俺達には影響がない。

「しかし……北郷がねぇ」

そんな中で俺が考えていたのは昨夜の燈の引き抜き騒動の事だった。

劉備軍にいる御使い、北郷一刀が燈に対して脅迫に近い形で引き抜こうとしていたらしい。

結果的には久遠が来た事で引き抜きは失敗したらしいが……

「まさか引き抜きがあるとは思わなかったからなぁ」

「まぁ……うちに来ないか？　みたいな感じでの話しはあるかもしれないけどさ、まさか脅迫される事は考えないからね」

隣に立つ久遠が顔を顰めながら言う。

どうやら、昨夜の事を思い出したようだ。

ちなみに、燈は昨夜のショックが引きずっているようで休んでい

る。

さきほどの軍議にも久遠を連れて行ったんだけど。

いや……良く考えたら、久遠はうちの筆頭軍師の立場だ。

本来は最初の時から軍議にいなきゃいけないのに……あの状態だったからなぁ。

そういえば、軍議の際に久遠が名乗った際、曹操の視線が気になったな。

久遠もあからさまに視線を逸らしていたし、何かあったのかねぇ。

まぁ、今聞かなくてもいいか。

「あの時は流れで約束したけど、やっぱりあの軍議の時に昨夜の事を言った方が良かったかもなぁ」

昨夜の約束、それは北郷が行った事を劉備軍、および連合軍の誰にも言わない様にというものだった。

「燈の様子を見てたら、あんなのの相手をする気も無かったし」

「まぁ、約束してしまった以上は話してしまえば、約束破りで色々言われそうだけどな」

「それが嫌なんだよね。あいつと話す気にもならないし……」

そう言っている最中も、連合軍は虎牢関への攻撃を続けている。

「あぁ……この位置からじゃ、張遼や呂布の捕縛は無理だよねぇ

……」

暗い雰囲気を察したのか、久遠は話を切り替えた。

「そうだな……呂布は劉備軍、張遼は曹操軍に当たってるみたいだな」

「ゲッ……もし、呂布を撃退出来たら、あの御使い。絶対自分の手柄の様に言ってくる……間違いない」

また北郷の名前が出た事で久遠は頭を抱える。

うん……俺も、何となくその映像が見えてくるな。

撃退したのは武将なのに……あぁ、北郷も最前線で呂布と討ちあったなら別にいいんだけども。

流石にないよな……

「張遼に関しては、曹操は絶対に欲しがってるから何があっても捕縛するだろうし……後は陳宮とか賈駆か……」

「高望みは止めた方がいいぞ。俺達はあくまで董卓救助が最優先なんだから、人材求めすぎて助けられませんって展開はやめてくれよ」

「分かってるよ。あぁ……でも、軍師の賈駆は董卓の傍にいるだろうから助けられたら2人とも手に入るかも……ってまた軍師が増える」

武将の量は変わらないのに軍師は増える。

喜んでいいのか、悪いのか。

というか、話を切り替えるつもりが、また久遠が悩み始めてるし。

「……あ、虎牢関が落ちてる」

視線を前に向けると虎牢関に「孫」の旗が見える。
どうやら、孫策軍が一番乗りで落としたらしい。

連合軍は無事に虎牢関を突破した。
かなりの被害は出てるが、それは相手も同じ事だろう。

虎牢関を抜ければ次は洛陽……董卓がいる。
俺達は洛陽に向かう為にこの場所に居るんだ。

「ここからが本番だ……」

そう、俺は呟いた。

袁紹軍に救援に言っていた命によると、袁紹軍が戦闘を開始した際。
袁紹は馬から落ちて頭を打って気絶していたらしい。

ここまで聞いたら、『何やってんだ』で終わるのだが……
命曰く、袁紹が馬から落ちた瞬間、今までいた所に矢が撃ち込まれていたらしい。
落ちていなければ頭を射抜かれて即死だったでしょうと命は言った。

なんて運がいい人なんだろう……鷺島軍、全員の思いが一致した。

そしてもう一つ、命は戦闘中に華雄の部隊の兵士と戦闘になったらしい。

その際に「華雄様より、伝言は伝えた」と言われたそうだ。

つまり、俺達が董卓を助けるという話は本人に伝わったらしい。

「張遼は曹操軍が捕縛したみたいだね。あと、呂布は戦線離脱してる、陳宮も一緒に離脱したようだね」

天幕内で氷花が報告を行う。

現在、久遠以外の全員がここに集まっている。

久遠は連合軍の最後の軍議へと向かっている。

総大将の袁紹が気絶中なので、軍師のみ集まって下さいという知らせが来たからだ。

「任せておいて、洛陽への一番乗りは僕らに任せる様に仕向けてくるよ」

そう、久遠は笑みを浮かべて言った。

一番乗りじゃないと董卓救出の難易度は跳ねあがる。

否、不可能と言ってもいいかもしれない。

洛陽に入り、董卓の首を取る。

それこそが自分達の名声を上げる最高の代物と考えている者もいる。

そういう奴らと鉢合わせになる訳にはいかない。
一番手で洛陽に入り、董卓を救出……そして、董卓は自害したとかそういう理由をつけて袁紹を納得させる。

「まぁ、久遠ちゃんに任せておけば何とかなるんでしょうけど……」

「どうした氷花？」

「ちょっと劉備軍が面倒かもしれないなと」

「劉備軍が？」

劉備軍が面倒、その言葉に葵が氷花に聞く。

「はい。劉備軍も洛陽への一番乗りを狙ってるらしく……まぁ、単純に董卓の首狙いみたいだけどね」

「確かに、一番大きな名声を手に入れる事が出来るだろうからね」

「そうならない為に、私達だけが一番手で洛陽に入る。これが必須になる訳ですが」

「それは……久遠次第か」

「えぇ、上手く持っていってくれればいいのですが」

そう、氷花は言う。

～久遠ｓｉｄｅ～

だー！！　なんで軍議の席にあの北郷がいるの。
あいつ軍師なの？　軍師じゃないでしょ。

ただの看板が何、えらそうな事を言って自分達が洛陽に一番に行くんだって発言してるの。

何か、俺が呂布を追い払ったみたいな話に聞こえるけども……何もしてないよね。
勝手に話を自分中心にしている……なんなんだろ、この人。

あぁ、軍議内の雰囲気が悪くなる……どうしたもんかな。
劉備軍の軍師も「はわわ」って言って慌ててるし、同情するわ……馬鹿が上司だと。

自慢話が終わったのか、北郷が黙ると軍議が再開された。
ただ、勝手に発言する事があり、その都度、軍議が止まって効率が悪すぎる。

あぁ、曹操軍の軍師さんが殺意の目で見てる……って氷花と良く似た服着てるなぁ。
それにあの猫耳頭巾も……氷花の知り合いか何かかな？

まぁ、今調べる事じゃないね。

軍議の方は、最終的には鷺島軍と劉備軍を最初に向かわせる事になった。

本当は、僕らだけが先に向かう様に行きたかったのだけど。

「1軍だけ向かわせるのは良くない、俺達も行く」と御使いが勝手に発言。

もう、相手をするのも面倒になったのか袁紹軍の人が。

「では、劉備軍にも先陣を任せます。鷺島軍もよろしいですね」

と、『お願いします～』と目で訴えてきたので頷くしかなかった。

そういう目に凄く弱いの……僕。

満足そうな表情で戻って行く北郷と僕の視線に気付いたのか何度も頭を下げる軍師。

いい子だ、きっとこの軍師は凄くいい子なんだろうな……

そして僕は半分は成功し、半分は失敗したこの結果を持って自分の陣へと戻って行った。

……はぁ……

～暢介ｓｉｄｅ～

「そっか、劉備軍も一緒か……どうする」

「どうもこうも、とにかく素早く董卓救出、そして身代わりを立てて董卓が亡くなった事を伝えるという事でしょう」

軍議の結果の報告を受けた俺達はどう動くべきかを考えていた。

が、結論は全く出てこなかった。
まぁ、元々が一発勝負の場面だ……その時に最善な道を選んでいくべきなのだろうが。

「皆、董卓を救出する事が俺達の最大の目的だ。絶対にやり遂げよう……」

その言葉に全員が頷く。

これを失敗してしまえば今までの事が全て無駄になってしまう。
失敗だけは許されない……

～洛陽～

洛陽へ向かう鷺島軍と劉備軍。
その道中で、暢介は劉備から何度か話しかけられる機会があったのだが……
事あるごとに北郷一刀に邪魔をされてしまい、暢介は劉備軍の人間とは会話をする事もなかった。

洛陽が視界に入るとそこから煙が立っているのが見え、両軍は急いで洛陽へと入った。
洛陽の中では賊が入りこんでおり、強奪などを行っており悲惨な状態だった。

鷺島・劉備両軍は急いで賊殲滅戦へと入った訳だが……その中で暢介は氷花と共に宮廷へと向かう事になる。

宮廷へ向かう2人の背後に誰かがついてきている事も知らず……

～暢介ｓｉｄｅ～

俺は今、董卓を見つける為に宮廷内を走り回っていた。
何と言うか……凄く広いです。

「流石に大声を出す訳にもいかないし……」

「当り前です……しかし、どこに隠れているのやら……」

隣にいる氷花も息が荒い。
猫耳頭巾も今は取っており、炎の様な赤髪が見えている。

「人っ子一人いなさそうだし……ん？　どうした氷花」

辺りを見回していると、氷花の視線がある一点を見つめていた。
俺もそちらを見ると……そこには2人の女の子の姿が見える。

「氷花……あれは」

「董卓と賈駆ですね……やっと、見つけた」

氷花の言葉に俺は急いで2人の元へと走り出した。

2人の元まで走った俺は、2人に自分が君達を助ける為に来た鷺

島軍の人間だと告げた。
まぁ……俺がその鷺島なんですけど、それは言わなくても通じるだろうから。
服はまたスーツなもんで。

後ろではバテバテの氷花が呼吸を整えている。
悪いな氷花、でも、ちょっと体力ないみたいだな。
南郷に戻ったら体力強化な。

「なぜ……私を助けようと……」

その内、とても儚げな印象を持つ少女が呟くように話す。
氷花の話だと、こちらが董卓らしい。

そして、董卓の横に立ち、今でも警戒心全開の子が軍師の賈駆らしい。

「檄文の中身が真実かどうか、調べた結果。君はその内容とは正反対の人物だった……それが理由かな」

「ですが……」

彼女の言いたい事が分かる。
例え、檄文の中身が嘘でも自分を殺し、その首を取れば名声が手に入る。

もし、失敗すれば董卓を助けようとしたとして名声を無くし、次の標的にされるかもしれないのだ。
直接的な関わりの無い自分を何故助けるのか、そういう事なのだろう。

「俺は、無実の人間の首を取って名声を手に入れる気も無いし、殺す気も無い」

「それに、もしも自分の近くで助けられる人がいるなら助けて上げたいって思うから……ここにいるのかな」

それにさ……そういうと俺は少し呼吸の落ち着いてきた氷花の頭に手を置く。

「よ、暢ちゃん」

お、氷花の驚いた声が聞こえるとはレアケースかもしれない。
まぁ、今はそういう話じゃないな。

「信頼できる仲間がいる……だから、失敗する事なんて考えてなかったよ」

そう、笑顔で言う。
実際は失敗することだって考えている……普通は、そうだろ？

俺は、ヒーローでも神様でも無い。
普通の人間で、今までの人生で沢山の失敗をしてきた訳だから。

だから今回も失敗の恐怖をずっと抱えながら動き続けた。
そして今、その恐怖が無くなってきているのも感じていた。

その答えに董卓は少し呆気に取られていたが。
何かを感じ取ったのか少しだけ笑みを浮かべた。

「分かりました……わた「ちょっと待って」」

董卓が逃げる事を告げようとするのを賈駆が遮る。
そういえば、さっきから賈駆の警戒心が変わっていない。

「詠ちゃん……」

董卓が賈駆の恐らく真名を呼ぶ。
多分、彼女も俺への警戒心が解けていないのに気付いたようだ。

賈駆は董卓に対して首を横に振る。
あぁ……駄目だったか、と俺は思ったのだが。

「違うよ月。僕もこの人達は信用してる……でも……」

そういうと賈駆は俺達の後ろの方を指さす。
その位置は董卓からは死角になっており見えない。
だから、董卓は賈駆の警戒心が俺達に向けられていると思い込んでいた。

それは俺達も同じで、まさか背後に誰かいるとは思っていなかったからだ。

「あいつは……あんた達の仲間？」

その言葉に、俺と氷花は振り返る。
そしてそこに居る人物に驚く、そいつはここにいるはずの無い人物だからだ。

白く輝く服を纏ったそいつ、北郷一刀が久遠曰く「人を不快にさ

せる笑顔」と評されるその表情で立っていた。

「へぇ～そいつが董卓か」

その声が宮廷内に響く。

どうやら……董卓救出は、まだかかりそうだ……

15話　大事な時に限って邪魔は入ります（後書き）

さて、こんな状況でも登場してくる一刀君。
ある意味で主人公補正？　それとも嫌な奴補正？
でも、こういう場面で出てくる人ってよくいますね。

さて、アンケートなのですが。
連合軍編は次回で終わりなのですが、その後のオリキャラについての質問です。

質問：登場するオリキャラは。

？：少なくとも、その当時に存在している人が好ましい
？：まだ産まれていない人でも構わない。

どちらがよろしいでしょうか？

１６話　一時的な別れ（前書き）

アンケートありがとうございました。

結果としては２の満票でした・ｗ・；

さて、色々な将を探してくるか。

あ、登場はまだ先になるかと。

そして、今回はちょっとした別れが。

16話　一時的な別れ

～暢介ｓｉｄｅ～

「へぇ～そいつが董卓か」

目の前に居る北郷に俺は、自分の不注意を呪った。

俺と氷花がここに向かうのを見て追いかけてきたのだろう。

俺はこういう状態にならない為に背後に気をつけておかなければいけなかったはずなのに。

全く、警戒もしていなかった。

「お前ら、董卓を助けるって言ってたよなぁ。それってまずいんじゃねぇの？」

未だにヘラヘラしながらそう言ってくる北郷に思わず。

（まずいに決まってるだろ）

と、脳内で突っ込みを入れておいた。

「俺が一言、袁紹に『鷺島軍は董卓を助けた』って言えば、どうなるかなぁ？」

「そ、それは……」

「とりあえず、次の標的はお前らになるよなぁ～」

優位に立った事を理解している様で、北郷は脅しに入る。
恐らく、こちらからどうすれば見逃してもらえるかの条件を貰おうとしているのだろう。

見逃す為の条件、まずは董卓を殺し、その首を自分の手柄として差し出せとか。
あるいは前の失敗から燈を渡せという事になるのかもしれない。

いや……もしかしたら、久遠や氷花も出せと言ってくる可能性も考えられる。
こちらが完全不利な状況だからだ、こっちはどんな条件でも受けざる得ない。

それに……

「……」

「おいおい、何とか言えよ。まぁ、俺としてはこのまま黙っててもいいんだぜ。俺を探しに誰か来るかもしれないからな」

そうだ、北郷がいなくなった事に気づけば劉備軍の誰かが探しにここに来る可能性が高い。
それが、関羽か張飛なら余計に厄介な事になる。

もしも戦闘になれば俺と氷花では即、殺されるだろう。
だから……この話はすぐに決着させないといけない。

「望みは何だ？」

「ん？　望みねぇ……とりあえずは、徐庶を頂こうかな」

「燈を……」

予想通りか、よっぽど燈を手に入れたいらしいな。

「あぁ、それと董卓は助けてやってもいいぜ」

「え？」

「あぁ、ついでにその隣に居る子も一緒にな……流石に俺も人を殺すのは気分良くないしな。俺が保護してやるよ」

「……」

意外な答えだったが、北郷の表情を見れば何故董卓を助けようとするのかが分かる。

その目つき、どうやら2人に興味があるらしい……もちろん、良い意味じゃない。

こいつ……人を、女性をそういう目でしか見れないのか。

思い出せば、連合の軍議の際にもこいつはこの目をして周りを見ていたな。

おかげで……こいつの評判が落ちっぱなしだったけれども。

「俺の望みを一つでも断ったら俺は袁紹、連合軍の全員に、この事をばらす」

もとより、こいつは俺に拒否させる選択肢を与える気は無いらし

い。
燈を差し出して、更に董卓も北郷に渡す。
「どうするんだ？　答えは一つしかないと思うんだけどな」
確かに、答えは一つしかない。
正直、「ふざけるな！！」と叫びたいぐらいだ。
だが……
「ククク……」
そんな時、俺の横にいる氷花が笑い始めた。
その姿に北郷は『こいつ壊れたか？』という感じの表情を見せる。
「フフフ……ハハハ……」
笑い続ける氷花。
ただ、笑いながらもその目の光は消えていない……正常だ。
「いやぁ失礼。北郷さん、あなたの考えが全て叶うといいですね……まぁ、無理でしょうね」
その言葉に北郷の表情が変わる。
「無理だと」
「ええ、あなたは私達がその願いを聞かなければ袁紹に伝えると

言いましたね。でも、それを袁紹が信じるでしょうか」

「どういう意味だ」

「簡単な事です。話す本人と相手の信頼関係が内容の信用性を左右します……あなた、連合内で信用があるとでも？」

確かに、信用されている人間からなら明らかな嘘話以外ならその話の信用性を高く取ってくれるはずだ。

逆に全く信用されていない人間からだと、信用性の高い情報でも『本当か？』と疑ってしまうだろう。

北郷の連合内での評判は悪い。

さっきも言ってたが、いやらしい目つきや言動などなど。

その為か、多くの勢力は劉備軍と話す時は北郷がいない時を狙って行っているらしい。

そうでないと北郷がいちいち口を出してきて面倒になるらしいからだ。

「それに、その話に出てくる相手は鷺島様です。その彼とあなたは天の御使いと言われています」

「天の御使いは俺だ！　そいつは偽者なんだよ」

そう叫ぶ北郷に氷花は首を横に振る。

「それを決めるのはあなたじゃなく私達です。劉備達があなたを天の御使いと言った様に。私達は鷺島様が天の御使いと考えております」

「だから！」

「あなたは事ある事に彼を敵視しているのは連合内でも知られています。そんな中でこの様な事を言えば袁紹もこう思うでしょう」

……嘘をついてまで彼を落とし入れたいのか……とね。

氷花がそう言うと、北郷の表情が怒りに変わる。

「俺は嘘はついてないだろ！」

「そうですね。ただ、相手が信じるかと言うとそれはまた別の話でして…」

そこまで言うと氷花の表情が少しだけだが、曇る。

そうだ、ここまでで北郷を優位な立場から引き摺り下ろしている。

まぁ、彼が普通にしててそれなりに印象が良かったらこんな話にはならなかったわけで。

ただし、だからと言って彼がこのまま見逃す訳がない。

氷花……何かあるのか？

視線を北郷に移すと、少し変化が見られた。

先ほどまでは怒りの表情だったが、少し冷静になったのか表情は落ち着いて見える。

「北郷さん、あなたは先ほどこう言いましたね。董卓とこの子を助けてもいいと」

「あ、あぁ……確かに言ったけど。」

氷花の言葉に北郷が頷く。

「では、こうしましょう。あなたと私達、それぞれに彼女達の1人を助けるという形を取るというのは」

「え？」

氷花の提案に北郷が声を上げ、驚きの表情を浮かべる。

声は出さなかったが、俺も後ろに居る2人も同様の表情を浮かべる。

「私達が2人を助ければ、あなたがそれを良しとしないでしょう。逆もまた同様です」

ならば……そこで氷花は一呼吸を入れる。

「互いに1人を助けるようにすれば互いに他の勢力に隠さなければならない事を抱える事になります」

要するに、董卓と賈駆を俺と北郷がそれぞれ助けて匿うという行為を行う事で。

互いに知られてはいけない部分を持つという事になる。

しかし……それは、董卓を助けた方にしか意味がないのではないだろうか。

賈駆に関して言えば、仕える場所が無くなったので今はここに仕えているで言い逃れが出来るが。

董卓はそうはいかない。

「……分かった、それでいこうじゃないか」

北郷の答えに氷花は頷く。

「ありがとうございます。どちらに向かうかは彼女達に任せても構いませんか？」

2人に選択権を与えようと言う氷花。

北郷も頷く、恐らく、どっちでもいいという事なんだろう。

「董卓……賈駆、ごめん。今の状況を抜けるにはこの案で納得させるしか無くて」

2人の方を向き、氷花は頭を下げる。

その表情は暗い。

「いえ……そんな事は……」

董卓の表情も暗い、賈駆は何かを考えている様子だった。

「決まった以上は、どちらかが劉備軍に行かなくてはいけな「ボクが行くよ」」

俺が喋っているのを遮って、賈駆がそう宣言した。

「詠ちゃん」

董卓が驚きの表情で賈駆を見る。

「月をあんな男の所に行かせる訳には行かない、絶対に助平な事をするに決まってる」

まぁ、ああいう目つきで見てればそう思うよな。

……北郷本人もそのつもりかもしれんが。

「だからボクがあいつの所に行って、月は鷺島軍に行くんだ。それが一番いいから」

そう言うと賈駆は少し笑みを浮かべて董卓を見る。

その笑顔は弱々しい。

「ごめんね月。最後まで一緒のつもりだったけど……少し離れ離れになるから」

「詠ちゃん」

「大丈夫。別に取って喰われる訳じゃ……喰われるかもしれないけど、ボクは大丈夫だから」

「……」

賈駆は視線を俺と氷花に移し頭を下げる。

「鷺島、荀攸……月の事、お願いします」

「分かってる。俺達が責任を持って董卓を守るから……」

「ええ、私達が彼女を守るわ」

俺達の言葉を信じてくれたかのか、賈駆は頷くと北郷の方へ歩き出した。
董卓じゃない事が少し不満なのか一瞬、表情が曇ったが、まぁいいかと思ったのかその表情は消えた。

「分かってると思うが、董卓の事、他国に流す事は止めてくれ。それが約束だ」

「あぁ、分かってるさ。約束だもんな」

約束という言葉に、少しだけ力を入れて返してきた北郷。
何だろうか、凄く嫌な予感がする。

「じゃあ、俺はこの子を連れて行くぜ。さぁ、行くぞ」

「分かってるわよ」

そう言って2人は俺達の前から去って行った。

少しの時間、無言の俺達だったがこのまま、ここに居る訳にも行かず董卓が自害したという状況を作り、宮廷を後にした。

連合の勢いに、もはやこれまでと考えた董卓は自室に火を放ち自害して果てたという設定にしておいた。
その為、まずは董卓の部屋に向かう最中に宮廷内にある遺体を部屋に入れて火を放った。

これで、調べて行けば部屋の中にある遺体が董卓のものとなるだろう。
この時代には鑑識も無いし、ＤＮＡ鑑定なんて代物もない、偽者の遺体が本物になる事も出来るはずだ。
次に董卓の服を文官の着る服に着替えさせて外に出ていく。
流石に彼女の服のままでは目立ってしょうがない。
そのまま、俺達は自分達の陣に戻ってきた時、皆は俺達が無事である事を喜んだ。
ただ、内容を聞いて少し落ち込んだけど。
「何であいつは、僕らの邪魔をするんだろ」
タイミング良く乱入してきた北郷に嫌悪感を抱いている久遠。
「私にもっと武があれば……」
自分の武の無さがあの状況下において早期決着を狙わざる得なかった事を悔やむ氷花。
普段なら率先して暗いムードを払う2人が落ち込んでいる中で。
「で、でも董卓さんを助けられたんですから良かったと思うべきじゃないでしょうか」
と、葵が言う。
確かに、俺達の目的は董卓救出でそれは成功しているんだ。
あとは董卓を無事に俺達の本拠地である南郷に移せれば終わり。

ただ、北郷の乱入と賈駆が北郷の所へ行った事で失敗したと思ったのだろう。

成功だったはずですよと葵が久遠と氷花を励ます。

すぐに2人は立ち直りを見せ始めていたのだけれど……葵よ。

「氷花さん、南郷に帰ったら武を磨く為に私と命ちゃんと一緒に訓練しませんか？」

それは酷ってもんだぞ。

氷花の奴、凄い嫌そうな表情だ……初めて見た。

その後、袁紹の元へ董卓は自害し部屋に火を放ったため、消火後に入ると既に遺体は真黒になっていた。

ただ、近くにこれがと董卓が頭に乗せていた物を見せる事で納得してもらった。

その際に「やはり袁紹様を恐れて、これまでと思ったのかもしれませんね」と久遠が言ったのが良かったのかもしれない。

凄く機嫌よかったからなぁ……

その日の軍議で洛陽をある程度復興させてから、帰る事になり配置が伝えられた。

俺達の担当の隣は……曹操か……知った瞬間に久遠が凄く嫌な顔をした。

曹操と過去に因縁でもあるのか？

～華琳ｓｉｄｅ～

「鷺島軍の隣ね……都合がいいわね」

復興の配置を見た私は、そう呟く。

あの軍には私の欲するもの、優秀な人材が多く存在している。

徐庶・満寵・徐晃・荀攸、彼女達は私の所にいても優秀な分類に入ると思う。

そして何より……

「やっと会えたわね……司馬懿」

あの時の事を忘れる事は無い。

今までは、優秀な人材を見つけた際に手紙を送る、もしくは実際に会って話すなどを行えば成功が多かった。

だから彼女にも手紙にて仕官要請を行ったのだけれど……

『お断りします』

という、一行で終わってしまったのだ。

本来なら激怒するべきなのかもしれないけれど、これはこれで面白いと思ったわ。

代わりではないが、彼女の姉である司馬朗が私に仕官し十分な働きを見せている。
この連合の直前に司馬朗に会い、鷺島軍にいる司馬懿を引きぬけるだろうかと相談をした所。

『無理ですね』

という、一行で返された。
何と言うのか、司馬家の返答はこれが基本なのかしらと思ってしまったわ。

無理と言われているが、本人と実際に面と向かって話してみれば引きぬける道が見えるかもしれない。
待ってなさい司馬懿、私は、狙った獲物は逃がさないのよ。

特に、優秀な人材となればなるほどにね。

翌日、私は配下である春蘭、秋蘭、桂花を伴って鷺島軍の天幕へと向かっていた。
鷺島軍へ向かうと言った時に桂花が凄く嫌な表情を浮かべていたけど。

まぁ……男嫌いだからしょうがないわね。

そして、鷺島軍の天幕に入った私達は目の前の光景に思わず目が点になったわ。

そこには……

「だから！　僕の胸を触らないでよ氷花！」

と顔を真っ赤にして叫ぶ司馬懿。
それを見て顔を真っ赤にし、「ふわ～」と言っている徐庶。
別の所では呆れた表情を浮かべる鷺島と満寵と徐晃。

「む！　久遠ちゃん、少し大きくなった？　お姉ちゃん、ちょっと嬉しいかも」

と、司馬懿の背後から出てきたのは……桂花？　桂花に良く似ている。
服装なども桂花のそれの色違いで猫耳頭巾。
その子が楽しそうな表情を浮かべている。
まさか、彼女が荀攸？　桂花とは全く違う感じを受けるわ。

「あ……ああ……」

横から変な声が聞こえたので見てみると、桂花が荀攸を指を指していた。
荀攸も桂花に気付いたのか、笑顔で手を上げる。

「あ～久しぶりだね、桂花おばさん」

その言葉に、桂花は。

「あんた何してるのよ！！　氷花！！」

と、大声を上げていた。

１６話　一時的な別れ（後書き）

桂花からしてみたら、自分の姪が同じ軍の将の胸触ってる最中。
怒鳴りたくなりますわな・ｗ・；

さて、董卓と賈駆をバラバラにしてみました。
あの状況ではああするしか道は無かったのではないかと思っての判断です。

もうちょっと粘って関羽辺りが来るのを待った方が良かったかしら？

１７話　忠告する際は信用を持っておきましょう（前書き）

今作に置いて、鷺島くんと北郷くんは仲が良くなる事は無いので。
あしからず。

休みの日に書けばよかったのに色々と大変でした・ｗ・；
それに、何かあんまりいい出来じゃない気がします

17話　忠告する際は信用を持っておきましょう

～暢介ｓｉｄｅ～

いやぁ、曹操にとんでも無いものを見せてしまったなぁ。

まぁ、俺達からすれば日常的な光景だった訳だが。

だからって見慣れちゃいけないよなぁ……流石に。

現状では頭に大きなタンコブを作った氷花が。

「うぉぉぉ……」

と、呻きながら蹲っている。

そして、拳骨をした久遠の顔は真っ赤になっている。

まぁなんだ……氷花よ、自業自得って事にしとくわ。

曹操がここに来た理由は、久遠達に興味があり自分の所へ来ないかという誘いだった。

まぁあれだ、引き抜きってやつだな。

流石に相手の天幕に来てそれを告げてくるとは思わなかったが。

引き抜きの為、話をさせてもらえないかと言う曹操に対して俺は。

「あぁ、構わないよ」

と、そう返した。
その答えに皆、曹操軍の人達も含めて驚きの表情に変わる。

勘違いして欲しくないので言っておくけど、別に俺は皆が引き抜かれてもいいとは思っていない。
ただ、曹操は久遠達を高く評価していると言う事。
それは久遠達の主である俺にとって嬉しい事。

それに対して俺が出来る事は曹操に彼女達と会話をする機会を与える事。
それぐらいしかない。

何も頭ごなしに「彼女達を出す気は無い！」と言うつもりもないので。

「ただ、選ぶのは彼女達だ。無理やりに連れて行くのは勘弁してくれ……例えばだが、彼女達の親を使ったり」

と、俺は北郷の取った策を曹操が使わないか確かめる為にそう言う。
すると曹操の後ろに居た3人の内の2人、荀?と夏侯惇が怒鳴る。

「貴様！　華琳様がその様な卑怯な方法を取るはずがなかろう！」

「そうよ。そんな事を考えるのはただの馬鹿のやる事よ！」

という答えが返ってきた。
北郷……どうやら、お前は馬鹿らしいぞ。

「2人が言った通りよ。私はそういう方法は取らないわ」

曹操もその様に返してくる。

「分かりました。では、俺は外に出ておいた方がいいでしょう。その方が彼女達もいいでしょうし」

そう言って俺は天幕の外へ出る。

彼女達がどういう進路を取るか、それは彼女達自身が決める事なのだから。

～華琳ｓｉｄｅ～

引き抜きの機会を与えられた私は早速、鷺島軍の将達と話をした。

結果から言うと全滅、誰も話に乗って来なかったわ。

まず司馬懿、彼女は以前断られており今回も難しいだろうとは予想していた。

案の定、開口一番。

「僕は、鷺島様に忠誠を誓っております。ですので、あなたの元へは行けません」

と言われ、私は説得する間も無く拒否をされた。

他の徐庶、満寵、徐晃の3人も引き抜きを拒否、忠誠心の高い将達ね。

何が彼女達を鷺島暢介への忠誠心に向かわせるのかしら。

残るは荀攸。
彼女はまだ頭を押さえていたわ……結構本気で叩かれたみたいね。
あと、桂花が頭を抱えている。
まぁ、自分の親類が仲間に悪戯して頭にコブをこさえるのを見れば抱えるわね。

「大丈夫かしら荀攸？」

「いてて……全く、私は久遠ちゃんの成長を確かめたかったのに……」

そう言って荀攸は苦笑を浮かべ私を見る。

「あぁ、曹操様。私もあなたの引き抜きに応じる事はありませんので話すだけ無駄ですよ」

私も鷺島様に忠誠を誓ってますのでと荀攸は続ける。

「ねぇ荀攸、一つだけ聞いていいかしら」

「はぁ。何でしょうか？」

「あなた達が彼に忠誠を誓ってるのは……北郷一刀の噂と同じなのかしら？」

「ん？　北郷とですか？」

北郷という名前が出た瞬間、鷺島軍の将達の表情が変わる。

心底、嫌いだという雰囲気。

「えぇ、北郷一刀に関する噂で一つね」

その噂を彼女達に告げる。

曰く、北郷一刀は劉備軍の将達のほぼ全員と関係を持っているとの事。

しかも1、2度ではすまないらしく既に骨抜きにされているとの事。

当初はこれを聞いた時は正直、怒りと呆れがどっちも来た気がしたのを覚えている。

まぁ、噂なので多少の嘘もあるだろうが。

怒りも呆れも結局の所、男というのはやっぱりこういうものかというものであった。

所詮、天の御遣いもそういう男かという。

「なるほど、つまり曹操様は鷺島様が北郷と同じ様に私達と関係を持っていると思っておられるんですね」

荀攸の声に少し怒気が含まれているのを感じる。

表情も先ほどまでと違い、少しだけ険しい。

「ここに来る前はね。ただ、さっき彼を見て北郷とは違うというのを理解したわ」

ここに来るまでは、彼も同様の人間なのだろうと思っていた。

しかし、彼女達の言葉には何かをされた事での忠誠ではなく、心からの忠誠が感じられる。

「それは良かった……私達としても自分の主がその様な見られ方をするのは心外ですので」

荀攸の声から怒気が消える。
表情も元に戻っている。

「少し長居をしてしまったわね。交渉が失敗したんだから私達は自分の陣に戻るわ」

これ以上、ここに居ても何も得られないわね。
説得する以前に彼女達の鷺島暢介への忠誠心を揺るがす事は不可能のようだし。
そうして私達は自分達の陣へと戻った。

そういえば、天幕の外にいるはずの鷺島がいなかったわね。
一言、言っておきたかったのだけど。

『優秀なのは分かっていたけれど、忠誠心も高い、いい将達を持ったわね』

と、ただし。

『余計に欲しくなったわ』

と、付け加えておきたい。
私は欲しい人材は何が何でも手に入れる主義だから。

……ただ、流石に親を人質とかそういう手段は取りたくないわね。
人としてどうかと思うし。

～久遠ｓｉｄｅ～

「ふぅ……」

曹操が天幕を出て行くのを確認し、僕は息をはく。
見れば皆も緊張が解けたのか同様の行動を取っている。

曹操の威圧感、尋常じゃないなぁ。
あんな雰囲気じゃ、もし僕が在野なら絶対に首を縦に振るよ。
断ったらその場で殺されそうだし……

「そういえば、久遠ちゃんって曹操と知り合いだったの？　久しぶりねって言われてたけど」

思い出したように氷花が聞いてくる。

「あぁ……初対面なんだけど、手紙でやりとりがあって。以前、仕官要請が来てそれを断ったの」

「えぇ～曹操からの仕官要請をですか」

燈が驚きの声を上げる。
まぁ、確かに曹操の仕官要請を断るのは珍しいか。

「うん。まぁ、曹操の噂でちょっとね……」

「「「「？」」」」

全員が首をかしげる。
あれ？　皆、曹操の噂知らないんだっけ。

「曹操は優秀な人材は好むけど優秀すぎる人材は警戒する。でしゃばり続けると身を滅ぼすとか……」

それにも色々あるのだけれど。

って、別に僕が優秀すぎる人材だって事じゃないからね。
勘違いしないでよね。

「あとは……その……」

残り一つの噂、それを言おうか言うまいかで悩む。
結構有名らしいんだけど……あぁ、どうしようか。

「どうしたの？　久遠」

珍しく命が口を開く。

「いや……あのね。曹操は女性好きだって話が……」

「「「「あ～それか」」」」

全員が頷く。
やっぱり有名なんだね、その噂。

曰く、曹操は美しい女性が好きで夜な夜な閨に連れて行っているとかいないとか。

まぁ、優秀すぎる人材を警戒するとか美しい女性好きとかそういう噂を聞くとちょっと仕官する気も……

「ほぉ～つまり久遠ちゃんは自分が優秀すぎて美しすぎるって言うんだね」

ねぇ氷花、僕の心の文を読まないでほしいんだけどさ。

というより。

「僕は一言も自分が美人とは言ってないよ……僕は大した事ないし」

そうだ、僕なんかより美人と言われる人達は大勢いる事だろう。

対して自分の容姿に自信があるとも思っていないし。

「なぁ～に～、久遠が美人じゃなかったら私とかどうなるんですか、街人1とかだよ」

葵が凄い勢いで詰め寄ってくる。

いやいや、葵は美人だと素直に思う。

髪も綺麗だし、顔も整っているし。

僕は……

「どうせ、自分には何も魅力は無いって言いたいみたいだねぇ」

氷花が笑みを浮かべながら言う。

ただ、その笑みはいつものそれとは違い、母親が子を見る様なそんな感じだった。

「久遠ちゃんは美人だよ。綺麗な髪してるし、顔も整ってるよ。もっと自信持っていいと思うけどね」

何と言うか、面と向かって言われると凄く恥ずかしい。

「それにさ……久遠ちゃんには破壊力抜群の武器があるじゃない」

訂正、氷花の笑顔はやっぱりいつものものでした。
それと氷花、もうあなたはただの助平でいいよね。

「そういう話ばっかりしないでよ」

「そういう話をしたいぐらいの魅力的なものだって言いたいんだよ」

私とか葵とかには縁のない魅力なんでね。
と、氷花は続けた。

「え？　私も氷花さん側」

葵が呟くのが聞こえたが無視しておいた。

「大丈夫、葵は無い方がいいから」

命……それは慰めにならないからね。
余計に落ち込んでるし、命は焦ってるし……何だろこの状況。

「……ねぇ氷花、あれが武器だっていうなら燈も破壊力あるよ」

氷花と2人で燈へと視線を移す。

「そうなんだけどさ。何て言うか、燈のあれは触れると危ない気がするんだよね」

「僕は危なくないっての？」

「見た目的にはね」

……僕と燈は同い年なんだけどさ。

何だろう、凄い損してる気がする。

その後、天幕に戻ってきた暢介に引き抜きには応じない事を告げた。

聞いた当初は喜んでいた暢介だったのだけれど。

その後は何かを考え込んでしまい、話しかけずらい状態になってしまった。

何かあったのだろうか？

～暢介ｓｉｄｅ～

夜になって俺は天幕を出てある場所へと向かっていた。

久遠達が曹操と話をしている際に俺は天幕を出て外にいた。

その際に、劉備軍の兵士が一人俺の所へ手紙を届けてきた。

手紙には今日の夜に会って話があるという北郷からのものだった。
俺は兵士に行くという旨を伝え、その場は終わった。

天幕に戻り、何の話だろうかとずっと考えていた。

（もしかして、今更董卓がいいって言うんじゃないだろうな）

という考えが浮かぶ。
それを言われると俺は「無理だ」としか答えられない。

既に董卓は先に南郷へ向かわせているからだ。
流石に一人でという訳ではなく、信頼できる兵士達を同行させているけれど。

（……それ以外は思いつかないんだよな）

指定された場所につくと、既に北郷が立っていた。
見渡すが誰もいる様子がないので1人なのだろう。

まぁ、間諜みたいな人がいても気付かないけど。

「北郷、俺を呼び出して何の用だ？　董卓の事か？」

そう聞くと、北郷は首を横に振る。
ん？　董卓の事じゃないのか。

「いや、董卓の事じゃなくて、お前の事についてなんだ」

「俺の事？」

「あぁ、お前はこの時代の事。どれぐらい知ってるんだ？」

この時代の事？　三国志の歴史の知識って事か。

「悪いが全く知らないんだ。歴史ってのに興味が全く無くてな高校の時は赤点ギリギリだったんだ」

苦笑しながらそう返す。

まぁ、武将の名前は知ってるやつはいるけどそいつが実際は何したのかとかはまるで分からん。

「冗談だろ？　それであれだけの武将を集めたって言うのか？」

北郷は俺が嘘をついてると思っているのか、少し怒った表情をする。

いや、これで嘘をついてもな。

「嘘じゃないさ。それに武将を集めたのもその武将が優秀と知っていたからじゃないよ」

確かに三国志に詳しければ。

（この武将、凄く強いんだよな～）とか（こいつ裏切るんだよなぁ）とか分かるかもしれないけどな。

「まじかよ……」

「要件はそれだけか？　なら、俺は帰らせてもらうぞ」

そう言って、俺は北郷に背を向け、陣へ戻ろうとしたのだが。

「まてよ、本当に歴史を知らないんだな」

そう言ってきた北郷にうんざりした表情を浮かべて振り向く俺。

「何度も言わせないでくれ。俺は三国志ってのは名前しか知らないんだ。これから何があるかもまるで分からない」

そういうと北郷は何やら思いついたのか笑みを浮かべる。

「そうか、俺は三国志好きでさ、色々知ってるんだ。だからお前にも一言言っておくぜ」

「いや……そんなのは」

いらないと言おうとした俺を遮って北郷が言う。

「司馬懿には気をつけた方がいいと思うぜ」

「え……それってどういう意味だ」

俺の問いに北郷は答えず、そのまま去って行った。

一人残された俺はひとまず陣へ帰る事にした。

久遠に気をつけろって何だ？　何を気をつけるんだ。

裏切りか？　まさか……歴史でそうなってるってのか？

いや、あいつの言う歴史はあくまで俺の時代であってこの世界じゃないだろ。

それに、あいつの話すのが本当とは限らないしな。

俺と久遠の仲を悪くさせようとしてるのかもしれなけれど。

そもそも、あいつの事を信用出来るかという話になる。
答えはＮＯだ。

あいつの行った、燈への脅迫に近い形での引き抜き。
これだけで信用出来るはずが無いからな。

気にする事ないか。
そう思いながら俺は陣へ戻る。

天幕に戻ると、久遠がいて『勝手に一人で出ていかないでください！』って怒られた。
本気で心配してくれてたみたいだ……何か、少し涙目っぽいし。

こんな彼女が俺を裏切るか？　そんな事は絶対に無いはずだ。
そう、俺は思った。

～一刀ｓｉｄｅ～

三国志の歴史を何一つ知らないらしい鷺島。
それであれだけの武将を確保とか、運がいいとかそういうレベルじゃない。

ただ、知らないからこそあいつを抱えてるんだろうな。

「司馬懿なんて、おっかなくて俺だって持っておきたくないからな」

司馬懿って暗いイメージしかないからなぁ。

まぁ、どうせ朱里の噛ませ犬程度にしかならないだろうしな。

こっちには天才軍師様がいるんだから安心だわな。

それに、さっきの言葉で鷺島は司馬懿を警戒するはずだ。

そうなって仲違いが起こればしめたものだな。

後は内部分裂して崩れて行けば苦労しないで倒せるだろう。

そして鷺島は即死罪……最高の計画だ。

そう思いながら俺は陣へと戻って行く。

北郷一刀は理解していない、鷺島暢介が自分を全く信用していない事を。

司馬懿は暢介に忠誠を誓い、決して裏切る事は無い事を。

彼の考えは成就する事はない事を。

17話　忠告する際は信用を持っておきましょう（後書き）

2人の仲を悪くするような展開になっていましたので。
修正いたしました。

18話　久遠ちゃん、相談する（前書き）

さて、董卓さんの扱いについては本作の様な侍女はありませんので。
そういうの、暢介くん嫌ってる様なので・ｗ・；

オリキャラはもう少し先で2～3人出てくる様にいたします。
登場時期にズレはあると思います。

18話　久遠ちゃん、相談する

～氷花ｓｉｄｅ～

どもども、荀公達こと氷花です。

洛陽の復興も終わり、南郷へ帰ってきました。
董卓も無事、南郷に到着したので良かったですね。

まぁ、久遠ちゃんが『あぁ～董卓軍の武将、一人も手に入らなかった』
なんて、今でも嘆いていますけどね。

さてさて、その久遠ちゃんなんだけど。
どう見ても、暢ちゃんに惚れてると私は思っている。

だって、そうじゃなかったらおかしいでしょ。
洛陽復興の際に、夜に１人天幕を出てどこかへ行ってた暢ちゃん。

その後、戻ってきた暢ちゃんに『勝手に１人で……』って感じで説教してた。
目にちょっと涙を溜めてね。

あれは反則だね、並の男ならコロッといっちゃうとおもうよ。

え？　何で知ってるかって？

そりゃあ、覗いていたから……あ、久遠ちゃんには内緒だよ。
って、私は誰に言ってるんだ？

南郷に戻っている時に聞くと、北郷から歴史に関する事を言われたそうで。
なんでも久遠ちゃんに気をつけろとの事。

ただし、『俺は久遠を信頼してるからさ、あいつの言う事は信用してないんだよ』とそう言っていました。
まぁ、あいつの世界での久遠ちゃんはそうなんだろうけどね。

今の久遠ちゃんを見て、そんな事が言えるかねぇ？

「……」

「……」

流石の私もこの展開は予想していなかった。

仕事上がりで部屋に戻っている途中で久遠ちゃんに会って。

『相談したい事があって』

と言われたので、どうせ聞くなら部屋がいいかと思って、私の部屋に招いた。
そして今、机を挟んで向かい合っているのだけど。

うん……久遠ちゃん、様子がおかしい。

何か、顔が少し赤くてモジモジしてる……
まさか……相談って

「えっと……恋愛の相談だよね」

「え！　何で分かったの」

分からない方がおかしいよ。
そんな表情でモジモジしてたら誰だって『あぁ～恋愛関係だな』って思うよ。
多分、恋愛対象は暢ちゃんで間違いない。
他に久遠ちゃんが惚れそうな男がいたら誰か私に教えてほしい。

「分かった理由はさ、後で考えたら分かると思うから言わないけど」

「？」

「なんで……私なの？」

そこが一番、私が聞きたい所。
何故私？　私は別に恋愛慣れした女性では無い。
断言できる、言ってて悲しくなるけど。

「うん……こう言う事は一番の年長者に聞くべきかと思って」

「……年長者って、私よりも年上はいると思うんだけど」

例えば、食堂で料理作ってくれてるおばちゃんとか、文官でもいるし。

「そうなんだけど、こういう相談が出来るのって氷花ぐらいしか思いつかなくて」

何だろう、嬉しさ半分と良く分からない感情が半分って気持ち。

とりあえず、次の久遠ちゃんを悪戯する時は、胸を触る時に思いっきり揉んでやる。

痛いって言ってもしばらくは止めないつもりだ。

「なるほどねぇ……暢ちゃんがどう思ってるのかが知りたいわけか」

その言葉に久遠は頷く。

しかし、顔を少し赤くしてモジモジしてる様子が何とも言えない。

まぁ、単純に言うと久遠ちゃんは暢ちゃんに完全に惚れている様だ。

確かに暢ちゃんは性格はいいからなぁ……凄く優しいし。

それに努力を惜しまない姿は見る人によっては凄く魅力的に見えるから。

恐らくだけど、実際に告白しようものならもっと混乱した久遠ちゃんが見られそうな気がする。

告白するべきだと促してみるか？　いや、止めておこう。

今は真剣にこの相談に乗ってあげよう。

「なら、私が聞いてみようか？」

「へ？」

「だってほら、私なら普通に会話してて聞く様な流れに持っていきやすいし」

多分だけど、将の中で一番暢ちゃんと世間話をしているのは自分だと思う。

そんな自分なら『そう言えば、暢ちゃんて久遠ちゃんの事どう思ってるの？』って会話も出来そうなものだ。

他の将がそれをやると凄く違和感があるんだよね。

まず、燈はそういう話はまずしないし、葵も世間話はあっても恋愛事じゃない。

命は……そもそも、世間話を暢ちゃんとするのか？

「大丈夫だって～お姉ちゃんに任せなさい」

そう言って、私は自分の胸をポンっと叩いた。

骨に直に当たった気がした……地味に痛い。

「う、うん……お願い」

だから、そんなモジモジしない。

しかし……久遠ちゃん、乙女だねぇ……

とりあえず、久遠ちゃんを部屋に戻してから私は暢ちゃんを探して回っていた。

探し回って書庫にたどり着くと、そこに暢ちゃんはいた。
何やら探し物をしている様で、その表情は真剣そのもの。
しばらくは隠れて見ていたけど、このまま居る訳にもいかないので。

「暢ちゃん～ちょっと話があるんだけど、いい？」

と言って暢ちゃんに近づく。
私の声に気付いた暢ちゃんは竹簡を置くと私の方を見る。

「ん？　どうした氷花？」

私の言葉遣いで仕事関係で無い事が分かったのか口調は軽い。
まぁ、仕事関係なら私も言葉遣いは変わるからなぁ。

「うん、ちょっと気になった事があってさ」

「気になる事？　何？」

う～ん、自分の事じゃないけど恋愛関係を聞くのは恥ずかしいな。
それに、暢ちゃんって何となく交してきそうだしなぁ。
まぁ、行ってみるか。

「暢ちゃんって久遠ちゃんの事どう思ってるのかなぁ～ってさ」

「久遠の事？　そりゃあ、信頼できる仲間だけど」

その答えに私はずっこけた。

何と言うか、この質問にこの答えって王道な感じが。

「そ、そうじゃなくて……久遠ちゃんを女性としてどう見てるか何だけど」

「女性として……はぁ!?」

私の質問を理解したのか暢ちゃんが大きな声を出す。

書庫には誰もいなくて良かったよ、誰かいたら迷惑だしね。

そもそも、ここで会話する事も迷惑なんだけどね。

「……」

そこで考え込む暢ちゃん……何か上手い逃げ道は無いかって探してるのかな?

それともまさか……『女性としては特に見てないなぁ』なんて言うんじゃなかろうか。

いや……もしかしたら。

「ま、まさか暢ちゃんって女性よりも男性の方が……」

「それはない!」

おぉ、強く否定してきた。

まぁ、それだったら久遠ちゃんにどう報告したらいいか分からないしね。

「なら、答えてほしいなぁ」

「……分かった答える」

「わ～い、さぁ答えて頂戴」

「正直、いい子だと思うよ」

「お～」

おっ、この展開は久遠ちゃんに報告できそうだとその時は思っていた。

ただ、話を聞いていくと褒めてる内容がちとおかしい。

……あぁ、これはあれだ。

一個人としての評価では無くて上に立つ者として見た女性としての久遠ちゃんの評価だ。

一個人、鷺島暢介としての評価はまだ聞けない。

こっちとしては一個人の意見を手に入れたいのになぁ……

「って事でいいかな？」

「あ～うん。まぁいいや……ありがとうね暢ちゃん」

期待した答えが手に入らず、私は暢ちゃんに感謝の言葉を言うと書庫を出て行った。

その後、久遠ちゃんの部屋に行ってこの事を報告。

がっかりするかと思ったけど。

「暢介らしいなぁ……」

って、笑ってるよ久遠ちゃん。

暢ちゃんの事を本当に理解してるんだろうなぁ。

まぁ、私としては2人が一緒になった方が嬉しいからねぇ。

お似合いな感じがするし……これからも世話をかけてあげようかな。

鷺島軍のお姉ちゃんとして。

ん？　私はまだいいや。

……今誰かが、最年長なのにって言ってた気がする。

落とし穴に落とすぞ……って、私は何を言ってるんだろうか。

疲れてるのかなぁ？

～暢介ｓｉｄｅ～

昨日は氷花から、変な質問をされたなぁ。

あれってどういう事だったんだろうか。

あと、時々久遠が俺の事をチラチラ見てるんだが……何か変なのか？

髪が爆発してる訳じゃなさそうなんだけど。

さて、俺達の前にはちょっと扱いづらいものがある。

「董卓をどうするかか……」

董卓は現在、俺達のいるこの城の中に居る訳だが、どうするべきかを考えていた。

当初は董卓を生まれ故郷に戻らせるべきかという話になったのだけれど。

現状で董卓の故郷へは遠いし、俺自身の支配地でも無い。

そこへ董卓を帰らせておしまいという訳にはいかない。

それに……

『私は、ここに残り鷺島様の進む道を見届けさせて頂けませんか』

と、董卓本人が言ってきた。

その強い決意の目を見て、断る訳にもいかない。

そして、今に至るわけだ。

「さて、どうする暢ちゃん？　流石に何もさせないで置いとく訳にはいかないよ。本人もそれは嫌がってるようですので」

「分かってる……だけど、何をさせていいのか分からないからなぁ」

現状では董卓に仕事を与えられていないので部屋に居るはずだ。

ただ、本人は力になりたいと言っているのだけど。

与えられる仕事が限られてしまう。

さてと……何か無いか。

「内政関係は文官達が処理できるし、武関係は董卓には無理だろうから……」

「外交で出す訳にもいかないからね。そもそも彼女は私達と同じ鷺島軍所属じゃないから」

そう、董卓の扱いはあくまで保護した人という扱い。
鷺島軍に所属している訳ではない。

なので、置ける範囲は限られている。

どうしようかと思っていた俺の頭にふと、ある事が浮かんできた。

「……あっ。そういえば、最近、街の人から何か要望が無かったっけ？」

「要望？　あぁ、動物関係のでしたね」

俺の問いに氷花が答える。

そう、最近、街中で野良猫や野良犬によって被害が起きているようだ。
まぁ、狙うのはあくまで食料品なんだけども、たまに猫同士や犬同士での喧嘩で色々と壊されているそうだ。

まだ人間に対しての被害は出ていないが、時間の問題かもしれない。
ただ、流石に兵士達で処分なんて強硬手段は取りたくは無い。

「うん。今はまだ子供とかに被害は無いけど……このまま放置は出来ないからさ」

「そうですね。ただ、それが董卓の事と関係が？」

董卓と動物、これが繋がらないので皆が首をかしげる。

「あぁ、そういう野良になっている動物をこちらで預かって見てはどうかと思ってね」

「預かるんですか？」

「うん。そして、世話をする事で動物達を人に慣れさせ、そして躾け、その後に街の人達の中で飼いたいという人がいればその人に譲るって具合にね」

要するに、動物の調教師という所なのだろうか。
実際にそういう職場に就職した友人がいないものでどういう事をしているかは分からない。

「その役目を董卓に任せると？」

「俺はそのつもりなんだ、最近だけど彼女が猫の世話をしてるのを見てね」

世話をされている猫がとても気持ちよさそうで董卓の傍を離れよ

うとしなかった。
完全に心を許している状態だったわけだ。
そういうのって才能だと思うんだ。

「ふむ……恐らく、董卓は断る事は無いと思いますが……そうなると場所と建物を建てる資材が必要になりますね」

場所、これは城内に建てるしかない。
董卓をあまり街に出すと、誰かに『董卓は生きている』みたいな噂を立てられてしまう恐れがあるからだ。

まぁ、他人の空似だろ？　って言えばいいんだけど。
ただ、そういう話になるのが嫌なので城内で探す様にする。

資材などは調達するしかなく、建物の見取図も専門家に頼まないといけない。

さぁ、やろうと言ってすぐに出来るのはあくまでゲームの世界……って最近はゲームでもすぐには出来ないか。
あとは……

「あぁ、預かる動物の種類も決めておかないと……猫と犬でいいかな」

猫や犬ならまだ可愛い。
これが虎とか来た日にはこっちも笑えないからな。

そもそも、董卓に万が一があってはいけないわけだし。

その後、董卓にこの話をすると快く引き受けてくれた。
最近まで君主としていた人が動物の世話を仕事にする人になるとは……
普通の人から見たら、信じられない様な光景なんだろうな。

でも、その後、小屋が完成し野良猫や野良犬が入ってくる事になるのだが。
董卓はそれらの動物達をしっかりを面倒を見て、彼女が世話をした動物達が街の人達の元で幸せに過ごせる様になっていくのは。
もう少し、先の話。

18話　久遠ちゃん、相談する（後書き）

大幅な書きなおして、ほぼかなり変わってしまいました。

さて、ハーレム関係ですが、それは無いという形をとりますね。
その方がいいかなと思いますし、ハーレムなんて書けませんし・ｗ・；

ただ、本編でそういう関係になるのは無いので。
拠点でそのあたりが書ければいいかなと。

拠点１　頑張れ久遠ちゃん（前書き）

拠点関係は、暢介×久遠の流れになります。
他の将は応援の形で出てきたりです。

間違っても久遠の邪魔をするわけではありません。
本人たちは「よかれと思って」やっているはずです。

拠点1　頑張れ久遠ちゃん

～久遠ｓｉｄｅ～

「だからね、暢ちゃんを手に入れる為には色々な技術が必要になると思うよ」

あの日、僕が氷花に相談してから氷花は僕の為に色々と助言をしてくれたりしている。
凄く感謝してるんだけど……

氷花ってそういう経験あるのかな？　でも、聞けないよね。
聞いて怒らせたら……また、胸を揉まれそうだし。

前の時は本当に痛かったからなぁ……

ちなみに、今、僕と氷花は仕事が一段落がついたので昼食を食べに食堂へ向かっている。

「聞いてる？」

「う、うん。聞いてるよ」

凄い世話をしてくれる氷花、でも……

（絶対楽しんでるよ～）

でも、後が怖いから言わない。
絶対言わないよ。

「そういえばさ、久遠って料理とか出来るの？」

「料理は……そこそこかな。実家に居る時に色々と教わったから」

料理は母上から教わって練習とかしていた。

本当は永遠が凄く上手だったから、実家に居て永遠がいたら頼んで作って貰ってたからなぁ。

そう言えば、そろそろ永遠も誰かに仕える頃だなぁ……

あっそうだ、実家に手紙送って仕えないかって仕官要請しようかな。

暢介も嫌って言わないだろうし……永遠も嫌って言わないだろうなぁ。

あの子、基本的に断る事しないし。

「う～ん、料理で暢ちゃんを落とすって手段もあるけど。それだと燈ちゃんぐらいの腕が無いと」

「無理無理！　燈ぐらいの腕ってあの子の腕はちょっとした料理人より上だよ」

「あ～久遠ちゃんも燈ちゃんの料理食べた事あるんだね。確かに、彼女の腕は確かだよね」

しかも……そこで氷花は一旦言葉をきる。

「そうなんだよね、未だに上達中って僕、信じられないよ」

恐らく、氷花の言おうとした事を先に言う。

「まぁ、作ってあげたい人がいるからだろうね。結構な期間、会って無かったらしいから」

そう、現在燈は母親と一緒に暮らしている。

連合終了後、燈と数名の兵士達を燈の実家に向かわせて母親を連れて来る事になった。

北郷の言ってた事が実行される訳にもいかないからねぇ。

結果としては母親は了承して南郷へと来てくれた。

いやぁ、断られたらどうしようかと思ってたけど、成功して良かった。

それから南郷に来た母親と燈は一緒に生活している。

そこで毎日料理を作っている様なんだけど……その料理の腕がとてつもない。

一番凄いのはお菓子作りでそれは商品として売れば即完売は間違いないと思う。

財政に悩んだら売って稼ごうかと本気に思ったぐらいだ。

聞けば、劉備軍にいる軍師の2人に料理を教えていたらしい。

そして今でも成長中……もう、料理で天下統一してみてはいかがですかと言いたい。

「作ってあげたい人がいる……おっ、私閃いたかも」

隣にいる氷花が何やら閃いたと言っているが嫌な予感しかない。

「……何を閃いたの」

「久遠ちゃんが暢ちゃんに、『僕の作る料理を毎日食べてほ』「却下！」え～何で」

「何でって、そんな恥ずかしい事出来るはずがないでしょ」

やっぱりロクな事を閃いてなかった。

そんな事……僕が暢介に……うわぁ、想像出来ないよぉ。

「久遠ちゃん、顔真っ赤っかだねぇ。想像しちゃったんだね」

「そ、そんな事は……って、あれ？」

視線の先の出来事に思わず足を止める。

僕の視線の先、食堂のある所から暢介と燈が一緒に出てきた。

２人とも笑顔で……

「ん？　どうしたの……あら」

氷花も僕の視線の先を見て、２人を見つける。

暢介が視界から消えたのを確認した僕と氷花は燈の所へと進む。

燈は再び、食堂へ入ろうとしていた。

「ちょっと燈」

入ろうとしていた燈を呼びとめる。
声に気付いた燈は僕の方を見る。

「あっ、久遠さん……それに、氷花さんもどうしたんですか？」

「いやぁ昼食取りに来たんだけど燈ちゃんが暢ちゃんと一緒に居たみたいだから何してるのかな～って」

こういう時に氷花がいると凄く助かる。
凄く自然な感じで会話をするから……

「あぁ、実は食堂で料理を作ってくれる人が急病で休んでまして」

聞くと、食堂で作ってくれる人がいなかったのだが。
燈は自分で作れるので厨房を借りて料理をしていたらしい。

そこに暢介が来て、自分の分も頼めないかと燈に頼んで作ってもらったらしい。
そして、その料理の出来は良くて暢介は満足したらしい。

確か、今まで暢介は燈の料理は食べた経験が無かった様に思うんだけど。

「へぇ～燈ちゃんの料理をねぇ……」

そう言って氷花は僕を見る。
今は食堂内で椅子に座っている。

「はい。暢介様に満足いく料理が出来て良かったと思います」

そう、笑顔で言う燈……ん？　ちょっと待って……

今何か聞いた事ない名称が出てきた様な……

確か、燈が暢介を呼ぶ時は『鷺島様』だった気がするんだけど。

氷花も表情が変わっている。

「え～っと……燈ちゃん。いつから暢ちゃんの事を暢介様って呼ぶ様になったの？」

「え？　あぁ、これは最近なんですが」

聞けば、『付き合いも長いし、そろそろ鷺島様っての変えてほしいなぁ』と暢介が言ったらしい。

それに燈が『では、暢介様とお呼びいたします』という事らしい。

ちなみに、葵や命も既に『暢介』もしくは『暢介様』と呼んでいるらしい。

……知らなかった

「お二人が早い時期から名前でお呼びだったので、私や葵さん達が鷺島様と呼んでいるのが片っ苦しかったらしいです」

「……」

確かに、僕や氷花は最初から『暢介』と『暢ちゃん』と気軽に呼んでいた。

……軍議の時もそう呼んでたような……今思えば、大変な事だよね。

「それより、久遠さん。表情が凄く暗いんですが、何かあったんですか？」

燈が心配そうな表情でこちらを見る。

ちなみに彼女はいつも付けている帽子を今は外している。

「まぁ、何かあったならその原因は……燈ちゃんなんだよね」

そう、氷花が言う。

「ふぇ？　わ、私が何かやりましたか？」

燈が慌てる。

自分の取った何かしらの行動が僕を落ち込ませたという事を言われたからだ。

「久遠さんが暢介様の事を……なるほど」

なぜか、燈にまで僕が暢介をどう思っているかが知られてしまった。

本当はこういう気持ちは一人で持っておくべきなんだろうけどなぁ……

「つまり、私の料理を食べた事で暢介様の中での味の基準が上がってしまったと思ってるんですね」

その言葉に頷く。

思いたくは無いけど、例えば、何かの機会に暢介に料理を食べてもらうとしよう。
その際に燈と同じ料理を出して『燈の作った方がおいしかったような』と言われてしまったら……
僕は燈と比べたら全然料理の腕は下の方だから。

……あぁ、でも暢介はそんな事言わないかもしれない。
でも、そう思われたくない……自分でも、何てめんどくさい性格なのかと思ってしまう。

「手っ取り早いのは、明日の昼食を久遠ちゃんが燈ちゃんと同じものを作れば分かる事なんだけどね」

「それは、そうだけど……」

そう言って考え込む僕。
さっさと、『よし、やるぞ！』って言えればいいのに……

そう考えている僕に燈が声をかける。

「私は、母に喜んでもらいたくて料理を学びました」

「燈？」

「母に美味しかったよ、そう言われたくて……久遠さんは今までそれがありましたか？」

「……無いね。僕は、ただ教わっていただけだから」

「それでも構わないんですが……本当に暢介様に美味しいと言ってもらう為には、彼の為に作ると思う事です」

燈の顔を見る。

真剣そのもの、まるで戦場にいるみたいだ。

「それだけで変わる？」

「だいぶ変わると思いますよ。心が入っている事は最大の調味料だって……私に料理を教えてくれた人の言葉です」

「心か……」

「それがあれば、暢介様に美味しいと言ってもらえると思いますよ」

そう言って燈は笑みを浮かべる。

心を込めろか……

「分かった。やってみるよ」

「おっ、やるんだね久遠ちゃん」

氷花の言葉に頷く。

絶対に暢介に美味しいって言わせるんだ……あっ、そう言えば。

「ところで燈、今日は何を作ったの？」

そもそも、その料理を作れないと意味が無いんだった。

～暢介ｓｉｄｅ～

今日も食堂のおばさんは休みか……大丈夫なのかなぁ。

仕事中の際に、氷花からその情報を聞いた俺。

昨日は燈がいたから昼食は取れたからなぁ……今日は街に出るか。

そんな事を考えながら歩を進めていた俺。

食堂の前を通った際に美味しそうな匂いがしたのでふと足を止める。

（あれ？　おばさんいないんだよな？）

そう思って食堂の中を覗いてみると、厨房に立っている見慣れた銀髪。

（久遠？　あいつが作ってるのか）

久遠が料理をしている所は初めて見た様な気がする。

久遠の家に居る時は司馬孚が作ってくれていたし、そもそも久遠は試験で出ていたし。

旅に出てからも基本は宿に着ける工程を組んでくれてた為か、そういう機会はなかった。

調理が終わったのか、料理の乗った皿を持って厨房を出てきた久

遠と目が合う。

「あっ、暢介。どうしたの？」

何か、久遠の様子がいつもと違う様な……まぁ、気のせいかもしれんが。

暑い厨房にいたからだろう、顔が少し赤い感じがするけど。

「いや、昼食を食べに街に行こうと思ってたんだけど」

久遠の持っている皿には湯気が立っている炒飯が見える。

「食堂のおばさんが今日、いないって聞いてたんだけど。美味しい匂いがして」

「覗いてみたら、僕がいたと……」

そう言われて頷く。

「久遠が料理してる所、初めて見たからさ」

「ん？　僕が料理してたらおかしいって？」

少しムッとする久遠。

俺は、首を左右に振る。

「いやいや、そういう意味じゃなくて……」

その先を言おうとした所で。

グー！　とお腹が鳴ってしまった。
まずい、想像以上に空腹状態らしい……っていうか、凄く恥ずかしいぞ俺。

「えっと……た、食べますか？」

「え？」

「ですから、これを食べないかと聞いてるんです」

そう言ってくる久遠。
あら？　また顔が少し赤くなった気がする。

「いやでも……それって久遠が自分で食べる為に作ったんだろ」

「そうですけど、また作ればいいんです。それに、今から街に行ってもすぐには食べられないでしょ」

確かに、今から街に出て店を選んで入店して品物頼んで出てくるまで考えると結構かかる気がする。

「……う～ん」

「何で悩むの！　食べるのか食べないのかはっきりして！」

「は、はい。食べます」

久遠の剣幕に押されて俺は急いで席に着く。
目の前のテーブルに皿が置かれる。

「ぼ、僕はもう1個作るから先に食べててもいいよ」

そう言うと久遠は厨房に戻って行った。

「御馳走様でした。美味しかったよ」

「そ、そうですか……わざわざ待たなくても良かったのに。冷めてたんじゃないですか？」

そう、俺は久遠が自分の分を作り終えて席に着くまで待っていた。

その為に炒飯は少し冷えていた。

「いや、どうせなら一緒に食べる方がいいかなと思ってね。それに、冷めてても十分美味しかったよ」

「そ、そうですか……良かった」

安堵の表情を浮かべる久遠。

ただ、最後の方は聞こえなかったけど。

だけど、久遠って本当に凄いよなぁ。

頭はいいし、剣術もそれなりに使いこなせて。

料理も出来て、掃除は前に久遠の部屋を訪ねた時は塵一つない状態になってたし。

これで後は洗濯とかも完璧なら非の打ち所が無いよなぁ。

「あ、あの暢介」

久遠の声に俺は考えを一旦止める。

「ん？　どうした？」

「燈に聞いたんですが、昨日、燈の料理を食べたそうですね」

「あぁ、昨日も食堂のおばさんがいなくてね。で、たまたま燈が作ってくれるって言ってくれたんだ」

あれ？　そう言えば、昨日、燈が作ったのも炒飯だったような。偶然の一致ってやつかな。

「そ、その燈と比べて……ぼ、僕の料理はどうだったかなぁって……」

「燈と比べて？」

燈の炒飯と久遠の炒飯……食べてみてどっちが美味しかったかって事か？

特に考えて無かったな……そもそも、人の作った料理を比べるほど、俺は料理を知ってる訳じゃないからな。

自称食通って訳でもない。

だから……

「俺に人の料理を比べる事なんて出来ないよ。俺は食に精通してる訳でもないから」

「そ、そうなんですか」

「うん。2人とも凄く美味しい料理を作ってくれたし、俺は感謝してるよ」

おかげで、食事代が浮いたしなと笑いながら言う。

「はぁ……」

久遠がため息をつく。

あれ？　俺なんか呆れさせる様な事、言ったか？

「いえ……ちょっと納得してただけです。これが暢介なんだって」

「？」

「気にしないでください。さてと……僕は食器洗ってくるから。暢介は仕事に戻った方がいいよ」

そう言って、席を立つ久遠。

俺も立ちあがると久遠の左手を掴む。

「え？　よ、暢介？」

久遠が驚きの表情で見る。

「えっとな。洗い物は俺がやっとくから、久遠がしなくてもいいよ」

「え？　でも、料理を作ったからには最後までやるよ」

「いや、美味しい物を食べさせてもらったからさ。さめて食器洗

いぐらいはしておきたいんだ」

美味しい物を食べて、はいさよならって言うのは駄目だ。
せめて食器洗いぐらいはお返しでしておきたいからな。

「べ、別にそんな事をしてほしくて料理を作った訳じゃ……」

初めての対応なのか久遠も焦っている様だ。

「任せろ、俺は実家では食器洗いは一番うまかったんだ」

これ本当だから。

「えっと……それじゃあ、お願いしようかな」

久遠が折れる形になり、俺が皿を持って流し台に向かう。
そして食器を洗っているわけだが。

「うわぁ～暢介って本当に食器洗い得意なんだね」

後ろから久遠が見ている。
あの～仕事に戻るわけじゃないのね？

「まぁね……あっそうだ、久遠」

「ん？　何？」

「また機会があったらでいいんだけど。また、飯を食べさせてくれないかな」

何気なく言った、また食べたいなという言葉。
その言葉に久遠は一瞬で、顔を真っ赤にした。
そして……

「えっと……僕の料理で良かったら」

と、俯き加減で答えるのであった。

～氷花ｓｉｄｅ～（番外）

私は今、食堂の入口から隠れて2人を見ている。
いい雰囲気な2人を見ながら私は、こう思った。

（いけいけ久遠ちゃん！　今なら告白もいけるはずだ！）

ただ、そう思いながらも久遠ちゃんの性格を考えると告白はなさそうだ。
……しかし……

「苦しいなぁ……」

私はお腹を押さえる。
凄い満腹感で動くのも苦しい。

全ての原因は目の前の久遠ちゃんだ。

今日の昼食で暢ちゃんに久遠ちゃんの料理を食べてもらおうという事で。

午前中に『食堂のおばさんが今日も休みらしい』という情報を言っておいた。

これで、暢ちゃんは今日も街に行こうとするはずだ。
燈ちゃんと同じ様に匂いで引き寄せるわけだ。
条件は全て同じにという久遠ちゃんの謎の対抗心な訳だが。

ただし、いつ暢ちゃんが来るか分からないので久遠ちゃんは何度か料理を作っていた。
それが無駄になって捨てるのも何なので。

私が全部処理しました。
……今日は夜食べなくてもいいや……というかこれ消化するのかな。

せめてこの栄養分が胸に行ってくれればなぁ……はぁ。

そう、ため息をつく私だった。

拠点1　頑張れ久遠ちゃん（後書き）

この拠点が終わる時が、成立する時なのでしょうか。

まぁ、この拠点は、たま～にやるぐらいなので注意を。

さて、次はオリキャラ1名様追加となるかと思います。

１９話　人材不足（前書き）

今回の作品で、オリキャラ３名登場ですね。

１名（永遠）は大分前にちょろっと出てましたが。

これもある程度集まったら新しくオリキャラ紹介作りますね

１９話　人材不足

～暢介ｓｉｄｅ～

連合が終了し、南郷に戻った後の俺達は内政に重点を置いて活動をしていた。

まず取りかかったのは、領内の道の整備。
物の流れをスムーズにする為に行っているのだが。

分かっていた事だけど、人員とお金が飛ぶ飛ぶ。
削れる所は無いかと、久遠達は文官を巻き込んで調査をしている。

……流石に、この時代にアスファルトなんかある訳ないしな。
原料見つけても俺には何を出来ないけどさ……

さて、領内の街や村などに転勤状態になっている文官達からも手紙が届いている。
中身は『ここまで復興が完了しました』とか『指導している○○の様子』などが記されている。

復興に関しては、文官達の力を信じているので心配はしていない。
指導に関しても、しっかりと次の世代が育っていれば安泰なのでいいのだが。

中には手紙の内容が嘘の者も存在している可能性があるので。
そこには命の育てている間諜を訓練という形で送り込んでいる。

もしも、内容と違う。

または、私腹を肥やしているならば報告が来る様になっている。
既に何人かが報告を受けて処分している。

送る時は、理想があったはずなんだが……誘惑ってのはどこにでもあるって事か。

さて、そんな時に俺達は少しの問題にぶつかっていた。

「将の数か……」

「はい。武将に関して、私と命しかいない状態では、少なすぎると思います」

軍議の際に葵が発言した『将の数』。
これは、俺も思っていた事だ。

現状では武将と言われるのは2人。
これでは少なすぎる。

小規模な戦闘ならいいが、これが大規模になると間違いなく足りない。
関係ないけど、一騎打ち出来る将も命しかいない現状。

「確かに、将の数は俺も心配していたんだけど……」

「誰も来ないからねぇ……これじゃあ、増やす以前の問題だよ」

俺の言葉に続けて久遠が繋ぐ。

「まぁ、現状は私と命で上手くやりますが……なるべく早めに武将をお願いします」

そう、葵が言う。

２人にかかるウエイトが凄いからなぁ……楽にしてあげたいのだが。

「そういえば、久遠ちゃんの妹ちゃんがここに向かってるんだよね？　武はどうなの？」

思い出したように氷花が久遠に向かって言う。

その言葉に久遠は首を横に振る。

「永遠は武はからっきしなんだよね……そもそも、戦場に出す様な子じゃないから」

そう言うと、氷花は「そっか」と言って考え込む。

久遠の妹、司馬孚が現在この城に向かってきている。

ん？……ちょっと待てよ。

「なぁ久遠。司馬孚って武芸の心得はあるんだよな？」

「護身程度はね、ただ戦で使える様なものじゃないけど」

「いや、賊の集団に出くわしたら一人じゃ危ないんじゃないかな？」

そうだ、司馬孚の家からここまで結構な距離がある。
それを1人で歩く、もしくは馬でもいいが賊に会った時に大丈夫なのかと思っていた。

各地の王によって治安向上は行われているが今でも賊は出てきている。
やはり、簡単に金や物が手に入ると思い行動している様だが。

捕まった代償は自分の命の訳だが。
（俺が捕まる訳ないじゃん）みたいな感じの根拠のない自信で自滅するんだろうな。

「流石に一人は無いと思う。方向が同じなら商人と一緒に向かってもいいだろうから」

「そうですね。私も商人の人と方向が一緒で乗せてもらってましたから」

久遠の言葉に葵も続く。
そうか、それならいいんだけどさ。

「兎に角、司馬孚は内政担当になるだろうから。武将に関しては立て札などで呼びかけておこう」

俺の言葉に皆が頷く。

誰でもいいって訳でもないが、武将が欲しい所だなぁ。
いや本当に。

～？ｓｉｄｅ～

「へぇ～嬢ちゃんの姉貴があの司馬懿なのかい？」

そう言って俺は隣を歩く少女を見る。

少女は笑み浮かべると頷く。

お嬢ちゃん、司馬孚と出会ったのは、ついさっきまでいた街の宿屋。

南郷郡に向かおうとしていた所、宿屋の亭主から。

『あんた南郷郡に行くって言ってたよな。この子も南郷郡に行きたいらしいから良かったら連れて行ってくれないか』

と頼まれた訳だ。

いやいや、俺は子守りをするつもりは無いんだがな。

ってその時は断ろうとしたんだが……司馬孚を見ると断るのが悪いと思ってしまった。

小柄で可愛らしい雰囲気。

髪は水色で腰まで伸ばしそれを髪留めで止めている。

聞けば、姉を真似ているらしい。

そういう子に『お願いできませんか』と言われて『無理だな』とは言いづらい。

なので『分かったよ』と言うしかなかった。

やれやれ、俺はもうちょっと大人な女性が好きなんだがね。

目的地へと向かう最中、司馬孚と話していると色々な事が分かった。

どうやら、彼女は南郷群を治める鷺島暢介の右腕と言われる司馬懿の妹らしい。

確か、司馬懿は河内郡の出身だったよなぁ。

河内郡にいる司馬家……すげぇ名門の家柄じゃないか……

そんな所の子が1人で行動してたのか……危ないじゃないか。

いや待てよ……もしかしたらこの子、武芸に長けているのか？

……いや、それはねぇな。

この子からは武に長けているという感じがしない。

せいぜい、護身程度だろう……

もし、この子が武芸に長けていたら俺の目が節穴ってこったな。

「そういえば、あなたの武器は珍しいものですね」

司馬孚に話しかけられた俺は自分の得物を見る。

他人と武器が似てるのが嫌だなぁと考えに考えて作ってもらったものだ。

まぁ、大陸中探せば、どっかで似た様なのがあるだろうなって思うけどさ。

俺の身長をゆうに超える高さ、そして重さも結構ある。

槍の穂先に斧頭、反対側には突起物をつけておいた。

これで斬る、突く、突起物に引っかける、叩くという行為が可能となっている。

おかげでこいつの使用用途は物凄く多い。
それこそ、相手を引っかけて馬から引き摺り降ろしたり、足を引っかけることだってできる。
やろうと思えば、相手の兜や鎧を破壊する事だって出来る。

ただ、重いんだこれ……だから使いこなすのに大分時間が掛っちまったけどな……

「あぁ、こいつは斧槍って言ってな。俺が作らせたものなんだ」

「作らせた？　と言う事は、あなただけの武器なんですね」

そう言うと司馬孚は興味深く俺の武器を見る。
まぁ、珍しいからなこれ。

「あぁそうなるな。あと、斧槍ってのも俺がつけたんだけどな」

これを作った際に何て名前にしようかなと考えた事があった。
色々浮かんだが、しっくりこない中でふと浮かんだのが『斧槍』だった。

「いいですね、自分だけの武器で名前も自分が付けるというのは」

「まぁな。ただ、大陸中探したら似た様なの使ってる奴いそうだけどな」

似てるのは探したら出てくるもんさ。

問題はそれを扱う人間の技量ってやつさ。
違うかい？

その後、司馬孚と歩き続け南郷に到着。
司馬孚は既に話が付いているのか、先に城へと入って行ってしまった。

ちなみに俺は、街の宿屋へ向かっている。
……うん、入れなかったんだ。

まぁ、司馬孚と違い、鷺島軍内で俺の知り合いがいる訳じゃない。
すんなり入れる方がどうかと思うけどな。

知り合い関係なら……曹操の所だろうが、あそこは男性にはちと厳しい環境らしい。

何でも、猫耳軍師の言葉責めが凄まじいらしい。
……中にはそれがいいって奴もいるんだがな、俺は違うぞ。

後は、百合百合しい雰囲気の所って噂もあるが……霞の奴、大丈夫だろうか……
ちと心配してしまう。

どうにか、仕官させてくれないか。
そう、門番に言うと、明日、仕官希望者を集めての試験があるとの事。

勿論、参加する旨を伝えると、一枚の紙を手渡された。

何でも、受験票というやつらしく、明日はこれを持ってきてくれと言われた。

忘れたら資格が無くなるらしいから絶対に忘れない様にと何度も念を押された。

これは過去に、一悶着あったと考えるべきだな。

そう思いながら歩を進め、ようやく宿屋に到着した。

そういえば、部屋開いてるのか？　同じ様に仕官希望者でもう満室って事は……

『申し訳ありませんが、満室でして』

嫌な予想ってのは当たるもんだな。

いや待て、まだ慌てる様な時じゃない。

これぐらいの街だ、何も宿屋が一軒な訳は無いだろうから……大丈夫だよな。

そう考え、やっと部屋の空いてる宿屋を見つけたのは陽も傾きかけた頃。

ここに着いた時ってまだ、陽は頭上にあったはずなんだが……

ま、まぁとにかく、休めるんだから体調を整えようじゃないか。

そして明日の試験でしっかりと結果を残して採用されるようにしないとな。

流石に、職無しは辛いんでね。

～？ｓｉｄｅ～

「……やっと着いた」

陽も落ちており、空は暗くなっているけどこの街はまだ明るい。
実家を出て徒歩だったり、同じ方向だった商人などと一緒に行動しやっと到着した。

「……ここなら」

ここは将の数が少なく、困っている状態だと言う事を聞いた。
ならば、採用される可能性も高いのではないか。
そう思い、ここまでやってきた。

別の所の試験に行った際に私は全く喋れなかった。
いや、喋ろうとしたのだけど……上手く話せずに言葉はつっかえたりして。

焦る余りに更に深みにはまるという結果になってしまった。

いつも、こんな形で試験に落ちてしまう。
筆記や実技はいいのだが……面接になればその失敗を思い出してしまう。

「今回は……ちゃんと……」

試験は明日だ、それに備えて今日は休もう。

そう考え、私は宿屋へ向かった。

……そういえば、部屋開いてるのかな？

１９話　人材不足（後書き）

さて、高順こと駿の武器ですが。

斧槍と日本語訳されるんですが「ハルバート」の事です。

一応スペックとしては。

・高さ＝２．５ｍ
・重さ＝３ｋｇ

という所です。

本当はこの時代の武器がいいのでしょうが。

あんまり私自身が武器に詳しくなかったので。

次回でもう１名加入です。

20話　求む人材（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。
色々と私事があった為です。

今後も、少し遅れながらの更新になるかと思います。

20話　求む人材

～久遠ｓｉｄｅ～

「……なんで、こういう時は人数多いんだろ」

そう言って、僕は今回の仕官試験の参加者の名簿を見る。

当日参加も大丈夫だから、もっと増えそうな予感がするよ。

やっぱり、立て札を立てる事で来やすくなるのかな。

普段からいつでも来てくださいって言う方が……遠慮するって事か？

そんな事を言いながら名簿の名前を見ていく。

現在、部屋には僕と燈、そして氷花が名簿を見ている。

３人で見てるって事で人数の事は察してほしい。

「……ん？」

氷花の声が聞こえ、僕は視線を移す。

「どうしたんですか？　氷花さん」

燈も氷花を見ながら、話しかける。

「いや……ちょっと気になる名前を見つけてね。彼なんだけど」

そう言って氷花は名簿を机の真ん中に置く、そしてその人物の所

を指さす。

そこには”高順”と書かれていた。

横の性別の欄を見ると”男”となっていた。

「高順……どっかで聞いたことあるような」

そう僕は呟く。

知らない名前では無いんだけど。

……あっ。

「ひょっとして……陥陣営の」

その言葉に氷花は名簿を取ると頷く。

陥陣営。

董卓軍において、狙った陣は確実に陥落させていた部隊。

その部隊の存在は、敵軍に恐怖を味方には頼もしく見えていたそうだ。

……確か、その部隊を率いていた将が高順という名だったはずだ。

思い出せてよかった……というより、何で忘れるかな。

「そんな人が、参加してるなんて」

燈が信じられないといった表情で呟く。

「……何で、ここに来たのかな?」

「？」

「私達は反董卓連合に参加していた……彼にとって前の主君を討った連合のね」

「あっ……そうか」

董卓は自害しているという情報が流れている現状。

真実を知っているのは、僕達と北郷……そう言えば、あいつは劉備軍の人達に教えているのだろうか。

まぁ、流石に賈駆を隠し通すのは無理だろうから。

話してるはずだよね、僕らの方に董卓がいるって事も。

高順の立場からすれば、何の罪の無い董卓がいきなり悪者に仕立て上げられ。

攻められ、最後には自害してしまったという認識でしかないはずだ。

「ひょっとして、復讐？」

燈の言葉に氷花は首を横に振る。

「復讐が目的なら、標的は暢ちゃんじゃなくて袁紹になるはずでしょう」

それはそうだ、あの連合の総大将は袁紹。

暢介が標的になる理由が見つからない。

「それに連合参加の者を殺せば、他の勢力は警戒するでしょう……それなら、総大将を殺して終わればいい」

「なら……高順は何故ここに？」

「さてね……実際、面接の時に聞くしかないんじゃない？　担当は私だし……たまたま同じ名前って可能性もあるし」

そう言って氷花は、再び名簿に視線を落とす。

僕と燈も視線を名簿に移す。

もしかしたら、大物を見落としてる可能性があるんじゃないかと思いながら。

結果を言えば、高順以外に名の知れた人物はいなかった。

ただ……僕の名簿に一人、気になった人物がいた。

面識も無いし、名前を聞いた事も無い人物のはずなんだけど……この、？艾という人物に強い興味がある……何でだろ？

～高順ｓｉｄｅ～

……おいおい、人集まりすぎだろ。

男女問わず、かなりの人数が集まっている。

聞けば、当日参加も可能だったらしくもう少し増えるかもしれないという事。

……大丈夫かねぇ、俺。

試験内容は、弓・馬術・模擬戦・筆記・面接という順番らしい。

ちょっと待て、これだけの人数を一日で捌けるのか？
普通に考えれば無理だろうから……2～3日はかかると思っていいだろうな。

金、足りたっけか？
ちょっと心もとないなぁ……食費削るか……

何て事を考えながら、周りの視線に気づく。
皆、俺の武器を見ている様だ……まぁ、目立つからなぁこれ。

ただし、視線の中には（目立つ為か？）みたいな感じのもありそうだな。
まぁ……その考えが当たりかどうかは模擬戦で分かるだろ。

……結果から言えば、弓も馬術も満足いく結果を出す事は出来た。
そりゃあ……つい最近まで戦場にいたからな。

弓も撃ったし、馬だって乗っていたしな。
模擬戦は抽選で選ばれた人物と行う形式で行われた。

なるべく強い奴と戦いたいなぁと思っていたのだが。

……全力出す前に終わってしまいましたよ。

やっぱり……霞や華雄なんかと模擬戦してれば力はつくか……あの2人に勝った事ねぇけど

恋に至っては、瞬殺なんだけどな俺……

まぁ……あの辺は別格という事にしておこう。

そう思いながら、他の人物の模擬戦を見ていて1人の女性に目がいった。

背は高く、髪は肩ぐらいまで伸ばしており色は茶色。

全体的に体型はスラッとしている。

（おぉ～雰囲気的に凄く大人な感じがするなぁ……いかん。俺の好みだ）

俺の好みの女性のど真ん中って感じがするなぁ。

俺って大人な女性が大好きなんだよ、ついでに髪もあれぐらいの長さがいい。

あっ、別に見た目と好みがど真ん中って事で注目してる訳じゃねぇよ。

（あの子……相当やるな。得物は……槍か？　見た事ない形だな……）

彼女の持つ槍と思われる物。

確かに槍の形はしているのだが、違うのは先端が十字の形をしている事だろうか。

穂先の左右に短く、上向きの刃が付いている。

何と言うか……鳥が飛び立つ際に羽を広げている様に見えるなぁ。

それを彼女は上手に使いこなし、相手を翻弄していた。

相手との距離で柄を持つ場所を変えながら戦っている。

そうして相手を追い詰め、撃破した。

（……あの子、いい将になるだろうな……）

そう思いながら、再び彼女を見る。

勝てた事に安心したのか、彼女はホッとした表情を浮かべていた。

「私が聞きたい事は1つだけです。あなたは、董卓軍に所属していた高順殿でしょうか？」

筆記を終えて、面接に入っての面接官の一言目は、これだった。

いきなり聞いてくるか、まぁ、本名書けば誰かが気付くわな。

偽者だったりする可能性も考えてるんだろうけど……ここで嘘をつく必要も無いな。

「……ええ。確かに私は董卓軍にいた高順です」

「陥陣営と呼ばれている」

「そうです。いつの間にかそう呼ばれていましたね」

陥陣営、俺の率いていた部隊が確実に敵陣を落とす事からそう呼ばれていた。

別に悪い気はしなかった。

ただ、そう呼ばれたからにはその名に恥じない様に訓練もしていたんだが。

……今回の反董卓連合戦では敵本陣を落とす事は叶わなかった。

いや、いい所までは行ったんだ……総大将めがけて弓も撃てて後はそれが当たるだけだったのに。

……何で、あいつは馬から落ちたんだよ！

完璧な軌道を描いていたのに……確かに敵総大将は悪運が強いって噂は聞いていたが予想以上だった。

その後は押し返されて離脱し、バラバラだった兵士達を整えた所で連合軍が洛陽制圧、月様と詠は自害したという知らせ。

それを聞き、俺は部隊を解散させた、維持する必要は無くなった訳だからな。

思い思いの場所へ帰る兵士達を見送って、俺は新しい主を見つける旅に出る事にした。

ん？　罪の無い主を殺した連合に復讐しないのかって？

まぁ、確かにそれは考えはしたんだがな……あくまで考える所で止めているんだ。

今の段階で、入念に準備をして連合の総大将であった袁紹を討つ

事を決めたとしてだ。
……成功するかどうかは、殆ど可能性は無いだろう。
袁紹自身の悪運の強さもあるだろうし、配下の連中も警戒しているだろうからな。
それに、俺はちと名前が売れすぎてしまっている。
名前を変えた所で、袁紹軍と戦っていたのは俺の部隊だ。
何人かの将ともぶつかっていたし、顔を覚えられている可能性もある。
……後は、月様が霊みたいにいるなら『仇討ちなどしないでください』と言ってきそうだ。
あの人は優しすぎる……でも、それが良かったんだがね。
復讐をするとか、しないとか言っても腹は減るしお金は無くなっていく。
流石に飢え死なんてのは勘弁願いたいものだから、商人の護衛やら村を襲う賊の討伐などで金を稼いでいた。
ただ、いつまでもこうしているのも何なのでどこかに仕官しようと思い各地を回っていた。
曹操の所は以前言った様に、男にはちと出世しにくい環境。
劉備軍は……まぁ、なんだ。
行ってみたんだが……「将は十分そろっている」なんて事を言われて終了。
いやぁ……噂だと、足りないって話だったのになぁ。
他の勢力に行っても、新参者には辛そうな感じが見受けられた。

……と、ここでもう一人の天の御使いの存在を思い出した俺は。
とりあえず向かってみるかと思い、移動をしていた訳だ。

噂では将不足に悩んでいるという話も聞いたからな。
こいつは軍功稼ぎも上手く行けそうな気もしたしな。

途中で司馬孚と一緒に向かった訳だが。

あ、別に俺は仕えるなら連合にいたとかそういうのは無視しておく。
とりあえずは、自分の力が発揮できて更に、将として重宝してくれる場所。

そんな所だろうか。

「安心してください。私は、以前の主を討った連合に復讐したくてここに来た訳じゃない」

大体、復讐するなら総大将の元に行きますよ。
そう、俺は付け加えた。

「確かにそうね……正直に言えば、あなたほどの将。試験無しで採用すべきなんでしょうけど」

そう言って面接官は視線を落とす。

まぁ、しょうがないだろうな。
反董卓連合に参加していた鷺島軍に董卓軍に所属していた将が仕官しに来た。

何かあるんじゃないかと思うのは当然だわな。

「いえ、私としては他の受験者と同じ立場でやらせていただけて良かったです。こういう体験はしておいて損は無いでしょう」

そう言うと面接官は視線を俺の顔に向ける。

「本当にそう思ってる？」

「思ってますよ」

「本当は、『ちっ、こんな事しなくても俺様の実力分かってんだろうが』って思ってるんじゃ」

「思って無いから、っていうか俺はどんな風に見られて……あっ」

い、いかん、素の自分に戻っちまった。

これじゃあ、面接官に悪印象が。

「変な事言ったのは私の方なので、申し訳ありません」

……って謝られたよ。

俺は何も言わずに黙っていたので、面接官が続けて話す。

「あなたに関しては、採用の方向に行くかと思いますが、一つ約束してください」

「約束？」

「はい。あなたが本当に鷺島様の命を狙わないという事を……申

し訳無いですがね」

なるほど、信用していないって事か。

まぁ、適当に連合参加者なら誰もいいから復讐って事でここに来た可能性もあるよなぁ。

曹操や孫策は武があるし、それに長けた将も持っている。

劉備自身に武は無いが……武に長けている将はいるらしいからな。

袁紹はあの悪運で何でもかわしてきそうだし。

……そう考えると、狙いやすいのはここか？　後は、袁術ぐらいか？

いや、ここには華雄と互角にうちあった将がいるはずだよなぁ。

って事は、一番狙えるのは袁術か……まぁ、あそこには興味は元々無かったがね。

別にそう思ってきた訳じゃないんだが……まぁ、約束はしておこうか。

せっかく、仕える先が見つかりそうだからな。

「あぁ、俺は鷺島様の命を狙う気は無いよ。この斧槍に誓って……ってあれ？」

俺の横にあるはずの斧槍が……無い。

無くした？　そんな訳無いだろ、どうやったらあんな武器を無くすんだよ。

……あっ。

武器は外に置いておく様に言われて置いてたんだ。

「え～っと……外に置いてある斧槍に誓って……」

微妙に締まらない展開だなぁ……

まぁ、後で命にかけてもって言いなおしたからいいとしようか。

～久遠ｓｉｄｅ～

「……」

多分、今頃氷花は高順と面接中だろう。

そんな中で僕は？艾と面接を行っていた。

「……」

何と言うか、空気が重いよ。

まぁ、原因となっているのは目の前の？艾なんだけど。

彼女自身の成績は優秀で、武官でも文官でもどちらでも可能な評価が出来る。

なので、この面接も形式だけで後は採用に持っていくつもりだったんだけど。

「……」

彼女は最初の挨拶で少し言葉に詰まったのだが。

それに焦ったのか彼女は少しだけ早口になったんだけれど、悪循

環。

再び詰まって、更に焦っての繰り返しで。
それに伴ってか彼女は自分の目を擦ったり、瞬きの回数が増えている。

（変に意識してるのかな？）

面接で全てが決まるって感じの考え方をしてて、出だしで躓いた事で焦っているのか。
そう思った僕は。

「？艾さん、少し世間話をしませんか」

「は、は、話ですか」

？艾の言葉に頷く。

「そう、？艾さんの生まれた所の話などをしましょう」

「は、はぁ……」

そう言って、僕は？艾と話を始めた。
何でもない世間話。

ただ、？艾の口調は先ほどまでとは違い全く詰まっていない。
先ほどまであった目を擦ったり、瞬きも見られない。

（……ふむ。緊張してたから？）

という事でひとまず納得しておいた僕。

とりあえず、？艾……彼女は、採用という運びにしておこう。

何か、凄く気になる子だしね。

～暢介ｓｉｄｅ～

今回の試験で、採用の運びとなったのは高順さんと？艾さんの２名。

今、２人は氷花達と真名の交換をしている。

いやぁ……男性の将ってすごく珍しいよなぁ……しかも、董卓軍の所属だったらしい。

「……」

「どうしたんですか暢介？」

黙っている俺に久遠が話しかける。

既に久遠は２人と真名を交換し終えて俺の横に移動していた。

「いや、駿に月の事を教えた方がいいのかなって」

「あぁ……」

駿は高順の真名だ。

元々は月の元にいたのだから、月が無事だという事は伝えるべきなんだろうけど。

「どうする？」

「まぁ……ここに居れば、いつかは分かる事ですから」

確かに、ここに駿がいればいつかは月に会う事になるだろう。
月も毎日部屋に居る訳じゃなく、動物の世話をしている。

いずれ会う事になるだろうけども。
前もって教えておいた方がいいだろうし、後で伝えておこう。

その後、？艾こと鈴佳（すずか）が永遠と同じ年齢なのという事実が発覚し。
鷺島軍の将達は驚いた訳だ。

まぁ、見た目＝年齢って訳じゃないからね。
老けてると思ったのか、落ち込む鈴佳を励ます事になるのだが…

…

20話　求む人材（後書き）

さて、次の話は仕官したての3人の話に。

……拠点入れて少し伸ばすかもしれないですね・ｗ・；

21話　新入り3人の日常（前書き）

間隔が開いてしまって申し訳ありません。

何とか一定のペースに持っていきたい所ですが。

……年末に近づくと、そもそも家に帰れるのだろうか。

何て思ったりします・ｗ・；

21話　新入り3人の日常

～駿ｓｉｄｅ～

「いてて……」

そう呟き、俺は部屋に戻っていた。

つい先ほど、命と手合わせをしていたんだが。

いやぁ……流石は華雄と互角だっただけの事はあるな。

何とか喰らいついていたんだが……あと一歩及ばす。

まぁ、華雄に勝てなかった俺が、華雄と互角だった命に勝てる見込みは低かったんだが。

（命の方は、冷静さも持ってるからなぁ……）

その後、葵と手合わせしたが……こっちはあっさり勝てた。

葵の方は武に長けている訳じゃ無かったようだ。

そう言えば、葵を倒した後……命の目が怖かったがな。

（ひょっとして、あの2人はそういう関係か？　こりゃあ、次の手合わせで、命に殺されないか俺？）

葵と命の関係を怪しみながら歩を進めていると、俺の視界に見覚えのある人物が映った。

彼女も俺に気付いたようで、笑みを浮かべ会釈をしてきた。
それに対して俺も頭を下げる。

「こんにちは、駿さん」

「こんにちは、月様」

仕官が決まったあの日、俺は暢介から月様が生きているという事を告げられた。

その後、実際に月様の姿を見た俺は月様の側に駆け寄ると泣き崩れてしまった。
死んだとばかり思っていたからなぁ……

今思い出せば……皆の前で泣いた所を見せちまった訳だが……恥ずかしいな。
あんまり男が泣くもんじゃないって言われそうだが、あの場面は許してくれ。

本当に良かったと思ったわけだからな。

「2人で話す機会なんて、殆どありませんでしたね」

「確かにそうですね」

月様の言葉に頷く俺。

確かに、月様と2人で話す機会なんて、前の時には全くと言っていいほど無かった。

それは……

「こうやって話してたら、どこからともなく詠が突っ込んで来てましたからね」

そう、詠のやつが突っ込んできて『あんた！　月に何してんの！』と叫びながら飛び蹴りをかます。

これは、男性の将が月様の近くに来ると必ずこの流れだ。

「そうでしたね」

月様は笑みを浮かべたまま頷く。

まぁ、月様を守るという意味合いでの行動と考えるべきだろうが。

（しかし……劉備軍の所に詠がね……）

月様の話を聞くと、詠は劉備軍の所にいるらしい。

劉備の所へは俺、仕官希望で行ってたからなぁ……その時に見つけていれば。

まぁ、あの頃は月様も詠も自害していたと思い込んでたからなぁ。

他人の空似で済ませていたかもしれないな。

いや、それはねぇな。

もしかして詠と会わせない為に拒否したか？

いや、それならば詠をどこかに監禁して置いて『ここに近寄るな』みたいな事を言えば……

駄目だ、そう言われたら俺は間違いなく行くだろうなぁ……

話し始めると、時間ってやつはすぐに流れていくもんだ。
ある程度話した所で、月様は仕事があるらしく去っていった。

しかし、月様の仕事って動物の世話だったよなぁ。
似合っているといえば、似合ってはいるんだけども。

（つい最近まで主君だったしな、他の董卓軍のやつらが見たらどう思うんだろうか）

特に詠とか詠とか……
あぁ、でも、月様が幸せそうだから許すかもしれんな。

許さなかったら暢介のやつ、思いっきり蹴られる訳か。
見てみたい光景ではあるが。

そう言えば、恋はどこにいるのやら。
色々と歩きまわってはいたが、結局見つける事は出来なかったしな。

彼女の武はとんでもないからなぁ、どこの勢力だって欲しいはずだ。
まぁ、おまけで音々音までついてくるがな。

あっ、華雄には会ったんだけども確か、大陸を見て回りたいとか言ってたな。

今はどこにいるんだろうか……見て回ったら月様の所に戻ってくるとも言ってたが。

戻る頃には大分、大陸の情勢も変わっている事だろうな。
華雄……なるべく急がないと出番無くなるかも知れんぞ……

そんな事を考えながら、俺は再び部屋に向けて歩を進めた。
結構、話しこんでしまったから休む時間も少ないが……まぁ、いいか。

～鈴佳ｓｉｄｅ～

「えっと……氷花さん、どうしてここへ？」

部隊の訓練が終わり、部屋に戻っていた私。
暇になる午後は”アレ”をしようと思っていたのだけれど……

部屋に入ろうとした所で、氷花さんに話しかけられ。
今は部屋の中に一緒に居る。

「いや～ちょっとね。鈴佳ちゃんの噂を聞いちゃってね」

「噂ですか？」

噂？　私、何か噂になる様な事をしていたでしょうか？
上手く喋れないとかでしょうか……後は……”アレ”かな？

「うん。鈴佳ちゃんが変な行動をしているって聞いてね」

「？」

いよいよ意味が分からなくなりました。

「何かを書いているらしいって話なんだけど」

書いている？　もしかして”アレ”の事でしょうか。

「ひょっとして、地図の事ですか？」

「地図？」

氷花さんの言葉に頷く。

私が暇な時に行う、”アレ”、地図作成。

自分のいる地域の地形の把握等をする為に行っていて。

あとは、変わった地形などを見ると無性に地図を書きたくなったり……

私の中では日常的な行動なのだけれど、やっぱり変に見えちゃうのでしょうか。

「はい、これの事だと思います」

そう言って、私が見せたのは現在作成中の地図。

まだまだ未完成で暇を見つけては作っている状態です。

「……」

氷花さんは真剣な表情で地図を見ています。
……それから少しだけ考える様な感じになりました。

え～っと、何かまずかったかなぁ。
無言が続く中で氷花さんは、一度頷くと笑みを浮かべて私を見た。

「良い地図だね。これだけ正確に書いてあるとは思って無かったよ」

「そ、そうですか」

「うん。実はね、暢ちゃんと文官の人達で地図は作ってたんだけど、それよりも正確だから」

全部一人で作ったの？　そう言ってきた氷花さんに私は頷く。
誘う様な人もいませんでしたし、いたとしても断られていた事でしょうから。

「そっか……ねぇ鈴佳ちゃん。この地図が完成したら私に教えてもらえないかな」

「え？」

「鈴佳ちゃんの作っている地図。色々な面で使えるはずだから」

その後、私の作っている地図の利用価値を語る氷花さん。
今まで地図を作っていて、この様な評価を貰った事は無かった。
大抵の人は、変人扱いをしていたから。

凄く嬉しいかも……

「ところで、鈴佳ちゃんって他にも地図作ってるの？」

その言葉に、私は自分の住んでいた村の地図を探し手渡す。

地図作成、今日はちょっと無理かもなぁ……でもいいかな。

そんな事を思いながら。

～永遠ｓｉｄｅ～

現在私は、久遠姉様、燈さんと3人に執務中です。

ある程度、仕事が一段落ついた所で私は、ある事を思い出しました。

母上が私に伝言を預けていた事を。

長い間忘れてたと思うかもしれませんが。

母上も『覚えてたらでいいから』との事だったので今まで忘れていました。

「久遠姉様。母上から伝言を預かっていました」

「ん？　何？」

久遠姉様は私の方を見ています。

多分ですが。

『迷惑をかけていないか？』とか、そういうものを予想しているのでしょうが。
申し訳ありません、それでは、ありません。

「えっと。早く孫の顔が見たい。との事でした」

「……は？」

あぁ、予想外だったので久遠姉様がキョトンとした表情を浮かべています。
私もこの伝言を聞いた時は同様の表情を浮かべました。

燈さんも、驚きの表情を浮かべています。
あぁ、今は室内なので燈さんは帽子を脱いで机に置いています。

そして久遠姉様、言葉の意味が分かったのか、顔が真っ赤に染まっています。

「な、何を言ってるの母上は、孫の顔が見たいって……」

「言葉のままだと思いますけど」

「いや、それは分かってるんだけど……そもそも、相手が」

その言葉に私は少し驚きました。

「えっ。久遠姉様は暢介様が……」

「よ、よよよ、暢介とは、まだそんな関係じゃ……」

久遠姉様、凄い動揺です。
ここまで動揺する姿は、実家に居た時は見た事なかったです。

「で、でも……そういう関係に慣れたらなぁ～って思ったり……って、ち、違うのよ」

「私、何も言ってませんよ」

「あ、あぅ……」

久遠姉様、自爆するとは思いませんでした。
顔を真っ赤にして俯いてしまいました。

これでは、久遠姉様と暢介様の現状がつかめません。
私としては知りたい所……なので。

「燈さん。久遠姉様と暢介様の現状でも関係を教えて頂けませんか」

「ふわわ。わ、私に？」

「そうです。聞けば、この軍で暢介様と久遠姉様を除くと一番長い期間いるのは燈さんと聞きました」

「た、確かにそれはそうなんだけど」

話を振られると思わなかったのか、燈さんはかなり混乱している様でした。

「どうなんですか？　分からない場合は正直に仰ってください」

「そ、そう言うのはちょっと分からな……」

どうやら、分からないと言うみたいなので……

「その場合は、次に長い氷花さんに聞きに……」

「ひょ、氷花に聞きに行くのは駄目！」

分からない時は氷花さんに聞きに行くと言った所、久遠姉様が大声を出して遮ってきた。

「と、永遠……氷花に聞きに行くのだけはやめてね……絶対に」

久遠姉様、凄く顔が怖いです……笑顔が怖いです。

「わ、分かりました」

ここは引いておいた方が得策でしょう。

後は、氷花さんに聞きに行くのも止めておこうという事です。

私も命は惜しいですから。

21話　新入り3人の日常（後書き）

次回は拠点です。（断言）

拠点が終われば次のステージへと進みましょう。

あっ、3人の新規さんの紹介も書かないと。

拠点2　酔った勢いでこんな目に（前書き）

ちなみに私は酔っても記憶が異常にはっきりしています。

そのせいか、ゴミ捨て場で寝るまでの記憶があったりします。

忘れたい部分なんですけどね・ｗ・；

拠点2　酔った勢いでこんな目に

～氷花ｓｉｄｅ～

やばい……やばいよ。
この状況は完璧にまずいよぉ……

あっ、どもども荀公達ことって今はそれどころじゃないんだよ。
いやぁ、こういう状況になるなんて思ってもみなかったので凄く混乱してるんだよね。
ん？　そんな風には読みとれない？

その辺は作者の腕だからしょうがない……って私は誰に言ってるんだ？

兎に角、今は大変なんだよね。

実は、ちょっと前まで私は久遠ちゃんとお酒を飲んでいたんだけども。
今までそういう機会があんまり無かった訳で、誘ってみたら大丈夫だって話になってね。

まぁ、明日は私も久遠ちゃんも休みだって事で、それなりに飲ませようと思っちゃった訳で。
久遠ちゃんが酔っ払ったらどうなるのかなぁって思ってね。

うちの身内で言うと。

葵ちゃんはどんなに飲んでも変わらないんだよね。
酔わない体質なのかなぁ……記憶も足取りもしっかりしてたし。

後、命ちゃんは酔うと普段とはまるで違う人になるらしい。
饒舌になるらしい……見てみたいけど、誘っても受けてくれないんだよねぇ。
記憶も無いらしくて、聞いても『知らない』って一点張り。

あぁ、それで酔っ払った久遠ちゃんなんだけど……

「おい」

ちょっと待ってよ、今大事な……

「……帰る」

「あぁ～帰らないでよ駿くん」

「睡眠中の人の部屋に来て何事かと思ったら、酔った久遠を探してくれって……」

そう言ってため息をつく駿くん。

いやぁ、一人で探すのはちと大変かなぁと思って援軍を考えてたんだけど。

「永遠ちゃんと鈴佳ちゃんと燈ちゃんは、もう寝ちゃってるみたいで」

「俺も寝てたぞ」

「……葵ちゃんと命ちゃんは街の方に行ってるみたいで、探すのに手間が」

「……無視するな」

「もちろん悪いとは思ってるけど、駿くんぐらいしか頼める人がいなかったから」

ここで駿くんを上目遣いで見る。

こういう行動は、かなり男性に効果ありって話なんだけど。

「……しょうがねぇな。まぁ、嬢ちゃんや鈴佳を起こす訳にはいかんか」

頭を掻きながらそう答える駿くん。

おっ、これは効果あり？　ところで……

「何で永遠ちゃんだけは、嬢ちゃんって呼ぶの？」

「ん？　何となくだな……理由は特にないが。それより、酔ったら久遠はどうなるんだ？　酒癖が悪いのか？」

「それなんだけど……」

そう言って、私はちょっと前の出来事を話す事にした。

～氷花ｓｉｄｅ～（回想）

普段、真面目な久遠ちゃんが酔っ払ったらどうなっちゃうか。
酒癖が悪くなるのか、それともすぐに寝ちゃうのか。

ちなみに、私自身はある程度は、お酒に強いって自覚があったからやったんだけどね。

流石に、自分がお酒に弱いのにこういう事は普通はしないよ。

久遠ちゃんは中々な飲みっぷりで、酔うのも時間の問題。

（さてさて、久遠ちゃんはどうなるのかなぁ～）

と、その時の私は楽観的に見ていた。

「えへへ～」

「……」

え～っと、凄い事になってます。
何か、久遠ちゃんが笑顔で「えへへ～」とか言ってます。
こんな酔い方をする人は、今まで見た事無いんだけど……
それに……

「ね、ねぇ久遠ちゃん。ま、まだ飲むの？」

「うん！　こんなに美味しいお酒だもん、僕、もっと飲むよ～」

正直に言うと、私の方は既に限界に近づいていた状況。
なのに未だに久遠ちゃんは笑顔で飲んでいます。

（こ、こんなに久遠ちゃんってお酒飲むの）

そう思っている際に、久遠ちゃんと以前飲んだ時の事を思い出した。
あの時の久遠ちゃんはある程度飲むと、その後は水を飲んでいた。

お酒を注ごうとしたら「いや、僕はこれ以上は」って断ってたし。
あれは、自分の中でこれ以上は危険というのを理解していて取った行動なのだろう。

「あれ？　氷花、全然飲んでないじゃん、ほらほら」

「へ？　いや、勘弁し……」

久遠ちゃんが私の杯に酒を注ぐ。
個人的に私はお酒は好きだったんだけど、初めて嫌いになりそう。

出来るなら、この液体をどこかに捨てたいと本当に思っている。
ただ、飲まないと……久遠ちゃんが笑顔で私を見ている。

私は一気に酒を流し込む……もう、味も香りも何も感じない。
ただ胸のむかつきが増すばかりだ。

「ね、ねぇ……そろそろ寝ないと、明日の休みを一日寝台で寝て過ごす事に……」

「何を言ってるの氷花？　まだ始まったばかりだよ」

必死に訴えたけど、笑顔で断ち切られました。
それと久遠ちゃん……もう、結構な時間経ってると思います。

「そう言えば、僕ね。氷花に言わなきゃいけない事があってね」

「？」

いきなりの言葉に私は戸惑う。
はて？　何か、久遠ちゃんから言われる様な事があっただろうか？
仕事面かな、確か何も無かったはずなんだけど。

「うん！　あのね、氷花って毎日、僕の胸を触ってくるじゃん」

「ま、毎日じゃないけどね」

酔ってる為か、胸を触ってるとか普段の久遠ちゃんなら言うにしても顔を赤くするはずだけど。
笑顔のままで言ってくる……正直、怖い。

「ほぼ毎日だっけ？　でもね、そのおかげで僕、また少し大きくなったんだよね」

「は、はぁ……」

何ていう爆弾発言。
というか、久遠ちゃんのそれは未だに成長中だったんだ……
既にこの城中で一番の大きさだけども。

「それでね、僕ばっかりそういうのをされるのは不公平だと思ってね」

そう言うと久遠ちゃんは席を立ち、私の背後へと回りこんできた。
ま、まずい……この流れは。

「く、久遠ちゃん？」

「だからね……僕も氷花に同じ様に手伝ってあげようかなって」

予想的中、も、揉まれる。
逃げたいけど、今逃げたら間違いなく吐く。

何しろ動くのもきついぐらいに飲んでしまってるから。

「い、いやぁ……久遠ちゃん。私ね、揉むのは好きなんだけど。揉まれるのは嫌いなんだよねぇ」

そう言ってる私の胸に久遠ちゃんの手が服越しに触れる。
だ、駄目だ……

変に焦ったせいか意識が遠くなり、そして私は気を失った。

目が覚めた時には既に部屋に久遠ちゃんの姿は無かった。
気を失ってた時間はそんなに経っていないと判断して私は久遠ちゃんを探しに向かった。

何で時間が経ってないか分かったかって？　……痛かったんだよ、胸が。

まぁ、他にも色々あったんだけどね。

『回想終了』

～氷花ｓｉｄｅ～

「……それって、全面的に酒を酔うほど飲ませたお前に原因があるよな」

「ごもっともです」

呆れたまま言う駿くん。

うっ……吐き気が……さっき、凄く吐いて楽になったはずなのになぁ。

頭を押さえる私を見ながらため息をつく駿くん。

「はぁ。氷花、お前は部屋に帰って寝ろ。久遠は俺が探しとくよ」

「えっ、でも」

「でもじゃない、今すぐ部屋に帰って寝ろ」

「……はい」

何を言っても駿くんには断られると悟った私は大人しく部屋に戻る事にした。

その際に。

「なぁ、久遠はどこにいると思う？」

と、聞かれたので私は答えた。

「多分、暢ちゃんの所だと思う」

「……分かった」

駿くんは頷くと、走り去っていった。

一人残った私はそのまま、部屋に戻った。

～暢介ｓｉｄｅ～

う～ん、いつでも城壁から街を見るってのはいいもんだよなぁ。

時間的にも街の明かりとかで綺麗に見えるし、ここって俺のお気に入りスポットだな。

こういう所に好きな人と一緒に来て見たら、景色が変わって見えるのかなぁ。

……俺、誰と一緒にこの景色を見たいのかな？

ふと、そんな事を考えてしまった。

この世界に来て、考えた事も無かったなぁ。

だけど、疑問に思った以上は考えてみるか。

そう思って俺は考えてみた。

……あれ？　全員が浮かんできた。

いやいや……これでは信頼している仲間って事になる。

もっと……そう、好きだって思う人を……

あぁ、やっぱり彼女だよな。

始まりの時から、俺の横に居て。

最初は男だと勝手に思い込んだりして。

張り切りすぎて次の日に体調崩して葵を困らせて。

毎日一生懸命なあの子……

「……く」

そこまで言った時だった。

「ようしゅけ～」

右側から聞こえてきた声に俺はそちらの方を見る。

そこには、笑顔で足取りが少しおぼつかない久遠がこちらに歩いて来ていた。

「久遠？　お前まさか……えっ！」

酔ってるのか？　そう聞こうとしたが俺は言えなかった。

近づいて来た久遠が俺に抱きついて来たからだ。

そして同時に酒臭いにおいが感じられた。
あぁ……やっぱり酔ってるな。

「エへへ～ようしゅけ、つかまえた～」

……すいません、久遠をこんな風にしたのは誰でしょうか？
普段の久遠って確か、酒を飲むにしても自分の飲む量を把握してたはずだぞ。

誰だ？　氷花か？　それとも……氷花しか出てこないぞ。
まぁ、氷花で間違い無いんだろうな。

にしても……酔ったらこうなるのか久遠って。
何か、猫みたいだな。

「お、おい久遠……」

「ん～？なぁに～」

笑顔で俺を見上げる久遠。
身長差の為か上目遣いになっている。
久遠の潤んだ目と俺の目があう。

「く、久遠……」

微かに紅潮した頬、息遣いは少し粗い。
先ほどまで笑顔だった表情は、妖艶なものへ変わっている。

その姿に、ドキッ！　と心臓の音が聞こえた。

まずい、今の久遠は危ない……

ある時に氷花が言っていた事を思い出した。

『久遠ちゃんって色香が無いんだよねぇ……』

おい氷花、今の久遠は色香を手に入れた様だぞ。

「ようしゅけ～僕ね、ようしゅけに言いたい事があるんだ」

久遠の表情は再び笑顔に変わる。

何と言うか、大人と子供の表情を行ったり来たりだな。

「えっと……何？」

今の状況を考えると、マイナスな事は無いよなぁ……

プラスの事で考えると……ま、まさか告白って流れか。

いや、久遠がそんな……

「僕ね、ようしゅけの事。だ～いしゅきだよ」

先生、予想通りでした。

ただし、予想はしていたが俺の頭の中は大混乱状態だ。

久遠が？　俺を？

「ようしゅけは僕の事、しゅき？」

その質問に俺は答えようとして口籠ってしまった。

（お、俺も久遠の事……）

好きだ、そう言えばいいはずなのに。

口からその言葉が出てこない。

高校の時と同じだ、あの時だって答えきれなくてあの子を泣かせてしまったじゃないか。

「……ようしゅけ？」

久遠の表情が不安に変わる。

くそ！　何で自分の事を好きだって言ってくれた子を不安にさせなきゃいけないんだ。

「お、俺は……」

そこまで言った瞬間。

「……ごめん、ようしゅけ……限界」

「……はっ？」

先ほどまで赤かった久遠の表情が青ざめていき……

「うぇぇぇぇ……」

「うわわわ！　ちょっと久遠！」

「おはようございます、暢介」

「あ……お、おはよう久遠」

あの後、氷花に頼まれたらしく久遠を探していた駿が来てくれた。

駿は「後始末は俺に任せておいてください」とそう言って酔い潰れた久遠を介抱したり。

部屋まで運び、嘔吐物の処理まで全て行ってくれた様だ。

後、原因を作った氷花もかなり反省したらしく二度と久遠ちゃんを酔わせませんと誓った様だ。

「え～っと、暢介。昨日の夜、僕と会った？」

「は？」

「実は、氷花の所でお酒を飲んでたんだけど気付いたら部屋に戻ってたんだよね、そしたら……」

駿が来て、昨日は大変だったよと苦笑しながら言ったらしい。

昨日、自分は何かしたんじゃないかと思って皆に聞いて回ってるらしい。

どうやら、久遠は酔うと記憶が飛ぶのか……なら、あの時の……

『僕ね、ようしゅけの事。だ～いしゅきだよ』

あの言葉も忘れているのか……

「いや、俺は会ってないな」

「そっか」

そう言うと久遠は、まだ少し頭が痛いので今日は寝ておきますと言ってきた。

折角の休みだったのになぁ、と付け加えると苦笑し去っていった。

記憶に無いか……あの時の、何も言えずにアタフタしていた俺の事も覚えてないんだろうな。

まぁ、覚えてもらわなくていい所なんだけど。

でも、あの言葉は酔った勢いで出たものじゃないはずだ……だから……

「今度こそ……ちゃんと伝えないとな」

そう誓う。

もう、後悔だけはしたくない。

～久遠ｓｉｄｅ～

暢介との話を終えて、部屋に戻っている最中、僕の顔は真っ赤だ

った。
多分、駿とかは『酒が残ってるのか？』とか行ってきそう。
この赤はそうじゃない、恥ずかしさの赤だ。
お酒に酔ってる間の記憶？　ばっちり持ってますよ。
それにしても、僕って何て行動しちゃったの。
まさか、暢介の所に行って…し、しかも好きだって伝えちゃったし。
だけど、暢介から返答は無かったなぁ……いきなりすぎて驚いたのか。
それとも僕の事、好きじゃなかったからかな。
い、いや……きっと驚いたんだよね。
今度は、お酒に酔った状態で言わないで、ちゃんと伝えないと。
それにしても……ようしゅけって……はぁぁ。

拠点2　酔った勢いでこんな目に（後書き）

自分にとってはこれが甘いという流れでしょうか。

さて、次から新しいステージと言いましたが。
ちょっと作品が、不調気味なので。

拠点（恋愛なし）で埋めるかもしれません。

すいません、予定通り進まない作者で・ｗ・；

オリキャラ紹介2（前書き）

3人分の紹介を入れておきますね。

同時に、1の方も修正しとかないと・ｗ・；

オリキャラ紹介2

姓：高
名：順
字：？
真名：駿（しゅん）

史実では呂布の誇る猛将として活躍したそうです。
義に厚く清廉な人柄ので、兵士の鎧、武器の手入れを徹底しているほどの仕事熱心。

彼が攻めた敵陣は必ず撃破された事から「陥陣営」の異名をとった。

ただし、呂布は高順の忠誠ぶりは評価する一方で、進言を取り入れていなかったそうです。
ちなみに陳宮との不和もあったそうです。

そんな中でも高順は不平を言わず、従い、戦い続けた。

しかし、最後は曹操軍に敗れる。
処断される最後まで呂布への忠義を貫いたそうです。

この作品では、董卓軍に所属していたが連合に敗れた後に在野となる。
色々な仕官先を探すも見つからず、鷺島軍への仕官試験を通り所属する事に。

同時に、董卓が生存している事を知る事になる。

普段は、少し抜けており、楽天家な言動がある為、一見適当な印象を受けるが。

仕事となれば誠実で、年長者として兵士、将のフォローを的確に行ってくれる大人の男性。

普段の状態でも、頼まれれば嫌とは言わない為、氷花などに頼まれごとをされる事が多い。

本人いわく、好きなタイプは大人の女性。

南郷に来る際に一緒に来ていた永遠の事を『嬢ちゃん』と呼んでいる。

本人が言うには『いや、一緒に来てる時にそう呼んでたから』からとの事。

姓：？
名：艾
字：士載

真名：鈴佳

史実では、蜀を攻略した人物として有名ですね。

将来に必ず役立たせてみせると、地図作成を行っていたそうです。

ただ、この行動は奇行に見られ、周囲からは笑われていたそうです。

その後、呉討伐などを計画するも司馬昭より独断専行を注意されると反論。
これに鍾会などがこの言動が反逆行為に相当すると言上すると、?艾は反逆者とされ送還。

送還されている途中、鍾会・姜維らがクーデターを起こすも失敗、?艾の軍勢は彼を助けました。
しかし、復讐される事を恐れた衛?は?艾に個人的な恨みのあった田続を唆す。

田続は?艾の軍勢を追撃し?艾は息子と共に殺されてしまいました。
その後、段灼により?艾の名誉は回復し孫である?朗は郎中に取りたてられたそうです。

この作品においては、吃音持ちではあるが内容次第では全くどもる事は無い。
幼少期から周囲の地図を作っていたりしており、その作成能力は高い。

久遠曰く「伸びしろは十分にあると思う」という将来が有望視される将。
本人もそれに応えられる様に努力を重ねている。

性格は大人しく、控えめで優しい。

時折だが、崖や坂を見た際に「……ここって降りれるかな」とポツリと呟いて。
その後、訓練として実際に降ろさせようとして兵士達を恐怖へと陥れる。

駿が言うには「既に女性としての魅力は十分」というぐらいに成長している。

久遠、そして同年齢である永遠と一緒に居る事が多い。

姓：司馬
名：孚
字：叔達

真名：永遠

史実では、兄達と同様に曹操に仕えた。
温厚寛達で誠実な性格、人を恨んだ事がない、とまで評される。

曹植の文学掾となり、奔放な気質を持っていた曹植を度々諫め、当初曹植は反発していたが。
その後は非を謝し、厚遇した。

兄である司馬懿が曹爽に対してクーデターを起こした際には、洛陽の宮城の城門を押さえ。
内外を鎮撫した。

魏に重用された司馬孚は魏への忠信が厚く、皇室を重んじる姿勢を貫き。
４代皇帝が暗殺された際には、その遺体に取りすがって号泣したそうです。

兄に劣らぬ才気を持っていた様で、曹叡は側近に「司馬孚には司馬懿の風があるか？」
そう、尋ねたところ側近は「よく似ています」と答えた。
これを聞いた曹叡は「私は司馬懿を二人も得た」と大喜びしたそうです。

ちなみに、司馬孚は２７２年に死去しますが、年齢は９３という長命だったようです。

この作品においては、姉である久遠の要請を受けて鷺島軍へ仕官します。
主な仕事は内政で、まだまだ外交などの仕事を任されるのは後になりそうです。

性格は真面目で温和。
怒った所を見た事が無いと久遠が言うぐらいに優しい。

鈴佳と同年齢だが、パッと見ると『うわぁ、親子みたい』と言ったのは葵談。
しかし、ある知識に関しては姉である久遠を上回っている。

久遠と暢介の関係を、もっと親密にしたいと考えて動き回っている。
その内、暢介の事を『義兄様』と呼ぶ日も近いかもしれない。

【データ】

身長順：駿＞命＞葵＝暢介＝鈴佳＞久遠＞氷花＞燈＞永遠
髪の長さ：久遠＝命＝永遠＞葵＞氷花＞燈＝鈴佳

番外拠点　幽霊嫌なら無理しなくても（前書き）

久遠ちゃんの幽霊嫌い。
まぁ、本当は「幽霊に策使っても効かない」ってしたかったのに。
ただ、幽霊嫌いになっちゃいました。

ちなみに番外拠点は拠点2の前という設定でお願いします。

あ、あと3人称に挑戦。

この手の文章、誰かの作品で既にありそうだなぁ。

番外拠点　幽霊嫌なら無理しなくても

薄暗い室内、そんな中で一人の女性が口を開こうとしていた。
外は雨が降っており、その雨脚は強い。

先ほどから窓を強く叩いており、風もあるせいか窓が震えている。
そんな室内のせいか、皆の緊張感も高まる。

「……そして、気付けば辺りは真っ暗となっていました。家のある村への距離はまだかなりあり、その道中に村や街はありません。しかも、この道は幽霊が出る事で有名な道です。少年の胸にはわずかな不安と焦りが出ていました」

女性の話は、ある少年が体験した話。
それを語っているのですが、女性はある人物をずっと見ています。

その人物は、この手の話が苦手なのか目を瞑っており、少し震えていました。
それを見て女性は少し微笑みます。

少しの間、言葉を発さずにいると、その人物は『終わったのかな？』と思い目を開けます。
が、終わってる訳で無く微笑む女性を見ると、また目を閉じます。

勿論、両手は耳を抑えているのですが……聞こえているのでしょう。

「……少年の目にようやく村が見えてきました……ほっと安心する少年。しかし、その時、少年は自分の背後に何者かの気配を感じました。恐る恐る、後ろを見ると……そこには血だらけで首の無い兵士達が……そして……」

「いやぁぁぁぁぁぁ」

結末を話す前に、絶叫してしまったその人物。
女性は『あらら』と言った表情を浮かべている。

「久遠……私の話、まだ終わって無いんだけど……」

女性、葵が苦笑しながらいう。

そう、どう言う訳か、ただいま怪談中なんです。

「こんな本を見つけました」

たまたま、全員の都合がついたので夕食を城内の食堂で取っていた所。
昼に街の本屋に行っていた燈がある本を出してきた。

それは怪談話の載っている本だった。
やはり、この時代から心霊話の類があったのかと暢介は思った。

ちなみに彼は、この手の話は好きな方である。

テレビなどで、この手の話題が出た時はよく見ていた類だ。

その本を読んでいると『あ～この手の話は知ってるよ』と葵が言ってきたり。

『そういえば、こんな話も』とか『俺もそれは知ってるなぁ』と色々な事があり。

いつの間にか、それぞれが知っている心霊話を話す場面になってしまったという訳だ。

あっ、約一名が凄く反対していたけども『え～久遠ちゃんってこういうの駄目なの？』という。

氷花の言葉に、『そ、そんな訳無いでしょ！』と反発してしまった訳だ。

まぁ、もっと言えば妹の永遠の上目遣いにもやられていた。

やっぱり、妹の興味には勝てませんな姉は。

「久遠、苦しいって」

「あっ、ご、ごめん暢介」

「久遠ちゃん、驚きすぎだよ」

「おいおい久遠、嬢ちゃんの方は全然驚いてねぇってのに、これじゃあ、どっちが姉か分かったもんじゃないぜ」

本当に怖かったのだろう、無意識に暢介に抱きついていた久遠は、

慌てて離れる。
恥ずかしそうに俯く久遠の様子に、氷花が言う。
「まぁ、確かに怖かったよね。葵ちゃんの話し方もあるんだろうけど」
その言葉に暢介も頷く。
「確かにね、でも葵。その話はどこで手に入れてきたんだ？」
「この話は友人からですね。ただ、この話は意外と信憑性があるらしく、どこの村かって言うのも分かってるんですよ」
「へ？」
「実際にそこに行った人が、夜に首の無い兵士達の行軍を見たらしくて……それと、村の中で家の窓を叩いたりしたんだって」
「へぇ～、と言う事は、本当に幽霊が……」
「そ、そんなのあくまで噂でしょ！」
「く、久遠。出来ればちょっと離れて……」
あくまで噂だと力強く言うが、久遠は暢介の後ろに隠れている、少し震えてもいる。
本人は無意識かもしれないが密着している。
そんなのを見ながら、（普段からそれぐらい大胆になればいいのにねぇ……）と苦笑しながら。

氷花が口を開く。

「さてと、次は私の番かな」

「ちょ、ちょっと！　もう夜も遅いし、止めましょう」

（うわぁい！　当たってる）

「あれ？　でも、氷花の話はまだ聞いてないし」

「久遠姉様、怖いんですか？」

永遠の質問に全員が（いや、怖がってるでしょ）と突っ込みを入れる。

ただし、久遠自体は。

「そんな事ないよ！　でもね、遅くまで起きてたらあんまり良くないんじゃないかなって」

と、苦しい言葉で返す。

ところで、そんな中で暢介は背中に柔らかい感触を感じ続けていた。

「（当たってる！　当たってるから！）　あぁ、あんまり遅くまで起きてるのも何だしな……この辺で終わろうか」

これ以上、密着が続けば暢介の理性が弾け飛びそうな状態になるだろう。

それを察したのか、他のメンバーも頷く。

メンバーの事を考えると、別に深夜の行動もあったりするので特に問題は無い。
ただ、このまま続けたら久遠と暢介が壊れかねない。
それをメンバー全員（永遠除く）が悟った。

「残念だなぁ。最後に残していたとっておきのがあったのになぁ……」

「いいじゃん葵ちゃんは、私なんて話も出来なかったんだよ」

「しかし、丁度いい時間じゃないか」

「これで怪談話はおしまい！　いい皆！」

そう言って暢介から離れる久遠。
理性破壊の寸前で助かった事を安心するも、背中に残る感触に少し残念だったりする暢介。

（危なかったなぁ……でも……）

「暢ちゃん、何か残念そうだねぇ」

「へ！？　い、いやぁそんな事は」

ニヤニヤしながら言ってくる氷花に、暢介はしどろもどろに言い返す。

それを見ながら……

（まぁ、分からんでは無いな）

と、同情する駿。

そう言えば……今になって久遠と永遠以外が思った事なのだが。

（……久遠って今日、一人で寝れるのか？）と言う事。

久遠は既にいい歳だし、流石に寝れるだろうと思うかもしれないが。

今の久遠を見ると、どうみても脅えている……

しかも、葵の話で兵士達の霊が窓を叩くという部分が……今は雨が窓を叩いているという状態。

絶対に気になって眠れないはずだ……

さて、久遠はどうするんだろうか？

結果を言えば、久遠は永遠と一緒に寝たらしい。

「永遠、久しぶりに一緒に寝ようか？」

「はい！」

と、永遠に話しかけて何とか突破したらしい。
……しかし、どうやら神様というのは久遠を見逃す気は無いらしい。

「えっと……何って言ったの今」

今日もまた、全員が同じ時間に夕食を取っている中で氷花の言った言葉に久遠の動きが止まる。

「それがね、今日街を歩いてたら幽霊の噂を聞いちゃってね」

「……」

久遠の表情が変わる……『何でそんな話を聞いてくるのよ!』と目で訴える。
それを氷花は簡単にかわす。

「街の近くに川があるでしょ、あそこで夜な夜な女性が汚れた顔を洗おうとするんだけど、洗えない」

「……」

「なぜなら女性の腕は切り落とされてて、汚れた顔は顔を斬られた事で真っ赤に染まってるって話」

「……へ、へぇ……」

「何でも、過去に賊に殺された娘の霊らしいんだけど」

「そ、そうなんだ……」

久遠の声は震えている。

「でね、今夜、そこに行こうかと」

「何でそうなるの！」

氷花の申し出に久遠が叫ぶ。

いや、今の流れなら多分、こうなると予想がついたはずだろうにと皆が思う。

「いや、別に久遠ちゃんが来なくてもいいんだけど……ねぇ、暢ちゃんはどうする？」

話を振られた暢介は少しだけ考える。

ただ、彼はこの手の話は好きであって……

「あぁ、行ってみようか。噂が本当かどうか確かめたいしね」

「おぉ～これで私と暢ちゃんと……後は、駿くん？」

「何で俺を指名するんだ……まぁ、行ってやってもいいぞ。どうせ暇だし」

駿も行く旨を伝えると、氷花の視線は久遠に向けられる。

（暢ちゃんも行くってさ、これは少し怖がって抱きついちゃえば行けるって）

（無理無理、僕は本当にこの手の話は駄目なの。そんな暇ないから）

目と目で会話をするが久遠は折れない。

そんな中。

「あ～だったら私も行こうかな。今日暇だから」

命は仕事だしねと、葵が言うと氷花は再び久遠に目で言う。

（いいの？　もしかしたら葵ちゃんに取られるかもよ）

（へ？　葵って暢介の事……）

（分かんないよ、でも、こういう場面で驚いて抱きついた日には葵ちゃんだって暢ちゃんの事……）

（うっ……う～）

「ぼ、僕も行く！」

久遠の言葉に全員が驚く。

だって、どう見ても半泣きだし。

「あのさ、久遠。無理しなくていいからな……別に、行きたくないなら」

「い、行きます！　だ、大丈夫だから！」

返事をする久遠の表情はかなり怖い。
意気込みの強さは感じられるが、どうみても半泣きだ。

時間は深夜、場所はその霊が現れると言われる所。
そこに暢介・久遠・氷花・駿・葵が隠れている。

深夜という事で、辺りは静かで、恐怖を煽るには絶好の場所になっている。

「はぁ、やっぱりやめた方が良かったかな」

久遠から元気の無い声が漏れる。

「久遠大丈夫？　今から城に戻ってもいいけど」

「だ、大丈夫。大丈夫だから……それに、今から城に1人で戻るのも怖いし……」

元気の無い久遠に、葵が声を掛けている。
流石に無理はさせられない。

「そういえば駿。何かの気配とか感じられないかな？」

もしかしたら、誰かが扮装とかして驚かせてる可能性も考える。
それなら、久遠も怖がらずにすむだろう。

「いや……人がいる気配は無いな。まぁ、幽霊なら感じられないがね」

「や、やめてよ。そう言う話……」

そう言って久遠は右手は葵の服の裾を左手は暢介の服の裾をちょこっとだけ握る。

その姿に暢介と駿、葵は笑みを浮かべる。

（さてと、どうするかな……）

ここに居る5人は明日の仕事というのが多少は少ない状態になっている。

別にこの為と言う訳じゃないんだが。

来ていない人達は明日の朝一から仕事が入っている為に参加不可となった訳だ。

特に命などは残念がっていたが。

永遠と鈴佳は……あれだ、子供って事で。

本人達に言ったら怒られるが。

氷花が口を開く。

「ところで久遠ちゃん、聞きたい事があるんだけど」

「どうしたの氷花？」

久遠が氷花を見る、普段の氷花と違い、無表情だ。

何やら嫌な予感を久遠は感じた。

「その、肩の上に乗ってる手は何？」

「へっ！？」

氷花の指摘に、久遠は驚き、首を回して左右を確認……時折真後ろを見たりするも何もいない。

「えっ！？　ど、どこ？　どこっ！？」

「久遠、落ち着いて、何も無いよ」

氷花の指摘に混乱状態の久遠を葵が落ち着かせようとするが、効果は薄そうだ。

「あれれ？　今何か見えたのになぁ……ごめん、気のせいだった」

「お前……楽しんでるな」

謝っているが氷花の顔はニヤついていた。
勿論、これは久遠を驚かせる為の嘘だった訳だが。

「お前な、ああいう状態の久遠をからかって面白いか」

暢介と葵が久遠を落ち着かせている時、駿は氷花に話しかける。

「だってさ、いい反応返してくれるから」

「……お前、いつか久遠に刺されるぞ」

「大丈夫、その辺の見極めはしっかりやっておくから」

「いや、俺は反省しろっていいたいんだが……」

頭を抱えため息をつく駿。

「久遠、大丈夫だから。氷花の言ってたのは嘘だから」

「ほ、ほんと？　本当に嘘？」

「あぁ、だから落ち着いて」

涙目になっている久遠。
その姿に不謹慎だが、暢介は可愛いなぁと思ってしまう。

今の久遠は冷静さも判断力も欠けている状態になっている様だ。

「あれ？　あれれ？」

久遠が落ち着きを取り戻そうとしていると、氷花が不思議そうな表情を浮かべ暢介と久遠の後ろを見る。

2人は振り返るも、そこには誰もおらず城の灯りが見える程度で、何も無い。

2人とも首を傾げながらもその景色を見ていると、突然氷花が久遠の両肩にポンっと手を置いた。

「き……きゃあああああああ」

何が起こったか理解出来ていない久遠は悲鳴を上げた。
静かだった場所に久遠の悲鳴が響き渡る。

恐怖のまま、久遠は暢介に抱きつく。
身体は震え、完璧に怖がっている様だ。

どうするべきか困った暢介は、大丈夫だと言うが。
完全に怖がっている久遠には効果が無い。

そもそも、聞く耳を持っていない。

そんな中で久遠は自分の方から暢介に抱きつくという普段ならあり得ない光景がある訳で。
暢介も久遠に抱きつかれ、かなり焦っている。

そんな中で氷花は面白そうに笑い、葵も苦笑を浮かべている。
駿は『なんだこの展開は』と言いたげな表情をしていたが、暢介と目が合うと頷き。

氷花の頭に強烈な拳骨を喰らわせた。

「調子に乗りすぎだ、馬鹿野郎」

と、言って。

結局、朝が来るまで氷花は駿に説教を喰らわされ。
暢介と葵は怖がる久遠を慰めていた。

結論を言うと、幽霊は見れなかった。
その点では暢介や葵は残念だったなぁと思っていた様だ。

「ねぇ、ごめんって久遠ちゃん。機嫌直してよ」

久遠が落ち着きを取り戻したのは城に戻ってからで、氷花への文句を呟いていた。
流石に氷花も駿から説教を喰らい、文句を言われて反省した様で。

久遠に向かって頭を下げていた。

ただ、久遠は未だに氷花の悪ふざけに怒ったままだ。
暢介や葵、駿は今回に関しては氷花が悪いと言っていた。

「氷花、最後の最後に『二度と来るな！』って声色まで変えて言う必要は無かったはずだよ」

久遠はそう、文句を言う。

「へ？　いや、ちょっと待ってよ。私、そんな事言って覚えないよ？」

ただし、氷花は戸惑いながら否定してきた。

「え？　いや、でも、僕、ちゃんと聞いたよ。女性の声で『二度と来るな！』って」

氷花は再び『言ってない』と言い、久遠は戸惑う。

「えっと、ひょっとして葵？」

と疑うが葵が「私じゃないよ」否定する。

「そもそも、俺にはそんな声聞こえなかったぞ」

「あぁ、俺もだ」

と、男性陣は聞こえなかったと証言。

女性陣も否定する。

簡単に言えば、誰かが嘘をついていない場合、言った人物は４人の中にいないという事になる。

「ちょっと待ってよ……じゃあ、僕が聞いたあの言葉って、まさか……ほ、本物」

顔を引き攣らせながら、久遠が言う言葉に、誰も答えは返す事は出来なかった。

以降、鷺島軍内で怪談を取り上げる事は無くなった。

やっぱり、遊び半分でやるもんじゃないと言う事なのだろう。

番外拠点　幽霊嫌なら無理しなくても（後書き）

季節外れの怪談話。

ちなみに私は得意分野ではございません。

22話　少し前に進みましょう（前書き）

本編の進みが悪いですね。

本当に申し訳ないです。

ちなみに、軍師達は動き回っております。

そこを書けよと言われそう・ｗ・；

纏められなかったのです・ｗ・；

22話　少し前に進みましょう

～暢介ｓｉｄｅ～

連合が解散し1ヶ月が過ぎた頃、朝廷より褒美が贈られた。
と言っても、これは物だけじゃなくて領土などもあるのだが。

一番の出世は劉備だろう、何しろ手に入ったのは徐州の州牧。
とんでもない大出世と言えよう。

ちなみに参加した諸侯達にも多少の領土ないしは物が与えられる訳で。
それは俺達も同様で……

「領土は無くて、物か……」

与えられたのは領土ではなく物。
それも、使い道があるのか分からない物で扱いに困ってしまう。

とりあえずは有難く受け取ったは置いたが……商人に売ってしまうか？
何て事を思ってしまった訳だが。

この期間、至って普通の事をしてたといった所だろうか。
悪いな、本当にこれといって特別な事はしていなくて。

南郷郡の街と街、村と村を繋ぐ道がそろそろ完了するとの知らせ

が入ったのが昨日。
これで、郡内の流通がスムーズになってくれればいいと思う。

賊などの心配をしているのだけれど、ここ最近は全く報告が上がって来ない。
別の郡に行ったか、それとも賊自体がいないのか分からないのが不安でもあるが。

そういう部分は、完成してからの経過で判断するしかないかもしれないな。

南郷郡の村や街に送っている文官達から送られてくる竹簡にも。
成果が見え始めているという報告も出てきている。

中には、自分が指導している文官が素晴らしい才能を秘めている様なので。
これからの指導が楽しみでしょうがないというものも含まれていた。

人材は宝物なので、それが見つかるのはとてもうれしい事。
これからもどんどん見つけてきてほしい訳だが……

何か、育成施設とか出来れば……学校か？
幼少期からどのような子供でも教育を受けられる場を設ける事で才能を持っている人物を見つける……
まぁ、せめて読み書きぐらいは出来る様になれば郡内の教育レベルは上がるよな。

……相談してみるか。

さて、新しく入ってきた3人についても報告。

駿と鈴佳は将として訓練などをこなしているが問題は無さそう。
まぁ、駿の方はつい最近まで月の所で将をしてたんだから大丈夫だとは思っていた。

鈴佳は隊を率いる事自体が始めての事らしく心配されていたが問題無く統率出来ていた。
……たまに、変な病気を発症するけどな。

その病気……『険しい道（崖）を見ると進みたくなる病』と呼ばれるもので。
行軍訓練などで鈴佳が。

『ここ、降りれるかもしれない』と言えば、行軍コースに入るらしい。
結果として走破させているのだが、隊の人達の傷は絶えない。

でも、隊から離れたいって言う人はいないんだよなぁ……不思議だ。

駿は流石に月の元で将をやっていた訳で、兵の訓練なども難なくこなす。
それだけじゃなく、訓練が終われば兵士達の悩みやらの相談を聞いているらしい。

親身になって聞いて、的確なアドバイスを送る。
かなり面倒見がいい性格の様で、隊の兵士達からの信頼も厚い。

そんな2人に負けてたまるかと葵と命も、対抗心を燃やして訓練しているようで。
４人の隊はそれぞれ成長が著しいらしい。

永遠はというと、今は仕事を覚えている最中といったところだろうか。
まぁ、もう少しすればそれも終わるだろうがね。

俺はというと、今まで通りの新兵の体力訓練や内政などに関わっている。
新兵も最近は経験者などが入り体力訓練を行う人数は減ってきているけどね。

……まぁ、１人でもいる限りはやっていこうと思ってるよ。

あぁ、学校の件……やっぱり考えて相談してみるかな。
ちゃんとした資料でも作って……でも問題が多いんだろうな色々と。

～駿ｓｉｄｅ～

「……今、なんつった？」

久遠の言葉に俺は間の抜けた声を出した。

今は夕方、自室に居た俺は腹も減ったので飯食いに行こうとしていた。

そんな時に女性陣が入ってきていきなり。

「だから、駿が夜な夜な街に繰り出して女性を口説いて回ってるって噂が」

って言ってきた。

うへぇ……女性陣の目が怖いって……

ちなみにここに居るのは久遠、燈、葵、命だ。

氷花と嬢ちゃんは暢介と一緒に仕事中。

鈴佳は地図作成に励んでいるそうだ。

嬢ちゃんと鈴佳はこの噂は知らないらしい。

まぁ、こういう噂は子供に聞かせちゃいけねぇな。

にしても、誰だよそんな噂を流した奴は。

見つけたらただじゃすまないぞ。

「しかも、一緒にお酒を飲んで女性を酔わせて……」

「ちょっと待て……酔わせるだって？」

俺の言葉に女性陣は頷く。

夜な夜な街に繰り出し女性を口説き、酒場に行って酔わせるほどに飲ませて……

あぁ、女性陣の顔見れば何となく分かる……顔真っ赤だからな。

しかし、命まで顔を赤くしてるとは珍しいものが見れた。

「もし本当なら、そういう人物をここに……」

「あ～ちょっと待て、その噂は嘘だ。俺は女性を口説いたりはしていない」

これは本当だ、神様に誓ったっていい。

「第一、俺は酒は飲まないんでな」

「へ？　そ、そうなの」

驚きの声を上げる葵に俺は頷く。

「あぁ、大体、そういう噂を聞いて何で信じてるんだよ……」

「え、だって……」

「「「「そんな雰囲気が」」」」

見事に声が揃ったな。

いや……悲しいよ、俺は。

見た目で俺はかなり遊んでいる風に見えるらしい。

まぁ、それはしょうがないさ。

この顔は持って生まれた物でお袋なんて『お父さんの若い頃にそっくり』なんて言ってたからな。

親父は若い頃は結構遊んでいたらしく、かなりの女性を口説き落としていたらしい。

まぁ、そんな親父もお袋と付き合ってからはパッタリと女性問題

は無くなったらしい。
何でもお袋と付き合うと決めた時に全ての女性問題を清算したらしい。
その行動で親父の顔は少し腫れあがったらしいけどな。
自業自得だわな。

「雰囲気ね……それは前に月様の所に居た時にも言われたよ」

「えっと……月さんの所でも言われてたんですか？」

燈の言葉に頷く。

「あぁ、仕官してしばらくしてな。危うく追い出される所だった」

あの時も説明して納得してもらったんだよな。
どこに仕えてもこの噂に悩まされるのか俺は……

沈黙が部屋の中を支配する。
何と言うか、雰囲気が悪いな。

「駿……その、ごめんね。噂を鵜呑みにしちゃったみたいで」

「いや、噂を鵜呑みにしてしまうほど、俺の顔が遊んでる奴に見えるんだろうな」

ただ、そう呟き一呼吸入れる。

「少しは疑ってくれ……頼むから」

仲間と思ってる連中から疑われるのって結構、堪えるからな。

「「「「はぃ……」」」」

4人とも反省してるみたいだな。

「反省してくれて助かるよ……さぁて、俺は飯食いに行くから皆部屋から出てくれ」

そう言って俺は4人と一緒に部屋を出た。

まぁ、確かに俺は女性と話す事は多い。

女性慣れしてるしな。

だからって、女性全員に声とか、かけないから……誤解しないでくれ。

その後、街に出て飯を食って帰ってきた訳だが。

街中で女性が少し身構えたり、恐らく交際している男性だろう。

後ろに隠れたりしていた……俺ってどんだけ危険人物扱いされてるんだ。

食堂入っても対応に出てきたのは野郎だったし……

噂流した奴……絶対潰す。

見つけられなかった時の為に……暢介に言って噂は嘘だって言ってもらおうかな。

しかし、王に『高順に関する噂は嘘だ』って言われるのは……恥ずかしいよな。

それが裏切りとかそういうのなら、まだいいが……女性問題って。
微妙に締まらねぇ……

22話　少し前に進みましょう（後書き）

さて、次回の本編は他勢力の視線になりましょう。

といっても、数名ですがね。

後は、一刀くんがちょこちょこと。

23話　ちょっと別の人達も（前書き）

本当は孫策も考えていたんですが。
どうにも組み立てが出来ずじまい……

構成力の無さが浮き彫りです。

23話　ちょっと別の人達も

暢介達が動いている時、何も他の勢力は止まっている訳ではない。
それぞれの考えの中で動いている。

～華琳ｓｉｄｅ～

「華琳様、細作からの情報を持って参りました」

自室での執務が一段落ついた頃、桂花が竹簡を持ってきた。
恐らく、大量に送られてくる情報から重要なものを選別してきているのだろう。

「ありがとう桂花」

桂花に礼を言い、私は竹簡を見る。

彼女の細作が手に入れてくる情報はどれも価値が高い。
時には相手の戦略方針までも手に入れてくるのだから恐ろしいものを感じる時があるわ。

（全く、荀氏の持つ情報網……恐ろしいわね）

そう思いながら、竹簡を見ているとある人物の所で指を止める。

「やっぱり、麗羽は公孫賛をまずは叩く様ね」

「そのようです」

麗羽、袁紹に放っている細作からの情報で軍事面での動きがみられるという報告。

となれば、相手は誰かとなるが……まぁ、背後を突かれるのは嫌でしょうからまずは北を狙うわよね。

そして、それが終われば。

「次の狙いは私と言う事になるわね。麗羽の性格を考えて」

「そ、そうでしょうか？　我々より、劉備を狙った方が楽かと思われますが」

分かって無いわね、桂花。

麗羽の性格を考えれば、劉備よりも私に向かう事はすぐに分かるわ。

まぁ、私の場合はそれなりに付き合いが長いというのもあるんでしょうね。

思えば、互いに子供の頃は一緒になって色々と悪さなどをしていたわね。

それが互いの親に知られて、一緒に怒られ……怒られている時に俯いていた時に目が合えば笑って。

それでまた悪さをして……

恐らく、もう二度とあの時の様な関係には戻れないわよね……

あの時の思い出、悪いものでは無いわね。

「互いの領土を見れば、劉備よりも私達の方が大きいわ。小さい領土より大きい領土を狙う……それが麗羽よ」

「……なるほど」

「今の所できるのは、国境の警備には注意するように通達するぐらいね」

ちょっと不安なのが、麗羽がいきなり私を狙ってくる可能性がどうしても捨てきれないという点。

殆ど無いはずなのにどうしても『麗羽ならやりかねない』という部分。

ため息をつきながら竹簡を読んでいくと別の勢力の話へと移る。

「袁術は領内の不満に対応できていない様ね」

「そのようです。領民達の不満がかなり溜まっている様で」

無理な税率などで民から取れるだけ取り、自分達の欲求を満たす為に使う。

こんな事じゃ、遅かれ早かれ、つぶれる事になるでしょうね。

それに……

「孫策がいつまでも、袁術の下で満足する人間には見えないわね」

あれは間違いなく猛獣の類、気を抜いたら即、首を噛み切られる

ほどのね。

袁術は檻に閉じ込めてるつもりだろうけど、既にその猛獣は檻から出て袁術の首に牙をむけている事でしょうね。

気づくのはいつかしら？　噛まれた瞬間？　それとも、死ぬまで気付かないのかしら。

「袁術の情報より、孫策の動きを追いなさい……どこかで動くはずよ」

「御意」

そう桂花に告げ、私は再び竹簡に視線を落とす。

残りの勢力は目立った動き、領内の変化は見られない。

劉備は新しい領内の把握などで苦戦している様。

鷺島は交通網の整備や治水などを重点的に行っているようね。

新しい将も手に入ったらしい……

「鷺島の元に新しく仕えている将の情報はあるかしら？」

「はい。新たに仕えているのは高順、司馬孚、？艾の3名の様です」

「……高順、どこかで聞いた事のある名前ね」

「以前は董卓に仕えていたようです。彼の率いる隊は陥陣営と呼ばれていたようで」

陥陣営という名を聞いて、私は思い出した。
陥陣営に狙われた陣は必ず落とされるという話。

実際にその光景を見ていない為、それが本当かは分からないにしても。
優秀である事は間違いないだろう。

ただ、報告している桂花の表情を見て、もう1つ分かった事があるわ。

（高順、男性なのね……軍師が、こう分かりやすい表情をしてていいのかしら……）

分かりやすい表情を浮かべる桂花にため息をついて、私は聞いた。

「元々董卓の所にいたなら、霞に後でどのような将だったか聞くべきね……それと、司馬孚は……」

「司馬孚は司馬懿の妹だと言う事です……それだけしか分かっておりません」

妹ね……自分と同じ所に仕える様にと司馬懿が呼び出したのかもしれない。
もしも、司馬懿と同じほどの力を持っているならば……かなりの将のはずね。

そうでなくても司馬家の人間……優秀じゃないはず無いわよね。

「司馬孚に関しても、司馬朗に聞いてみればいいわね。それと？艾……聞いた事がないわね」

「彼女は仕官試験で採用された様で、司馬懿が彼女の才能に惚れ込んだとの噂です」

「司馬懿が惚れ込んだ？」

私の言葉に桂花は頷く。

彼女の人を見る目がどれほどかは私には分からない。

桂花と同じぐらいの目を持っているならば、その？艾は優秀な将なのだろう。

だが、彼女の人を見る目が無いならば……特に気にする事は無さそうだけれど。

ただ、高順の力は確かなので、鷺島軍の力が上がった事は確かだろう。

そこに司馬孚、？艾の力も確かならば……警戒すべきかもしれないわね。

ふと、思い出した。

そう言えば……桂花に聞いてみたい事があったのを忘れていたわ。

「桂花。あなたに一つ、聞きたい事があるんだけど」

「はい。何でしょうか？」

「天の御使いの２人、あなたの目にはどう見えたかしら」

天の御使いという存在、馬鹿馬鹿しいと思う者もいれば、希望とする者もいる。

「あの2人ですか……」

桂花が少し嫌な顔をする、まぁ、この子は極度の男嫌い。
男性と関わった際には毒舌を吐き、相手を叩きのめす事がある。

いつか、罰として男と一日同室にでもしようかしら。
……やめておきましょう、自害しかねないわ。

彼女の人を見る目は確かで、優秀な人材を多く連れて来ていた。
男性という、含んだだけで『論外』といいそうだけれど、ここはその部分は取ってもらうわ。
桂花を分かっていると思うし。

「まずは北郷一刀ですが、彼は評価するに値しないかと」

「かなり厳しいわね」

「当然です。あの者は連合の軍議の際に鼻の下を伸ばし、将という将を品定めする様な目で見て、更に軍内の女性から『ご主人様』と呼ばせているという事。噂を聞けば下半身関係ばかりです」

そんな噂、聞いた事ないわね。
まぁ、桂花や秋蘭が消しているのかもしれないけれど。

「別の軍議の際には『呂布は自分が倒した』などと発言し軍議を止める始末、流石にあの時は一緒に居た軍師に同情しましたが」

「そう……」

何と言うか、聞けば聞くほど、あの男の評価が上がる様な話にならないわね。
まぁ、その程度の男を神輿にした段階で劉備軍も先が見えてるわね。

それにしても、どうしてああいう男に劉備達は忠誠を誓っているのかしら。
意味がわからないわ。

もしも、私が北郷を拾っていたら……今頃、首と胴体が離れてるわね。
その点では運が良かったとしか言えないわ。

「彼の話はもういいわ、それでもう1人の方をお願い」

「鷺島暢介ですか……」

そう言うと、桂花は考えるそぶりを見せる。
即答しない辺り、多少は考える部分はあるという事ね。

「彼に関しては、平凡としか言いようがありません」

「平凡ね」

「はい。ただ、あの種馬男と違い、その手の噂は皆無……細作もその様な情報は持って来ていません」

……細作に何を頼んでいるのかしら、この子は。
北郷の件に関しても細作経由なのかもしれないわね。

「それに……氷花が認めた者。氷花は、誰にでも仕える様な人ではありません」

「あなたの姪ね」

「はい年上ですが。氷花は私ほどではありませんが人を見る目は確かです。その氷花が認めた者なら、例え男でも認めざるえません」

嫌そうな感じを受けるわ。

表情も嫌そうだし……

「ありがとう桂花。現時点では劉備より鷺島の方を注意するべきね」

「はい。将の質などを見ても鷺島軍の方が上です」

この話は、ここで終わったのだけど。

夜になり、秋蘭が劉備から使者が来ているとの報告を受けて会うと、とんでもない事を提案された。

同盟を結び袁紹を討たないかという申し出、使者に聞けば提案者は北郷一刀……と言う事。

本来なら、将を集めて話をするべきなのかもしれないけれど、これに関しては即答でいい。

『断る』という選択肢しか存在しない。

同盟を結び、私に何の得があるのか、それがまるで見えない。

せいぜい、麗羽との戦で壁になってもらう事しか使い道が無いわ

ね。

使者に対し、『同盟を受ける気は無い』と伝え帰らせた。

後日、桂花から『どうやら劉備が袁紹との同盟を模索……』という報告を受けて更に呆れたわ。

多分麗羽は断るわ、彼女……同盟とかそういうものには興味を持たないだろうし。

彼女の配下も同盟の得を見つけられないでしょうしね。

劉備……いや、北郷、同盟が結べるなら誰でもいいというのは、頂けないわよ。

～一刀ｓｉｄｅ～

桃香が徐州の州牧という大出世を遂げた。

これで、鷺島よりも上の立場になれたって事だな。

聞いた話ではあいつには領土で無く物が与えられたらしい。

いい気味だ。

さて、徐州の状況を調べてみれば以前の場所よりも生産力は高いらしい。

人口も多いらしいので、ここで力をつければ一気に飛躍も出来るだろう。

ただ、そのぶん治める事が難しく、またこの生産力を狙ってくる

事が多いので大変だ。
そう、朱里は言っていたが。

大丈夫だろ？　俺って天の御使いだよ。
ちょっと街に出れば、まるで神様みたいな扱いされちゃってる訳だし。

上手く治めてやるさ。

まぁ、戦になったら愛紗達に任せる事になるけど……

そういえば、趙雲はいつになったら俺達の軍に加入するんだろうか？
やっぱあれか？　公孫賛が潰れないと駄目なのか？

趙雲が来てくれれば、こっちとしてはかなり戦力が良くなる訳だからな。

でも、初めて会った時、趙雲の目つきがかなり険しかったような。
……まぁ、気のせいだろ。

さて、当座の事を考えるとやはり同盟結んでおく方がいいと考えた。
丁度いい具合の壁になってもらいたいからな。

俺達は大陸を統一したい訳だし、なるべく損害は少なくしたい。

そんな事言えば、反対にあうのは分かっていた。
なので「早く大陸皆を笑顔にしたいんだ」といって納得してもらった。

扱いやすい奴らだからな……。
あっ、ちなみに相手は俺が選ぶって事で納得してもらった。

軍師の2人には一言、言うけどな。

初めに相手として目を付けたのは曹操、そりゃあ、史実での活躍は当然知ってる訳だし。
配下の将達も優秀なのが勢揃い、同盟が組めれば、最高の壁になってくれるはずだ。

って事で、さっさと使者を送ったが、即帰ってきて断られたという事だった。

何でだよ、袁紹の脅威は間違いなくあるはずだってのに。
俺達と同盟を結べれば、楽に戦えるかもしれないんだぜ。

史実で袁紹に勝ってるけどもだ……くそっ。

思えば、大陸統一を目指すなら曹操は厄介な敵だからなぁ。
さっさと潰した方がいいか。

出来れば俺達が潰して……曹操を……ククク。

見た感じ、曹操はドSだ。
そういう奴を屈服させるってのも面白いかもな。

そうなれば、曹操を潰す為の同盟ってのを模索しないとな。
現状でまともに当たっても負けるだけだしな。

結果的に言えば、袁紹も袁術にも同盟を断られた。
袁紹からは、俺達の力を借りなくても大丈夫だと言われ。
袁術は……門前払いだったようだ。

他にも色々な勢力に声をかけるも返事は、断りばかりだ。

「何でだよ！　どいつもこいつも」

一人で怒鳴っているが、答えは返って来ない。

「……後、声をかけてないのは誰だ？」

そう言って地図を取り出し、しるしの付いていない土地を見つける。

「……南郷郡……あいつか、まぁ、一応声かけてやるか」

鷺島の元へ使者を放つ。

その後、話をしに来てくれという返信を受け取った俺は焦った。

何しろ、その場で同盟締結ってなるかと思っていた訳だからな。
大体……何の話をしろって言うんだ。

そうだ……こういうときは……

俺は、桃香達を必死に説得して鷺島の所に行く時に朱里を連れていく事に成功した。
向こうに着いたら朱里に任せよう……上手くやってくれるはずな

んだから。

～朱里ｓｉｄｅ～

ご主人様が、鷺島さんとの同盟の話がいい方向らしいと聞いた時、私は信じられれないと思いました。

今の私達は徐州の内政に取りかかっている状態。

その状況下でご主人様は一人で外交……というより、同盟相手を探していた。

最初は曹操さんに使者を送ったそうですがすぐに断られてしまった。

そこからご主人様は袁紹さん、袁術さんにも使者を送るも結果は思わしくなかった。

それはその通りで、相手の事を考えればこの同盟が成立する訳が無いのだ。

この同盟により、相手の国に得となる部分など無いのだから。

得になるのは私達、内政、軍備、共に整っていない私達からすれば同盟相手からの支援が多くなる。

そうなれば損をするのは相手ばかり。

私達が提供できるのは……愛紗さんや鈴々ちゃんの武……それぐらいです。

曹操さんの所には、武に長けている将がしっかりといるので私達

を頼る必要はありません。
袁紹さんは広大な土地と財力を持っているのが強みです。
袁術さんの所は……門前払いだったようですが。
流石に西涼に使者を立てようとした時には止めましたが……何の為の同盟なんだという話です。
やがて、相手がいなくなったのかご主人様は鷺島さんの所に使者を立てました。
私としてはどんなに困っても、ここには送らないだろうなと思っていたんですが……
現在でも、ご主人様の前で『鷺島』という名前を言う事は出来ません。
言えば、ご主人様は、不機嫌となり話が進まなくなってしまいます。
やがて、帰ってきた使者が『会って、話したい』という返事を貰った事でご主人様は喜んだ様で。
桃香様達を説得し、私を連れて鷺島さんに会おうという話になりました。
ただでさえ、内政は上手く回っていないのに……雛里ちゃんに任せる事になりそうです。
それと、ご主人様……私に全てを任せようと思っておられるようですが……
私にはこの同盟で得となる部分が殆ど見えません……否、まるで見えません。

……あぁ、元直ちゃんに会えるというのに、嬉しくありません……

23話　ちょっと別の人達も（後書き）

さてと、次回は、また一刀君とのご対面。

ただ、今回は同盟を結ぶかどうかの話ですが。

さてさて……

拠点3　最後の舞台へ（前）（前書き）

さて、ここの前後篇でカップル成立となります。

まぁ、結果は見えてますよね・ｗ・；

強烈なライバルがいるわけじゃないので。

拠点3　最後の舞台へ（前）

～駿ｓｉｄｅ～

俺はそれなりに人生経験は積んできたと自負している。

だから、色々な相談に乗ったり出来る訳なんだが……

勿論、恋愛相談だって受けた事がある。

なので、今回も相談に乗れるのだが……いかんせん相手が。

「……まさか、主君の相談が恋愛って……」

頭を抱えたくなる。

目の前に居るのは暢介、俺の主君だ。

そんな彼が俺に伝えてきたのは……

『久遠に好きだと伝えたい……』って話だ。

あの久遠の酔っ払い事件以降、暢介は何とか告白の機会を窺っていたらしいんだが。

上手くいっていないらしい。

どうやら、好きだって言葉が口から出ようとしないらしい。

（言わなきゃ始まらねぇよなぁ）

と思うのは、自分が言う立場じゃないからだろうけども。

（しかし……久遠か……）

久遠の事を考えてみよう。

まず家柄、こいつは完璧だ……名門の家柄だからな文句無し。
性格は真面目で優しい……ついでに美人……文句の言い様がねぇな。。

確か、幽霊が苦手だったな、死んでいる者にどんな策も通用しないって言ってたか。

ふと、ちょっと前の幽霊騒動を思い出した。
あの時は半泣きで震えながら暢介に抱きついてたな。
あれをやられたら、並の男なら一発で惚れるな。

……あの時、久遠が聞いたっていう声の主は未だに分からないままだがな。

俺？　悪いけど女性慣れしてる身なんでな、効果は無いぞ。
そもそもだ、久遠は俺の好みに届いてはいない。

体型とか、かなりのもんだが色香や大胆さが今一つ。
あっ、酒に酔ったらかなり大胆になるが素面でそれをしないと評価は出来ない。

なにより……久遠には遊び心が足りなさそうだ。
これじゃあ、将来、暢介は他の女性にちょっかいなどを出した日には。

地獄を見る事になりそうだ。

まぁ、暢介が久遠一筋ってなら問題は無いだろうが。

「……尻に敷かれるのかねぇ」

「何の話だ？」

「いや、こっちの話だ」

思った事が口にでちまったか。

まぁ、暢介は分かって無い様だからいいとして……

「う～ん……」

既に自分の気持ちに気付いて、後は言うだけの展開。

こういう時に多いのは大抵が自分の気持ちに気付いていないって奴だ。

傍から見たら、何で気付かないんだ？　ってなる具合のな。

しかし、今回はそうじゃないからなぁ……ん？　ひょっとして。

暢介って一度、告白断られてるとかか？

告白しくじって臆病になってるとか？　十分にあり得る訳だが。

「なぁ……暢介。ひょっとしてお前、以前告白して失敗した事あるんじゃないか？」

「へ？　いや、そんな事は無いけど」

あれ？　予想と違った。
告白失敗じゃないとすると……ただの失敗を恐れてか。

「じゃあ、失敗したらその後の事を考えてるな、無意識に」

「……」

頷いた……そう言う事か。

聞けば、暢介は、ここに来る前に居た世界で告白される機会があったらしい。
しかし、その時に何も言えなかったらしい。

まぁ、よくあるわな。
告白されて、頭真っ白になって何も言えなかったって展開。

その後、その女の子と何度も顔を合わせたが、かなり気まずかったらしい。
今回も同様の事があるんじゃないか、そう思っている様だ。

断られた後も久遠と暢介は顔をあわせる機会はある。
何しろ、王と軍師の立場だからな。

そこで、気まずくなったりしないだろうかとか。
無意識に思う事は……まぁ、あるわな。

特に久遠は筆頭軍師だしな。

「俺から言えるのは失敗の後を考えるなよ。成功の後を考えな」

「成功……」

「そうさ、久遠は美人で頭も良くて、出る所はバッチリ出てて」

「……いや、俺は別にそう言う部分は」

「確か、料理も上手いんだろ？　家柄も完璧だ」

「そ、そうだな」

「そんな子に、お前は、大好きだって言われたんだろ？　だったら告白は成功するに決まってるだろ」

「でも、あの時の久遠は泥酔してて……」

「あのな、素面の久遠を考えろよ。お前に面と向かって大好きって言うと思うか？」

「……」

少し考える暢介。

俺が思うに、久遠は恋愛事などは苦手というか経験が殆ど無いんだろう。

なので変に焦ったり、取り乱したりするのが多いのはそういう事なんだろう。

それが酒の力が入った事で解放されて……あの告白になったって事だろうな。

「まぁ、俺から言えるのはさっさと告白しろって事さ。大丈夫、絶対に成功する。俺が保証するよ」

「……」

「もし失敗したら、俺の事を好きなだけぶん殴ってもいいぞ」

それだけ、俺は成功するって確証を持ってるからさ。

そう俺は続けた。

暢介は未だに悩んでいる様だが、多分、大丈夫だろう。

表情は悩んでるが目は何かの行動を起こそうという力を感じる。

暢介が俺に礼を言って部屋を出ていってから俺は少しだけ考えた。

（大丈夫だって言ってたが、もしも失敗したらどんだけ殴られるんだ俺？）

ありえねぇな……苦笑し俺はその考えを捨てる。

～氷花ｓｉｄｅ～

「どうして記憶が無いって設定にしたかなぁ……」

「だって……酔った勢いで告白って本気に思われないと思ったから」

目の前の久遠ちゃんに私はため息交じりに言う。

あの泥酔事件以降、久遠ちゃんは落ち込んでばっかりだ。

まぁ、自分の思いをまさか酔った勢いで発言なんて事になったからねぇ。

「私には久遠ちゃんが、普段の仕事中に暢ちゃんと普通に喋ってる姿が信じられないよ」

そう、仕事中だと何事も無かった様に会話をしているのだが。

一度、仕事が終わるとあの時の告白を思い出し、後悔するという流れに落ち着いている。

あっ、ちなみに私の胸揉まれ事件は大した結果にならなかった。

うん、特に変化は無かったよ……グスン。

「でもさ、最近見てたら暢ちゃんの方も久遠ちゃんに何かを言いたそうな顔してる時あるよ」

「……多分、お酒の事だと思うんだけど」

「いやぁ……そう言う事じゃないと思うんだけどなぁ」

暢ちゃんのあの表情は多分……

「久遠ちゃんの告白を聞いて、返答しようとしてるのかな」

「ふぇ！？　で、でも、僕は記憶が……」

「久遠ちゃんは記憶が無い設定だけど、暢ちゃんはしっかり覚え

てるよ。酔ってない訳だし」

「そ、そうだよね」

そう言って頭を抱える久遠ちゃん。

しかし、展開的には既に大詰めに来てるのではないだろうか。
後は暢ちゃんが返答するか、久遠ちゃんが素面で再度告白するか。

（素面の久遠ちゃんが告白……無理っぽいよねぇ）

多分、顔を真っ赤にしてアタフタしながら何も言えなくておしまい。
この流れの気がしてならない。

だからといって、私が道筋を作っても意味が無い。
そもそも、私自身が告白なんてやった事……ないし。

はぁ……

「ねぇ久遠ちゃん。やっぱり、もう一回想いを伝えるべきじゃないかな。素面で」

「……」

「このまま、ずっと黙ってるよりはさ……」

「で、でも、もし断られたら……次から暢介と顔合わせるのつらいし……」

「いやいや……失敗前提に考える必要無いって」

駄目だ、今の久遠ちゃんは完全に失敗しか考えられなくなってる。
何とかしないと。

「失敗する事を考えなくてさ、成功した後の事を考えようよ」

「せ、成功した後」

「そうそう。成功して暢ちゃんと仲良しな自分を想像してごらん」

「……」

そうなる光景を想像中の久遠ちゃん。
おっ、表情が変わって……

「……えへへ」

だらしなくなっちゃったよ……

「……久遠ちゃん、とりあえず涎、拭いてね」

「あっ、ごめん」

「いや、成功した未来図が、はっきり見えた様でよかったよ」

表情を整える久遠ちゃん。
うん、さっきまでの弱々しさが無くなってる。
……意外と久遠ちゃんって単純だよね。

言ったら怒られるけどさ。

「さぁ、その未来図が本物ってのを証明する為にいかなきゃね」

「そ、そうだね。よし！」

そう言って立ち上がった久遠ちゃんは私の部屋から出てい……かず。

扉の前に立つと私の方を振り返り。

「き、機会は僕の自由でいいよね？」

と、言ってきた。

「……そ、そりゃあね。私が『行け！』って言う訳にもいかないでしょ」

「だよね」

そう言って今度こそ、久遠ちゃんは私の部屋から出ていった。

「はぁ……」

何か、ひどく疲れた気がした。

恋愛の相談事なんて慣れない事をしているからかもしれない。

そもそも私自身が、そんな経験が無いというのにだ。

久遠ちゃんの恋を後押し中な訳だから。

（久遠ちゃんと暢ちゃんがくっついたら、私も相手探そうかな）

……何て事を思ってしまった。

～？ｓｉｄｅ～

そして始まる、最終舞台。
時間は夜、月が凄く綺麗に見える。

そして場所は、城壁の上。
２人の関係が変わるのか、壊れるのか。

そんな時に……

「何で皆、ここに居るのよ！！」

と、氷花は小声で叫ぶ。

氷花の視線の先では、暢介と久遠が並んで立っている。

彼女は２人に見つからない様に隠れようとしたのだが。
隠れる場所には既に多数の先客が。

というか、鷺島軍の将が勢揃いしていた。

全く……暇な方々ですね。

「いや、俺は暢介の様子を見に」

という駿。

「久遠姉様の覚悟を見届けようと」

真剣な眼差しで言う永遠。

他はどう見ても興味があっての事だろう。

葵・命・燈は視線を氷花から外す。

鈴佳だけは自分が何でここに居るのかちょっと困り気味だった。

拠点４　最後の舞台へ（後）（前書き）

え～っと、ちなみに拠点はこれ以降もあります。

何も成立して終了という訳ではありませんので。

拠点４　最後の舞台へ（後）

～久遠ｓｉｄｅ～

（月……凄く綺麗だなぁ……）

月が綺麗に見える中で僕は、今自分がここに居る理由を思い出す。

（ここで、僕の気持ちを伝えないと……）

だから、今日の夕方、暢介から。

『久遠、君に話があるんだ』

と言われた時は、初めは驚いたけど……機会を得られたと思い了解した。

そして……ここに居る訳だけど。

「月、綺麗だな……あの日と同じだ」

暢介の言葉に僕は視線を月から暢介に移す。

暢介は月を眺めている。

……そういえば、あの日、旅立つ前日も同じ様に月が綺麗だった。

「……そう、だね」

僕も、もう一度、視線を上に移す。

思えば、僕はいつから、暢介に惚れていたのだろうか……？
旅立つ決意をしたあの日？　それとも、城主となってから？
いや違う……あの日、倒れていた暢介を見つけた時から……

一目惚れだった……母上の言ってた事って本当だったんだな……

『いい久遠。本当に好きな人が出来た時は、一目惚れになるのよ』

当時の僕は、勉学に勤しんでいてそういう話にはまるで興味が無かった。
だから。

『ふ～ん』

と、適当に相槌を打っていたのだが……

『話を聞きなさい～、折角私が、あの人と出会った話をしているのよ』

酔っていた母上に耳を引っ張られ、嫌々ながら聞かされた恋愛話。

『だから、きっと久遠も好きな人を見つけた時は一目惚れ、そしてその恋を大事にしなさい』

そう母上は言っていた。

「ね、ねぇ暢介」

いつまでも月を眺めていても、埒があかない。
僕は威を決し、口を開く。

「……」

暢介が無言で僕の方を見る。
真剣な眼差し……

「じ、実はね……僕、暢介に嘘をついてた」

「少し前に、お酒に酔っ払って僕がやってた事……あれ……全部覚えてるんだ」

「だから、僕が暢介にした事も……全部、覚えてる」

暢介は『やっぱりか……』と苦笑しながら言う。

「久遠、必死に落ち着こうとしてたけど、目が泳いでたよ」

「う……」

「まぁ、言うべきじゃないと思ったから……今まで言わなかったけどさ」

そう言って暢介の表情が再び真剣なものになる。

落ち着け……落ち着くんだよ僕。
大丈夫……大丈夫だから。

「暢介……」

「ん？」

「あの時の言葉に、偽りは無いから」

「……」

「僕は……暢介の事が……好き……」

言えた……やっと。
僕が言いたかった言葉がやっと……

～暢介ｓｉｄｅ～

「僕は……暢介の事が……好き……」

そう久遠が言った。

もしかしたらと思っていたけど、実際に言われるとやっぱり嬉しいよな。

「暢介。答えを聞かせて」

久遠が言う。

さぁ……俺も言おう、ちと長くなるけどな。

「……俺って、最初の頃からずっと久遠の世話になってたよな」

「え？」

「拾ってもらったりしてな……それに俺、最初は久遠の事、男だって思ってたしな」

「そういえば、そうだったね」

「今思えば、どうして男だって思ったのか……思い込みって怖いと改めて思ったよ」

「……」

さっさと本心言えよって突っ込まないでくれよ。
緊張してるんだ……分かるだろ。

「久遠の家って名門なんだよな……俺さ、それ知って。余計に緊張しちゃったよ」

「ぼ、僕は別に」

「俺も、当初は緊張していたんだけど……ある程度一緒に行動してたら、気にならなくなったけどさ」

「あ……そうなんだ」

「まぁね、それでも連合の直前までは気にしてたんだけどな」

「最近だね、それで、名門が気にならなくなって僕はどんな風になった？」

「真面目で優しくて、街に出れば子供達がすぐに集まってくる人気者って見える様になったかな」

そう、久遠が街に出ると本当に子供達が集まってくる。
同じぐらいに葵にも子供が集まる事があって、一度2人を同時に出したら大騒動になっていた。

ただ、2人に共通しているのは子供が大好きだって事。
おっと……ここで、別の女性の話をするのはノーマナーだよな。

「ちょっと回りくどいな……はっきり言った方がいいよな」

「……」

「久遠、あの日のお前の言葉を聞いてさ……俺、少し考えたんだ……俺は、久遠をどう思っていたのかってね」

あの日、酔っ払った久遠が俺に言った『好き』という言葉。
あの後から、俺は自分自身が、どう思っていたのかを考えていた。

あ～、仕事中は流石にそういう事は考えなかった。
仕事とプライベートは別にってね。

「そしたらあっさりと答えは出たよ。久遠、俺も……君の事が好きだ」

ようやく、言えた。
俺の気持ち……全く、勿体ぶって結局、好きって単純な一言だけだったな。
そう思った俺に久遠が抱きついてくる。
それを俺は……しっかりと抱きしめ返した。

「でも、いいのか？　久遠、俺を選んで」

「ん？」

抱き合っているままで、俺は久遠に語りかける。

「きっと、俺はこれからも久遠に迷惑をかけ続けると思う。何しろ俺って平凡だからさ」

「……何をいまさら」

「へ？」

視線を降ろすとジト目の久遠と目があった。
あれ？　さっきまで泣いてたのに。

「あの時に言ったでしょ、暢介の出来ない事は僕が全部やってあげるからって」

「これから、どんどん増えていくと思うけどな」

そう言うと、久遠はニコっと笑う。

「任せて、今の僕は何だってやってみせるよ」

だって、そう言って久遠は一呼吸入れる。

「好きな人の為だもん」

思わずドキッとする。

いや、その言い方……そして笑顔、反則だ。

「久遠……」

「暢介……」

久遠が眼をつぶる……これは、間違いない。

キスへの流れだ……うわぁ、すごく緊張するぞ、おい。

見れば、久遠は既に待っている状態。

このまま待たすのも失礼だよな。

そう思って深呼吸をして、いざ！　と身構えた瞬間。

『おい、押すなって！』『ちょっと！』

という声が背後から聞こえた。

久遠も気付いたのか目を開ける。

俺と久遠は少し離れて音の方を見る。

そこには……

「あっ！　……どうも」

鷺島軍の将が勢揃いしておりました。

「やりましたね久遠姉様」

と、喜んでいる永遠。

「いやぁ～よかった」

と、胸を撫でおろしている氷花。

（な、言ったとおりだったろ）

と、目で言ってくる駿。

燈・葵・命もおめでとうという感じの表情を浮かべている。

鈴佳は顔を真っ赤にして俯いていたが。

さて、こんな祝福ムードの中で終わる……訳もない。

「あ……あなた達は……」

隣を見れば、久遠が方を震わせながら低い声を出している。

（あっ、滅茶苦茶怒ってる）

と、俺は直感していた。

まぁそれはそうだ、告白の場面をスタートから見られて、互いに抱きしめあってるのも見られて。

さぁ、キスで締めるという時に乱入という訳なんだから。

これは怒ってもいいレベルだな。

「げっ！　やべぇ、逃げるぞ嬢ちゃん」

「え？　ど、どうしてですか？」

駿は永遠を急いで抱えるとさっさと逃げる。

あ、お姫様だっこってやつか……いいなあれ、真似してみようかな。

「やば！　逃げるよ命、燈」

「「そ、そうだね」」

といって、凄い勢いで逃げる3人。

残りは氷花と鈴佳なんだけど、鈴佳は……許そう。

何ていうか、何故かここにいて気付いたら告白を見ていたって感じなので。

多分、皆が集まってたから（何してるんだろ？）ってだけだったんだろうしな。

結果として。

「氷花！　どうしてここにいるの！」

「いや、私としては久遠ちゃんの告白の結末を見届ける役割があるかなって……イタッ！」

あっ、拳骨一発。

「結果はちゃんと伝えるつもりだったのに……それに、皆を連れてきたのも氷花でしょ」

「ちょっと待ってよ。これに関しては私は何の関係も無いよ、大体、私が最後に来たんだから」

”これに関して”って事は、他には何かやったんだなって事ですね分かります。

はぁ……キスのチャンスはまた今度かね。

雰囲気的には最高の場面だったのにな。

見れば、未だに久遠の氷花への説教は続いている。

これは……もう一度あの雰囲気に戻るのは無理っぽいな。

俺は苦笑を浮かべ、鈴佳の方を見る。

鈴佳は未だに、さっきの俺と久遠の光景を忘れられないのか顔は真っ赤なままだった。

～氷花ｓｉｄｅ～

あ～頭がすっごく痛い……まぁ、今回はしょうがないよね。

私としては久遠ちゃんが暢ちゃんと結ばれた訳だから嬉しい話しだよね。

後はこのまま、順調に行って……2人の子供とか出来ちゃったらもっと嬉しいなぁ。

あっ、そうなったら2人の子供の教育係って私がしようかな。

でも、久遠ちゃんに止められそうだなぁ。

まぁ、その前に私も相手探さないとなぁ。

ここで私も暢ちゃんって言ったら……間違いなく久遠ちゃんに殺される。

うん、それこそ、かなりの惨殺になるんじゃないかと思う。

それこそ……

『ねぇ、氷花……最後はどうなりたい？　斬死？　轢死？　圧死？　頓死？　何がいい？　僕が何でも叶えてあげるよ』

みたいな展開……うへぇ、ありえそう。

まぁ、2人の仲を引き裂く気は無いけどさ。

となると……駿くんかなぁ……でも、駿くんの好きな女性って大人な女性だよね。

そう言って私は自分を見る。

年齢的には大人の女性なのだが……体型を見ると、子供だ。

背も低いし、出る所は、お情け程度しか出ていない。

これでは魅力的とは言えないだろう。

……世の中ではそういうのが大好きってのもいる様だけど。

駿くんは間違いなく違う。

はぁ……どうしようかな私。

拠点４　最後の舞台へ（後）（後書き）

しばらくは拠点はあっても、番外拠点になるかもしれません。

何しろ、男１人なんで・ｗ・；

２４話　もっと違う人達も（前書き）

冥琳の喋り方が良く分かって無い僕です。

後は、雪蓮の母親の呼び方が『母様』だったよなぁと思っていております。

馬家は……以降の登場があるのかしら（謎

試しに、～○○ｓｉｄｅ～を抜いてみました。

２４話　もっと違う人達も

連合が解散し、それぞれ領地に戻っていった。
私達も、領地に帰ってきている。
とはいっても、私達の領地じゃないけれど。

その領地を所有している袁術、現在彼女の領内は大混乱している。
まぁ……自分の思いつくままに税率を変更する。
おかげで民は苦しんでいて、領内から出て行った民もいるみたい。
領内運営を適当にしていれば、いずれはこうなるのは分かっていたはずなんだけどね。
側近を含めて、何を考えてるのかしら？
……何も考えてないのよね、きっと。

こうなると、圧政を布く袁術に対して、正義を掲げての討伐。
そして、袁術の領地を全部頂くという行動も取りやすいんだけど……

ただ、今の私はちょっと別の問題を抱えているのよね……

「……蓮……雪蓮！」

「ん？　何？　冥琳？」

考え込んでいた私の耳に、聞き慣れた声が聞こえた。
どうやら、ずっと私の事を呼んでいたみたい。

「何？　じゃない」

そんな怖い目で見ないでよ～

「計画が順調に進んでいるから、その話をしていたというのに全く聞いていないし」

「あぁ……そうだったわね」

そう言って私は少し笑みを作る。
ただ……それで安心するのは、付き合いが浅い相手……長い付き合いの相手だと誤魔化せないよね。

「……どうしたんだ？　ここ最近の雪蓮、おかしいぞ」

「あ～、ちょっとね……変な夢を見ちゃって……」

「夢？」

冥琳の言葉に頷く。
最近、よく見る夢の内容が、気になって落ち着かないのよね。

出てくる相手が相手だけにねぇ……

「実は……母様が出てくるのよね」

「え？」

冥琳が驚きの表情を浮かべる。

私だって驚いたのよ、まさか私の夢に出てくるなんて思わなかったから。

「悲しい表情でね……それで何かを言ってるんだけど……」

「……分からない……か」

その言葉に頷く。

多分、夢の中では聞こえてるはずなんだろうけど……目が覚めたら忘れてるって感じかしら。

何度も見てるのに、何で覚えてないのかしら私。

「まぁ……あくまで夢なんだから気にしなくてもいいと思うんだけど……」

「ふむ……」

そう言うと、冥琳は考え込んでしまった。

あぁ、駄目駄目。

「いいわよ冥琳。夢に関しては私が何とかするから……って、どうすればいいかは分からないけど。今は、やる事あるし」

「あぁ。そうだったな、とりあえずは計画は実行に移せる所まで来ている。後は機会を待つだけだ」

「待つだけね……早く動いてくれないかしら袁術。さっさと殺したいのに」

そう言って笑みを浮かべる。

さっきのとは違って、これは心の底からの笑みよ。

笑みを浮かべながら、私はある事を思い出した。

連合から帰ってきたら、聞いてみたいと思ってた事だったんだけど。

「そういえば冥琳。あの天の御使いの2人ってどう思ったかしら？」

「あの2人か……そうだな」

そう言って冥琳は少し考えるそぶりを見せる。

「とりあえずは、あの北郷という男は、あまり評価すべきではないかもしれないな」

「へぇ～」

北郷というと、あの劉備と一緒にいたやつね。

よく分からない自信を持ってて、劉備達に『ご主人様』って……

あれって、本人が呼ばせてるのかしら？

「軍師のみの会議の際に、自慢話ばかりでな……進行にかなりの支障をきたしていた」

「あ～そんな事があったんだ」

「流石に隣に居た劉備軍の軍師には同情したがな……現在は、外交を一手に引き受けてるらしい」

「外交ねぇ……」

「曹操、袁紹、袁術に使者を立てて同盟を模索しているらしい。まぁ、全部断られてるらしいが」

「そりゃあ……あの連合で、自分がどんな風に見られていたか分かって無いのかもね」

印象っていうのは案外馬鹿には出来ないものよね。

それに、劉備軍と同盟を結んで得なんてあるのかしら？

それにしても、不幸なのは劉備よね。

あんなのを持ってる為に、他勢力からの印象は最悪なんだから。

天の御使いって看板に助けられてるって話よね。

にしても、何で劉備達は、彼に忠誠を誓っているのかしら……謎だわ。

もし、私が彼を保護していたら……う～ん、考えるのやめよう。

『もし』とかあんまり考えるべきじゃなさそうだし。

「もう1人の鷺島は……平凡だな」

「平凡……ね」

「ああ……それぐらいしか評価が出来ないんだ」

そう言って冥琳は少し俯く。

まぁ、人物評価で、平凡としか言えないのは、くやしいわよね。

それにしても……早く、袁術、動かないかしら。

本当なら、今すぐにでも殺してあげたいのに待ってあげてるのよ。

早く処刑台に乗ってくれないかしら。

「……そう、董卓を助けられなかったのね……」

連合から帰ってきたホウ徳の報告を聞き、私は呟く。

ここは、執務室で私はため息をついていた。

「申し訳ありません」

そう言ってホウ徳は頭を下げる。

「いいのよ黒羽。連合に参加し、董卓を助けるなんて無理難題を押し付けた訳だし」

そう、今回の連合が袁紹の我儘だと言う事は分かっていた。

董卓とは多少の付き合いがあり、彼女の事はそれなりに知ってい

た。

まぁ……董卓の母親とも知り合いではあるんだけど。

兎に角、他人の我儘に董卓を死なせる訳にはいかないという事なのだが。

私達が董卓側につけば、恐らく、連合軍は私達も潰しにかかるだろう。

かといって、無視を決め込むのもよろしくないと判断し。

連合側で参戦、しかし、董卓を救出するという。

厳しい道を選んだ訳なのだが。

肝心の私が、病気で倒れてしまい、療養してしまった。

軍自体は、娘の馬超……翠に任せたのだけれど。

あの子にはこの件は伝えていなかった。

理由は単純で、あの子は隠すのが苦手だ……知っていれば、どこかでボロが出ると思ったから。

だから、黒羽にだけ伝えていたのだけれど。

董卓を助け出せなかった様だ。

「それで、連合軍に参加した人達にどんな印象を持ったのかしら黒羽？」

「そうですね……人間の欲と言うものが、あそこまではっきり見

えるとは思いませんでした」

「欲ね……董卓の件が嘘だと言う事を理解していた者もいたかしら？」

「恐らく、殆どの勢力は気付いていたかと……それでも、名声などの為に参加していた様です」

やはり、名声か……これからの大陸を考えると。

少しでも欲しいでしょうから……

「後は、噂の天の御使い２人にも会いましたが……両極端でした」

そういう黒羽の顔が、少しずつ赤くなっていく。

はて？　何かあったのかしら。

「北郷という男……女性の将を見る時に目が……その…」

黒羽の顔の色が真っ赤になる。

髪の色と合わさって、赤一色ね。

あぁ……なるほど、黒羽はこの手の話は苦手だ。

恐らく、いやらしい目で見られたのだろう。

しかし……両極端って事は。

「もう１名、鷺島だっけ？　彼は、違ったという事かしら？」

「……は、はい。彼の目は、そうではありませんでした……」

まぁ、北郷という者のおかげも考えられるわね。

ちょっといやらしい目つきでも上がいれば印象は無いわよね。

ん？　黒羽の表情がおかしい……何か、言おうか言うまいか悩んでいるようだ。

「黒羽、何か言いたい事があるのかしら？」

「……じ、実は、兵士からある話を聞きまして」

そう言うと、黒羽は懐から一枚の紙を取り出した。

そこには似顔絵が……って、これは！

「これは董卓……黒羽。これをどこで？」

「実は、洛陽の復興の最中に鷺島軍の一部が撤退をしておりまして。それに関しては、負傷兵とその護衛という事だったのですが」

黒羽に先を促す。

「その中に綺麗な女性がいたというのを私の部隊の兵士が見ていたそうで……あんまり、嬉しくない事ですが」

まぁ、仕事中によそ見してた訳だし。

怒ってもいい部分かもしれない。

「その女性の絵がそちらで……蒼様の言っていた特徴と似ておりまして」

「……」

確かに、そこに書かれていた人物は董卓によく似ている。
似ているでは無く、本人かもしれない。
しかし……

「董卓は自害したんじゃなかったの？」

「自害したと伝えたのは、鷺島軍です……恐らく、蒼様と同じ考えで参戦していたのではないでしょうか」

椅子にもたれかかる。
この子が董卓なら、私としては嬉しい事だ。
ただ……鷺島軍と私達は友好関係は無い。
その為、確認などは出来ないだろう。

『董卓を保護したと聞いた』なんて書状を送ろうものなら、警戒される。
間違いなく……

「今は、董卓が助けられた事を喜びましょう……にしても、黒羽。この絵は一体どこで」

「その兵士が『こんな可愛い子を見たんだぜ～』と言って自慢していたので」

一発かまして、絵を手に入れたらしい。

おかしい。
黒羽の部隊は精鋭のはずなんだけど……

「黒羽……」

「……もう一度、一から鍛え直します」

そう言っていた黒羽の目は……本気でした。

「ふぅ……相変わらず、女性の方々の目が厳しいなぁっと」

そうぼやきながら俺は、街の中を巡回していた。

以前なら、歩きながら色々とお話が出来ていたんだが。

噂のせいで女性が近づいてくれない。

……本当に流した奴……潰す。

とはいっても、言いだした奴を見つけるのは困難だから嵐が去るのを待つとしよう。

噂ってのもしばらく経てば無くなるだろうしな。

「……ん？　なんだ、あの人だかりは？」

視線の先で、人だかりが出来ており何かを見ている。

人だかりに近づくと、巡回しているはずの隊の兵士達の姿も見える。

おいおい、さぼるなよ。

「お前ら、仕事をさぼるとはいい度胸だな」

「……あっ！　こ、高順様」

兵士達、凄く焦ってるな。
そりゃあ、さぼってるのを見つかれば焦るか。

「で、この人だかりは何だ？　何かあったのか？」

「いえ、それが……」

兵士達は皆、視線を逸らす。
おいおい……

「さっさと言え」

「はい。何でも、女性が一人、大量の肉まんを食べているらしく」

「はぁ？　肉まん食ってるだけでこの人だかりか？」

俺は呆れた表情になる。
だって、いくらなんでも肉まん食ってて、これだけの人が集まるなんておかしいだろ。

娯楽が無いって事なのかねぇ。

「それが、尋常では無い量らしく……それにですね」

「ん？」

「食べている様子が、凄く可愛いらしく。多くの人が彼女の為に

買っている様で」

「……意味が分からん」

食べる姿が可愛いから買ってあげるねぇ……

あれ？　俺も経験がある様な……

『おい恋……いいかげん食べ終わってくれないと。俺の財布が限界なんだが』

『？』

あぁ、彼女に何を言っても無駄かもしれない。

大体、何で俺が彼女の為に金を出してるんだ？

この子と俺が付き合ってるなら、喜んで出そうじゃないか。

だが、そんなもんじゃないからな……

『……美味しいか？』

『（こくこく）』

『そうかよ……』

頷く彼女に俺はため息をつく。

まだまだ、食事は終わらなさそうだ。

その後、食べている彼女の頭を撫でようとした所で。

チビ助の飛び蹴りを喰らった訳だが……あいつ、どこに居たんだ。

……いやいや、確かにあいつは現在行方不明だけどさ。
しかし、こういう事ってあいつぐらいしか起きないだろう。

ま、まさかなぁ……
そう思い、俺は中心へ向けて進みだした、

「悪い、ちょっと通してくれ！」

そう言いながら人込みをかきわけて中心へ向かう。
っていうか、本当に人多すぎるぞ。

痛！　今、足踏まれたぞ！

ようやく人込みを抜けた先で、黙々と肉まんを食べている人物を見て。
俺は頭を抱えた。

確かに、彼女とまた会いたいとは思っていたけどさ。
こういう再会はちょっと予想外だぞ。

「……何やってるんだ、恋」

彼女は食べるのを止め、俺の方を見る。

「あっ。駿」

いつも通りの言葉を言うと、再び食べ始めた。

おいおい、奥で亭主が『もう、在庫が無いんですよ～』ってマジ泣きだぞ。

もう止めてやれよ恋。

それと、周りに居る奴ら。

まるで、自分の娘を見る様な温かい目で見るな。

お前らの善意で亭主が泣いてるんだからな。

……あれ？　そういえば、チビ助がどこにいるんだ？

恋といつも一緒のはずなんだが。

その時の俺は気付いていなかった。

人込みから離れていく集団の中の一人が、やけに暴れる袋を持っていた事に。

２４話　もっと違う人達も（後書き）

黒羽（クレハ）・蒼（アオ）と読みますです。

チビ助、誰の事かはすぐに分かりますよね・ｗ・；

暢介と一刀の同盟話は……もうちょっと先にしますです。

25話　一気に強化（前書き）

ちょっと主旨を変更する事にしました。

完全オリキャラ陣営を考えていましたが。

色々と大変で、作業が進まないので、多少ですが。

恋姫登場キャラを陣営に加えるという形を取りました。

って……元々、月がいるんですけどね・ｗ・；

25話　一気に強化

「そういやぁ恋。お前、チビ助と一緒じゃないのか？」

長い食事が終わり、俺と恋は、店から離れた場所で話していた。
店で話してても良かったんだが……まぁ、亭主の泣き顔を見るのもなんだしな。

「？」

首を傾げる恋。
あぁ、そうか……チビ助じゃ通じねぇか。

「音々は、一緒じゃないのか？」

「……一緒に来た」

「そうか……で、今、あいつはどこにいるんだ？」

辺りを見回しても、チビ助……音々の姿は見えない。
どっかに隠れている必要性は無いしな。

いや、どっかに隠れてて俺の行動次第では飛び蹴りをしに来るかもしれん。
……あいつ、どこからでも出てきてたからな。

やってみるかね。
そう思い、俺は恋の頭を撫でる。

「……ん？」

少しだけ驚いた表情の恋。

うん……これはこれで、可愛いな。

しばらく撫で続けるも、音々が出てくる様子は無い。

……おかしいな。

撫でるのを止める。

「おかしいな……そろそろ、出てきてもいい頃なんだが」

2人して辺りを見回すが出てくる気配なし……

音々が恋を置いて、どっかに行く訳ねぇからなぁ……

そんな時だった。

「あれ？　駿くんじゃん」

声をかけられたので、振り向くと。

そこには氷花の姿があった。

「氷花か」

「どうしたの……って、あらら、おじゃまだったかな？」

恋を見て、申し訳なさそうな表情を浮かべる氷花。

いやいやそうじゃねぇから。

「おじゃまじゃないんだが……って、氷花。その手に持ってるの

は何だ？」

氷花の右手を見ると帽子が握られていた。

「ん？　あぁ、これね。さっきさ、そこの路地で男性の集団が走り抜けたんだけど……その時に、男の一人が持ってた袋から落ちたやつ。そういえば、あの袋。暴れてたような」

そう言って首をひねる氷花。

……何だろう、お前の持ってるその帽子、見覚えあるんだけど。

「……それ、ねねの……」

「やっぱりか、見覚えがあると思ったんだ。おい氷花。その集団、どこに向かった」

詰め寄る俺に、少したじろぐ氷花。

「え～っと……あの道だから……あぁ、近々取り壊す予定になってる住居かな」

建物の情報から、場所を思い出す。

確か、人がいなくて老朽化が激しく、また、子供などが遊びに入って怪我するとかで取り壊す予定だったか。

あぁ、あそこなら人はいないわな。

子供に関しても、親が厳しく注意してるし……確か、立ち入り禁止の立て札も立ててるしな。

「あそこだな！　よし、行くぞ恋！」

俺の言葉に恋も頷く。
ん？　少し怒ってる感じだな。
歩を2、3歩、進めた所で俺は立ち止り氷花の方を見る。
「あっと、氷花。近くに居る兵士に、取り壊し予定の所に来る様に伝えてくれ」
「え？　あっ、分かった」
氷花が頷くのを確認し、俺と恋はその場所へと走り出した。
「そう言えば久遠さん。あの立て壊す建物は、どうするつもりなんですか？」
仕事に一段落がつき、休んでいると、私は思い出したように言ってきた。
「う～ん。今の所は更地かな、住民が増えれば家を作る必要があるし……他にも色々とね」
「そうですか。あの家、かなり大きかったですよね」
私の言葉に久遠さんは頷く。
豪邸でしたし……ただ、色々といわくつきな家らしくて。
元々は、かなりの財をなしていた有力者が作ったそうなのですが。

あらぬ疑いをかけられ、財を全て没収……最後には、一家そろっての自害。

その後も、色々な方が住んだらしいのですが、財を無くすか命を亡くすかだったようで。

ついには誰も住まなくなったそうです。

思えば、この話を聞いた時の久遠さんは半泣きでしたね。

「でも、よく考えたら。壊したら幽霊ってどこに行くんですかね？」

「へっ！？」

身体をビクッと震わせる久遠さん。

「あの家に住んでいる訳ですから。壊したら、家を探して街の中を徘徊するのでは」

「……こ、壊すの止めよ……」

「でも、あれだけの土地を使わない手は無いですよ」

「そ、それはそうだけど……」

どうしよう、どうしようと呟く久遠さんを見て……私は苦笑する。

本当に駄目なんですよね、この手の話は。

結果的には、立て壊して、その後にしっかりとお祓いをしてもらいましょう。

と言う事で落ち着いた。

普通に考えればすぐに思いつくはずなんですけどね。
やっぱり、久遠さんって幽霊関係をちらつかせると本当に混乱しますね。

「んー！　んー！」

まさか、こんな目に遭うなんて思いもしなかったのです。

恋殿を囲む人の群れに押し出された所を、変な男の1人に捕まり、そのまま袋の中に押し込まれたのです。
そして、今、廃墟らしき場所で椅子に縛られた状態なのです。

恋殿、助けに来て下され。

「よし、ここなら見回りも来ないだろう。さっさとやる事、やっちまうぞ」

「そうだな」

そう言って、2人の男は下穿きをおろしはじめた……って、まさか……

「んー！」

嫌ですぞ、こんな連中の慰み者になるなんて。
慰み者になるぐらいなら、いっそ舌を噛み切って……
って、猿轡されてるから噛み切れないですぞ！

「安心しろ、命まではとらんから。俺達で楽しんだ後は、金持ちの所に売ってやるから……お前みたいなのが好きなやつもいるからな」

余計、嫌ですぞ！

死にたくても猿轡のせいで死ねない。
このまま汚されてしまうなんて……

そう、音々が思った時でした。
誰かが扉を蹴破る音が聞こえたのは。

「おいおい……大の男が、２人してなにやってんだ」

扉を蹴破ると、椅子に縛り付けられたチビ助と下穿きをおろした男２人が立っていた。
チビ助は俺の姿を見ると、信じられない表情を浮かべた。
いや……それと男２人よ、おろしたまんま、こっちみんな。

呆然としていた男２人は急いで下穿きを上げる。
よし、そんなもんを俺は見たくないからな。

ついでに言うと、恋にも見せたくは無いので丁度見えない様に立

ち位置を考えたつもりだ。
まぁ、チビ助は見せつけられたんだろうがな。

一応……同情はしとくわ。

「全く、最近は事件らしいもんが無くて安心してたんだがな……ったく」

呟きながら、男達の方へと近づく。
あぁ、勿論、殺気は出しっぱなしだ。

俺も恋も……

この2人は災難だろうなぁ。
俺だけならまだしも、恋……呂布の殺気を受ける事になる訳だからな。

こんな経験、戦場じゃなきゃ味わえないぜ。
釣りはいらねぇから、存分に味わってくれや……

2人の男は呆気なく気絶した。
まぁ、しょうがないわな、俺だって恋の殺気を受けたら逃げるからな。

気絶した2人を横目に俺はチビ助の所に行くと、縄を解いた。

「大丈夫かチビ助？」

「だ、誰がチビ助ですか！　そもそも、何でお前がここにいるのですか！」

いきなり怒られたぞ。
助けたってのに……

「ここに居るのは、俺がここの主に仕えているからだ」

その言葉に、チビ助は更に驚く。
それはそうか、たまたま寄った所で以前の同僚に会って、それがここの王に仕えてるとか。

出来すぎだわな……

「さてと……いつまでもここに居る訳にもいかんな。出るか」

俺の言葉に恋は頷く。

出口の方へ向かおうとした時。

「ちょ、ちょっと、ま、待つのです」

「ん？　どうしたチビ助？」

振り返ると、その場に座り込んだままのチビ助。
……腰が抜けてるようだな。

「はぁ……しゃあねぇな」

そう言ってチビ助の側に行くとそのまま抱き上げた。

「へっ？　な、何しているのですか！？　お、下ろすのです！」

「腰抜けてるんだろ？　だったらこうするしかねぇだろ」

「そ、そうではなく」

「あ？　恋に抱えてほしいってか？　駄目だ、こういうのは男の役割ってやつでな」

「うっ……し、仕方ないのです。抱えられてやるのです」

何か、俺が頼んで抱えた感じに聞こえるが。

……まぁいいや、それにしても……軽いなこいつ、嬢ちゃんと一緒ぐらいか。

それと恋、いいなぁって感じの目で俺を見るな。

「あ～丁度良かったみたいだね、駿くん」

建物を出ると、兵士を連れた氷花と出会った。

建物内に今回の件の犯人がいると告げると、兵士達が入って行った。

「それにしても、駿くん。抱えるの好きだよね、永遠ちゃんも抱えてたし」

「別に好きじゃないけどな……それより氷花。帽子はまだ持って

るか？」

「ん？　あぁ、これね。はい」

氷花は持っていた帽子をチビ助に渡す。

「あ、これは音々の……」

「こいつが拾ったんだとさ、ついでに、こいつのおかげで俺達はお前を助けに行けた訳だがな」

そう言うと、チビ助は帽子を大事そうに持つ。

「あ……ありがとう」

感謝の言葉に氷花は笑みを浮かべて頷く。

「ところで駿くん……あの2人って一体誰なの？」

チビ助を下ろした後、俺は氷花に話しかけられた。

ちなみにチビ助は恋に少しばかりの説教を受けているようだ。

まぁ、あんまり怖くは無いがね。

ただし、拳骨はかなり痛いぞ……頭の形が変わるかと思ったからな。

「雰囲気的に、付き合いがあったっぽいけど。……ひょっとして月ちゃん関係？」

「……そうだ。あの2人は、呂布と陳宮……聞いた事ぐらいはあるよな？」

そう言うと、氷花は驚きの表情で恋とチビ助の方を見る。

「あるってもんじゃないわよ！　有名人すぎるでしょ……でも、何でここに居るのよ」

「俺が知るかよ」

「知らないって……まだ駿くんが手紙で呼んだって言った方が真実味があるよ」

確かにそうだ。

ただ、俺は実際に呼んでない訳だしな。

「そうかもしれないが。実際、俺は呼んでないんだ……たまたまここに来たって事だろうな」

「そっか……ねぇ、駿くん。2人って仕官要請したら応えてくれるかな？」

まぁ、そうなるわな。

恋の武は大陸中に広まっている……いらないって言う王は絶対にいないわな。

いたら教えてくれ、指さして笑ってやるから。

ただ……恋は、妙に鋭い所があって。

……人の善と悪を見抜くからなぁ……暢介を見てどう思うか。

まぁ、悪じゃないわな暢介が。

「まぁ、それを決めるのは恋とチビ助自身だからな」

「そうなるよね。あっ、あの2人って月ちゃんに会わせないの？」

「月様に？　あぁ……出来るなら会わせたいが、出来るのか？」

俺の言葉に氷花は少し考える。

「う～ん、これは暢ちゃん達とも話さないとだけど……大丈夫だと思うよ。まぁ、口外するなって言われるかもだけど」

「それなら、大丈夫だろうな。2人とも口は堅い方だ」

恋は口数が少ないし、秘密事は守る。

チビ助は……少し不安だが、恋が言えば守るからな……俺だと意味がねぇ。

「分かったわ。とりあえず、2人とも城の方へ連れて行きましょう」

氷花の言葉に俺は頷き、恋とチビ助のいる方へ歩を進めた。

「う～、僕、こういう場面弱いよ」

隣で久遠が泣いている。

別に久遠だけが泣いてる訳じゃなくて、ここにいる皆が泣いていた。

勿論、俺だってそうだ。

呂布と陳宮、その2人が月と再会したからだ。

駿の時と同様に、2人も月の側に来ると泣いていた。

流石に駿の様に泣き崩れなかったけども。

それを見て、皆、泣いちゃったという訳だ。

さて、呂布といえば大陸一の武を誇る猛将だ。

彼女を手に入れる事が出来れば、これほど戦力強化に繋がるものはない。

こういう場合は、説得が上手くいかないで駿や月の力を借りるもんだと思ってたんだが……

「……分かった」

と、あっさりと仕官要請を受けてくれた。

勿論、俺の後ろで久遠がガッツポーズしてたみたいだ。

陳宮も『恋殿とねねは一緒なのです。ですので、ねねも一緒なのですぞ』といい受けてもらえた。

これで戦力はかなり強化されたのだが。

「……動物、多くね？」

そう、呂布が俺達に言ってきた条件。
旅をしている最中について来た動物達の保護だった。

まぁ、動物関係の仕事もある事で小屋は作ってたんだけどさ……
これは、多すぎる。
幸いは犬と猫中心だって事だし、多少の拡張で何とかなるかな？

……虎とかいたら勘弁だからさ。
いや、人によく懐く虎でも嫌だから。

流石に、月に虎の世話は任せられないからなぁ。
どんなに可愛い虎でもな。

その日の内に、２人と真名を交換しその場は終わった訳だが。

翌日、月の仕事を見に行くと恋も一緒になって動物の世話をしていた。
動物の世話をしている恋の表情は笑顔で、幸せそうだった。

『恋さんは動物が好きな優しい子なんです』という月の言葉はその通りだった。

「がぁ～、おじいちゃん！　さっさと下ろしてよ！」

山奥の中で女性の声が響き渡る。

「何を言っておる……大体、わしの罠に簡単にかかりおってからに」

「そ、それは」

初老の老人の言葉に少女は黙る。

現在、逆さ吊りの状態になっており、世界が逆転して見えている。

「しかも、この罠は毎日置いてあるがな……何で、おぬしは毎日引っかかるんじゃ？」

「今日は無いだろって思ってたの！」

「……単純じゃのぉ……」

老人は頭を押さえる。

この少女、実は老人がその才能を評価して連れてきた。

老人は鷺島暢介の治める南郷郡で、ある村の復興を任された文官であった。

ただ、赴任する際に若手を連れていき指導し、成長が窺えれば推薦し送りだしていた。

そんな中で指導する喜びというものを味わった老人は、新たな育成人材を探して他の郡にまで足をのばした。

別に既に仕えている人物を引き抜く訳じゃなくて、在野で眠っている人材を見つけるわけだが。

その中で彼女を見つけたのだが……

「このままでは、鷺島様に推薦できんのぉ……」

「ちょっと待ってよ！　今の状態なら、推薦は近いって言ってたじゃない！」

「それも、罠に毎日かかる段階で評価はどんどんと落ちていっておったがな」

「……う、うっかりしてただけだよぉ」

「うっかりしすぎじゃ」

そういうと老人は少女に背を向ける。

「えっ！　ちょっと、下ろしてよ」

少女はもがくが、ただ左右にブラーンとなるだけだ。

「昼になったら解いてやるわい……それよりもだが……少々、下着が派手じゃのぉ」

「ふぇっ！」

逆さ吊り、少女の服の下はズボンじゃなくてスカート……後は、分かりますよね。

「今日は黒か、色気づきよってからに」

「ふ……ふぇぇぇ～ん」

さっきまでとは違い、泣き声が山奥で響いていた。

25話　一気に強化（後書き）

最後の罠にかかっている子はオリキャラです、はい。

恋が入って、武の面はかなりの強化になりますね。

……あれ？　陳宮と荀攸って何かあったような・ｗ・；

２６話　来る人（前書き）

寒くなったのでストーブを出してみました。

出したその日は半袖でいいぐらいの暑さでしたがね・ｗ・；

何で１２月間際で半袖の世話になってるんでしょう。

26話　来る人

「暢介。北郷達と同盟の話、受けるつもりなの？」

夕食を食べている際に、久遠から、こう尋ねられた。

ちなみに現在、食堂には俺と久遠しかいない。

今食べてる夕食も久遠が作ってくれたものだ。

まぁ、あれだね。

彼女の手料理ってやつになるわけだけど……ん？　爆発しろ？

やだよ。

「受ける受けないは、向こうの話次第だけどね」

「話次第では受けるって……相手は、あの北郷だよ」

そう言っている久遠の表情は険しい。

確かに、あいつは燈に対して無理やりな引き抜きを行っていたし。

月を助ける際にも邪魔の様な形で乱入してきた。

印象としては最悪だわな。

「確かにあいつにはいい印象はないけどね。門前払いってのは良くないと思ってね」

「でも、話を聞くって段階で向こうは成立出来ると思ってそうな気がする」

「それは……あっちの思い込みになるんだけど」

「そうだよね」

話しながら食べていると、いつの間にか食べ終わっていた。

いやぁ……何も無いのにちょっと探してしまった。

恥ずかしい……

「兎に角、明後日には話し合いになる。そこであちらが、どう出てくるか見極めるさ」

「何も考えて無かったら断って、僕達に何かの得があれば、検討する形にして」

「そうそう。とはいっても、今の所。俺達に何の得があるかは見えないけどね」

そもそも、俺達と北郷達の領土は繋がっている訳じゃない。

援軍とか求められても、他人の領内を通過しないといけない訳だし。

それに、あちらは新しい領土を得たばかりで今は内政の最中のはず。

武に関しても、駿や鈴佳、恋に音々が加わって層は厚くなっているし。

領内で『この者を推薦いたします』という形で色々と人材は集まってきている。

「まぁ、同盟を持ちかけてきたんだ。俺達の分からない何かがあるんだろうさ」

そう言って俺は、皿を持って洗い場へと向かった。
皿を洗うのは俺の役割、これも決まっている事。

「……僕には、考え無しに送ってきただけだと思うんだけど」

そう、久遠は呟いていた。

ご主人様と共に鷺島さんのいる城に着いた私の目に入ってきたのは賑っている街の姿でした。

多くの商店などが並んでおり、多くの人々が歩き回っていました。
聞けば、夜になっても賑いが止む事は無いそうです。

これだけのものを作り上げた……鷺島さんや、その配下の人達の努力が見えます。
もちろん、この地にいた人達の力が大きいのでしょうが。

「朱里。早く奴の所に行こう」

と、ご主人様は私の腕を取ると引っ張っていきました。

もう少し、眺めてみたかったのですが……

「長旅ご苦労様です。徐州からはるばるこちらまで」

城で身分を証明し、城内に通された私達は泊まる部屋に案内されています。

案内をしているのは高順さんという男性の方で、かなり背が高い人です。

本当は……元直ちゃんだったら嬉しかったのですが。

高順さん……話を聞いてみると、やはり陥陣営と呼ばれていた本人でした。

その様な人材も手に入れている……鷺島さんの戦力は確実に増してます。

「しかし、私も劉備殿の元に仕官したいと頼んだ事があるのですが、人材は足りてますと言われて断られまして……縁が無かったのでしょうね」

そんな聞いた事の無い話も聞きました。

私達は武も文も足りていないはずなんですが……一体誰の指示で断られたのでしょうか？

それと、ご主人様の様子が少し変です。

先ほどからブツブツと独り言の様なものを言っています。

『……何で、男なんだよ』と……あぁ、確かに私達の軍は女性が多いですね。

しかし、ご主人様。

何も、全ての将が女性とは限りません。

男性の方にも優秀な方も多数、存在しています。
高順さんも、その中の一人になります。
「こちらが、お二人の部屋です」
と言われ、私達は部屋に通されました。
……ちょっと広い部屋ですね。
「申し訳ありませんが、私が出た後に扉の前に兵を置かせていただきます。用がありましたら、その兵におっしゃってください」
「分かりました」
そう言って、私は頷きます。
隣にいるご主人様は何やら、考えている様ですが。
そして、高順さんが部屋から出ようとした際に、ご主人様が口を開きました。
「なぁ、今から出来ないのか。同盟の交渉は？」
「「へ？」」
私と高順さんが同時に同じ言葉を発しました。
ご主人様は何を考えているのか……そもそも、日程は既に決まっており、明日行われるものです。
それを前倒しに？　出来る訳がありません。

相手の日程も考えないと……

「申し訳ありませんが、話し合いは明日と決まっていたはずです。それに、主と軍師が不在でして、話し合いはできないかと」

「……そうか……なぁ、一つ聞いていいか？」

「はい？　私に応えられる事でしたら」

あっさりと引き下がったご主人様。

いや、元々……日程前倒しは出来ないと分かっていたのでしょう。

本当は、この聞きたい事を聞く為に高順さんを足止めした？

……なら、最初からそれを聞けばいい様な気がしますが。

「あんたの所の主、鷺島と軍師の司馬懿の仲はどうなんだ？　かなり悪いんだろ」

「え？　鷺島様と司馬懿様の２人の仲が悪い？」

「あぁ、そうだ」

ご主人様は、俺は全てを知ってるんだと言わんばかりの表情を浮かべます。

２人の仲はそんなに悪いのでしょうか？　その様な情報は聞いた事が無いのですが。

「いえ……仲が良いのは知っておりますが、悪いというのは聞いた事は」

「そうだろ……え？」

ご主人様の表情が驚きに変わります。
恐らく、予想と大きく違っていたのでしょう。

「仕事中は主と軍師ですが、終われば……いえ、こういう事は口外してはいけませんね」

「えっ……あれ……」

「2人の仲は良好です。私も仕事あるんで、これで失礼させていただきます」

そう言って高順さんは、部屋から出て行きました。

ご主人様は、呆然としたままですが少しずつ落ち着いて……いませんね。
表情が今度は怒りになっています。

「何で鷺島の奴、俺の忠告を無視してるんだよ！　司馬懿は危険だって伝えてやったのに」

「忠告？　どういう事ですかご主人様」

私が聞いた事で、ご主人様は慌てだしました。
目が泳いでいます。

「あっ……いや、個人的な事で朱里には関係ない話だよ」

「……」

どうやら、ご主人様は鷺島さんに司馬懿という人が危険だと言った様です。
司馬懿というと……鷺島軍の筆頭軍師の、あの人ですね。
その人物を危険だからと言って、主君と軍師の仲を悪化させようとする。
それって……良くは無いですよ、ご主人様。
ただし、主君と軍師の仲を悪化させて……こういう策はありますが。
多分、ご主人様はそういう意味で言ったんではない様な気がします。
何故でしょうか……私は確信が持てます。
それと、その様な行動が大陸に広まってしまえば悪声に繋がってしまいます。
それはご主人様だけでなく、皆に影響するものです。
せめて……私か雛里ちゃんに一言でも言ってもらえれば良かったのですが。
はぁ……
……兎に角、私は明日の同盟交渉に置いて、相手を納得させられる様に。
何か考えなくてはいけません……全く、思いつきませんが。
両家に得となる部分があればいいのですが。

「え？　俺と久遠の仲が悪いって北郷が？」

久遠と護衛に鈴佳を連れて周辺の村の視察を終えて帰って来てみれば。

駿から聞かされたのは、あの連合の時の忠告を俺が信じてると思っていた様だ。

「あいつ……殺す」

そう呟くと、久遠が北郷達のいる部屋に向かって歩を進めようとしていた。

慌てて鈴佳が抑える。

「お……おち、落ち着いてください久遠さん」

「放して鈴佳……あいつだけは絶対に殺す。この手で殺してやる！」

「だ、駄目ですよ」

力は鈴佳の方が上なので動く事が出来ないのだが、久遠の怒りに鈴佳が多少ひるんでいる。

う～ん……凄い迫力だな。

「しかし、何であいつはそんな事を言ったんだ？　お前らの仲が悪いなんて噂。聞いた事ねぇがな」

「あ～、それは……」

この事は話していいのかなぁ……少し悩む。
北郷の持っている、三国志の知識ってやつなんだろうけども……
ただ、このまま黙ってるのもどうかと思い、駿に話す事にした。
久遠を宥めている鈴佳も話を聞いていた。

「まぁ……北郷が俺を嫌ってるみたいだから。嘘って可能性もあるんだけど」

と、付け加えておいた。

「そう言う事か……まぁ、悪くは無いって言っておいたけどな」

「そうか。ありがとう駿」

礼を言われるとは思って無かったのか、駿はちょっと驚いていた。

「いやいや、礼を言われるこっちゃねぇよ……おっ、鈴佳。久遠は落ち着いたか？」

視線を久遠と鈴佳に移すと、落ち着いたのか久遠は鈴佳から離れていた。

「は、はい。な、なんとか……」

ただ、鈴佳……肩で息してるぞ。

「久遠も落ちついたみたいだな……そういやぁ暢介。腹減らない

か？」

駿に言われて、自分が空腹な事に気づく。

「あぁ……減ってる」

「そうか、俺もなんだよ。食堂で食う機会を無くしててさ、今行ったら誰もいないんだよ。あっ、鈴佳も減ってないか？」

「え……へ、減ってます」

ちょっと顔を赤くして応える鈴佳。

「鈴佳もかぁ……」

そう言って駿は久遠の方を見る。

「何？　僕の方をじっと見てさ……」

久遠がジト目で駿を見ている。

駿は俺を自分の方へ引き寄せると、２人に背を向ける形で小声で言ってきた。

「なぁ、駿。お前から頼んで久遠に飯作ってもらえないか？　俺と鈴佳の分も含めて」

「え！？」

「久遠の作る飯、かなり美味しいって話だろ。食べてみたいんだ

よ」

「いや、だったら頼めばいいだろ。基本、久遠は断らないぞ」

「あ～でもさ、やっぱ見てみたいんだよ。彼氏が彼女に頼む所ってのを」

「……」

俺は、呆れた表情で駿を見る。
駿は笑顔だ。

「性格悪いよな、駿って」

「好奇心旺盛って言ってくれ」

「……はぁ、もし断られたら駿の金で食いに行こう」

「断られたらな」

駿は笑顔を崩さない。
多分、成功するって信じてるんだろうな。

久遠の性格上、一旦断ると、どんなに手を変えてもその答えを変えない。
しつこく言い続けると、激怒させてしまうだろう。

俺は、久遠の方を見ると口を開く。
久遠はいつも通りの表情、ジト目ではなかった。

「久遠、夕食なんだけど作ってくれないかな？　その……４人分」

「えっ？　別にいいけど……って４人分？　暢介ってそんなに食べないよね。それに、僕もそんなに……」

「あ～……その、俺と久遠と駿と鈴佳で４人なんだけど」

「……」

あっ、久遠のジト目再び。
ため息もついた。

「……分かったよ。４人分だね……材料あったかな」

納得した様で、久遠は食堂の方へと歩き出した。
慌てて、俺達も後を追おうとした時、振り向いた久遠は駿を指さすと。

「もし材料が無かったら、駿。買ってきてよね……自腹で」

「わ～ってるよ。しかし、久遠の料理かぁ。氷花や嬢ちゃんから聞いて興味があったんだよなぁ」

「え、えっと……わ、私もいいんですか？」

「いいんだよ。ほれ、行こう行こう」

鈴佳は話についていけてないようだが、駿に引っ張られている。

久遠の料理はやっぱり美味しかった。

それでも『僕の料理って燈と比べたらまだまだなんだよね』と言っていたので。

「よ～し、次は燈に飯作ってもらうかな」

と、駿が新しい目標を定めていた。

その内、うちの将全員の料理を食べるんじゃないのか？

何て事を思っていた。

さて、明日は同盟交渉だな。

あちらがどんな風な話に持っていくのか……俺達の得は何だろうな？

まさか、何を無いのでとりあえずって事は無いよな北郷？

26話　来る人（後書き）

ひとまずは、同盟交渉は次回です。

番外拠点書きたいなぁ・ｗ・

あっ、新しいカップル拠点もいいなぁ・ｗ・

27話　交渉する以前の問題（前書き）

急に寒くなりました。

『暑いなぁ』と思い、窓を開けて寝ていたら。
翌朝、歯を鳴らして起きました。

交渉部分は、もっといい流れが見つかったら書きかえるかもしれません。
ただ、結果は変わりませんのであしからず。

27話　交渉する以前の問題

同盟交渉当日、天候は快晴。
……いい天気すぎるなぁ、これは洗濯物はすぐに乾きそうだし。
布団とかも干すのにも最高だなぁ。

何て事を思いながら、俺は椅子に座っていた。

相手方の使者は、北郷と諸葛亮。
こちらは俺と軍師3名。

外には駿、命などが不審者がいないか見回りをしてもらっている。
一応……北郷が誰かを忍ばせていないかとか、他国の間者のいるかもしれないわけで。

これぐらいはしとかないとね。

「さてと、挨拶も済ませたし同盟交渉といこうか」

俺がそう言うと、皆が頷く。
うん……北郷、睨むのやめようか。

……なんで劉備は、北郷を使者で送ってきたんだろうか？
うちの軍内で北郷の印象は、悪い方に入るんだが。

まぁ、うちの軍師達には個人的感情は抑えてほしいと頼んでおいたから。

多分……大丈夫だろう。

俺？　あぁ……相手にしたら負けだと思っている。

そう思わないと、『何睨んでんだ？』って喧嘩に……いや、俺ってそう言うキャラじゃないけど。

「私達としては、今回の同盟について色々と説明が欲しい所でしたのでこの様な形を取らせていただきました」

久遠が口を開いた。

……ん？　一人称が『私』になってるなぁ。

やっぱり、時と場所を考えての事か。

「説明ですか……」

諸葛亮の表情は険しい。

恐らく、説明を求められる点が分かっているのだろう。

「ええ。何故、同盟相手に私達を選んだのでしょうか？　それが私達には分からないので」

「そ、それは……」

「それに、あなた方は曹操、袁紹、袁術にも同盟の使者を送っていると聞きます。ただ、断られたそうですが」

「……」

「もしかして、私達を選んだのは消去法ではありませんか？　そ

れなら、理由が無いのも分かりますが」

俺達には劉備軍から同盟を求められる、その理由が無い。

特に親しい訳でもない、領土は離れている。

そして、戦略上の敵も違っているだろう。

それにだ、北郷は俺を相当嫌っている。

今だって睨んでるからな。

北郷は戦略云々を考えて俺に使者を出した訳じゃないだろう。

多分、『相手いねぇかなぁ…ん？　鷺島か、嫌いだけど、まぁ出してやるか』って事だろう。

周りには一言も言わずに。

うん、多分正解。

その相手から『詳しい話を聞きたいから来てほしい』、驚いただろうな。

ただ北郷、『話が聞きたい』→『同盟成立』じゃないんだよ。

そういうのはあり得ない。

諸葛亮の表情は苦しい。

何も言い返せない、それはそうだ。

俺の予想通りなら、彼女が話を聞いたのは俺達が返答した後だ。

意味も分からず、『同盟交渉についてきて』と言われ連れてこられる。

どんなに彼女が優れていても、これは厳し過ぎる。

「……そ、それは……」

俯き、弱々しく口を開く諸葛亮。

はっきり『理由は、そちらの言うとおりです』と言えばそれで終わる。

本人もそう言いたいのだろうけど。

隣の北郷はそれを許しそうにないな。

……ん？　北郷の様子が変だな。

何か、苛立ってるような……嫌な予感しかしないな。

「別に理由なんていいだろ、同盟結ぶのか結ばないのかどっちなんだよ！」

「どっちって……それを選ぶ為に話を聞くのでしょう」

怒鳴る北郷に久遠はため息まじりに言い返す。

「理由なんて、結んだ後にだって出てくるだろ」

「出てこなければ？　あなた達と同盟を結ぶ事で他の勢力との仲が悪化する可能性だってあるんですよ」

そう、北郷達と同盟を結ぶ事で他の勢力との関係も変わる。

最悪の場合は、敵対だって考えられる訳だしな。
慎重に動くべき問題だよな。

その辺について、どう考えているのか聞いてみたい訳だが。

「その場の思いつきで同盟は、やるものでは無いんですよ」

もっともらしい事を言われたのだが、北郷は久遠を睨む。
おいおい……交渉の場でそんな態度は不味いだろ。

そんな北郷を久遠も睨み返す。
やばい、久遠のやつ……完全にキレてる。

感情的になるなって言っておいたのに。

「何睨んでんだ、司馬懿」

「そっちが睨んでるから睨み返してるんですよ、御使い様」

久遠は『御遣い様』の部分、ちょっと挑発気味に言った。
北郷が余計に表情を険しくする。

「おい司馬懿、お前は俺の事が嫌いなんだろ。初めから俺を睨みやがって」

「ええ、嫌いです。そもそも、今回の同盟はあなたが送ってきたものでしょう。それが話を聞きたいと言われ、軍師と一緒に来て始まってみれば軍師に丸投げとは」

「丸投げしてるわけじゃない！」

「ならば、説明してください。私達を選んだ理由、それだけじゃなく他にも説明して欲しい所もありますがね」

あぁ……この流れじゃ、終わらない。
ほら、諸葛亮が完全に終わったって感じの表情浮かべてるし。

あっ、目があった。

「（申し訳ありません）」

と、声を出さず口だけ動かすと頭を下げる。
この子は苦労してるみたいだ。

俺も『（いや、こっちも悪かった）』と口だけ動かし頭を下げる。

こんな流れは予想してなかったなぁ。
こうなるんだったら、頭から断るべきだったか。

はぁ……未だに睨みあい、言いあっている2人にため息をつく。

ん？　隣にいる氷花に肩を叩かれたのでそちらを向く。

「ねぇ……どうするの暢ちゃん。これじゃあ、終わらないよ」

「そう言ったって、今の久遠は止められない。氷花だって分かるだろ」

「そこはほら、主たる者の持つ力で」

「無理だ。とりあえず、落ち着くまで黙っておこう」

そう言うが、北郷と久遠の睨みあいは当分、終わりそうにない。

「「「「……はぁ……」」」」

睨みあっていない４人のため息が見事にハモった。

「ごめんね、元直ちゃん」

会議？　なんて言っていいのか分からないものが終わって解散した後。

私は城内を歩いていると孔明ちゃんを見つけた。

孔明ちゃんも私に気付くと駆け寄って、いきなり頭を下げた。

突然の事で私は驚いてしまった。

落ち着いて聞くと、北郷はかなり機嫌が悪いらしく、一緒にいるのが嫌になって部屋を出てきたらしい。

「こんな事になるんだったら、出てくる前にちゃんと止めておくべきだった」

それなら、今みたいに悪化する事は無かったのにと続けた孔明ちゃん。

辛い表情を浮かべています、見た事が無い表情でした。

「いえ、私達も話が聞きたいという形にして期待させてしまったから。こちらにも非があるから」

「それでも……ご主人様の態度は……」

「あ～」

久遠さんを睨みつけ、久遠さんも睨み返して一触即発。
嫌な雰囲気のままで終了。

『ごめんなさい』

終わってすぐに久遠さんは私達に謝りました。
私達としては、久遠さんがああいう行動に出たのにびっくりしていました。

てっきり、流すものだと思っていたので。
あそこまで敵意むき出しになるとは思わなかった。

「そういえば、士元ちゃんは元気にしてる？」

「うん。元気だよ」

何気ない会話で、嫌な雰囲気を消したい。
せめて、友人との会話ぐらいはね。
鷺島軍とか劉備軍とか関係なく……ね。

「そういえば……孔明ちゃん。まだ艶本とか隠れて読んでたりしてるの？」

「へ？　えっと……そ、それは」

孔明ちゃん。

視線動かしすぎだよ……まだ読んでるんだね。

「そういう知識も大事だけど。ほどほどにね……」

「うん」

「まぁ、役立つとは思うけど。流石に、やお……」

「わー！　それは言わないで」

慌てて私の口を塞ぐ孔明ちゃん。

一度、私の本棚にそれが入ってて先生に見つかって大目玉喰らったんだけど。

『色々な事に興味を持つのはいい事だけれど、流石にこれはお勧めできないわ』

って真顔で言われたんだよ。

え？　本当の所はどうなのって、興味無いから。

「あっ、孔明ちゃんってまだ料理とかしてる？」

「料理はしてますよ。元直ちゃんから教えてもらったお菓子とか

作ってるよ」

「そっか～、だったら、新しいお菓子の作り方教えようか？　色々新しいの作れたから」

「いいの？」

孔明ちゃんの言葉に頷く。

流石に戦略とか軍備とか機密性の高いのは無理だけど。

単なるお菓子作りだし……あぁ、材料とかで裕福具合？　いや、流石にね。

「大丈夫だよ。ほら、行こう」

そう言って私は孔明ちゃんの手を取って食堂へ向かう。

調理場が使用可能ならいいんだけど。

「はわわ！　ちょっと元直ちゃん、引っ張りすぎです」

後ろから孔明ちゃんの声が聞こえるが気にしない。

私は笑顔で食堂へと歩を進める。

「ごめんなさい」

先ほどから久遠は謝ってばっかり。

まぁ、謝る理由は、はっきりしている。

交渉においての北郷との一触即発のムードになってしまった事。
それにより、話し合いは殆ど出来なかった。

ただし……これに関しては俺にも非がある。

相手の北郷は、俺が『話が聞きたい』という返答から受ける確率が高いと思ったのかもしれない。
それが、色々と質問攻めにあい……そして、怒った。

それに対して久遠も怒った。

これは、俺が最初の段階で『受ける気は無い』と言えば、それで終わっていた事なんだろう。
反省しないとな俺も。

「もういいよ久遠ちゃん。私達は最初から怒って無いし……まぁ、あの久遠ちゃんには驚いたけど」

確かに……あそこまで敵意むき出しの久遠は見た事が無い。
生理的に、苦手……いや、嫌いなのかもしれない。

まぁ、連合の時の事などで積もるものもあったのだろうけども。

「はぁ……もっと冷静にならないといけない」

そう呟いていた久遠であった。

結局、交渉は決裂で同盟は結ばないという形で終わった。

交渉の翌日、北郷と諸葛亮の2人は自分達の城へと戻って行った。

恐らくだが、北郷から劉備の報告で俺達の印象は悪いものになるんだろうな。

……はぁ……

27話　交渉する以前の問題（後書き）

別に久遠さんは短気って訳じゃないんですよと言ってみる。

次は番外拠点。

とりあえず、残り1名の男性キャラに、嬉しい様な。

怖い様な目に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1958w/

真・恋姫無双　２人の御使い

2011年11月21日00時27分発行